

五ノ 6R-91

328-281



328
281

紳士傳



自序

霜雪ハ以テ山木溪草ヲ胃スベキモ、爾カモ亭々タル松柏ノ操ヲ奪フ可ラズ、蓋シ是レ一面努力ノ偉大ヲ立證スル者ナリ、然リ努力ハ是レ人生ニシテ而シテ吾人ノ生命ナリ、即チ權化シテ向上トナリ發展トナル、彼ノ世間滔々ノ輩、相率ヒテ淺薄ナル群盲ノ知識ニ媚ビ、毫モ先憂後樂ノ氣魄ナシ、如斯シテ天下ノ青年ヲ誤リ、據テ以テ趨歸スル處ヲ失ハシム、或ハ徒ラニ不健全ナル成功熱ニ食傷セシメ、或ハ其根本ノ努力ヲ窺ハスシテ徒ラニ皮想ヲ學バシム、ソコニ元氣ナク、ソコニ努力ナシ、一波起ツテ萬波從フ鳴呼今ニシテ覺醒スル所ヲ知ラスンバ、帝國青年ノ將來果シテ如何、即チ是レ吾人ガ一片耿々禁スル能ハスシテ天下ニ呼號シ、人生幾多ノ曲折ニ處シテ奮闘シツ、アル所以ニシテ本書發行ノ動機亦茲ニ存ス元ヨリ最終ノ目的ハ努力ノ高價ヲ提示セント欲スルニアリ、敢テ必スシモ時流ヲ趁ヒ、彼ノ富豪權勢ニ阿ルモノナランヤ、好矣、墜石ヲ告ゲ瀑布ヲ警ムル聖者ノ絶叫ナクトモ、徒ラニ昏々トシテ惰眠ヲ貪ルノ輩ヲシテ、奮然自覺枕ヲ蹴ツテ起タシムル者アレハ足ル、管ニ恨ムラクハ事志ト副フニ至ラズ、晦澁ノ筆、杜撰ノ編、結果太ハダ振ハサリシヲ、サレド吾人ノ動機ト目的トハ凡ヘテ善良ナリ、區々タル形式敢テ問フ處ニアラズ、微衷ハ一ニ有識者ノ批判ニ俟タン已而。

黄塵萬丈ノ鐵橋々畔ニ於テ

明治四十三年初夏

編者誌

織田昇次郎	二九三	冲	牙太郎	二四七	川竹駒吉	二六四
大井康直	四八	川真田德三郎	川嶋龜夫	二四五	川東田經清	四七
大熊氏廣	一四一	河東田金五郎	河村金五郎	一六二	河合德兵衛	三三八
大江松太郎	四四〇	河合欣三郎	河合德兵衛	三三八	河合欣三郎	四四三
大木宗保	一五五	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
大森鐘一	一七八	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
太田清衛	三六五	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
岡田實藏	一一一	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
岡井藤之丞	二〇三	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
岡村銳介	四七五	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
岡本忠藏	四二八	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
岡本善七	四三一	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
奥田豊次郎	一五六	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
奥田柳藏	一一七	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
奥平昌恭	八三	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三
奥山三郎	六二	河合三郎	河合三郎	三三八	河合三郎	四四三

堀田生次郎	一五九	堀谷佐次郎	二二二	堀田信親	四七七
(ほ)之部		堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
西野惠之助	三七三	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
西村治兵衛	二四六	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
新關善八郎	二〇八	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
丹羽藤吉郎	二二七	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
二禮景助	一六三	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
二條基弘	四	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
(に)之部		堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
坂山繁治	四九二	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
花房正秀	四八二	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
花岡敏夫	四七四	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
伴田六之助	三一二	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
長谷川茂吉	二七一	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
長谷川金三郎	一三三	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
長谷川直藏	二二一	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
(は)之部		堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
道源權治	五四	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
富安保太郎	一九五	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
富田鐵之助	九四	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
富田明治郎	一四八	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
德光好文	二八二	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
藤堂高紹	一九八	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
遠山市郎兵衛	八	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
主居通博	二五〇	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
外松孫太郎	一六六	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
(と)之部		堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
血脇守之助	三四八	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
千坂高雅	二七九	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
千澤專助	三三二	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
千早正次郎	二二二	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
千葉貞幹	一九〇	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
千葉松兵衛	四五八	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
(ち)之部		堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
小笠原長生	七三	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
小野金六	一七	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
小野田元熙	二〇五	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
小野崎耕夫	四九五	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
小野武雄	二六	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
小澤滿友	七七	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
尾城全三郎	一四三	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
男全三郎	一四三	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七
織田信親	四七七	堀谷義昌	二二二	堀田信親	四七七

武田貞之助	宗重望	津久居平右衛門	津久居彦七	頭本元貞	土屋正直	鶴原定吉	堤功長	恒松隆慶	仙一隆	拓植一	辻俣五吉
二五二	八一	四三三	二一五	四六九	一六六	四二二	四〇〇	一四六	二五八	三三四	一九一
根岸昭太郎	奈良林淺次郎	成澤武藏	成瀬隆藏	成井正恭	中井三助	中井新之助	中川謙二	中谷整治	中村達太	中村雄次	中松盛雄
二〇一	七九	四四	四六五	二五三	七六	一五〇	一七〇	一四	三三四	二六六	一一六
中澤安	仲小路廉	永江純一	永見吉	長岡長	長岡護	並木和太郎	南部斐男	村井貞之助	村井吉兵衛	村上義雄	村瀬春雄
三八五	四二	二六八	二六八	四六	二七八	二一六	四六六	七二	四七二	三二八	一〇四

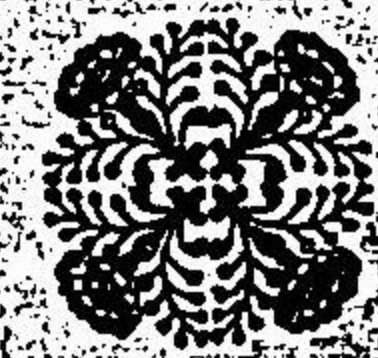
神木治三郎	櫻田龜一郎	柏谷義三	與倉東隆	米井源治郎	横田千之助	横山寅一郎	吉川孝秀	吉岡宗雲齋	吉田千足	吉田忠五郎	吉田利兵衛	吉田丹左衛門	吉田丹治郎	吉田金太郎	吉松駒造	
三六	三三	二二〇	四二二	二七五	二五五	二二三	四一	四八〇	九三	四一九	四四八	四〇三	三八四	四四九	一三〇	
高橋藤兵衛	高橋嘉太郎	高橋熊三	高橋政右衛門	高橋新吉	高岡門兵衛	高岡小次郎	高山長安	高山保綱	高松豐吉	高木兼寛	高木喜寛	高木兼寛	高木兼寛	高杉兼新	高杉宗義	辰野宗義
三四三	二九六	三六一	二八〇	四三	六九	四七一	二八九	一三七	二二七	一四九	一四四	一四四	一四四	一四三	二二五	二〇九

青木要吉	青山金彌	青山幸宜	青田網三	有坂成長	有賀長文	有尾敬重	相浦紀道	阿部政太郎	阿部正功	阿部孫左衛門	足立太郎	安島廣三郎	安樂兼道	安東敏之	安達仁藏	安部林右衛門	(あ)之部
一〇六	三五五	三四一	六一一	一七五	一一八	一〇一	三七五	一八五	一一三	三八三	四一七	一〇九	一六四	二〇四	四〇九	九五	
佐々木政吉	佐々木高志	佐々木熊太郎	佐野小兵衛	佐野春五郎	佐藤作太郎	佐藤達次郎	佐藤和一郎	(さ)之部	天野董平	天野七五郎	秋元興朝	秋山七朝	淺羽英靖	朝吹英二	綾井忠彦	青木房次郎	
九	四〇六	二四八	三七一	二〇〇	二九〇	四八四	二七二		二〇六	三一四	四九〇	三一八	二七七	三二五	八六		
桐島像	貴嶋勇介	木村義賢	木村義賢	三枝代三郎	佐井慎二郎	實吉安純	相良頼紹	坂本則美	澤田正六	才賀藤吉	齊藤二郎	齊藤省三郎	齊藤喜十郎	齊藤孝治	齊藤宇一郎	齊藤宇一郎	
一七	四一五	二二一	二二一	三三六	二九七	四四六	一六一	四五七	五六	一一四	二五九	四八三	六〇	三六〇	三七八	二五二	

宮内二勲	箕浦勝人	水品平右衛門	水間此農夫	水野忠亮	三嶋彌太郎	三崎芳之助	三村之助	(み)之部	目賀田種太郎	(め)之部	岸敬二郎	菊本直次郎	菊島生宜郎	北里染袈男	北田彦三郎	北垣國道
四三七	四六八	三〇五	一九四	三八	二七四	四三〇	三三一		一二九		二八三	一五二	二三八	一五三	二六五	八二
下村辰右衛門	下田歌子	清水彦次郎	清水宜輝	清水虎吉	澁澤榮一	芝原彌太郎	紫垣一雄	白杉政愛	白石元治郎	志水直	宮崎善吉	宮崎光太郎	宮崎道興	宮崎道興	宮古啓三郎	
三〇八	一七二	一一一	二〇	三一	四八九	四三二	一八八	三〇一	二六三	二四九	三八七	三四七	三六三	四六二		
久松源次郎	久野昌一	平山成信	平岡定太郎	土方久元	仁杉英助	人見新助	一柳友次郎	宏比重明	日比翁助	日比翁助	神保東作	新莊直陳	下郷傳平	下山順一郎		
四八一	四四五	三二七	八八	三四	三七四	三四四	二六三	四八六	三〇九	四六〇	二一七	三五六	二八八	八七		

望月右内	三六九
守山又三	三五五
(セ)之部	
湘陽壽雄	四〇
片澤幸太郎	二五四
關清英	二八一
關口安五郎	二二七
(ス)之部	
洲戸吉漸	三〇三
須藤篤作	三七六
菅原恒寛	三九五
菅原傳	四八七
菅野盛次郎	三七〇
杉下太郎右衛門	一九六
角倉嘉道	一三二
鈴木辰次郎	八一

鈴木常助 四五二
鈴木袖太郎 九二



秋元興朝氏

子爵

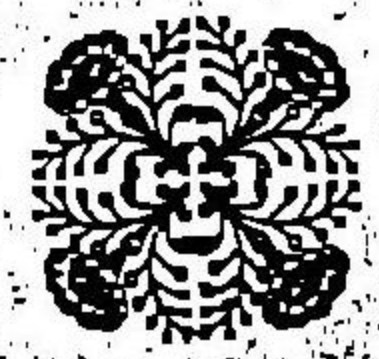
神田區駿河臺北甲賀町六番地

貴族社界唯一ノ平民的政治家トシラ且多方面ニ趣味ヲ有シスルノ君ハ稀ニ見ルノ篤學者トシテ君ヲ推ス
 三隣諸セザルナリ、今其略傳ヲ草センニ。
 當家ノ内大臣藤原鎌足公ノ後胤ニシテ、十二世關白太政大臣兼道公ノ裔、大久保頼綱ノ長男左衛門次郎
 泰業ノ後ナリ、弱冠故アテ別ニ一家ヲナス嘉祿年間上總ノ秋元庄ヲ領シ其姓トナス、爾後數世長朝ニ
 至リ徳川家康ニ仕ヘ上毛總社ニ居ス、慶長年間關ヶ原ノ役ニ際シ、命ヲ奉ジテ會津ニ赴キ智略縱橫與人
 ラシテ白河關ヲ踰ユル事ヲカラシム其後甲州谷村ヨリ武州川越ニ移城ス、ソレヨリ五世ヲ經テ禮朝ニ至
 リ明治維新ノ變革王師ニ從ヒ與羽ノ役屢々功アリ、平定後朝廷ヨリ賞典祿一萬石ヲ賜フ依病退隱ノ後君
 人戸田家ヨリ入りテ家督ヲ繼承ス、安政四年五月ノ生幼名ヲ和三郎ト稱ス、幼ニシテ學ヲ好ミ汗ク專門
 大家ヲ聘シテ漢洋ノ學ヲ修メ後更ニ外國語ヲ研究シテ大ニ海外ノ事情ヲ精査ス、明治十六年巴里公使館
 書記生トナリ尋テ獨逸ニ留學シ同十八年歸朝ス、廿五年辯理公使ニ任ゼラレ更ニ道ニテ特命全權公使ト
 ナリシガ、後年感ズル處アツテ野ニ下リ暫ク門戸ヲ閉ヂテ讀書三昧ニ入ル、後伊藤公ノ起ツテ政界ノ革
 新ヲ計リ政友會ヲ組織スルヤ、君當時ノ奔走計劃ニ盡瘁セシ處大ナリ、君亦曩ニ同族健全分子ヲ糾合シ
 テ談話會ヲ組織シ官僚政治ノ弊ヲ打破セント企テ有爲ノ俊才ヲ網羅シ以テ堂々藩閥ト對抗ス、尙前年五
 畿内ヲ巡遊シ名所古跡ノ興味ヲ踏査シ詳細ニ編纂セラレシ歴史的名所名物記タルアリ、君積年ノ草稿未
 ダ完ラ告ゲズ、此書ニシテ果シテ出版スルニ至ラバ他日日本批評界ノ隋眠ヲ惺覺スルニ足ルヲ信ジテ疑
 ハザルナリ。
 君資性謹嚴、極メテ慈善ノ美風ニ富ム斯ノ貧書生ヲ打揚シテ成功セシメタルモノ、已ニ數十名ニ達スト
 イフ。

電話本局七百二十二番

望月右内	二六九
守山又三	三五
(せ)之部	
湘脇壽雄	四〇
片澤幸太郎	二五四
關清英	二八一
關口安五郎	二七
洲吉漸	三〇三
須藤新作	三七六
菅原恒寛	三九五
菅原傳	四八七
菅野盛次郎	三七〇
杉下太郎右衛門	一九六
角倉嘉道	一三二
鈴木辰次郎	八一

鈴木常助 四五二
鈴木仙太郎 九二



秋元興朝氏

子爵

神田區駿河臺北甲賀町六番地

貴族社界唯一ノ平民的政治家トシラ且多方面ニ趣味ヲ有シスルノ君ハ稀ニ見ルノ篤學者トシテ君ヲ推スニ躊躇セザルナリ、今其略傳ヲ草センニ。

當家ハ内大臣藤原鎌足ノ後胤ニシテ、十二世關白太政大臣兼道公ノ裔、大久保頼綱ノ長男左衛門次郎泰業ノ後ナリ、弱冠故アリテ別ニ一家ヲナメ嘉祿年間上總ノ秋元庄ヲ領シ其姓トナス、爾後數世長朝ニ至リ徳川家康ニ仕へ上毛總社ニ居ス、慶長年間關ヶ原ノ役ニ際シ、命ヲ奉ジテ會津ニ赴キ智略縱橫與人ヲシテ白河關ヲ踰ユル事ヲカラシム其後甲州谷村ヨリ武州川越ニ移城ス、ソレヨリ五世ヲ經テ禮朝ニ至リ明治維新ノ變革ヲ經テ從ヒ與羽ノ役屢々功アリ、平定後朝廷ヨリ賞典祿一萬石ヲ賜フ、依病退隱ノ後君ハ戶田家ヨリ入りテ家督ヲ繼承ス、安政四年五月ノ生幼名ヲ和三郎ト稱ス、幼ニシテ學ヲ好ミ汗ク専門大家ヲ聘シテ漢洋ノ學ヲ修メ後更ニ外國語ヲ研究シテ大ニ海外ノ事情ヲ精査ス、明治十六年巴里公使館書記生トナリ尋テ獨逸ニ留學シ同十八年歸朝ス、廿五年辯理公使ニ任ゼラレ更ニ遣ンテ特命全權公使トナリシガ、後年感ズル處アツテ野ニ下リ暫ク門戶ヲ閉ヂテ讀書ニ味ニ入ル、後伊藤公ノ起ツテ政界ノ革新ヲ計リ政友會ヲ組織スルヤ、君當時ノ奔走計劃ニ盡瘁セシ處大ナリ、君亦義ニ同族健全分子ヲ糾合シテ談話會ヲ組織シ官僚政治ノ弊ヲ打破セント企テ有爲ノ俊才ヲ網羅シ以テ堂々藩閥ト對抗ス、尙前年五畿内ヲ巡遊シ名所古跡ノ興味ヲ踏査シ詳細ニ編纂セラレシ歴史的名所名物記タルアリ、君積年ノ草稿未ダ完ラ告ゲズ、此書ニシテ果シテ出版スルニ至ラバ他日日本批評界ノ隋眠ヲ懼覺スルニ足ルヲ信ジテ疑ハザルナリ。

君資性謹嚴、極メテ慈善ノ美風ニ富ム斯ノ貧賤生ヲ打揚シテ成功セシメタルモノ、已ニ數十名ニ達ストイフ。

電話本局七百二十二番

飯田 巽氏 實業家

小石川西江戸川町十八番地

義理人情ニ厚クシテ名利ニ淡ク沈重ニシテ輕薄ナラズ正義公道ヲ之レ守持シテ權謀術數ヲ卑シムハ實ニ東北人士通有ノ特質ナリ、飯田氏ハ東北人士ノ典型トシテ目セラル、所ノ人、大小策士ノ寄合タル我實業界ニ於テ、巖然俗流ニ擢ンデ一種燦然ノ光明ヲ放テルモノ蓋シ故ナキニアラズ、聞ク君ハ青森縣士族飯田勇馬氏ノ男ニシテ天保十三年八月五日ヲ以テ生ル、明治維新ノ當時藩ノ權大尉及應認會計通商ノ事ニ從ヒ早クモ其名アリ、廢藩置縣後徵士トシテ大藏省出納局ニ出仕ス、爾來忠實精勵克ク維新勿々ノ財務ニ關與シテ力アリ、遂ニ累進シテ大藏省書記官トナル、明治十六年四月依願免官トナリ、特旨ヲ以テ正六位ニ叙セラル、全年日本銀行ノ設ケラル、ヤ、君ハ選バレテ同行ノ理事トナル即チ此事タル本邦創始ノ事業ニシテ之レガ經營容易ノ事業ニアラザルナリ、然レド君多年ノ濫蓄ト其天賦ノ偉才トヲ以テ努力精勵遂ニ確實ナル緒ヲ啓クルヲ得タリ、廿年五月宮内省ニ入テ内藏頭ニ任ジ、全廿六年八月調度局主事ニ兼任ス、全三十年三月主殿助兼式部官ニ任ジ功ニヨリ特旨ヲ以テ菊御紋章付三組銀盃ヲ賜ハル、後帝室會計審査官兼式部官ニ任ゼラレテ勅任ニ進ミ始終一貫窮究其職ヲ奉ジ勤績十三年遂ニ老休ノ故ヲ以テ三十三年十月官ヲ辞ス、サレド其老熟ノ偉器ハ日本郵船會社ノ懇請モタシカタク直チニ其監査役トナリ復タ民間實業界ノ一員トシテ起ツニ至レリ、後更ラニ東京鐵道株式會社監査役、日本煉炭株式會社取締役、加納鐵山株式會社等ノ重職ヲ占メ、尙ホ日本赤十字社監事神宮神苑會理事トシテ其發達向上ヲ扶ケ趣味トシテ能樂會ノ牛耳ヲ取リツ、アリト。

君人トナリ温厚篤實寔ニ當代實業家ノ好典型トシテ謳歌セラレツ、アリ。

電話番号 千百二十八番

榎田龜一郎氏

醫學博士 侍醫

日本橋區品川町裏河岸八號地

九重與深キ處、微臣ノ分ヲ以テ親シク玉體ヲ拜診奉ル、寔ニ一門ノ光榮ナリト謂ツベシシカモ其半生ノ閱歷、好箇ノ立志傳ナルニ於テハ、吾人亦一段ノ敬意ヲ拂フト共ニ、世ノ後進子弟ノ好鑑トシテ推薦セント欲スル者ナリ、其略傳ニ曰ク、君ハ明治三年ヲ以テ奈良縣吉野ニ生ル、當時先考ハ同縣ノ牧民官トシテ在職中ナリキ、幼ニシテ醫學ニ志シ、父君ノ轉任ト共ニ出デ、東都ノ人トナリ、帝國大學醫科ニ入ル、蒼雪ノ苦學空シカラズ、成績常ニ儕輩ヲ抜イテ品行亦方正ナラキ、偶々其三學年中、家居火災ノ厄ニ遭ヒ、學資ノ供給途ニ杜絶スルニ至ル、君此難關ニ處シ、研究一倍スルト共ニ寸暇ヲ割イテ各所ニ獨逸語及生理學ヲ教授シ、純然タル自活ニヨツテ苦學スルト共ニ一家ノ經營ニ任ズ、遂ニ優等ノ成績ヲ以テ廿八年業ヲ卒業後『ベルツ』佐々木兩博士ノ助手トシテ内科一般ノ研究ニ從事シ、屢々新造詣ヲ開披シテ實力ヲ認容セラレタリ、此時日清戰役ノ爲メ招集セラレテ東京豫備病院ニ勤務セリ、幾モナクシテ新瀉縣小千谷病院々長トシテ任ニ就キ、親シク其濫蓄ヲ提供シテ精勵ノ好評ヲ受ク、サレド英材ヲシテ永ク此邊土ニ置カシムルニ忍ビズトナシ、先輩ノ誘招ニ應ジテ三度大學院ニ入ル、専ラ三浦博士ノ助手トシテ内科一般特ニ腦神系統ノ研究ニ腐心シ、前後五ヶ年寢食ヲ忘レテ學ヲ修ム、既ニ當時同輩ノ多數ハ、博士以上ノ學士トシテ尊敬ヲ拂ヒツ、アリキ、果セル哉、腸窒扶斯『テタニ』病ニ關スル論文ヲ提出シ、去ル四十一年一月十五日ヲ以テ醫學博士ノ學位ヲ授ケラル、ニ至レリ、是ヨリ先、日本橋區品川町ニ開業シツ、アリシガ、四十三年二月九日岡侍醫頭ノ推舉ニヨリ任セラレテ侍醫トナルニ至リシナリ、コレ其概歴ニシテ、願レバ、君一回ノ留學ヲナサズ、何等先人ノ糟粕ヲ嘗メタルニアラズシテ、純乎タル日本ニ於ケル研究ニヨツテ此光榮ヲ得、亦以テ本邦刀圭界ノ誇ナリトセズヤ、更ニ曰ハムカ、高潔稀ニ見ル人格ハ君ヲシテ愈々盛名ナラシメツ、アルヲ。

電話本局 一千百五十三番

二條 基 鷲 氏 公 爵 貴族院議員

牛込區若松町七十三番地

當家ハ内大臣藤原鎌足十七世ノ嫡孫、攝政關白大政大臣忠通四世ノ孫從一位關白道家ノ次男良實ノ裔ナリ、良實正二位權中納言兼左近衛大將ヲ歷テ左大臣關白トナリ、文永七年祝髮シテ名ヲ行空ト改メ、年五十五ニシテ薨ズ、二條押小路ニ邸居セシヲ以テ、家ヲ二條ト號セシトイフ、子師忠ヨリ兼基ヲ經テ關白左大臣道平ニ至ル、道平深ク典故ニ通ジ當時ノ名流皆其門ニ贊ヲ執リシト、其子良基文才アリ、和歌ヲ好ミテ其奥ニ詣ル、諸家ノ舊記及秘書ヲ藏シ、且ツ其祖先師輔以來ノ家記ヲ收ム是ヲ二條殿日記ト稱ス、因テ朝廷ノ儀式、武家ノ禮法等皆其家ニ就テ質スト云フ、所御禊記、百寮訓要抄、其他ノ著書夥ナカラズ、其子師良ヨリ十數代世々三公ノ顯職ニアリ五攝家ノ一ニ數ヘラレテ齊敬ニ至ル、君ハ其養子ニシテ、從一位關白九條尙忠ノ八男ナリ、安政六年十月京都ニ生ル、字ハ子篤、孤鶴ト號シ、幼名英麿ト稱ス、明治二年三月先代齊敬ノ養子トナリ、全四年家督ヲ相續シ、全十七年公爵ヲ授ケラル、東京育英義塾、英語學校、同人社、横濱「サラベル」學校等ニテ英學ヲ修メ、業大ニ進ム、全廿年一月英國ニ渡航シ、「ケンブリッジ」大學ニ入り、大ニ學業ヲ研鑽シ、全二十二年三月歸朝ス、全廿三年十一月貴族院議員トナリ、全廿九年三月第七回帝國議會召集ノ節勳精ニ付銀盃一組ヲ賜ハル全三十年一月皇太后陛下御葬祭齋宮ヲ、全四年後月輪東北陵後百日祭參向ヲ、同月英照皇太后御一周年祭濟ムデ御靈代守護ヲ、全年十一月古社寺保存會委員ヲ、全三十一年一月英照皇太后御一周年祭御靈祭齋官ヲ、全月英照皇太后御靈代皇靈殿御遷座マデ、御靈殿勸番ヲ仰付ケラル、後任セラレテ宮中顧問官トナリ、忠勤大節克ク名門ノ光榮ヲ全フシツ、アリ、殊ニ堂上華族中稀ニ見ル識見ヲ有シ、洋ツテ唱ヘラレタル、「一代華族ヲ置クノ議」ノ如キハ既ニ世ニ知ラレタル處ナリ。

電話番町 六十七番

青山 幸 宜 氏

子爵、貴族院議員

京橋區木挽町九丁目廿八番地

人性ノ弱點ハ極端ヲ愛スルニアリ、中庸ヲ守ラザルニアリ、此故ニ國粹主義ノモノハ他クマデ排外思想ヲ以テ埋メラレ、歐化主義ノ人ハ極力東洋流ヲ排拆ス、教育家ニ之ノ弊アリ、學者ニ此ノ風アリ、政治家亦特ニ此ノ兆アリ、浩嘆ニ堪エサルナリ、獨リ君ハ歐化主義ヲ主張スルモ又東洋ノ教ヲ輕ンゼズ、孔曾ノ言ヲ引テ當世ヲ諷誡シ、卓見凡衆ニ抽ンズ、得易カラザル名流トイフベキナリ、君ハ舊濃州郡上ノ藩主ニシテ安政元年十一月廿日ヲ以テ生ル、今君ノ其略歴ヲ録スルニ當リ、青山家ノ系附ヲ案スルニ抑々當家ハ攝政關白藤原師實ノ支流大藏大輔幸成ノ後ナリ、幸成德川秀忠ニ仕ヘ、其子大膳亮幸利美濃入幡ノ城主トナル、後チ九代ヲ經テ君ニ至ル、君ハ先代從四位下大藏大輔幸哉ノ次男ナリ、文久二年八月美濃國郡上四萬八千石ノ封ヲ襲グ、明治元年閏四月從五位下ニ叙セラレ大膳亮ニ任ズ、而シテ明治二年六月郡上藩知事ニ任ジ同十七年七月子爵ヲ授ケラル、同二十年十二月正五位ニ叙シ、同二十一年十月常宮勸番ヲ仰セ付ラル、同二十三年七月貴族院議員ニ當選シ、今尙同院議員トナルコト三回ニ及ビ偽善偽義ヲ當面ノ敵トナシテ盛ニ人情主義ヲ唱道シテ止マズ、自家所信ヲ直行シ以テ世ノ群盲ヲ導キ、國體ノ尊キヲ知り、上下階ニ君國ニ報ユルノ誠忠ヲ明カニセル、實ニ貴族中ノ人傑タルナリ、嘗テ日本鐵道株式會社重役トシテ令名アリキ現ニ玉川電氣鐵道株式會社取締役、株式會社十五銀行取締役、華族會館幹事トシテ世ノ信望ヲ負エリ、復タ聞ク所ニ依レバ英學ヲ學ビテ造詣深シトカ、眞ニ君ノ如キハ舊ニ一國一城ノ主タリ、今ハ皇室ノ藩屏トシテ其感化ヲ下人民ニ普クシ、尙立憲ニ參與シテ國利民福ヲ増進スルニ努メ、傍ラ實業界ニ餘勢ヲ割ヒ殖産興業即チ富國強兵ノ策ヲ講スル等、當代眞ニ敬服スベキノ貴公子タルカナ。

電話新橋 一千〇四十二番

古河虎之助氏

實業家

京橋區築地二丁目十番地

昔豊大閣ハ微賤ヨリ身ヲ起シテ關白ノ位ヲ占ム、明治實業界ノ巨人古河市兵衛翁アリ、眇タル一小店ノ使傭人ヨリ身ヲ起シテ銅山王ノ名ヲ博ス、剛放ノ資性、機略ノ巧妙、時代ヲ異ニシテ尙且經路ヲ等フス、翁ノ殘サレタル事業ハ聖世實業界ノ花ニシテ、尊キ經驗ヨリ遺サレタル運鈍根ノ三大秘訣ハ、蓋シコレ千古ノ金言ナリ、試ニ波瀾アル苦心慘怛史ヲ説ケバ、一面ハ一綱ノ脚本ヲナシ一面ハ一籍ノ立志ニ説ヲナス、其堂々タル男性的奮闘ハ、正ニ後進好箇ノ興奮資料ナリ、當主虎之助氏ハ翁ノ愛子ナリ、鐘ノ響ニ散ル落花今ヤ銅山王ハ幽明ノ人ナリ、養嗣潤吉氏(故外務大臣陸奥宗光伯ノ次男)其後ヲ享ク、温厚ノ君子人、爾カモ陸奥先生ノ薰化ハ、時トシテ奇抜ノ計劃ニ出ヅ、先天的守成ノ才、人ヲシテ絶好ノ後繼者ト稱セシメタリ、然ルニ天氏人ニ幸セス志業半途ニシテ病歿ス、時正ニ明治三十九年ノ冬、枯木寒風ニ鳴ツテ暮野荒涼タリ、虎之助君、弱冠ニシテ家督ヲ繼グ、君ハ明治二十年一月ノ出生ニシテ市兵衛翁ノ男ナリ、早クモ愛父ニ別レテ世ノ悲風ニ遭フ、幼少學ヲ好ンデ才智衆ニ勝レ、人ヲシテ二世市兵衛ト稱讚セシム、資性快活ニシテ頭腦明晰ナリ、前年歐米各國鑛業狀態ヲ視察シ、頗ル造詣アリ、由來古河家ハ多士濟々ト稱セラレ、會社常而ノ局ハ、木村、近藤、岡崎、中嶋氏ヲ中心トシテ青年敏腕ノ士ヲ擁シ、井上老候、澁澤男、原敬氏ヲ顧問トシ、西スエズ、東金門ノ間之レニ比スベキモノナシ、内事ニハ三代ノ忠臣勤恪精神ヲ以テ主家ノ爲ニ致ス、如斯シテ君ハ統覽ス、同家ノ前途亦トスルニ足ラズヤ、君品行方正志操堅實ナリ、快活ノ資性ハ、自働車ノ採用ノ卒先者トシテ知ラレ、無名ノ角通トシテ侮ルベカラザルモノアリ、公共心ニ富ム處、前年ノ數百萬圓ヲ投ジテ東北大學ノ設立ニ資シタルヲ以テ知ルベシ、夫人ハ西郷侯ノ令嬢ニシテ學生時代ヨリ才色兼備ト稱セラル、蓋シ好箇ノ内助者タリ、希クハ福祉永ク君ガ上ニ宿ツテ繁榮愈々熾ナラム事ヲ。

電話新新 一千七十三番

安廣伴一郎氏

法學博士 貴族院議員

中込區砂土手原町二丁目二番地

君ハ福岡縣ノ人、安政六年十一月ヲ以テ生ル、夙ニ普通學ヲ修メ後進ンデ慶應義塾ニ入ル、明治十一年清國ニ航シ香港中央書院ニ入リテ英學ヲ修ム同十三年同院ヲ卒業シ、尋デ北京ニ遊ヒ支那學ヲ研究スル事前後二年餘造詣スル處渺ナカラズ、後更ニ進ンデ英國ニ航シ「ケンブリッヂ」大學ニ入り専ラ法律學ヲ研究ス、在學中常ニ優等ノ成績ヲ占メ大ニ日本男兒ノ面目ヲ完フス、在學五年業卒ハリテ「バチエラー、オブロー」ノ學位ヲ領ス、歸朝後先ヅ第三高等中學校教諭トナリ銳意其蘊蓄ヲ披瀝シテ後進子弟ヲ訓育ス、廿三年内閣書記官ニ拔擢セラレ兼ヌルニ法制局參事官タリ、同廿九年内務省社寺局長心得トナリ、翌年文部省普通學務局長トナリシモ故アツテ之ヲ辞ス、此間神職試驗委員、文官高等試驗委員、中央衛生會委員、圖書審査委員長等ノ要職ニ參シ、卅一年内閣書記官長ニ進ミ兼テ製鐵所長官ニ任ゼラル後チ辭シテ暫ク野ニ在リシガ、同年桂侯ノ内閣ヲ組織スルヤ入りテ農商務省總務長官トナリ本邦實業ノ發達ニ努力シ改善創始幾多ノ功績舉ゲテ數フルニ違アラザルナリ、後辞シテ再ビ在野ノ人トナリ門ヲ閉ヂテ讀書三昧ニ入ル、是ヨリ先キ帝國議會ノ政府委員、條約改正準備委員、文官高等懲戒委員、法律取調委員トシテ献策シタルノ偉績モ亦渺ナカラザルナリ、卅三年勅選セラレテ貴族院議員トナル、前年第二次桂内閣ノ組成ト共ニ入りテ内閣法制局長官、兼内閣恩給局長トナリ多年練磨ノ敏腕ヲ施シテ名聲噴々タリ前年法學博士ノ學位ヲ授ケラル、尙東洋拓殖株式會社設立委員トシテ其造詣ヲ開披シテ成立ニ貢獻セリ今ヤ才鋒彌々鋭ク、陰然トシテ日本官海ニ其勢力ヲ示シツ、アリ。

電話芝 一千六百七十八番



遠山市郎兵衛氏

實業家

日本橋區北新堀町三番地

節儉ヲ崇ビ奢侈ヲ禁ジ澁澁ノ衣ヲ服シ蔬糲ノ食ヲ嘗ム是レ往古ヲ以テ良風美俗トセシ所明治ノ聖代豈亦然ラザランヤ、然モ泰西ノ風潮ハ滾々トシテ幾テ勤儉素朴ノ美風ヲ驅逐シ奢侈虚飾ノ陋俗滔々トシテ上下ニ充滿セリ豈憤慨ニ堪フベケンヤ、然レドモ茲ニ遠山市郎兵衛君アリ以テ人意ヲ強フスルニ足ル、君ハ明治八年二月ヲ以テ和歌山縣有田郡ニ生ル、實ニ現今我國實業界ニテ名聲籍甚タル富士紡績株式會社社長濱口吉右衛門氏ノ令弟ナリ、君始メ名ヲ解之助ト呼ブ幼ニシテ東都ニ出デ令兄吉右衛門氏ニ頼リ神田淡路町共立學校ニ學ビ、後進ンデ第二高等學校大學豫科ニ入り次デ大學政治科ヲ優等ノ成績ヲ以テ卒業セシハ實ニ明治三十一年ナリキ、先是君高等學校在學中濱口家ノ親戚ナル醬油鹽問屋トシテ都下ニ聲名噴々タル遠山氏君ノ爲人ヲ慕ヒ令兄濱口氏ヲ經テ君ニ懇望スルニ遠山家ヲ數ガンコトヲ以テセリ、君亦他日實業界ニ雄飛セントノ大志ヲ抱ケルニヨリ遂ニ入りテ遠山ノ姓ヲ冒カシ明治三十一年市郎兵衛ト數名シヌ是レ即チ君ガ今日アル第一階梯タリシナリ、君ヤ資性温厚ニシテ篤實宛トシテ君子ノ風アリ、然モ艱難ニ處シテ屈撓セズ自ラ信ズルノ處ヲ行フニ當リテハ頗ル果斷ノ處置ニ出ズト云フ、由來實業界ニ於テハ華美ニ流レ邊幅ヲ飾リ自ラ得タリトナス者往々ニシテ是アルハ吾人ノ屢々耳聞目睹スル處ナルガ君ノ如キハ自ラ奉ズル頗ル險素ニシテ花晨月夕唯斯業ヲ勵ミ以テ其進歩發達ヲ期シツ、アリト云フ、又以テ君ノ半面ヲ窺フニ足ラン尙濱口合名會社ハ君等ノ力ニヨリテ去ル三十九年創設セラレタリ今ヤ實業界人材ニ渴スルコト殊ニ甚ダシ吾人ハ愈々君ノ健全ナランコトヲ祈ル。

電話浪花 一千二百九十番

佐々木政吉氏

醫學博士 杏雲堂佐々木病院長

神田區 駿河臺 北甲賀町十一番地

君ハ安政二年ヲ以テ生ル、夙ニ好學ヲ以テ聞コユル佐々木東洋先生ノ嗣子トナリ普通學ヲ修メテ後チ東京大學醫學部ニ籍ヲ置キ、刻苦精勵些ノ怠リナク遂ニ明治十壹年三月優等ノ成績ヲ以テ業ヲ卒ヘ、更ニ進ミテ獨逸伯林ニ留學シタルハ、時干明治十二年ナリキ、居ルコト五年此間泰西專門ノ諸大家ニ親就シ醫學ノ奧堂ヲ極メテ全十七年新進ノ學理ヲ齎ラシテ歸朝スルヤ聘セラレテ東京大學御用係勤務ヲ拜命シ同年内務省醫術開業試驗委員トナル、十九年醫科大學教授ヲ仰付ケラレ次デ脚氣病審査委員トナリ銳意熱血ヲ濺ギテ貢獻シタル亦少シトセズ、同廿壹年醫學博士ノ稱號ヲ受領ス、翌二十二年第二院內科學教授主任ニ擧ゲラル、同廿四年「コッポ」氏結核療法審査委員ニ推サレ同氏發明ノ肺癆治療法研究ノ爲メ官命ヲ帶シテ露國ニ至リ、親シク眞髓ヲ極メテ二十五年歸朝スルヤ功勞ニ依リ正六位ニ進メラル、其後明治廿八年官ヲ辭シ專ラ乃父ヲ補ケ杏雲堂病院副院長トシテ噴々ノ好評世ニ喧傳セラル、君辭官ノ當時特旨ヲ以テ位階ヲ進メラレ從五位ニ至ル、而シテ君父隱退ノ後チヲ繼ギテ同院ニ院長トナリ、能ク多數ノ部員ヲ督勵シ、汎ク民間診療ノ事ニ從事シテ天職ヲ全フス、君亦眞ニ慈術者トシテ天爵ヲ受クベキノ士ナリ、即チ治療部ヲ擴張シテ世ノ貧窮ノ爲ニ盡ス、尙他ニ理想ヲ實現シ、院內ノ設備シ盡シ、藥局ノ如キ完全無比、思フニ當院ノ創設ハ本邦醫界ノ元勳東洋先生ノ卓識ニ成リ、西歐斯學ノ精粹ヲ範トシタルモノニシテ、君亦此旨ヲ經トシ自己特有ノ見意ヲ偉トシテ改發ニ努力シツ、アルハ實ニ好箇ノ承繼者ト言ハサルベカラズ。

君資性博愛ノ情深ク殊ニ後進扶掖ニ力ヲ致シ、又養父ニ對シ孝道厚ク其他逸話積モリテ山ヲチスト雖モ茲ニ記スル要ナシ世人既ニ認知スル所ナレバナリ、唯人格高雅現今ノ模範的紳士トシテ敬慕スベキノ士ナルニ止メテ稿ヲ結ブ。

電話本局 二千九百五十番

岡 實 氏

農商務省參事官

芝罘白金三光町二百七十六番地

赤門出身ノ俊才トシテ當代少壯能吏ノ評ヲ以テ定メラレツ、アルモノ君ナリ、農商務省必須ノ人材トシテ未來ノ大成ヲ期待サレツ、アルモノコレ君ナリ、本年度ノ帝國議會ニ於テ、政府委員トシテ一段ノ名ヲ博シタルモノ即チ君ナリ、今其閱歷梗概ヲ聞クニ、君ハ奈良縣ノ人、岡義杪氏ノ長男ニシテ明治六年九月十二日ヲ以テ生ル、同十二年笈ヲ負フテ東都ニ出デ、同二十八年東京帝國大學法科ニ入ル、苦學數年同三十一年ヲ以テ政治科ヲ卒業ス、即チ官海ニ志シテ同年文官高等試驗ニ合格シ、出任シテ法制局參事官ニ任セラレ、次テ農商務省參事官ニ轉ジ、商工局工務課長ヲ命セラレ、爾來其手腕ヲ逞フシテ、克ク上長ノ認ムル處トナル、同三十七年權度課長兼務トナリ、又商品陳列館長ヲ兼ス、翌三十八年、白耳義國利榮壽萬國大博覽會開設ニ際シ、事務官長心得トシテ差遣セラレ、閉會歸朝ノ後、博覽會ニ關スル造詣ヲ齎シ、斯界ニ向ツテ貢獻シタルモノ決シテ尠ナカラサリキ、次デ工業所有權保護ニ關スル會議、商業會議所、商工業組合ニ關スル會議、世界經濟擴張ニ關スル會議等各種ノ萬國會議ニ參與仰付ラル、後歐米各國ヲ歴遊シテ同三十九年歸期セリ、同年日露事件ノ功ニヨリ勳五等瑞寶章ヲ下賜セラレ、翌四十年日本大博覽會理事官ヲ命セラレ後中米及南米ノ商工業視察ヲ被命約一年ノ行旅ノ後、明治四十一年十月二月歸期ス、今尙農商務省ノ樞務ニ參シ商務局保險課長及工務局工務課長トシテ新進氣鋭ヲ以テ名聲噴々タリ、君資性快活、頭腦頗ル綿密ニシテ、事務整理ノ才ト部下ヲ心服セシムルノ度量トハ、君ヲシテ益々位置ヲ高メツ、アリ、翻ツテ其私生涯ヲ窺ハ、高尚ナル趣味ト、高潔ナル氣品ハ、一點ノ更臭ヲ認メズ、モシ夫レ君ニ與フルニ若干年ヲ以テシ、經驗ト知識ヲ擁シテ意ノ如ク活動セシメンカ、恐ラクハ、來ルベキ内閣ノ一椅子ヲ占ムルニ於テ、敢テ何等ノ疑ヲ要セサル處ニシテ、亦吾人ノ至願スル處ナリ、即チ附記シテ未來ヲ待タン哉。

電話芝 一千九百九十番

影山甚右衛門氏

香川縣郡部選出衆議院議員

麴町區紀尾井町三番地

君ハ讃州ノ人安政二年四月多度津ニ生ル伊右衛門氏ノ長子タリ年甫メテ十七父ヲ失ヒ爾來其遺業ヲ經製シテ米穀商ヲ營ム甚右衛門ハ其通稱ニシテ幽獨ト號ス幼ヨリ學ヲ好ミ木谷愚山ノ門ニ遊ブ明治十二年推サレテ戶長トナル後病ヲ以テ其職ヲ辭ス次デ町ノ總代トナル在職十年自治制ノ實地ニ際シ之ヲ罷ム君平素勤儉節約敢テ奢侈ノ風ナク克ク公益主義ヲ首昌シ讃海商人ヲ警醒スル所尠カラズ又常ニ施與ヲ好ミ學生ニ資ヲ給シ會テ勵商社ヲ興シテ後進有爲ノ商工徒弟ヲ糾合シ以テ米穀綿布及ビ肥料其他地方物産ヲ販賣スルノ業ニ就カシム明治十六年新道開鑿ノ爲メ大ニ東西ニ奔走シ終ニ其成功ヲ告グ商業上一大進歩ヲ與ヘタリ又多度津電信局設立ニ盡力シ或ハ多度津港ニ於ケル阜頭建築ノ如キ其力ヲ公益ニ致ス一ニシテ足ラズ二十二年讃岐鐵道會社ヲ創設スルヤ君ハ其理事ニ撰バレ次テ社長トナル又綾蔭ノ海外輸出ヲ企テ其工場ヲ丸龜ニ起シ讚圓會社ト稱シ君之レガ社長タリ此年八月多度津銀行ヲ創立シテ其頭取トナル又多度津測量所設立ノ如キ君ノ功與ツテ大ナリト云フ二十七年縣ノ第四區ヨリ選バレテ衆議院議員トナリ第十一議會解散後候補ヲ堀家虎造氏ニ讓リ爾來專ラ實業ニ從事シ讃岐農工銀行及讚岐紡績會社等ノ重役トナリ西讃商界ノ牛耳ヲ執ル其公共事業ノ爲木杯賞狀ヲ受タル前後數回ニ及ブト云フ。

君資性恭謙ニ博愛ニシテ公共ノ事タルヤ如何ナル私事ノ急ヲモ顧ミス汲々東走西奔北馬南船ノ勞ヲ執リテ毫モ怠色ナキハ當時人情地ヲ拂フテ紙片モ只ナラザルノ日如斯老好ノ君子人ヲ見ル稀ナリ、三十六年第八回總選舉以來再ビ立チテ身ヲ政界ニ投シ、爾來每期ニ當選シテ連續今日ニ至ル現ニ立憲政友會ノ宿傑タリ。

電話番町 五百三十七番

牧野平五郎氏

富山縣富山市選出衆議院議員

富山縣富山市衣服町

語ニ曰ク禍福ハ天ニアルニ非ズ人ノ招ク所ニヨル心ヲ正シクシ意ヲ誠ニスレバ天必ス福ヲ下スト此語探
 リテ以テ牧野氏ヲ評スベシ、君ハ元治元年八月越中富山市ニ生ル漢數ノ學ヲ修メテ造詣深シ、吳服太物ヲ
 商フヲ業トシ眞摯誠實ノ精神ト勤勉篤實ノ行ハ其繁榮ヲ出來シ今尙益々家運隆々世人ノ信用殊ニ著シ、
 以テ信用ヲ資本トシテ營業スル定ニ商術ノ秘訣ト云フベシ、後推サレテ富山市會議員及同市會議長、富
 山商業會議所議員、同會議所副會頭、富山縣會議員等ニ舉ケラレテ公共ノ事ニ與ツテ貢獻少ナカラス、
 尙十二銀行取締役、北陸商業銀行取締役、第四十七銀行取締役、中越鐵道會社取締役、北陸生命保險會
 社取締役、富山電燈會社取締役、富山米肥取引所監査役等多クノ銀行會社ニ取締役トシテ實業界ニ其敏腕
 ヲ振フ、常ニ事業ノ發展開進ノ策ヲ講究シテ寧日ナク勉勵精勵責任ヲ全フスル處決シテ凡介ニアラサル
 ナリ、抑々氏ガ衆議院議員トシテ政海ニ舟ヲ乘出シタルハ三十六年第八回選舉ニ富山市ヨリ選出セラレ
 シヲ以テ初メトス第九回選舉ノ際關野善次郎氏ニ席ヲ讓リ只管勇氣ヲ養フニ努メタリ、遂ヒニ四十壹年
 第十回總選舉ノ事アルヤ再ビ推サレテ衆議院議員トナル。
 今ノ青年徒ラニ先輩ノ成功ヲ羨ミテ、苦戰奮闘筆紙ニ盡シ難キ苦慘ノ裏面ニ存スルヲ解セス、僅カ一片
 ノ卒業證書ヲ受ケテ能事終ハレリトシ一職ヲ得テ欣然タルニ於テハ邦家ノ前途豈寒心セザルベカラズ、
 我徒茲ニ向上ヲ以テ終始一貫セルノ君カ傳ヲ記録スル故ナキニ非ザルナリ。

長谷川金三郎氏

實業家

牛込區築地町七番地

君ハ元治元年ヲ以テ江戸ニ生ル父ヲ長谷川源八氏ト稱シ君ハ其長男ナリ、家主々豆腐製造業ヲ以テ舊家
 ノ稱アリ、連綿トシテ十七代ノ今日ニ至リ斯業界ノ泰斗ヲ以テ目セラント、アリ、先代源八氏ハ勤誠勉
 實性質雄渾活達ノ人ニシテ如何ナル苦難ト雖モ介意セズ頑然屈色ナキハ恰モ猛將敵前ニ立チニ陸若タラ
 サル態度ニ酷似セル氣慨賞スベキノ士ナリキ、爲ニ同業者間ノ模範的事業家トシテ推服セラル、ニ至レ
 リト云フ、君其後ヲ承ケテ孜々刻々遺業ヲシテ益々改發セシメツ、アリ、商號ヲ尾張屋ト呼ビテ舊幕時
 代專ラ旗下ノ御用商トシテ都下ニ其名普ネカリシ信用日ニ加ハリ隨ツテ家業益々賑ヒ終ニ今日ノ基礎ヲ
 ナセリ、商家ノ最モ努ムベキハ自家ノ信用ヲ永遠ニ維持スルニ在リ、信用立チテ茲ニ始メテ事業ノ進歩
 ヲ見ルニ至ルベシ、僞シ事茲ニ出テズシテ一時ノ奇利ヲ占メ、俄カニ紳商タラムトシテ術策ヲ講ズルガ
 如キハ所謂山師的商人トシテ世人ノ最モ嫌惡スル所ノモノナリ、事業ノ大小廣狹ヲ問ハズ、只忠實ニ其
 職ニ當レバ福社招カズシテ其門ニ來ラム、不正ノ行爲ヲ以テ自己ヲ欺キ他ヲ欺瞞セントスルガ如キハ却
 ツテ自暴自棄ニ出ヅルノ甚シキモノナリ、己ノ信用ヲ失墜スルノ甚クシキモノナリ、君ガ從事セル本業
 ノ如キハ規模ノ大ナラザル事業ナリト雖モ創業以來相傳數世以テ君ノ代ニ及ブ、先人ノ業ヲシテ愈々發
 展セシメテ其餘慶ノ延キテ隣保ニ及ボスニ至リテハ實ニ欽スベキノ人士ト稱シテ溢美ニアラサルベシ。
 君人ト爲リ寛厚ニシテ慈心深ク一家和氣爾々ノ裡ニ其業ヲ樂シミ以テ之レガ繁榮ヲ圖リ并セテ社會公共
 ヲ利スル將來天ハ君ノ如キ人ニ對シテコソ初メテ天爵ヲ下スヲ固ク信ジテ吾人ハ疑ハザルモノナリ、請
 フ自重加養層一層奮勵ヲ以テ天職ニ貢獻セラレムコトヲ切望シテ止マサルナリ。

中川久任氏

伯爵 貴族院議員

東京府豊多摩郡澁谷村
中澁谷二百九十三番地

當家ハ清和天皇ノ皇孫、鎮守府將軍源經基三世、攝津守源賴光十二世ノ裔、兵庫頭中川清深ノ十世、瀨兵衛清秀ノ後ナリ、清秀織田信長ニ參ジ、屢々戰功アリ、攝津茨木ノ城主トナル、後羽柴秀吉ニ屬シ、賤ヶ嶽ノ軍ニ從フテ終ニ戰死ス、其子右衛門尉秀政家ヲ繼ギ、播州三木ノ城主トナリ、秀吉ニ諸所ニ從フテ戰功アリ、弟秀成其後ヲ享ケ、豊後國岡ニ移封シテ七萬四百四十石ヲ食ム、ソレヨリ久盛、久清、久恒、久通、久忠、忠慶、忠貞、忠持、忠貴、忠教、久昭ヲ經テ、從五位久成ニ至ル、久成嘉永三年八月四日ヲ以テ生ル、明治十七年七月伯爵ヲ授ケラレ、全廿三年七月貴族院議員トナル、君家ヲ嗣グ、實ハ淺野懋積ノ八男ナリ、明治四年五月二十日ヲ以テ生ル、全年五月一日中川久成ノ嗣子トナリ、全月十八日家督ヲ相續シ、翌月十四日今ノ名ニ改ム、夙ニ學習院ヲ卒リ、政事上ニ趣味ヲ有シテ同志ト共ニ現狀打破ヲ唱ヘ、前年互選セラレテ貴族院議員トナリ、少壯貴族硬團伯爵同志會ニ席ヲ有ス、而シテ濃厚篤實ノ資性ハ、流石豪傑揃ノ會員中、萬綠叢中紅一點ノ觀ヲ有ス、曩日松平朝壽伯ヲ訪フテ談君ニ及ブヤ伯爵曰ク「中川君ハ同志中最モ眞面目デ、會ノ事務整理ノ如キハヨク熱心ヲ以テ當ル、而カモ濃厚ノ君子人デアル云々」ト蓋シ憶ニ中レルノ評ナル信シテ疑ハザルナリ、今ヤ君等同志ノ奮闘ハ、單リ上院廓清ノ現狀打破ニ止マラズ、日本政治史上特筆大書スベキ偉業ナリ、既ニ輿論ハ定マレルアリ、數ノ多少ハ最後ノ勝利ト何等ノ交渉ヲ有セズ、希クハ犧牲的奮闘更ニ一段ヲ進メラレン事ヲ。

更ニ附記ス、君舊藩子弟ノ黨育ニ意ヲ用ヒ、育英會ヲ起シ、有望ナル青年ニ向ツテ學資ヲ貸與シ其志ヲ遂ケシメツ、アリト、亦以テ名門ノ出ニ愧テサルナリ。

電話 二千三百八十六番

野々村政也氏

實業家

牛込區東五軒町四十一番地

事務複雑ナル日銀調査役トシテ多年其軌ヲ過マタズ、多士濟々タル同行中一種ノ敬意ヲ以テ迎ヘラレツ、アルハ君ナリ。

開ク君ハ鳥取縣ノ人、安政二年六月ヲ以テ伯耆ノ國米子ニ生ル、嚴君ヲ伴一氏ト呼ビ君ハ其長男ナリ、幼名ヲ伴之助ト呼ビ後今ノ名ニ改ム、幼ニシテ穎敏聰悟ニシテ學ヲ好ミ、濃厚篤實ニシテ群童ト異ル、夙ニ米子藩儒高階眞齊ニ就テ漢籍ヲ學ビ造詣頗ル深シ、明治三年藩兵トシテ京都皇居警護ニ任ジ、又音樂隊ニ加ハリ止ルコト一年、翌年廢藩置縣ノ行ハル、ニ當リ、士族ノ常録ニ離ル、ヤ、力食ノタメ斡旋奔走スル所尠カラザリキ、明治七年郷關ヲ辭シテ東都ニ出デ英學ヲ研鑽スル事二年ニシテ以爲ラク資力ナクシテ何ゾ充分ノ研學ヲ能ハンヤ、如カズ官費ヲ以テスル師範學校ニ入ランニハト、全九年大阪師範學校ニ入り寸陰ヲ徒費セズ孜々トシテ研鑽怠ラズ、全十一年拔群ノ成績ヲ以テ卒業ス、是レヨリ先、君同校在學中長クモ、天皇陛下ノ臨御セラル、ヤ、教員評議ノ結果君ハ御前ニ於テ教育要旨朗讀ノ任ニ當リ親シク至尊ニ咫尺スルノ光榮ヲ荷ヒシトイフ、君同校卒業スルヤ直チニ滋賀縣師範學校教員ニ任セラレ、十三年兵庫縣ニ轉ジ同縣水上全郡ノ學事ニ盡瘁貢獻スル所少カラザリキ、明治二十二年森有禮氏ノ文部大臣タル時、君某氏ノ推薦ニテ文部省ニ出仕シ超ヘテ二十三年職ヲ辭シ、日本銀行ニ入り書記トナリ、尋デ調査役トシテ謹嚴方正ヲ以テ事務ヲ執リ、勤績今日ニ至ル多年教育界ニアルノ人ニシテ、一朝實業界ニ轉ジテ今日ノ榮職ニ在ル亦以テ君ガ手腕ノ一端ヲ窺フニ足ラズヤ。

君謙遜辭讓、嘗ツテ卓勵風發ノ鋒銛ヲ露ハサズ其溫醇含蓄ノ氣風ハ自ラ後進ノ敬愛ヲ増サシムル處タリ希クハ益々加重以テ斯界ノタメニ貢獻セラレンコトヲ。

電話番号 一千六百四十八番

板倉 中氏

千葉縣郡部選出衆議院議員

神田區新石町五番地

性資溫敦、友信厚義、而カモ濁界ニ處シテ毅然君子ノ風格具備セルモノハ板倉中氏ナリ、君ハ安政三年九月ヲ以テ上總國長生郡關村ニ生ル其先代ハ里見家ノ客將板倉大炊介ノ後ナリ、嚴父ヲ周二氏ト呼ンデ漢學ノ造詣深カリキ、君ハ其長子ニシテ幼時夙ニ經史百家ノ書ヲ讀破シ年齒僅ニ十八歳ニシテ漢學私塾蓋管學舎ノ講師ナル實ニ感歎シテ餘リアリ、明治十八年東都ニ笈ヲ移シテ賓作麟祥、大井憲太郎及ビ河津祐之ノ諸氏ニ就キテ佛蘭西學ノ研究ヲナシ傍ラ法律學ヲモ修メテ後辯護士トシテ世ニ處ス此間只管獨立獨學以テ毫末タモ他ニ補助ヲ受ケズト今尙自ラ評シテ我屯田兵のナリ自ラ耕シテ自ラ戰フモノナリト以テ其人格ヲ窺知スルニ難カラズ、明治十九年千葉縣會議員ニ推サレテ同議長トナリ、二十三年國會開會ニ際シ選ハレテ衆議院議員トナル、又自由民權ヲ鼓吹シテ千葉縣ニ東海新報ヲ創刊シテ自ラ主筆トナリテ之レニ努ム、既ニ千葉ニ於テ言論界ノ霸權ヲ握リタル茲ニ年ヲ重ネタリキ、廿七年再ビ衆議院議員ニ舉ケラレ爾來逐鹿場裡ニ失敗ヲ取ル前後二回事故ノ爲メ候補者タルヲ辭セシモノ一回、而シテ衆議院議員トシテ當選スルコト前後七回ニ及ブ、立憲政友會ノ一偉傑會員タルヲ失ハサルナリ、尙君ガ職掌ノ上ニ關シテハ彼ノ大坂事件ノ辯護以來世上注目ニ價ス大事件ニ其技量ヲ揮ハレタル者逐一ニ枚舉スベカラズ、君ノ餘技トスル著多キガ中ニ詩歌俳句ノ堪能ナルヲ外ニシテ臨池ノ技ハ其ノ尤モ其ノ妙域達セリ。

電話本局 四百五十四番

小野 金六氏

實業家

麴町區飯田町三丁目二番地

一貫ノ誠意會ツテ渝ルナシ、當代實業界ニアツテ甲州派ノ第一人者、小野金六君ノ如キハ、蓋シ一種ノ異彩ヲ放ツモノト謂フベシ、其企業ノ立脚地ガ、管ニ營利ヲ主トセズシテ國家觀念ヨリス、蓋シ現代氣質ヲ拔ク事一頭地、嶄然トシテ頭角ヲ顯ス所以ナリ、其關係事業トシテ世ニ知ラレタル、銀行、煉炭、製紙、電燈鐵道、電車、機械製造、鑛山、水力電氣ノ各種ハ、一トシテ力ヲ致サザルナク、彼ノ泡沫會社ト選ラ一ニスベキ者ニアラザルナリ、今其概歴ヲ揭グルニ、君ハ山梨縣北巨摩郡韭崎ノ人、小野彌左衛門氏ノ男ニシテ嘉永五年八月十八日ヲ以テ生ル、祖先ハ武田家ノ重臣ナリキ、中世小野兵左衛門氏故アツテ歸農シ酒造及吳服商ヲ營ミ、爾來代ヲ重ネテ君ニ至ル、君年僅カニ十四、同地ノ酒造家ヨリ選ハレテ取締トナル、蓋シ君ノ經營手腕ハ天才ナリシナリ、後年時勢ノ趨勢ヲ洞看シテ桑苗數萬ヲ植ヘ以テ養蠶ノ發達ヲ計圖ス、時ニ明治十年ノ事變アリ、米價ノ昂騰ヲ先見シテ巨利ヲ博ス、爾來其銳才ヲ逞フシテ中央實業界ノ人トナリ、兩敬氏ト提携シテ活動一日ノ休ムナシ、遂ニ甲州派ノ勢力地盤ヲ樹立スルニ至リシナリ、燃ユルガ如キ至誠ノ念常ニ企業上ニ發露シテ蔽フベカラズ、日清戰役終了ノ後、新領土ノ交通機關ニ就テ憂フル處アリ、朝野ノ有志ヲ說破シテ臺灣鐵道株式會社ヲ起シ、更ニ其發展ヲ計リツ、アリシガ、三十二年國有トナルニ至ツテ止ム、二十四年極東ノ風雲ヲ觀測シテ京釜鐵道ヲ發企ス、同鐵道ガ、日露戰役ト如何ナル關係ヲ有シタルカハ、敢テ吾徒ノ說クヲ須ヒサルナリ、尙教育用器械、醫療器械、及農具ノ普及改善ヲ計ツテ東京機械製造株式會社ヲ經營シ、斯界ノ天才石川角藏氏ヲシテ手腕ヲ揮ハシム、尙日本煉炭株式會社ノ如キハ軍事事ノ秘密ニ屬スト雖モ、日露戰役ノ軍需品トシテ供給シタルノミナラズ、列國東洋派遣艦隊ニ向ツテ常ニ供給シツ、アリ、其他東都交通機關タル電車事業ヲハシメ、前記事業ニ關與シタル事一々枚舉ニ遑アラザルモ今ハ管ニ國家的實業家ノ典型トシテ其功ヲ頌スルニ止メントス。

電話番町 二百五十三番

上埜安太郎氏

富山縣郡部選出衆議院議員

芝區三田四國町
二番地十七號

君ハ慶應元年ヲ以テ富山縣西礪波郡五位村ニ生ル、夙ニ自由主義ヲ執リ大同團結ニ投ジテ勢力ヲ鄉黨隣里ノ間ニ張ル、當時ノ改進黨勢ノ壯ナリシニ、君猶一個ノ青年ヲ以テシ、奮闘連年克ク此強敵ヲ排ス、爲ニ大ニ同志ノ重ンズル所トナリ、明治廿五年選バレテ同縣會議員トナリ、次テ副議長ノ重任ヲ帶ベリ時ニ年僅ニ廿五、人以テ異數トナス、爾來自由黨ニアリテ極力黨勢ノ擴張ニ努メ、曾テ北陸自由黨ヲ組織シテ其主義ノ鼓吹ニカメ、苦節今猶政友會ニアリテ北陸地方ノ重ヲナス、三十一年推サレテ縣會議長トナリ、最モ勸業教育及ビ土木ノ爲ニ盡シ、庄川改修、富直鐵道案ノ如キ其勞多キニ居ルト云フ、次デ北越組ヲ起シテ自ラ其社長トナル、曾テ同志ト共ニ北陸公論ヲ起シ尙ホ越中新報ニ社長タリ、三十五年第七回衆議院議員總選舉ノ事アルヤ縣民ノ強要スル處トナツテ候補ニ立ツ、遂ニ當選ノ光榮ヲ得テ以來每期ノ總選舉ニ當選シテ遂ニ今日ニ至ル、今ヤ立憲政友會ニ於ケル自由黨以來ノ志士トシテ黨員ノ重視ヲ受ケ、同會北信八州團ノ『オウソリチー』タリ、尙公餘力ヲ實業ノ發展ニ致シ、芝浦ノ一名物ロセツタ『ホテル』ノ如キモ、尾城、阿部等東都實業家ト共同經營ニアルモノナリ、尙同志ト共ニ東洋漁業株式會社(資本金二百萬圓)ヲ起シ監査役トシテ貢獻ス蓋シ同社ハ日本ニ於ケル大規模ナル捕鯨漁業ノ嚆矢タリ今ハ東洋捕鯨株式會社ト合同シテ大組織トナスニ至リ、其解散ノ際成功紀念トシテ同社株主ヨリ銀盃ヲ送ツテ君等ノ誠意ヲ感謝シタルガ如キハ斯界ノ一美談タラズンバアルベカラサルナリ。

君尙春秋ニ富ム希クハ奮闘一段ナラン事ヲ、其大ナル氣、宇其稜々ノ俠骨、好箇政治家袖領的素質ヲ有スルノ君、勉メテ怠ラズンバ大成ノ日決シテ遠カラサルナリ。

電話芝 千四百九十五番

池上仲三郎氏

實業家

下谷區上野花園町十一番地

群體圍繞シテ四面海ヲ見ズ、土地高爽ニシテ水急駛セリ、君斯クノ如キ靈域ニ生ラ享ケ夙ニ河海ノ氣ヲ受ケ度量殆モ洋々大海ノ如ク、豪傑ノ如ク又粹人ノ如シ、熱情アリテ輕忽ノ言動アルナク、蹶然トシテ起ル一度事ヲ圖ルヤ勇斷敢決力ノ亂麻ヲ斷ツニ似タリ。君ハ長野縣高遠ノ人ナリ、安政四年十月ヲ以テ生ル、幼時漢籍ノ素養ヲ以テ早クモ出藍ノ譽アリ、長スルニ及ビテ志ヲ實業界ニ立テ餘志東西ノ財政經濟ノ學ヲ研鑽シ、尙地方政界ニ意ヲ傾ケ、幾多ノ俊傑ト相來往シテ國家ノ大勢ヲ論ジ、他面ニ縣下凡百ノ公事ニ携ハリ、教育衛生土木等縣治ノ完備ハ固ヨリ殖産興業ノ改善ニ盡シタル一再ニシテ止マザルナリ、民望ノ歸スル所撰バレテ長野縣會議員トナリシハ明治二十年ノ事ニシテ少壯敏腕家ノ名政界ニ喧傳セラレ時人ノ望ヲ君ニ囑スル甚タ大ナリシガ斷然意ヲ斯界ニ斷テ、專念實業ノ發展ヲ劃ス後北海道ニ到リ、鑛山事業ヲ經營シ苦心ノ結果業務漸ク其緒ヲ得タルノ時、該事業ニ關スル諸般ノ事務ヲ後輩ニ托シテ都門ノ人トナル、而シテ中央實業界ニ辣腕ヲ揮ヒタル君獨特ノ堅且ツ忍ニシテ抜ク可カラザル奮闘ニ依リ田中平八、高嶋嘉右衛門兩氏ノ贊助ヲ得テ明治二十九年生命保險會社ヲ創立シ、君其專務取締役トナル、外ニ北海道鑛山株式會社ニ其副社長トナリ事實上ノ頭首タリキ、同年九月帝國貯蓄銀行ノ取締役トナリ、又同行ノ母体トシテ設立セラレタル合資會社田中銀行ノ投資者トシテ取締役トナル、又伊奈電車軌道株式會社諏訪電氣株式會社取締役等ヲ兼任シ、先キニ東京米穀商品取引所理事トシテ得意ノ敏腕ヲ揮ヒツ、アリシガ意見ノ同ジカラサルモノアリシヲ以テ斷乎トシテ同所ヲ辭シ、現ニ田中銀行及ビ如上列記ノ諸會社ニ『ベスト』ヲ盡シテ其主義ヲ貫徹スルニ忠實ナリ。

君資性博愛慈俠多涙多血ノ士ニシテ磊落豪放ニ似テヨク貧窮ヲ賑ハス逸歴佳履多シト雖モ紙數ニ限リアリ遺憾ナカラ摺筆シテ稿ヲ結ブ請フ讀者其意ヲ諒セヨ。

電話下谷 一千八百八十二番

清水宜輝氏

實業家

本郷町一丁目七番地

君ハ新瀉縣ノ人安政三年九月十三日ヲ以テ新瀉縣中頸城郡葛城村ニ生ル舊高田藩士清水宜義氏ノ長男明治六年年十八ニシテ上京同人社ニ學ビ致ヲ中村敬宇先生ニ受ク時ニ銀行業始メテ我國ニ創立セラレ世未ダ其事務ニ通ズル人ナシ官之レヲ患ヒ大藏省ヲシテ官費生ヲ募リ銀行學ヲ學バシム君深ク時世ヲ察シ同人輩多クハ朱授金章ヲ夢ミルニ反シ獨リ率先シテ募ニ應ジ勉學スル事茲ニ四年明治十年業卒リテ第十五銀行ニ入ル爾來多年一日ノ如ク其職ヲ守リテ倦マズ其精勤其勉勵深ク先輩ノ推服スル處トナリ漸次累進シテ廿七年支配人トナリ遂ニ監査役ニ進ミ三十年丁酉銀行ノ取締役ニ舉ケラレ支配人ヲ兼ネ三十一年推カレテ岩越鐵道會社監査役トナリ四十二年上越電氣株式會社ヲ起シテ取締役タリ君本務ノ餘又公共事業ニ盡シ推サレテ本郷區會議員トナリ區政ノ改善ニ献策シ、今ハ學務委員トシテ熱心盡力シツ、アリ、以上ハ君ガ公生涯ノ半面ヲ摘記シタルモノナリ、夫レ羈旅ノ身ヲ以テ功ヲ他郷ニ成スハ已ニ尋常人ノ企及スベカラザル處況ヤ衆望ヲ有スル如斯隆ナルハ君ガ材識德性兼備ノ人タルヲ窺フニ足ル、嗚呼霜臺公逝キテ茲ニ三百年北越人材ノ寂トシテ聞ユル者ナカリシヲ今ヤ文明ノ戰場タル經濟界ニ於テ戰勝者ヲ輩出スルハ北越ノ人タルモノ亦以テ氣ヲ吐クニ足ランカ今ヤ戰後ノ經濟界人財ニ渴スルコト恰モ大旱ノ雲霓ヲ望ムカ如キモノアリ、吾人ハ君ノ益々自重加養シテ斯界ニ貢獻セラレンコトヲ切望シテ止マザルナリ。

電話下谷 二千三百七十六番

木下吉之丞氏

長崎縣選出衆議院議員

長崎縣北高來郡小野村

青巒崖鬼、彩波縹渺トシテ風光極メテ明媚、滄溟浩蕩トシテ九州西岸ニ沿ヘ、雲烟迷フ天草灘、波浪ハ半島ヲ折レテ濤ノ渚ヲ洗フ處、コ、肥前諫早ノ近郊、北高來郡小野村、コレナン君ガ生地ニシテ時ハ安政六年十二月ナリキ、君幼ニシテ温厚篤實風ニ學ニ志ス、家ハ鍋島ノ客老諫早家ノ臣下タリ、長スルニ及ンテ策ヲ負フテ東都ノ客トナリ、一代ノ篤學中村敬宇先生ノ同人社ニ學ブ、敬宇先生ハ明治學界稀有ノ人格ニシテ同人社ニ臨ムヤ、智育ノ修養ニ勉ムルト共ニ、人格ノ向上ニ重キヲ置ク、當時同社ニ贊ヲ執リシ幾多ノ秀才ガ、一種ノ特色ヲ有シテ現時ノ社會ニ尊重セラレツ、アル者亦這般ノ理山ニ存セスンハアルベカラズ、君亦鎮西代議士中人格高潔ヲ以テ定評アリ、早クモ縣下ノ公共事業ニ盡瘁シ、選ハレテ長崎會議員トナリ以テ全常置委員トナル、夙ニ同志中倉、有田氏等ト共ニ立憲政友會員トシテ黨勢擴張ニ努力シ、同縣支部ノ重鎮トシテ有數ノ人材ナリ、又一方縣下ノ産業發達ヲ唱道シテ一日ノ怠リナク自ラ島原鐵道株式會社ノ創立ニ干與シテ專務取締役トナリ、事實上ノ經營者トシテ其發展ノ樞務ニ執筆シツ、アリ、前年第十回衆議院議員ノ總選舉アルヤ、立憲政友會公認候補者トシテ逐鹿場裡ニ打ツテ出デ、遂ニ當選ノ光榮ヲ有スルニ至リシナリ、二十五議會ノ初舞臺ニ、選舉セラレテ懲罰委員タリキ。君資性温厚ニシテ頭腦明晰、殊ニ創始の才能ハ其最モ長トスル處ナリトイフ、君亦九州政友團中ノ一明星タルヲ失ハサルナリ。

千早正次郎氏

岐阜縣岐阜市選出衆議院議員

牛込區仲町三十六番地

當今ノ人士口ヲ開ケバ政治家ノ腐道敗徳ヲ慨シ、代議士ノ遊惰放落ヲ歎ゼリ、爲リト雖モ請フ沈思セヨ古人モ既ニ人恒産ナレバ恒心ナシト云ヘリ、今ノ代議士ヤ政治家ヤ多クハ之レ皆ナ資豊ナラズ産富ナラズ豊恒ナキ言フ俟タズ其腐敗墮落シテ止マラザルナキモ怪シムニ足ラズ、故ニモシ完全無缺有資高德蓋深キ士ヲ得ムト欲セバ須カラク其レ等ヲ千早氏ノ如キニ求メヨ、今氏ノ閱歷、梗概ヲ叙シテ傳トナサムトス君ハ安政三年七月美濃國惠那郡苗木村ニ生ル、志ヲ海軍主計ニ立テ海軍主計學校ニ入りテ刻苦勉勵好成绩ヲ以テ業ヲ卒ヘルヤ海軍主計補ニ任セラレ此處ニ素志ヲ貫徹シテ専心身ヲ捧ケテ以テ功績大ナルモノアリ、遂ヒニ海軍大主計ニ昇進スルニ至ル、其職ヲ奉シタル間逸績頗ル大ナリト雖モ列記スルヲ得ズ、其如何ヲ問フモノ、爲メニ附記シテ答ヘムトス、紙數制限アリテナリ後日大冊ヲ編スルニ當ツテ明記シテ其缺ヲ補ハムトス讀者之レヲ涼セラレムコトヲ、昨明治四十一年第十回總選舉ニ於テ岐阜市ヨリ推サレテ衆議院議員トナリ下院ニ席ヲ有スルニ至レリ、是レ偶然ニアラズ其人ト其實歷ヲ知ルノ人ハ當然ナルヲ首肯スベシ。

君天資敦厚度量寬裕名利ニ淡ナリ、海軍ニ職ヲ捧シタルニ際シテモ政ヲ巧智ヲ弄セズ、才識術ハズ眞摯率直循々其本分ヲ盡セリ其人トナリ窺ヒ知ルヲ得ベシ。

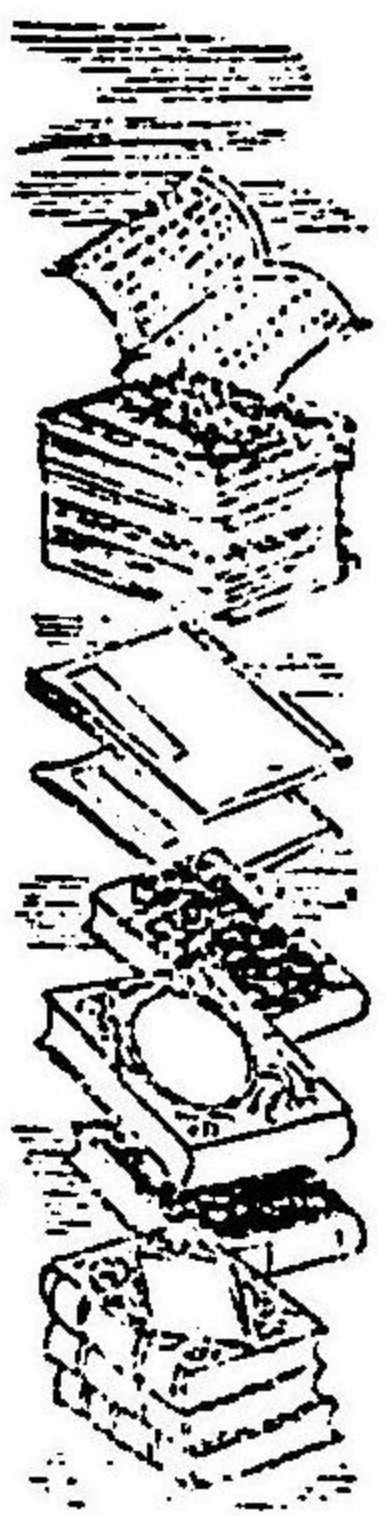
電話番号 二千百三十番

神前修三氏

和歌山縣郡部選出衆議院議員

和歌山縣海草郡神前村

温厚篤實ニシテシカモ仁慈ノ情ニ富ミ、義ノ爲メ尙身ノ危殆ヲ顧ズ、此美質ハ君ノ血管ヲ横流スルノ精ナリ、今ヤ代議士ノ老熟者トシテ、行ク處必スヤ圓滿ノ跡ヲ印ス、蓋シ夫レ、近畿政友團中ノ白眉カ聞ク君ハ嘉永六年十二月ヲ以テ紀伊國海草郡大字神前ニ生ルト、家ハ土地屈指ノ舊家ニシテ同地ノ草分ケト稱セラル、父祖以來地名ヲ以テ姓トナシ、代々此地ノ里正トシテ地治ニ奔走ス、君幼ニシテ學ヲ好ミ、夙ニ和漢ノ群書ヲ涉獵シ、造詣最モ深キ者アリトイフ、少壯早クモ公共事業ニ關係シ徐々ニ縣民ノ信任ヲ博ス、幾モナクシテ四十五ヶ字宮井筋取締ヲ命セラレ、更ニ縣會議員ニ當選シ、誠實敦厚群ヲ拔イテ勤格ス、次テ同常置委員、同參事會員、地方衛生會員、第一回圖書審查委員、地方森林會議員、等ノ要職ニ推舉セラル、コレヨリ先キ身ヲ政黨ニ投ジ、立憲政友會支部創設ノ如キハ君ノ力ヲ藉ルモノ頗ル多シト云フ、宜ナル哉縣下ニ於ケル同會ノ先輩トシテ常ニ青年政客ノ欣慕ヲ受ケツ、アル事ヤ、三十五年大選舉制實施ト共ニ衆議院議員トナリ、爾來連續シテ今日ニ至ル、此間院内ニアツテハ各種ノ委員ヲ勤メ、院外ニアツテハ黨ノ古參トシテ重要會議ニ參加シ、多年一日孜々トシテ邦家ノ爲ニ努メツ、アリ、尙日露戰役ノ功ニヨリ勳四等ニ叙セラレ旭日章ヲ賜ハル。



片岡久太郎氏

宮内省官吏

淺草區永住町二二七

年のたつあしたの雪をはしめにて

うれしき事のなほつもらなむ

閑雅ニシテ雄麗、健カニ國民趣味性ノ一面ヲ具体現スル此國風、コレ本年ノ勅題新年雪ニ對スル片岡君ノ詠進シタル處ナリ、過クル十八日宮中風風問ニ於テ行ハレタル御歌會ニ二萬八千餘首ヨリ預選ノ光榮ニ浴シタル名譽ハ、正ニコレ一門ノ譽ニシテ吾徒亦大白ヲ舉ケテ未見ノ歌人、君ガ名譽ヲ謳歌セサルベカラズ。

君夙ニ職ヲ宮内省内事課ニ奉ジ、寔々匪躬克ク其本務ヲ全フシ、公暇大口鯛二氏ニ就テ敷島ノ道ヲ修メ、古昔ノ涉獵ニカメテ多年怠リナシ、爾來隠レタル歌人トシテ一部ノ尊重ヲ享有シツ、アリキ、其詠風ニ至ツテハ一種獨特ノインスピレーションヲ具有シ、他ノ擬スベカラサル妙味ヲ露出ス、今期ノ預選歌ノ如キモ、尠クトモ這箇ノ消息ヲ解スベク例トスルニ足ル、既ニ干草會ニ於ケル其勢力ハ決シテ侮ルベカラサルモノアリ、頃日某新聞訪問記者ニ答ヘタルノ一節ニ曰ク、余ハ趣味ヲ解スルベク貧弱ナリ、歌道ノ如キモ、只思想ヲ一ノ言葉綴ル事ノ愉快ナルヲ思惟シ殆ンド漫然ト其道ニ入りシノミ、加フルニ時ト場所ヲ問ハズ行ハル、事ノ妙ヲ自覺セルヲ以テナリ……云々」ト、側面ヨリ攻竅シテ君ガ文學觀トナスベキ歟。

今ヤ或ハ新派或ハ何々ト、和歌壇ノ形勢何等ノ統一ヲ有セズ、徒ラニ輕薄者流ノ玩弄スル處トナツテ亂調ノ極ニ達セントスルノ時、忠實ナル君ヲ得豈文壇ノ一慶事ナリトセズヤ。

服部金太郎氏

實業家

京橋區銀座四丁目八番地

帝都ノ地、由來人材ノ叢淵其見識其人格一世ニ秀デタルモノ軒ヲ併ベテ雄飛ス、茲ニ傳スル君ノ如キ優ニ如上ノ好例タルヲ信ジテ疑ハザルナリ。

抑モ君ハ尾張ノ人、嚴父ハ曾テ都門ニ出デ、夜間露店ヲ出シ微少ノ利益ヲ以テ辛クモ家計ヲ維持シ來レリ、君爲人具サニ此辛苦ヲ嘗メ悲境ニ出入シテ能ク艱難ト戰ヒ、不屈不撓ノ精氣ヲ鼓舞シテ胸裏私カニ期スル處アリ、年僅カ十二、京橋八官町ノ某商店ニ入り使働ニ從フ、若年ナルモ君至孝ノ念深ク家計ヲ憂ヒ父母孝養ノ氣勃々トシテ心裡ヲ去ラズ百方苦慮ノ末同店ヲ辞シ遂ニ日本橋區ナル某時計店ニ入り孜々トシテ其業務ヲ練習シ餘暇讀書ニ勉メ他日ノ發展ヲ期圖ス、後同家ヲ辞シ更ニ下谷某時計店ニ入ル、偶々同店ノ閉鎖スルニ遭フヤ君奇特ニモ其貯蓄金ヲ主家ニ送り一片ノ赤心ヲ表白セント云フ、爾後幾年ノ辛酸ヲ經テ遂ニ古時計修繕業ヲ營ミ夜間英、漢學ノ研修ニ力ム、明治十四年初メテ京橋區采女町ニ時計店ヲ開業セシモ同十六年火災ニ遭ヒ財産ノ過半ヲ失フ、更ニ同區木挽町ニ轉ジ滿腔ノ熱血ヲ以テ業務ニ努メ苦心慘澹席温マルノ時ナシ、宜ナル哉内外人ノ信望頓ニ加ハリ心勞空シカラス着々好運ニ進ミ店舗ノ狹隘其業務ヲ伸張スルニ堪ヘズ、同廿年更ニ銀座街頭ニ移轉シ盛ニ營業スルニ至レリ、當時君輸入時計ノ莫大ナルヲ奮慨シ如何ニモシテ完全ナル時計ヲ製出シ以テ輸入品ト對抗セント欲シ、明治廿五年本所區柳嶋ニ精工舎工場ヲ創設シ、初メ掛時計ヲ製出シ次デ同廿八年更ニ懷中時計ノ製作ニ着手シシカモ事業ノ困難亦豫想外ナリ、後チ卅二年十月歐洲ニ航シ親シク其製造法ノ濫與ヲ極メ歸朝後幾百名ノ職工ヲ獎勵シ、遂ニ精巧完全ナル物ヲ製出シ以テ輸入品ヲ減少セシメ、以テ國益ニ貢獻スル處偉大ナルハ世人ノ熟知スル處ナリ。

電話新橋 七百十三番 全 七百十四番 全 一千三百〇番

小澤 武雄 氏

男爵 貴族院議員

麹町區下六番町十番地

君ハ舊小倉藩士ニシテ弘化元年十一月十日豊前國足立村ニ生ル、小澤庄兵衛ノ男ナリ、幼少ノ頃ヨリ武藝文學ヲ好ミ、安政四年藩ノ因永館ニ入り無眼流、寶藏院流ノ槍、山鹿流ノ兵學、揚心流ノ柔術、御家流ノ馬術等ヲ學ビテ技大ニ進ム、其前父ノ後ヲ襲イデ書院勲番トナリ、文久元年江戸藩邸詰ヲ命セラル、爾來藩政釐革ニ力ヲ致シタリ、明治元年小倉藩ノ兵ヲ東北ニ發スルヤ、君軍務官トナリ畫策スル所少ナカラズ明治二年兵部少録ニ出仕シ間モナク兵部權小亟ニ至ル、更ニ陸軍少佐トナリ次デ兵部卿官房長タリ、後テ累進シテ陸軍中將ニ昇陞ス、其間一等法制官軍律取調掛トシテ我が陸軍法制ノ基ヲナス、遂ニ太政官大書記官トナル、君亦西南ノ役征討軍團參謀ニ任セラレテ軍機ニ參與シ、尙同輜重部長トシテ後方事務ヲ處理シ征討軍ヲシテ後顧ノ憂ナカラシム、平定後凱旋將校以下ノ動功調査委員トナリ、後テ陸軍省總務局長、陸軍士官學校長、陸軍少輔同參謀本部次長ノ重職ニ身ヲ捧ゲ、軍團ノ機密ヲ掌ルコト數年、是ヨリ先明治八年米國費府博覽會視察トシテ出張ヲ命セラレ、廿二年砲臺建築取調トシテ再ビ歐州ニ航ス、此時露國皇帝ヨリ壹等勳章ヲ受ク明治廿年五月多年ノ功ニ依リ華族ニ列シ男爵ヲ授ケラル、三十五年正三位ニ叙セラレ、尙三十七八年戰役ニ赤十字社救護部長トシテ滿韓ニ渡リ大ニ盡ス所アリ其功ニヨリ勳壹等ヲ賜ハル現ニ日本赤十字社副社長、錦鷄間祇候貴族院議員男爵正三位勳壹等ノ肩書アリ、去ル明治三十九年韓國壹等勳章太極章ヲ受領シ、同四十年「クロムス」皇帝ヨリ赤十字社三等勳章ヲ受ケ同四十二年露國皇帝ヨリ赤十字社勳章ヲ賜ハル、又明治四十年五月英京倫敦ニ開催セラレタル萬國赤十字社大會ニ出張シ副部長ニ推サル、尙四十壹年六月第六回内國勲業博覽會評議員トナル、如斯佳歷一々枚擧ニ遑アラズ、夫人桑子ハ舊靜岡藩土河村綱賀氏ノ二女ニシテ嘉永六年正月十五日ヲ以テ生ル、小澤家ニ嫁シテ男爵夫人トナリ明治卅七八年戰役ノ際篤志看護婦會頭トシテ功アリ勳五等ニ叙セラル。 電話番町 三十六番

關口 安五郎 氏

實業家

深川區藤井町十六番地

純簡江戸式商業ノ趣味ハ今ヤ歐化セラレタル東都ノ何地ニカ求ムルヲ得ン、吾人ハ敢テ江戸式商業趣味ヲ以テ今日ノ時勢ニ適合セリトナサスト雖モ、爾カモ信義地ヲ拂ツテ誦詠是レ事トスル澆季ノ世、稜々タル俠骨ヲ以テ立ツノ江戸趣味ハコレ須要缺クベカラザルモノナルヲ思惟ス、豈管ニ吾人東京ッ兒ノ我田引水論ノミナランヤ。

深川ノ名望家トシテ、且ツ亦附近唯一ノ老輔トシテ知ラレタル關口君ノ如キハ、蓋シ吾人ノ意ヲ得タルノ士カ、共明晰ナル頭腦ハ俠的江戸趣味ヲ骨子トシテ巧ミニ當世式ヲ應用シ、粹ヲ集メテ一丸トナシ、之レヲ業務ニ之レヲ生活ニ施シテ過タズ、換言スレバ一面ハ所謂且那式ニシテ一面ハ所謂紳士式ナリ、試ニ其略傳ヲ究ムレバ、君ハ萬延元年一月ヲ以テ江戸ニ生ル、幼ニシテ敏慧、嚴格ナル乃父ノ薫育ヲ受ケテ大ニ資スル處アリ、既ニシテ苦心多年實業ノ全般ニ曉通ス、家ハ古クヨリ和船用ノ舟具殊ニ精ノ製造ヲ營ミ、獨特ノ商風能ク需用者ノ輿望ニ投ジ、品質亦他ノ得テ擬スベカラサルモノアリ、聞説ク、近海船舶ノ全部ハ殆ンド君ノ店輔ニヨツテ供給セラレ、今ヤ及ホシテ日本全國ニ到ラントシツ、アリ、三十年同志ト共ニ深川銀行ヲ起シ、今ヤ頭取トシテ其經營ニ任ジ、江東屈指ノ金融機關トシテ成績茲ニ良好ナリ、コレ君ノ概傳ニシテ、假リニ詳記セント欲セハ片々タル本書全篇ヲ埋ムルモ尙且能ハスト雖モ今ハ省キテ一部ヲ採録スルノミ。

君資性快活、任俠ノ美風ハ其長トスル處、日常公共事業ニ盡瘁スル如キハ寧ロ其癖ニ近シトイフ、廢レ行ク江戸氣質ハ吾人頗ル恨事トスル處、希クハ加重シテ奮ハレン事ヲ。

電話浪花 四千二百六十番

渡邊 千秋氏

子爵 宮内大官

芝罘高輪南町七番地

進ミテハ忠ヲ盡サント思ヒ、退キテハ過ヲ補ハンコトヲ思フ、國家ニ藩屏トシテ皇室ニ忠臣トシテ四民ノ上ニ立ツモノ誰カ這般ノ氣節ナカラムヤ、君ハ舊高嶋藩士ニシテ天保十四年五月ヲ以テ生ル、長シテ藩費長善館ニ漢學習字詩文ヲ修ム後チ王陽明ノ學風ヲ慕ヒ經世ニ志シ文武ノ兼修ヲナス、高嶋藩皇學講習所ヲ設クルヤ君其學徒トナリ老書ヲ以テ評セラル、幕末ノ頃家ヲ實弟國武氏ニ譲リ大ニナス所アラムトス茲ニ君ノ閱歷ヲ按スルニ文久元治ノ交藩主諏訪忠誠閣老トナルヤ君ヲシテ公務ニ携ハラシム藩主職ヲ罷メ君亦退ク、已ニシテ將軍大政ヲ奉還スルニ至リテ東北諸藩ノ服セサルモノヲ遊説シテ勤王ノ大義ヲ唱導ス、明治二年伊奈縣少參事トナル當時貨幣製造ノ各藩ニ行ハル、ノ時眞價貨幣換算ニ關大藏卿大隈重信氏ト意見ヲ異ニシ遂ニ免官トナリテ都門ニ流遇ス、後チ再ビ伊奈縣ニ出仕シ筑摩縣ニ合併スルヤ權典事及ビ權參事ニ歷任ス、又明治九年判事ニ任ジ東京上等裁判所ニ出仕シ、爾來訴訟審判司法職制等ニ關シ改革スル處多シ、西南ノ役鹿兒島縣大書記官トナリ、尋テ縣令知事等ニ任ジ在職十有餘歲、治績見ルベキモノ多シ、二十三年行政裁判所評定官ニ任ジ後チ滋賀縣知事トナリ間モナク北海道長官ニ累進シ次テ内務次官トナル、明治廿七年貴族院議員ニ互選セラレ正四位ニ叙ス、後錦鷄間祇候ヲ拜命シ其ヨリ京都府知事ニ任ジ其後内藏頭ニ任ゼラル、明治三十五年華族ニ列シ男爵ヲ授ケラル、此間帝國議會ニ政府委員タルコト二次、第四回内國勸業博覽會事務官長、帝國京都博物館評議委員、土木會長、大吏使務官東宮御婚儀會計主務官、東宮御所裝飾品取調委員長、昌子内親王御婚儀御用掛等仰付ケラレタリ、越ヘテ日露戰役ノ功ニヨリ三十八年子爵ヲ授ケラル、次テ宮内次官兼ネテ樞密顧問官帝室林野管理局長官内藏頭ニ任命サレ這般任セラレテ宮内大臣トナルニ至リシナリ。

電話芝 一千三百〇四番

加藤 正惠氏

貴族院議員

愛知縣新居郡多喜濱村

現今長者議員中、牢乎トシテ拔ク可ラサル識見ヲ有シ、正々堂々、信スル處ヲ直行シテ憚ラズ、果敢勇邁ヲ以テ定評アル者君ナリ、我徒ハ敢テ君ニ對シテ何等ノ思怨アルニ非スト雖モ、平素ノ行動ヲ聞知シテ頗ル崇敬ニ耐ヘサルモノアリ、由來伊豫人物ハ多角のナリ、當世流ノ俗才子ヲ出サ、ルハ事實ノ示ス處ナリ、サレト行爲悉ク男性的ナル亦沒スベガラサル具体例ナリ。

君ハ愛媛縣新居郡多喜濱村ノ人ニシテ、嘉永四年五月ヲ以テ生ル、家ハ縣下有數ノ大地主ニシテ、連綿トシテ十數代、而シテ以テ君ニ至ル、夙ニ和漢ノ學ヲ修メテ修養スル處アリ、先代歿後其家督ヲ繼クニ及ンテ一家ノ經營ヲ双肩ニ荷フ、既ニシテ一半ノ精力ヲ割イテ公共事業ニ致シ、盛名漸ク縣下ニ知ラル尙多喜濱郵便局長トシテ其職ヲ全フシ、地租改正掛擔當委員トシテ努力ヲ傾注シタルガ如キハ、既ニ人ノ知ル處ナリ、去ル三十七年九月貴族院議員改選期ニ際シ、同縣多額納稅者ノ互選ニヨリ、推サレテ貴族院議員トナル、爾來引續イテ今日ニ至リ、致々汲々、其本務ヲ全フシツ、アリ、三十七八年戰役ノ功ニヨリ、勳四等ニ叙セラレ旭日章ヲ賜ル。

君資性豪宕、一言一句苟クモセズ、宛トシテ老武俠ノ傑アリ、今ヤ上院ノ活躍ハ世ノ耳目ヲ聳動シツ、アルノ時、老熟堅剛君ノ如キヲ存スルハ、聊カ以テ世ノ意ヲ強フスルニ足ル、幸ニ夫レ健在ナレ

田原太兵衛氏

實業家

淺草區並木町一番地

帝國ノ國是ハ實業ノ振起ニアリ日本ヲシテ長ヘニ隆盛ナラシメント欲セバ先ズ之ヲ待テ實業ノ發達ニ依テセサルベカラス、茲ニ於テカ之ガ振起ヲ絶叫スルモノ常ニ求ムル者ハ有爲ノ人材ナリ、蓋シ新進有爲ノ君ノ如キハ、正ニ以テ此要求ニ應ズベキノ士ナルヲ信ジテ止マサルナリ。

夫レ男子世ニ處シ荷シクモ事務ニ資スルナクンバ取ルニ足ラザルナリ、人生意氣ノ高潔ヲ要ス徒ラニ、浮華ニ流レ權勢ニ阿ネル世俗ノ輩敢テ天山識者ノ與スル所ナラザルナリ、聞ク君ハ東京府ノ人先代亡太兵衛氏ノ長男ナリ、明治五年五月ヲ以テ生ル、家ハ十數代紙商トシテ君ニ至ル、天資仁達伶俐ニシテ弱冠自ラ群童ト異リ初メ普通學ヲ修メ長スルニ及ンデ經濟ノ學ヲ深ク收得ス、明治二十二年十二月家督ヲ相續シテ戶主トナリ舊名ノ安太郎ヲ改メテ先代ヲ襲名ス、夙ニ身ヲ實業界ニ投シ名ヲナシ功ヲ立テント欲シ明治三十三年先輩ナル實業家ノ偉人數名ト二十萬圓ノ株式會社東京共同銀行ヲ起シ重役數名ノ撰定スル處トナリ常務取締役ニ舉ケラレ銳意其發展ニ力ヲ致シ往年増資シテ三十五萬圓トナシ、多年鍊磨ノ手腕ヲ要シテ益々行務ヲ進捗セシメツ、アリ、尙曾テ同志ト共ニ上越電氣株式會社ヲ起シテ監査役タリシガ今ハ辭シテ其任ニアラズ。

君爲人慈善公共ノ念ニ厚ク、茲ニ私財ヲ投ジテ公益ノ爲メニ盡瘁シタル事一々枚舉ニ遑アラズトイフ亦以テ當實業家中ノ一異彩タルヲ失ハサルナリ。

電話下谷 九百十七番

長谷川直藏氏

實業家

北品川御殿山七百二十七番地

世間往々出世セシ者ヲ見テ彼レハ幸福ナリ、僥倖ナリトシテ竊カニ羨望シ、或ハ是ヲ嫉視スルモノアリ何ンゾ其心事ノ淺陋ニシテ、其態度ノ卑屈ナルヤ、諺ニ曰ク牡丹餅ハ糊ニアリ、運ハ寢テ待テト是レ誤謬モ甚タシキ哉、凡ソ事ヲ成サントスル者ハ必ズヤ、着手スル前ニ在テ設計ナカル可ラズ、設計成ツテ然ル後其業ニ着手ス、是尋常ノ順序ナリ而カモ之レヲ實行スルニ及ンデ、其人ノ識量ノ有無、才能ノ多少、技術ノ巧拙機智ノ有無ハ其要素ナルベキモ、例ヘバ人自身於ケル肉ナリ血ナルカ如シ、吾人ハソカ第一緊急ノ要素トシテ熱心奮勵着實勤勉テフ骨子アルコトヲ求ム、此意味ニ於テ長谷川直藏君ヲ物色セント欲ス、君ハ兵庫縣人、永野友吉氏ノ令弟ニシテ明治四年八月ヲ以テ生ル、幼少學ヲ好ミ才氣衆ニ拔ンデ夙ニ普通學ヲ修メ造詣頗ル深ク、後長谷川彌三郎氏ノ養子トナリ、其性ヲ習ス、明治三十一年一月田坂、馬場、朝田ノ諸氏ト相謀リ、日本『ベイント』製造株式會社ヲ創設ス、其成ルニ及ビ推サレテ取締役トナリ、兼ヌルニ支配人ヲ以テス、爾來社運ノ隆盛ヲ劃圖スルニ努メ、繁劇ナル事務ヲ整然處理シテ素サバルノ疎腕ハ諸人ノ推服スル處トナル、而カモ事ニ當ル首尾一貫勤勉ヲ以テス、故ニ聲譽大ニ揚リ、信用日ニ厚ク君ノ蘊蓄スル所ノ學識ト勤厚ノ徳ハ益々同社ノ隆盛ニ與ツテ力アリトイフベキナリ、尙ホ三十七年十二月、岡田、津田其他ノ氏ト共ニ乾電池製造株式會社ヲ起シ舉ケラレテ其取締トナリ、兩々相對シテ發展ト向上トニ努メツ、アリ、而カモ公務ノ餘暇好シテ書ヲ讀ミ文ヲ草シテ倦マズトイフ。

君資性溫厚篤實ニシテ最モ信義ヲ重ンズ、亦以テ工業界屈指ノ實業家ト謂ツベキナリ。

電話芝 千五百三十二番

海野勝眠氏

彫金家帝室技藝員

本所區番場町三十八番地

幽艶ナル秋草爛熳タル春花或ハ胡蝶飛ビ或ハ鳥雀鳴ク時ニ可憐ノ兒童笑ハント欲シ、時ニ赴々武夫躍ラント欲ス、堅硬殿石ニ優サレル、金銀銅鐵ノ如キ鑲物ヲ使役シテ巧ニ這般ノ物象ヲ彫鑿ス、誠ニ神妙ト言フベキナリ、蓋シ一藝以テ名ヲナスノ人必ズ其刻苦切瑛ノ功ヲ積ミタルヤ疑ヒナシ、君ハ常陸國水戸ノ人ニシテ弘化元年五月生ル、幼名ヲ竹次郎後芳洲亦勝眠ト稱ス、年九歳ニシテ叔父水戸藩士海野太三郎氏ニ就キ彫金術ヲ學ブ、尙同藩ノ士萩谷勝平氏ニ從ヒ學ブ事十一年業大ニ進ム、此ノ間文尾ノ門人安達梅溪氏ニ書畫ヲ武庄次郎氏ニ漢籍ヲ學ブ、明治元年奮然東都ノ遊子トナリ本郷區駒込千駄木町ニ居テ定メ加納夏雄氏ヲ訪ヒ其彫法ヲ傳授サレ與技ヲ究ム、已ニシテ廢刀令出デ、此業ニ從事スルモノ困乏極度ニ達ス、然レトモ君不屈不撓此ノ逆境ニ處シ一斯機軸ヲ案出シ、爾來後進子弟ノ薰育ニ盡力シ其門下俊秀已ニ數十名ノ多キニ達セリ、君明治十一年第一回内國勸業博覽會及第二回内國勸業博覽會作品ヲ出シ共ニ褒賞ヲ受ク、同廿一年皇后陛下寶冠章ノ彫刻ヲ命セラル身ノ功譽何ニカトクトフベキ、同廿二年天皇陛下御前ニ銀製鐘子ヲ彫刻スル等實ニ家ノ案ヘ身ノ譽レ到底吾輩ノ企テ及ハサル處羨望シテ止マズ、廿四年八月東京美術學校助教授トナリ後教授ニ榮ム、第三回内國勸業博覽會ニ蘭陵王ノ置物ヲ出品シ、妙技一等賞ヲ賜ル、其他内外博覽會ヨリ金銀賞牌受ル夥ダシ、一々枚舉ニ遑アラズ、廿九年帝室技藝員ヲ命セラレ、第五回内國勸業博覽會ニ審査官トナリ、藍授褒章ヲ賜ル、同三十八年勳六等ニ叙セラレ瑞寶章ヲ授ケラル後累進シテ高等官三等ニ陞リ從五位ニ叙セラル蓋シ金彫家中ノ異例ト云フモ敢テ過言ニアラズ、日本美術協會彫工會ノ特別會員トナリ功勞ヲ謝スルニ賞牌ヲ送與セラハ、三十九年君還歷ノ祝宴ニ際シ發起人百餘名ニ達シタル如キ其勢望ヲ察知スルニ難カラズトス。

電話下谷 二千二百八十三番

和田豊治氏

實業家

本所區向陽町二百三十七番地

日本紡績業界ノ偉人トシテ、世ニ一定ノ評ヲ以テ許サレツ、アルハ君ナリ。君ハ大分縣中津藩士和田直右衛門氏ノ長男ニシテ家代々與平伯爵家臣ニシテ儒官タリ、君幼ニシテ嚴父ヲ失ヒ姉妹一弟ト共ニ慈母ニ撫育セラル、夙ニ醫學ニ志シ藩醫村上氏ニ就テ刀圭學ヲ修ム、其才能深ク同氏ノ信愛ヲ受ケ傍ヲ英語ヲモ教ヘ遂ヒニ學資ヲ給シテ東都ニ上ルヤ直チニ慶應義塾ニ入り勉勞積年造詣大ニ加ハル、明治七年業全ク卒ハルヤ翌十八年桑港ニ航シ彼地ノ實業狀態ヲ視察ス、次デ甲斐織衛氏ノ商店ニ入り専ラ商務ヲ實修シ其發展擴張ニ努力ス、幾干モナク歸朝シテ日本郵船會社ニ入り神戸支店長トナル、尋デ三井銀行ニ入り横濱支店副支配人及ビ鐘淵紡績會社支配人等ヲ兼ネ君一流ノ熱誠ヲ以テ事ニ任ジ、大ニ面目ヲ一新ス再ビ歐米ニ於ケル綿布織物業視察ノ爲ニ派セララル、歸朝シテ三井吳服店詰ヲ命ゼラル、偶々富士紡績會社ノ輕營宜シキヲ失ヒ正ニ解散セムトスルニ當リ、森村翁ノ清燭ト、日比谷氏ノ仲介トニヨリ、身ヲ投シテ此難衝ニ起ツ、茲ニ於テカ非凡ノ技量ヲ發揮シ自ラ職工ト伍シテ真相ヲ探究シ、時ニ暴力ヲ以テ迫害セラル、等、殆ント筆紙ニ盡ス能ハザルノ大努力ヲ以テシ期年ナラズシテ社運ヲ挽回スルニ至リシナリ、當時ノ詳細ハ、已ニ世人ノ知ル處ニシテ一人トシテ君ヲ頌セザルハナキナリ、爾來大合同ヲ計ツテ富士瓦斯紡績會社トナシ依然專務取締役トシテ今尙不斷ノ精力ヲ致シテ社運ノ發展ヲ企圖シツ、アリ、如斯シテ君ノ技量ハ世ノ確認スル處タルノミナラズ、人格高潔ナル當代稀ナルモノニシテ常ニ世ノ尊崇ヲ受ケツ、アリ、彼ノ孝行談、彼ノ義俠談ノ如キハ、斯界ノ佳話トシテ傳ヘラル、處ナリ、當代ノ實業家、嘗ニ功利ニ汲々トシテ毫モ人格ヲ顧サルモノ、比々悉ク然リ、此時君ノ健存スルアル、吾人ハ理想的實業家トシテ後進ノ鑑鑑タルヲ信ズ、即ナ一片ノ尊敬ヲ捧ケテ此稿ヲ結ブ。

電話下谷 二千三百三十一番

平岡定太郎氏

樺太長官

在 かばふ 廳官官舎
自宅本郷區丸山新町二十二番地

窮北ノ長官平岡君、新進氣鋭ノ有材ヲ抱イテ新領土ノ經營ニ任ズ、思ヒ出多キ樺太ノ地、國民ノ頭腦ニ深刻セラレタル樺太ノ地、今ヤ英才君ノ快腕ニヨツテ着々統治ノ實蹟ヲ示シツ、アリ、試ニ其半生ノ閱歴ヲ究ムレバ、曾テハ蓬頭垢面ノ苦學生タリキ、誰レガ一片ノ敬意ヲ吝ム者ゾ。

君ハ兵庫縣印南郡志方町ノ出身ニシテ慶應元年ヲ以テ生ル、同苗多吉氏ノ次男ニシテ、進歩黨ノ名士、辨護士平岡萬次郎ノ令弟ナリ、年僅カニ十四、出テ、姫路龜山運平先生ノ漢學塾ニ入ル、龜山先生ハ、關西屈指ノ老儒ニシテ幾多ノ奇行今尙人口ニ膾炙セラレ、處ニシテ、君ガ豪磊ノ資、蓋シ此當時ノ黨化ニ享クル處大ナランカ、在學三年次テ兵庫縣乾行義塾ニ入ツテ外國語ヲ修ム、然ルニ當時家道豊カナラスシテ學資ヲ得ルニ窮シ、苦學力行一日ノ弛忘ナシ、幾モナクシテ官費修學ヲ企テ神戸師範學校ニ入ル、在學中數學ニ就テ天才ノ譽アリ、卒業後、志ヲ抱イテ東都ノ人トナリ、小野梓先生ノ門ニ入ル、即チ、先生官ヲ辭シテ神田神保町ニ東洋館ヲ開塾シタルノ時代ニシテ、君薪水ノ勞ヲ執ツテ股雖ノ苦學ヲナス、其精勵恩師ノ認ムル處トナリ、早稻田專門學校法律科ニ入ルノ好機ニ接シ、茲ニ正則ナル專門學ヲ修ムルニ至レリ、卒業二三ヶ月前、故アツテ同校ヲ退キ、外國語學校及共立學校ニ入ル、進ンテ大學豫備門ニ學ビ、更ニ大學法科ニ入り法律學ヲ修ム、二十五年七月、益雪ノ功空シカラスシテ、同校卒業法學士トナル、コレ君ガ修學時代ノ概況ニシテ一貫セル努力ハ、他ノ富裕學生安座徒食輩ノ想像シ能フ處ニアラサルナリ、願レハ同期ノ卒業者悉ク當代ノ少壯人物、曰ク、福原專門學務、曰ク水野神社、曰ク北里帝國生命、曰ク白石東洋汽船、即チ是レ鐵中ノ錚々タリ。

卒業後直ニ內務試補ヲ拜命ス、恰モ熊谷前樺太長官ト同時ナリシハ何等カ因縁ノ存在ヲ認メザル可ラサルナリ、爾來內務次官白根專一氏、秘書官江木衷氏ノ知遇ヲ得テ重ク用ヒラル、踵テ德嶋縣參事官トナ

リ、地方官ノ初舞臺ニ其真技ヲ認メラレ、更ニ朽木縣警部長トナル、由來同地治政ノ難、殊ニ警務ノ多事ナル既ニ定評アル處ニシテ、君ノ技量亦研磨セラル、牧扑真氏ノ內務省警保局長タリシ時、拔擢セラレテ同局書記官トナリ兼スルニ衆議院書記官ヲ以テス、恰モ隈板聯立內閣組織セラル、ノ際、特ニ兼官サレタル君ノ使命ハ頗ル重大ナル責任ニシテ、其功績ニ至ツテ尠クモ政界消息ニ通ツルモノ等シク口ニスル處ナリ。サレド恨ムラクハ事機密ニ屬シテ俄カニ發表スル能ハサルヲ、後轉ジテ江木令尹ニ從ツテ廣嶋縣書記官トナリ、彼ノ有名ナル二河川水道事件ノ衝ニ起チ、奔走計籌大ニ努メタルガ如キ亦儘カニ特筆大書ノ價值ナクンバアラサルナリ更ニ宮城縣書記官ニ轉ジ、六代ノ知事ニ歴仕シテ介補ノ任ヲ全フシ、更ニ大坂府書記官トナル、幾モナクシテ任セラレテ福嶋縣知事トナル、即チ多年ノ經驗ヲ要シテ縣政ノ發展頗ル顯著ナリシ、新領土ニ於ケル楠瀬熊谷二氏轉任アルヤ、後任者ノ選定ハ當局ノ焦慮スル處ナリキ遂ニ地方長官トシテ寧ロ後輩ニ屬スルノ君ハ、多年 實力試驗ニ登第シテ光榮アル現職ニ就クニ至リシナリ、爾來一貫ノ熱誠ヲ提供シテ統治ノ衝ニ當リ、年來ノ精弊ヲ一掃シテ面目ヲ更新ス、想フ同地ノ價值ハ、鑛山、森林、漁業、耕作ノ植民の四大要素ヲ完備ス、而シテ本國ト近接セル斯ノ如キハ、列國植民地ニ於テ見ルヲ得サル處ナリ、資本家ノ奮發ト行政者ノ熱誠ヲ以テ同地ノ發展蓋シ易々タルノミ君就任以來、到ル處ノ機會ニ於テ其真相ヲ内地人ニ知ラシメ、以テ領土ノ意義ヲシテ完全ナラシメント苦慮シツ、アルハ吾人爲邦家滿腔ノ感謝ヲ拂ハサルベカラサルナリ。

稿ヲ結ブニ際シテ尠シク君ノ面影ヲ附記センカ、曰ク豪傑ノ如ク老書生ノ如ク、居常極メテ平民的ナリ與到レバ磅礴タル元氣談論風ヲ發ス、ヨク人ヲ容ル、ノ雅量ト、物質ニ淡泊ニシテ後進ノ爲メ、俸給ノ過半ヲ割クガ如キハ、當代官海稀ニ見ル處ニシテ、將來ノ進境豫メトスルニ由ナシ、希クハ夫レ自愛セヨ

電話下谷 一千七百六十三番

神木治三郎氏

實業家

淺草區橋場町三十七番地

淺草橋場ノ邊リ前ニ洋々タル隅田ノ流レヲ控ヘ對岸遙カニ水神ノ森ヲ望ム處市井ノ紅塵ヲ他外ニシテ徐ニ鏡ヲ養フ是レ神木治三郎氏ナリ。

君ハ東京府ノ人明治三年十月ヲ以テ生ル、嚴父ヲ神木保衛氏トイフ其三男ナリ、幼ニシテ嚴格ナル家庭ノ教育ヲ受ケ孜々トシテ學ヲ勵ム蓋シ同家ハ土地有數ノ分限者ニシテ附近唯一ノ舊家ナリ、其家憲トシテ傳ヘラレタル不文律ハ着實敦厚身ヲ持スルニ薄ク人ヲ待ツニ厚シ常ニ善根ヲ積ミ子々孫々此旨ヲ奉戴セシムルニアリ、君モ亦此薰化ニ依ソテ生背シ普通學ヲ修ルヤ直チニ一橋高等商業學校ニ入り専ラ商業學ヲ究ム此間君ハ刻苦精勵益々苦學ヲ經學業大ニ進ミ尋テ密カニ期スル處アリ、乃チ外國輸入業ヲ營ミ多年研究ノ學識ヲ實地ニ活用シテ苦心經營遂ニ業務繁盛ノ狀況ヲ呈スルニ至ル、後明治三十一年二月合名會社神木銀行ヲ創立シテ其代表社員トナリ、同行監督ノ衝ニ立チ着實業務ノ發展ヲ計リ、部員ヲ統督スル事其宜シキヲ得業務着々隆盛ノ好況ニ到來シ都下幾多ノ同業界中嶺然頭角ヲアラハスニ至リ堅實無比ト稱セラル、モ蓋シ君ノ献身ノ精勵努力ノ高價ヲ拂ヒタル結果ニ外ナラザルナリ、今ヤ東都屈指ノ堅實ナル銀行トシテ信用一段ノ高キヲ致シ三井、中井、等ト共ニ無限責任組織中ノ白眉タリ、前年經濟界萎微ノタメ幾多同業者ノ失態ヲ演ズル中毅然トシテ動カザルモノハ管ニ資産及手腕ト稱センヨリモ容易ニ購フベカラザル信用アルヲ以テナリ。

電話下谷 一千三十三番

山本悌二郎氏

新潟縣佐渡選出衆議院議員

京橋區明石町二丁目二番地

叢爾タル日本海ノ一孤嶋、鳥モ通ハスト謳ハレシ佐渡國、佐渡郡真野村ハ君ノ生地ナリ、二千年來交通頗ル不便ヲ極メタリシ此邊邑モ、時代文明ノ光被スルアツテ閉サ、レタル鬱勃ノ氣ヲ發シ、明治ノ新人ヲ産シタルモノ、亦以テ故アル哉、君ハ明治三年一月ノ生誕、日比原頭少壯政客ノ白眉タリ、幼ニシテ學ヲ好ミ、笈ヲ負フテ東都ニ入ル、志ス處アツテ獨逸協會學校ニ入り、一意専心獨逸語ヲ研究ス、業卒ルヤ直ニ科學ノ叢源獨逸國ニ遊ビ、「ハルレー」及「ライプツヒ」大學ニ於テ經濟學及農學ヲ修ム、益々雪苦途ニ造詣大ニ加ハリ、「ライプツヒ」大學ニ於テ「ドクトル、フイロソフヒ」ノ學位ヲ受領スルニ至レリ、次テ歸朝スルヤ、宮内省御料局業囑托ヲ命セラレ經營措處克ク新知識ヲ加味シテ貢獻スル處尠ナカラズ、幾モナクシテ第二高等學校教授トナリ後進子弟ノ撫育ニ努メタリシガ後辭シテ實業界ニ身ヲ投ジ、初メ日本勸業銀行鑑定役トナル、偶々力ヲ政治ノ爲メニ致サント志シ去ル三十七年第九回衆議院議員選舉ノ事アルヤ故山佐渡ヨリ打ツテ出テ遂ニ當選ノ光榮ヲ有スルニ至ル、爾來同地ハ憲政本黨所屬中山小四郎ノ獨擅タリシガ、君立憲政友會ノ候補者トシテ、逐鹿場裡ニ現出シテヨリ以來大勢ノ趨ク處摩實ナル君ガ政治的地磐ヲ爲スニ至リシナリ、爾來引續キテ當選シ、院內ニ於テハ各種ノ常置委員ニ推舉セラレツ、アリ、コレヨリ先、藤田四郎、武智直通、賀田金三郎氏ト計ツテ臺灣製糖株式會社ヲ起シ選ハレテ常務取締役トナリ、事實上當面一切ノ責任ヲ帶シ、拮据經營今日ノ盛大ヲ致サシメタリ。

電話新橋 一千八百十九番

水野忠亮氏

子

爵

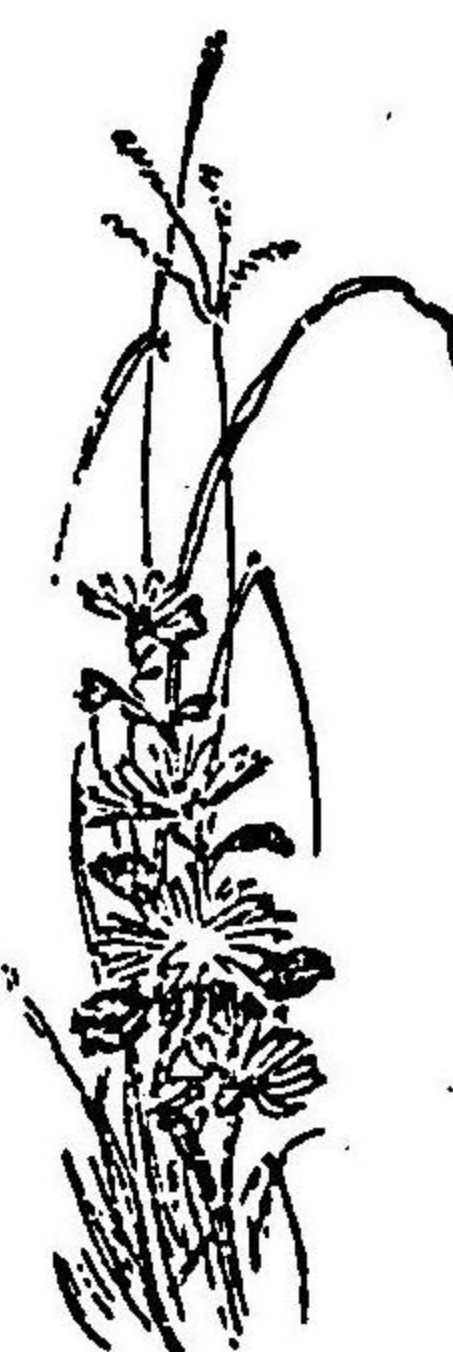
麹町福下二番町四十七番地

世ハ輕薄ニ流レ、忠實ニ事ヲ膺タルモノ尠ナク、人皆徒ラニ虛名ヲ趁ウテ、尊大倨傲ニ傾クニ至レリ、嘆ズベキカナ、然レ共裏面ニハ未ダ篤實ノ士アリテ、勤勉實直以テ國民ノ儀表トナリ、世道人心ノ衰微頽廢ヲ救ヒツ、アリ、寔ニ君ノ如キハ如上ノ適例トシテ茲ニ謹ンデ其閱歷ノ梗概ヲ録セントス。

聞ク當家ハ清和天皇ノ後裔、六孫王經基ノ胤、和泉守水野忠重ノ次男、華人正忠清ノ後也、忠清德川秀忠ニ仕ヘ大坂ノ役從軍シテ軍功アリ、信州松本七萬石ノ城主トナル、ソレヨリ六世ヲ經テ從四位出羽守忠誠ニ至ル、次テ先代忠敬氏ニ至ル、忠敬實ハ分家ノ戶主ニシテ忠誠子ナキヲ以テ嗣トナス、先代駿州沼津ノ城主タリシガ、明治元年移封シテ總州菊間五萬石ノ城主トナル、君其後ヲ享ク、實ニ先代忠敬氏ノ長男ニシテ、明治七年十一月十二日ヲ以テ、呱呱ノ聲ヲ藩邸ニ揚グ、同四十年八月先代忠敬氏ノ歿セラル、ヤ、家督ヲ相續シテ爵仰付ラル。

君人トナリ温厚篤實、猥リニ人ト爭ハズ、誠ニ當代貴族中ノ理想家トシテ後昆ニ傳フルニ足ル、吾人ハ當今輕薄輕佻ノ世ニ處シテ、君ヲ見ル、實ニ空谷ノ從音ノ如シ、乞フ自重自愛シテ益々報國ニ意志ヲ全フセラレン事ヲ。

電話番町 六百十番



小笠原長生氏

子

爵

豊多摩郡代々幡村九番地

恭謙己ヲ持シ博愛衆ニ及ボスノ、聖慮ニ副ヒ奉リ皇室ノ藩屏將タ國家ノ干城トシテ忠勤一日ノ如キ君ガ閱歷ヲ舉ムカ、當家ハ清和天皇ノ皇孫、鎮守將軍源經基五代、甲斐義光ノ裔、信濃守小笠原秀政ノ三男從五位下壹岐守忠知ノ後ナリ、忠知德川氏ニ仕ヘ大番頭及奏者番タリ寛永九年豊後國杵築四萬石ノ城主トナリ、正保二年正月三州吉田ニ移リ四萬五千石ニ加増セラル、其レヨリ十一世ヲ經テ從五位長國ニ至ル、維新ノ際肥前唐津ノ城主トシテ封邑六萬石ヲ領ス、君ハ其嫡孫ニシテ從四位長行ノ長男ナリ、慶應三年十一月廿日ノ生、幼名ヲ賢之進亦拾九ト云フ、明治六年九月十九日先代長國ノ家督ヲ相續シ、同十三年十二月現名ヲ改ム、同十七年七月特旨ヲ以ツテ子爵ヲ授ケラル、同年九月海軍兵學校ニ入り、廿年七月海軍少尉候補生トナリ同年九月筑波艦ニ乘組ミ米國ニ航ス、同廿一年七月歸朝後續ヒテ海軍ニ身ヲ委ネ、明治廿七八年戰役大ニ軍功ヲ樹テ凱旋後日清戰誌編纂委員トナリ、其前後ノ賞トシテ功五級ヲ授ケラル、後海軍大學校教官タリ、明治廿九年十一月海軍々令部出仕ヲ仰付ケラル次テ軍艦淺間分隊長トシテ英國ニ航ス、君亦常ニ筆現ヲ友トシテ其造詣深遠妙域ニ達セリト、如斯キハ今此處ニ事新シク喟々スルノ愚ヲ爲サハルナリ、既ニ幼時伊庭氏ノ塾ニ學籍ヲ置キタルノ比ヨリ俊才ヲ以テ目セラレシナリ、君日露戰役中大本營海軍參謀トシテ無々タル巧績亦鮮少ナラズ、爾後累進シテ海軍大佐トナル、實ニ君ノ如キハ幾多貴公子中稀ニ見ルノ顯君子ニシテ將來ノ大成ヲ囑スルニ足ル。

電話番町 八百九十八番

瀬脇壽雄氏

ドクトル 高輪病院長

芝區高輪南町三十一番地

(四〇)

熾ナル哉日本杏林界、各科専門ノ大家翕然トシテ起リ、隆々昌々今ヤ先進歐米ヲ凌駕セントス、其昔草根本皮ノ時代ヨリ尋イデ長崎蘭法時代ニ及ビテ追想一番亦以テ隔世ノ感ナクンバアラザルナリサレド其間養ハレタル一種ノ弊害亦抄ナカラザルナリ、吾人茲ニ秃筆ヲ執リテ堅實ナル國手ヲ以テ京童ニ囑望セラレツ、アル君ガ略歴ヲ草セントス。

抑モ君ハ我國刀圭界ノ先覺者タル博士高木兼寛氏ノ血族ニシテ、元治元年壹月ヲ以テ郷土ニ呱々ノ聲ヲ揚グ幼少學ヲ好ミ早クモ醫道ヲ以テ身ヲ建テント欲シ弱冠遠ク英國ニ航シ、『セント、トーマス』病院『ブロンプトン』肺病院等ニ於テ醫學ヲ研修スル事五年業大ニ進ミ造詣スル所亦大ナリ、遂ニ『ローヤルコレージ、オプゼ、サージオンス、オフ、イグランドライド』及ビ『ローヤル、コレージ、オフ、ゼフキジシアンズ、オフ、ロンドン』ノ試験ニ合格シテ『メンバー、オフ、ゼ、ローヤルコレージ、オフ、ゼ、サージオンス、オフ、イランドライド』及ビ『ライセンシエイト、オフ、ゼ、ローヤルコレージ、オフ、ゼ、フキジシアンズ、オフ、ロンドン』ノ學位ヲ得テ錦衣歸朝ス、尋デ明治廿四年東京病院副院長トナリ兼テ慈惠醫院醫學校ニ内科講義ヲ托セラレ同廿六年醫術開業試験委員ヲ命ゼラル、同廿八年職ヲ辞シテ韓國ニ赴キ聘セラレテ内部衛生顧問ヲ托セラレ兼テ漢城病院長トナリ、同國ノ醫事ニ貢獻スル處大ナリシガ翌廿九年職ヲ辞シテ歸朝シ京橋區宗十郎町ニ私財ヲ投ジテ瀬脇水治院ヲ開業スルニ至ルヤ漸次患者ノ重望日ニ加ハリ遂ニ病室ノ狹隘ヲ感ジ前年新タニ高燥ナル閑地ヲ選定シ更ニ規模ヲ擴大シ名ケテ高輪病院ト改稱シ専ラ内科患者ノ希望ヲ全フシツ、アリ。

電話芝 三百三十四番

吉川孝秀氏

實業家

麹町區飯田町五丁目二十三番地

沈勇ノ態度。謹嚴ノ言行以テ心ヲ養フ寧靜ノ徳アルヲ知ルベシ、謙遜辭讓甘テ風勵卓發ノ鋒鋷ヲ露サズ以テ身ヲ保ツニ恭儉ノ素アルヲ知ルベシ、而シテ其ノ温醇含蓄ノ氣風ハ自ラ後進ノ敬愛ヲ増サシム、天賦ノ大器素要ノ深奥アルニ非ズンバ爰ゾ能ク斯クノ如クナランヤ、君ハ東京ノ人、明治六年十一月ヲ以テ呱呱ノ聲ヲ舉グ代々幕臣ニシテ君幼ヨリ學ヲ好ミ神童ノ譽アリ、夙ニ普通學ヲ修メ造詣頗ル深ク、穎悟人ニ絶シ、明治二十三年高等學校ヲ卒業シ、尋デ帝國大學法科大學ニ入り笹雪ノ功空シカラズ廿七年首尾能ク同科ヲ卒業シテ直チニ伊豫宇和嶋中學校々長ニ聘セラレ、子弟ヲ訓育スル懇篤ニシテ已ガ理想ノ幾分ヲ實行セシガ、明治卅一年故アリテ東京ニ歸リ、大藏省ニ出仕主計局ニ勤メ大ニ理想ヲ實現セントセシモ官界ノ事多クハ對間的ニシテ理想モナク信仰モナク何等ノ確信モナクシテ衣食ニ奔走スル俗物ノミナリケレバ、終始君ト意見合ハズ、衝突ニ衝突ヲ加ヘ居ルコト四年遂ニ其職ヲ辞シテ實業家トナル卅五年興業銀行ノ創立ニ與リテ功勞アリ、其成ルニ及ビ庶務兼秘書役トシテ熱心行務ニ軼堂シ、經營努メシカバ信用亦一段ノ高キヲ加ヘ往年同行總裁ニ從ヒ歐米各國ノ經財界ヲ視察シ歸朝シテ行務施設其宜キヲ得、同行ノ今日益々隆盛ノ域ニアル誠ニ以テ君等主腦ノ精勵ナル高價ヲ拂ヒタル言ヲ待タザルナリ君人トナリ『嚴格ナル家庭ニ成長シテ武士的堅實ノ氣風ハ能ク方今軟弱ナル惰風ヲ矯正スルニ足ルモノアリ、而シテ亦家ヲ治ムル嚴肅ニシテ些ノ墮容ヲ許サズ眞ニ武士的薰陶ノ典型トシテ特記スベキモノアリ。

電話番号 千〇十一番

(四一)

成澤武之氏

實業家

日本橋區北町二丁目五番地

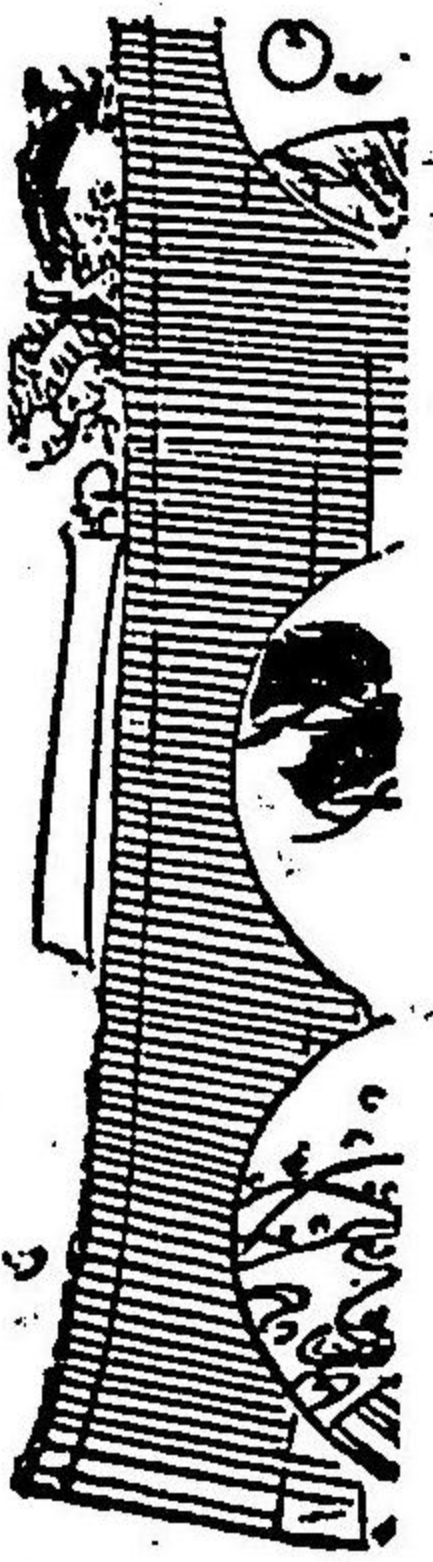
(四四)

吾人ハ眞面目ナル實業家、堅實ナル實業家トシテ君ヲ物色セントス。

君ハ宮城縣ノ人、成澤惣左衛門氏ノ二男ニシテ元治元年一月十一日ヲ以テ生ル、資性温厚人ト交ルニ信義ヲ以テス、明治廿六年六月分家シテ一家ヲ創立ス、君幼少聰慧ニシテ學ヲ好ミ夙ニ普通學ヲ郷賢ニ修メ専ラ和漢ノ學ヲ涉獵シテ造詣侮ルベカラザルモノアリ、其長ズルニ及ビ、實業ヲ以テ身ヲ立テント志シ、夙ニ株式會社七十七銀行ニ入りテ其行員トナリ、爾來孜々トシテ當局ノ事務ニ執筆盡精スル十年一日ノ如ク、精勵勤勉、其筆實ニシテ、氣概アル寔ニ銀行家ノ範トシテ先輩ノ推服スル所トナル、後推サレテ、東京支店支配人トナリ、銳意益々同行ノ發展ニ努メ精勵以テ業務ノ隆盛ヲ計ル、今ヤ同行カ同業者中眞摯堅實ヲ以テ一頭角ヲ顯ハシ業務ノ隆盛ニ赴キツ、アルハ何人モ否定シ能ハザル所ニシテ亦以テ君ガ同行ニ於ケル功勞ノ大ナル知ルベキナリ、尙ホ、繁忙ナル、業務ノ一端ヲ割イテ株式會社繁城銀行ノ取締役トシテ同行ノ爲メニ盡精シツ、アルナリ。

君人トナリ温厚眞摯ニシテ常ニ實業界ノ弊風ヲ憤慨シ同志ト共ニ此制新ニ努メツ、アリト聞ク亦以テ胃頭ノ句過マラザルヲ知ル。

電話浪花 一千七百二十二番



仲小路廉氏

遞信次官

麻布區廣尾町二番地

曾テハ少壯非凡ノ法官トシテ、天下ニ嘔歌セラレ、延イテ遞信次官トシテ其令聞亦噴々タルアリ、茲ニ半生ノ閱歷ヲ按ズレバ。

君ハ徳山藩士、先考休暈氏ノ男ニシテ、慶應二年七月ヲ以テ生ルト、幼少讀書ヲ好ミ、出デ、大坂ノ游子トナリ、直チニ高見照隅氏ニ就テ漢籍ヲ修メ造詣大ニ加ハル、後チ大坂開成所ニ入りテ英學ヲ究メ、次デ法學ノ研究ニ志シ驟然東都ニ上リ、苦學力行遂ニ明治廿一年判檢事登用試験ニ應ジテ一躍月桂冠ヲ荷ヘリ、幾干モナク職ヲ司法部内ニ奉ジ判事試補ニ任ゼラル、次デ檢事トナリ神戸、横濱等ノ裁判所ヲ經テ東京裁判所ニ轉ズ、偶々韓國ノ刺客李逸植、洪鍾宇等ガ、金玉均朴泳孝其他提攜者ヲ殺害セント計リ終ニ金玉均ヲ上海ニ於テ殺害スルヤ、天下ノ一大事件トナリ、東京地方裁判所ハ君ヲシテ審理ニ從ハシム、尋デ濱野茂等ヲ主トセル、斯ノ不正鐵管問題ノ起ルヤ君亦之レヲ擔任シ、美事解決ヲ結ンデ其辣腕ヲ發揚シ、當時ノ耳目ヲ聳動セシム、時人稱シテ、神法官ナル名稱ヲ喧傳セシムルニ至ル、同卅一年東京控訴院檢事ニ補セラレ、次デ司法省參事官兼行政裁判所評定官等ヲ歴任シ、後チ法律取調委員改正條約準備委員等ニ推舉セラレ、條約實視ノ事務取調ノ爲メ歐洲へ差遣サレ、歸朝後法官増俸問題ニ關與シテ當局者ト見ヲ異ニシ、斷然食祿ヲ棄テ、野ニ下リ只管修養意ヲザリシガ、後再ビ官海ノ求ムル處トナリ、推サレテ遞信省官房長トナリ、多年勤勉治績大ニ舉ガル、果セル哉終ニ前年擢テラレテ遞信次官トナリ、銳才克ク其重望ヲ完フシツ、現時ニ及ブ。

電話芝 四百十番

(四五)

桑田熊藏氏

法學博士 貴族院議員

本郷區千駄木林町十九番地

(四六)

工業經濟學界ノ「オウソリチー」トシテ定評アルモノ即チ君ナリ、上院ノ硬固、谷、曾我、將軍ト伍シテ土
 曜會ノ明星ト仰ガレ、事實上同會ノ權威ヲ代表スル者、即チ君ナリ。
 君ハ明治元年十一月ヲ以テ鳥取縣東伯郡倉吉町ニ生ル、家世々土地ノ富豪ヲ以テ鳴リ、連綿十數代、先
 考藤十郎氏ニ至ル。藤十郎氏ハ嘉永五年ノ出生ニシテ幼少父ヲ亡ヒ早クモ世ノ辛酸ヲ嘗メ、夙ニ經史及
 法律學ヲ修メ同地新文明ノ木樨ヲ以テ許サル。爾來幾多ノ公共事業ニ盡瘁シ、學校ノ建築、道路改修工
 事、貧民救濟等ニ私財ヲ投シテ徳ヲ積ミ、町立成徳小學校及山陰義塾ノ如キハ殆ンド其獨力ヲ以テ經營
 ノ端緒ヲ啓カレタリ、其他二三會社ノ創設、各種名譽職ヲ帶シテ殆ンド最善ノ努力ヲ傾倒セリ、廿三年
 初議會以來三十年ニ至ルマデ席ヲ貴族院議員ニ列ス、當主桑田君ハ其長男ナリ、二十六年帝國大學政治
 科ヲ卒業シ、直ニ甲午俱樂部幹事トシテ其任ニアル事前後四年、此間明治評論ノ文壇ニ據ツテ侃々諤々
 ノ論議ヲナス、二十九年英佛獨三ヶ國ニ留學シ専ラ勞働問題ニ就テ研究ス、滯留三年歸朝スルヤ其造詣
 ヲ開披シテ名著「歐洲勞働問題ノ大勢」及「工業經濟論」ヲ公刊ス、尙社會政策學會ニ於テ經濟叢書ノ發行
 ヲ提出シ法學博士ノ學位ヲ授ケラル、同年九月、貴族院改選期ニ際シ、同縣多額納稅者ノ互選ニヨリ、推
 サレテ貴族院議員トナリ、引讀イテ今日ニ至ル、此間各種ノ常任委員及株式會社拓植銀行設立委員等ニ
 任セラレ、前記土曜會ノ一角ニ陳シテ活動例ニヨツテ例ノ如シ、前年工科大学講師タリシガ今ハ專ラ中
 央大學ニ於テ工業經濟學ヲ講シツ、アリ、因ニ曰フ、這般發布セラレタル工場法ハ、曾テ君ガ農商務省
 囑托時代ニ起草シタル者ニ二三ノ修正ヲ加ヘタルモノナリトイフ。

電話下谷 三千四百四十三番

中澤彦吉氏

實業家

京橋區南新堀町一丁目四番地

資性温良恭謙ニシテ、頭腦明晰而カモ能ク人ヲ容レ職務ニ忠實ニシテ儕輩ニ仰望セラル、君ハ、天保十
 年三月ヲ以テ京橋區南新堀ニ生ル、幼名ヲ保次郎ト稱シ長ズルニ及ビ今ノ名ニ改ム、弘化元年南雲新一
 郎氏ニ就キ研鑽大ニ勉メ造詣頗ル深シ、嘉永三年ニ至リ酒類釀造ノ術ヲ研究セントテ武州川越ニ頼川氏
 ヲ頼リ其術ヲ修メ、具ニ辛苦ヲ嘗メ安政三年歸リテ家業ニ就ク翌四年恰モ櫻田ノ變アリテ氣運一變牙籌
 ヲ捨テ蹶然起ツテ遠ク鎮西ニ遊ハントシ先ヅ伊勢ニ至リ、井養牙翁ノ門ニ至リ經史ヲ攻究スルノ傍ラ四
 方ノ士ト交リ頗ル得ル所アリ、後辭シテ東歸シ一意家業ニ就ク、後箕作麟祥氏ノ門ニ入り轉ジテ慶應義
 塾ニ遊ブ、福澤翁之ヲ奇トシ大ニ望ヲ囑ス學成リテ後深ク時運ニ鑑ミル處アリ、仍テ三井家ニ計リ東京
 商社ヲ起シ開墾會社ニ頭取トナリ、成績頗ル舉ル、後八十四銀行頭取ニ推サレ尋デ衆議院議員トナル、其
 他公私ノ榮職ヲ帶ルモノ多ク、東京市參事會員、東京市會議長、京橋區會議長、東京商業會議所特別議員
 株式會社京橋銀行頭取、株式會社興業貯蓄銀行頭取、東京建物株式會社取締役會長、橫濱電氣株式會社
 取締役社長其他一々舉グルニ遑アラザルナリ。
 君ガ實業界ニ於ケル、斯カル勢力ト社會公共ニ盡粹セルコトノ多キハ實ニ驚クニ堪ヘタリ。
 君自重加餐身ヲ保ツニ努メ益々斯界ノ爲メニ貢獻アラン事吾人切リニ望ンデ止マザル處ナリ。

電話浪花 二百三十一番



(四七)

大井 卜新

三重縣郡部選出衆議院議員

大坂市東區平野町
四丁目九十二番地

其卓犖ノ才器ハ之レヲ實業界ニ用ヒテ綽々餘裕アリ、剛毅ノ資ハ難局ニ當リテ撓マズ、識見高ク抱負大ニ勇往敢行ノ志氣凜然タルモノアルニ至ツテハ實業界誰カヨク君ト比肩スルモノゾアル、特ニ博愛ノ高德任侠ノ義心好シテ人ノ急ニ赴キ私財ヲ散ジテ貧弱ヲ恤ムガ如キニ比シテ滔々タル當今僞君子連愧死セザルモノ果シテ幾人カアル、吁君ハ實業界ノ君子ナルカナ又政界ノ傑士ナルカナ、吾人君ヲ贊スルノ辞ヲ知ラズ、茲ニ不文ヲ願ミズ阿筆略歴ヲ録シテ前陳ノ誤ラサルヲ示メサムトス、其レ君ハ天保五年三年紀伊國南牟婁郡西山村ニ生ル、夙ニ蘭學ニ志シ又醫學ヲモ修メテ學殖深シ、屢ニ大坂假病院師及文部中助教ヲ命セラレ大ニ職蹟ヲシテ見ルベキモノ多ヲ致シ、次デ大坂府會議員ニ推サレ其貢獻亦鮮ナラズ尙君ガ實業界ノ君子トシテ本分ヲ全フシツ、アルハ現ニ伊和鐵道株式會社取締役、大坂電燈株式會社監査役、東京硫酸株式會社取締役、日本食鹽「コークス」株式會社監査役、硫酸肥料株式會社取締役等多數會社ニ重職ヲ負フテ遺憾ナク其任ヲ全フセラレツ、アル常人凡夫ノ倣フ能ハサル所ナリ君ナレバナリ、政界ノ傑士タルハ去ル明治三十七年第七回總選舉ニ郡部ヨリ推薦スル所トナリ衆議院議員トナリ續ヒテ四十一年第十回總選舉ニモ最多數ヲ以テ當選シ今日ニ至ル、何ゾ民望君ニ歸スル大ナルヤ、是レ到底「レベル」ノ者ニ於テ能フベクモアラズ、君ハ亦主義意向ニ於テ首肯スベキ立憲政友會ノ一員ニシテ氣運ノ推移ニ追隨シテ機宜ヲ誤ラザルノ士ナリ、以上録スル所穿テ盡シタルト云フヲ得サルモ、君子ト傑士ノ四字ニ對シテノ意ヤ通スルナリトス、逸佳ノ美談多キモ他日讓ニリテ筆ヲ擱シ、今ハ敬意ヲ拂フテ拙クモ筆ヲ染タルナリ、尙本邦藥種製藥ニ關シテハ多大ノ功勞アリ、實ニ今日賣藥ノ眞價ヲ擧ケタル君等ノ力與ツテ大ナルモノアルナリ。

野田 豁通氏

男爵 貴族院議員 實業家

本郷區金助町二番地

功ヲ得ント欲シテ權謀百端名ヲ得ント欲シテ其術到ラサルナキハ現代滔々タルノ思潮ナリ其實力ヲ以テ一世ニ名ヲ博セント欲ス容易ノ事ニアラズ君ハ舊態本藩士石光文平氏ノ三男ニシテ弘化元年七月ヲ以テ生ル天資伶俐幼ニシテ百事他童ト異リ平素ノ戲既ニ別ニシテ大志アリ武藝ヲ嗜ミ書ヲ學ヒ神童ノ稱アリ同藩士野田淳平氏ノ養嗣トナリ其家督ヲ嗣キ身ヲ軍籍ニ置ク成辰ノ役起ルヤ奥羽征討ニ從ヒ尋テ函館ニ戰ヒ勳功アリ平定ノ後兵部省ニ出仕シ磨澤縣新置ノ際同縣少參事トナリ弘前縣大參事ニ轉シ陸奥國六縣合併青森縣新置セララル、ヤ其長官トナル後再ヒ陸軍省ニ轉シ兵學寮八等出仕ヨリ陸軍會計吏トナリ各官等ヲ歷テ陸軍監督長主計總監ニ陞任セラレ日清戰役ニハ君野戰監督長官トシテ専心大本營ノ經理ニ任シ其任務ヲ全ウシタルノ勳功ハ限アル紙數ニ盡ス能ハサル所ナリ而シテ其功ニ依リ勳二等功三級ニ叙セラレ特ニ華族ニ列シ男爵ヲ授ケラル後三十三年清國事變ノ功ニ依リ勳一等ニ叙セラル明治三十四年豫備トナリ後貴族院議員トナリ日露戰役後旭日大綬章ヲ賜フ其頃ヨリ實業界ニ入り熊本縣下肥後酒精株式會社九州蠶糸信託株式會社及日本硫黃株式會社ノ重役トナリ専ラ社務ノ整理ニ注目シ社運ノ漸進ヲ計リツ、アトイフ寔ニ君ノ如キハ一偏ノ武人氣質ニアラス政治思想ニ加フルニ實業ノ眞味モ亦嗜アル人ト云フベシ。

電話下谷 五百五十五番

渡邊 亨氏 實業家

芝罘高輪南町五十一番地

各人其執ル職業ニヨリテ名聲ノ顯ハルト否ラザルトアリ、於是名望ヲ欲スル者權勢ニ驅スルノ輩ハ毫モ社會ヲ思ヒ國家ヲ思フノ念慮ナク、徒ラニ顯位顯名ニ適スル職業ヲ選ブハ現時ノ弊風ナリ。是故ニ正直熱心ニシテ而モ獻身的ニ其業ヲ執ルモノニシテ名ノ知レザルコトアリ平々凡々日暮的ニ其職ヲ執ルモノニシテ却テ名ノ聞ユルモノアリ何ゾ夫レ理ノ轉倒スルヤ、君今身ヲ實業界ニ置ク。今ヤ我國ニ於ケル經濟界ハ狀勢俄カニ膨脹シ諸事業ノ振興ハ昔日ニ倍シ宇内ノ列強國ト競フテ國力ノ發展ヲ計劃シ益々富強ノ基礎ヲ鞏固ナラシメント奮進シツ、アリ、君ハ千葉縣平民渡邊紋右衛門氏ノ長男ニシテ慶應三年九月二十二日ヲ以テ生ル、幼名ヲ吉之助ト云フ天性氣敏剛勇ニシテ沈着人ニ優ル堅忍不拔以テ事ニ處シ、明治二十九年分家シテ一家ヲ創立ス夙ニ早稻田專門學校ヲ出デ、新聞記者トナル、精到着實ノ議論流暢明達ノ辨舌到ル處衆聽ヲ感動セシメテ由來進歩シ來タル我操觚界ニ於テ第一流ノ雄辨家トシテ噴々ノ評アリキ、後東京株式取引所書記長タリシコトアリ又日本火災保險會社ノ監查役タリシガ、明治三十八年十一月岩下清周氏、益田太郎氏、中野武營氏、瀧玉田氏、李序園氏、葉亮卿氏ト共ニ資本金二百萬圓ヲ投ジテ營口水道電氣會社ヲ創立シ大ニ社務ノ爲ニ盡瘁セリ能ク辛苦艱難ト戰ヒ推舉セラレテ專務取締役トナル、會テハ萬歲生命保險株式會社監查役ニ推サル、超群非凡ノ頭腦ト才識トヲ有スルニアラズンバ焉ンゾ能ク茲ニ至ランヤ君ガ斯業界ニ於ケル地位以テ想見スベシ。

電話芝 九百五十六番

川上直之助氏

實業家

麻布區東町二十四番地

屹トシテ深淵ノ大巖ノ如ク、奇骨稜々、俗世ヲ罵リ志士ノ如ク、一種優スベカラザル氣品ヲ有スルハ、ソレ實ニ、川上直之助君ナランカ、國力ノ膨脹ヲ圖リ、吾家ノ富強ヲ致スハ、一ニ實業ノ發達ニアルコト今更喋々ヲ要セズ、君一身ヲ犠牲トシテ、其發達進歩ニ資ス卓識ニアラズンバ能ハザルナリ、君ハ東京府士族亡川上助七氏ノ長男ニシテ慶應元年四月十日ヲ以テ生ル、幼ニシテ英俊敏捷ノ令聞アリ、明治七年四月家督ヲ相續ス、温厚篤實夙ニ學ヲ好ミ明治廿二年東京法科大學ニ學ビ卒業シテ法學士ノ稱號ヲ受ク、同時同窓ノ多クハ先輩ノ鼻息ヲ窺フテ榮進之ヲ望ムノ時、偶々炯眼ナル君ハ時運ノ發達ニ鑑ミ國家理財發達ノ要素ハ實業ノ伸長ニ多大ナル關係ヲ有スルヲ洞察シ決然トシテ身ヲ實業ニ投ゼントス、後チ銀行事業調査トシテ米國ニ航シ後チ次デ獨國ニ其蘊奧ヲ究メント伯林大學ニ遊ブ同二十六年歸朝後正金銀行ニ入り、外國課詰トナリ同三十年日本勸業銀行ニ轉ジテ收支課長トナリ後チ券書課長ニ轉ジ同三十二年同行監查役トナリ、滿腔ノ熱血ヲ業務ノ上ニ傾注シテ苦心慘憺同行ノ經營ニ余念ナク、爲ニ内外人ノ信望ヲ博シ心勞空シカラズ着々好運ニ進メシメシモノ君等ノ功績亦渺ナカラザルナリ、同三十三年推サレテ理事ニ擧ゲラレ現時尙就任セリ、君資性明敏快濶ニシテ度量寬厚能ク人ヲ容レ、其流暢ナル辨舌ハ滾々トシテ源泉ノ如ク、莞爾タル風采一見人ヲシテ春風ニ接セルガ如キ快感ヲ抱カシム、實ニ當代ノ紳士トシテ信用頗ル高キモノ亦故アル哉。

電話芝 七百三十番

佐竹作太郎氏

山梨縣甲府市選出衆議院議員

麴町區有樂町
三丁目三番地

(五二)

政治、實業兩界ニ跨ツテ縱横ノ手腕ヲ揮フ、前者ニアツテハ政友會ノ重鎮トシテ前年來全院委員長ノ椅子ヲ占メ、後者ニアツテハ、東京電燈株式會社々長トシテ最モ能ク顯ハル、今其閱歷梗概ヲ聞クニ、君ハ元京都府士族ニシテ嘉永二年三月ヲ以テ山梨水明ノ山城國受宍郡小出石村ニ生ル、少壯ニシテ山梨縣ニ移住シ、茲ニ勢力地盤ヲ築造ス、明治二十一年、山梨縣會議員ニ選バレ、爾來、甲府市會議員、甲府市區改正調査委員等ノ重職ニ就ク、第七回衆議院議員總選舉以來、引續イテ、甲府市ヨリ選出セラレテ衆議院議員トナル、爾來立憲政友會有數ノ人材トシテ黨務ノ擴張ニ盡瘁ス。

尙實業方面ニ於ケル重要關係ヲ摘記スレバ、東京電燈株式會社々長ヲ中心トシテ、株式會社第十銀行頭取、日本第一麥酒株式會社及山梨新聞株式會社各取締役等ニシテ、殊ニ渾身ノ精血ヲ瀝キツ、アルハ東京電燈ナリ、同社ノ營業狀態ニ至ツテハ既世ノ定評アリ、敢テ秃筆ヲ行フノ要ヲ見スト雖モ社長トシテ實際ノ局ニ當リ、盲判ト食堂ニ雜談スルヲ以テ當代實業社會ノ所謂社長連ト趣ヲ異ニス君最初入社時代(去ル二十九年)ヨリ引續イテ同社ニアリ、現職ニ就キシハ、三十三年木村正幹氏ニ代リシ後ヨリニシテ或ハ社員ノ大淘汰ニ、或ハ冗費ノ節減ニ、快刀亂麻ヲ斷ツテ業務ヲ整理シ、更ニ發電所及配電所ノ設備ヲ完全ナラシメ、需用者ノ要求ヲ洞察シテ大ニ盡ス處アリ、是ヨリ先、君水力電氣事業ノ有利ナルヲ看取シ、甲州桂川駒橋附近ニ水利權ヲ買收ス、數年後會社水力電氣ヲ計劃スルニ當リ、豫ネテ買收セシ權利ヲ原價ニテ會社ニ移シ株主ヲシテ感謝セシメタリ、三十五年品川電燈ヲ、三十八年深川電燈ヲ買收シ今ヤ純平タル獨占事業トナル、前年推サレテ、渡米實業團トナリ、北米ヲ視察シテ歸朝スルニ至リシナリ、君溫厚ノ好紳士、常織圓滿ヲ同儕ニ推サル亦當代ノ一人物ナリ。

電話本局 九百五十番

長岡長氏

實業家

牛込區北町十一番地

夫レ銀行家ナルモノハ、政治家ノ如ク、文學者ノ如ク、智力ヲ活動スルヲ以テ足レリトセズ、廣ク實際ニ涉ツテ緻密ノ頭腦ヲ要シ多クノ經驗ヲ積ミ、時アツテハ、勇氣ト果斷トヲ要シ金融界ノ歸趣波動ノ及ブベキ處ヲ察知シ、推斷スルノ明ナクンバアルベカラズ、此資格アツテ始メテ眞ノ銀行家タルベキカ、吾人此意味ヲ以テ長岡長氏ヲ物色セントス。

君ハ大阪府ノ人、故長岡宗芳氏ノ長男、慶應元年八月一日ヲ以テ生ル、嚴父宗芳氏ハ大藏省出納局長崎出張所々長トシテ維新當時ノ計理家ヲ以テ鏘々タルモノ、君先考ノ教ヲ受ケ、幼ニシテ聰慧英才拔群風ニ普通學ヲ長崎中學校ニ修メ造詣頗ル深ク卒業後出京シテ高等商業學校ニ入ル、螢雪ノ功空シカラズ、優位ノ成績ヲ以テ同校卒業、後直チニ横濱正金銀行ニ入り精勵以テ事ニ從ヒ早ク先輩ノ推服スル處トナリ選バレテ廿四年紐育支店勤務トナリ、居ルコト五年、即チ廿八年ロンドン支店ニ轉勤シ歸朝後東京支店副支配人トナリ、幾何モナク斯業調査ノ目的ヲ以テ歐米各國ニ派遣セラレ、夫レヨリ後日露戰役ノ交、日本銀行ニ入り計算局調査役トシテ今日ニ至ル。

君、人トナリ、謙嚴正直、思想綿密ニシテ些少ノ事ニモ舉措苟クモセズ、慎重ノ態度ヲ以テ常ニ事ニ當ル、寔ニ銀行家トシテ其手腕ノ凡ナラザルヲ知ル、一面仁俠ニ富ミ幾多捐金シテ公共ノ事業ニ盡粹シツ、アルヤ數フルニ遑アラザルナリ、吾人如上ノ意ヲ以テ君ヲ物色ス亦中ラザルナキカ。

電話番町 千六百六十四番



(五三)

道源權治氏

貴族院議員

山口縣郡邊郡宮田村

(五四)

規模既ニ立チ、秩序既ニ整フ、而シテ天下是非ノ嘆ナキカ、是非ノ嘆ナキトコロハ善惡ノ錯誤ナシ、是レ果シテ社會ノ形式ナランヤ、善中惡アリ、惡中善アリ、共ニ實ニ錯雜ナルモノ是ヲ單調ニ改メントスルコソ抑々誤リナレバ世人兎角ノ評論アルハ即チ材物タル所以彼ノ凡人ヤ夫レ閱トシテ聲ナキナリ、蓋シ一言以テ君ノ成功ハ懸抜ノ手腕ト富ノ力トニアリトイフヲ憚ラサルナリ。

君ハ山口縣ノ人岩崎惣輔氏ノ次男ニシテ明治二年一月十六日ヲ以テ生ル、同二十六年十二月道源岩太郎氏ノ養子トナリ同三十二年七月家督ヲ相續ス、既ニシテ力ヲ縣下產業ノ發達ニ盡シ、同縣勸業委員トシテノ貢獻ノ如キ、決シテ一片ノ責任果シノミニアラサルナリ、尙豊富ナル資金ヲ擁シテ銀行事業ニ出資シ、周密ナル用意ト堅實ナル主義トニヨリ、同縣金融界ニ與ヘタルモノ亦尠ナカラサルナリ、尙公共事業ニ盡瘁シテ縣治ノ爲メニ全力ヲ注ギ、教育、衛生、土木等各方面ニ身財ヲ吝マズ、發達改善ヲ企圖シ爲ニ同縣會ノ面目大ニ揚ル、前年同縣多額納稅者ヨリ互選セラレテ貴族院議員トナル、尙日露戰役ノ功ニヨリ勳四等ニ叙セラレ旭日章ヲ賜ハル呼實ニ君ノ如キハ人世ノ光榮ヲ一身ニ集メタルノ士ナルカナ、今漸ク年四十有餘歲前途多望技倆益々圓熟シテ人格愈々完全ニ、將來果シテヨリ以上ノ發展ハ火ヲ見ルヨリモ明ナリ、當代所謂富豪ト稱スルノ輩、動モスレバ金權ヲ擁シテ世ヲ茶毒シ、爲ニ不健全ナル思想ヲ國民ノ或部ニ抱カシム、如斯ハ、富豪亦一半ノ責ニ任セサルベカラズ、モシ夫レ吾徒ノ衷心ニシテ合理ナリトセバ世ノ分限者タル者尠シク就テ我道源君ニ學ベ。

守山又三氏

熊本縣郡邊郡選出衆議院議員

芝區葺手町
二十一番地

君亦一橋ノ出身、由來高商卒業生ノ本領ハ對外活動ニアリ、官ニ志スモノハ外交官領事官トシテ國際的ニ活動ス、實業ニ志スモノハ。貿易事業ノ中堅トシテ活動ス、コレ同校ノ特色ニシテ、彼ノ赤門、三田、早稻田ト軌ヲ異ニス、サレド内地ノ事業ニ從フ者モ亦、自ラ一橋式特有ノ活躍ヲナス、人材彬々トシテ輩出ス、サレド守山君ノ如キハ、儕輩ト赴テ異ニスルヲ見ル、過去ノ經歷ニ徵スルニ一橋式骨子ニ自家獨特ノ造詣ヲ肉トシ、九州男兒ノ猛力ヲ發揮シテ奮闘スルハ、君特有ノ手腕ニシテ、人ノ評シテ「快腕」トナス亦故アル哉。

君ハ肥後國八代郡太田郷村ノ人ニシテ明治二年三月ヲ以テ生ル、普通學卒ルヤ東上シテ高等商業學校ニ入ル、苦學四年、良好ノ成績ヲ以テ卒業ス、直ニ去ツテ大坂ニ赴キ、身ヲ實業界ニ投ズ、由來日本商工業ノ中心ハ大坂ナリ、眞ノ實務的經驗ヲ得ント欲セバ、機敏ナル大坂商界ニ學ハザル可ラズ、君茲ニ陣ヲ張ツテ商戰場裡ニ起ツ、生來剛腹ニ加ヘテ犖猛肥後人一流ノ活動ハ、期年ナラズシテ少壯實業界ノ敏腕辣手ヲ以テ敵手ヲ怯怖セシメタリ、北濱ノ岩下氏ト共ニ東京高等商業ヲ代表スルノ事實ヲ呈示ス、四十一年度第十回衆議院議員總選舉ノ事アルヤ、郷里熊本縣有志者ヨリ推サレテ候補者トナリ、美事當選ノ月桂冠ヲ得ルニ至レリ、是ヨリ先、籍ヲ大同俱樂部ニ置キ、同志ト共ニ奔走計籌意ヲサルモノアリキ、此次非政友同盟ノ中央俱樂部成ルヤ、馳セテ盟ニ加ハル、尙前年高商問題ノ紛議起ルヤ、稜々タル俠骨座視スルニ忍ビス、母校ノ爲メ後進ノ爲メ身ヲ挺シテ盡粹セリ、君亦中央政界ノ少壯家トシテ未來ヲ至嚮セラレツ、アルノ一人ナリ

電話芝二千三百九十四番

(五五)

澤田正六氏

實業家

日本橋區本銀町一丁目八番地

(五六)

正直ハ無形ノ資本ニシテ、又成功ノ要素タリ、故ニ人苟クモ正直ナランカ、天幸福ヲ獲ヒ、盛運ヲ齎ラ
 スコト必然ニシテ彼ノ才子オヲ弄シ、策士策ヲ廻ラス、一時ヲ糊塗纏繞スルヲ遂ニ失敗不成功ニ終ル所
 以ノモノハ、一片真情正直ノ缺如セルモノアレバナリ、澤田君、正直ヲ以テ主義本領トシテ而シテ世ニ
 立ツ、幸運續來豈偶然ナランヤ、此意味ヲ冒頭トシテ君ガ經歷ノ梗概ヲ叙センカ。
 君ハ岩手縣ノ人、文久三年正月六日ヲ以テ西磐井郡一ノ關町ニ生ル、嚴父ヲ五三郎氏トイヒ其長男ナリ
 幼ニシテ學ヲ好ミ聰慧亦鄉黨ニ冠タリ、夙ニ和漢ノ學ヲ鄉愛ニ修メ造詣深ク、曾ツテ嚴父五三郎氏三井
 組ニ其録ヲ食ミシ事アリシ故ヲ以テ君モ亦早ク三井組ニ入り、銀行部検査役トシテ永年其職ニ在リ噴々
 タル令名アリシモ故アリテ明治四十一年十月大株主トシテ東京貯蓄銀行ニ入り後チ四十二年推サレテ同
 行頭取トナル其正直其忠實ナル精神ト勤勉ト熱心ナル性格トハ月ト共ニ信用ヲ増シ、其劃策計籌宜敷ヲ
 得益々隆盛ニ趣ク同行ガ今日斯業界中斬然頭角ヲ顯ハスニ至ル所以、君ガ正直ニシテ且ツ精勵ナル高價
 ヲ拂ヒタル結果トイフベキカ、君人トナリ、剛直仁俠ニ富ミ、私財ヲ投ジテ弱者ヲ賑恤スルナト、如斯
 クシテ君ノ名聲不自然ナラザルヲ知ル、亦以テ東都實業界ノ一名士タリ。

電話本局 二千八百三十五番



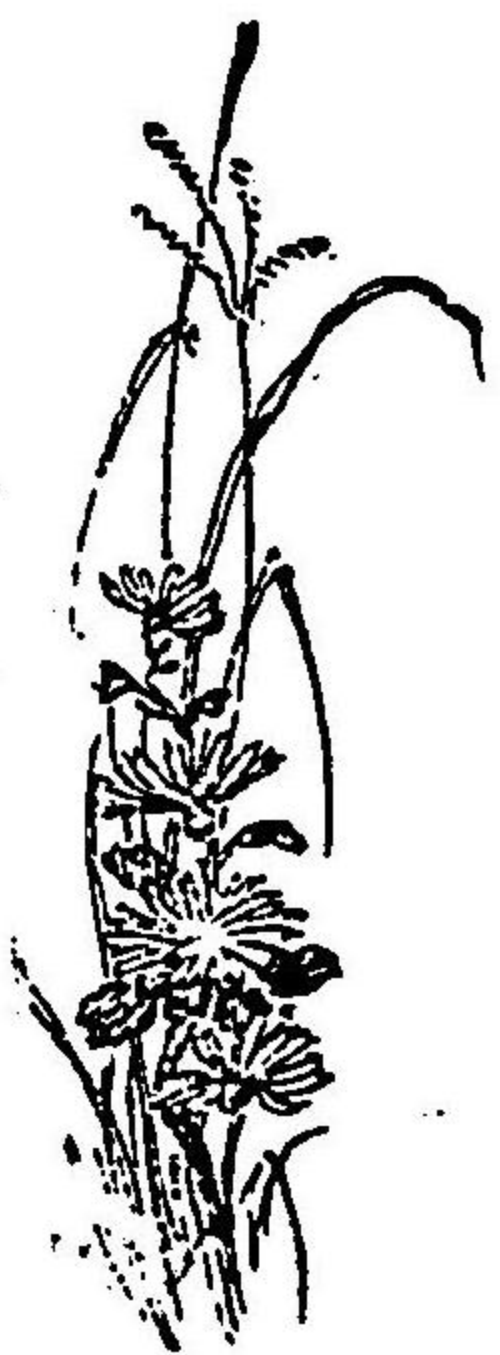
松平親信氏

子爵 貴族院議員

淺草區北三筋町一番地

世ハ澆季末法ニ屬シテ人情紙ヨリモ薄ク、社會ハ腐敗溷濁シテ道義廉耻共ニ蕩然地ヲ掃ヒ邦家ノ前途洵
 ニ寒心ニ堪ヘザルノ時、清節恰モ孤松ノ如ク、正義ニ處シテ自若ヨク邦家ノ大事ヲ果斷シテ驚カズ宛然
 豪傑ノ風采アリ、實ニ當代少壯政治家トシテ崇仰スルニ足ル。
 遠ク當家ノ祖先ヲ按ズルニ、清和天皇ノ皇孫鎮守府將軍源經基七代大炊助新田義重ノ裔、從五位下和泉
 守松平信光ノ末男、能見三郎右衛門光親ノ後ナリ、ソレヨリ重親、重吉ヲ經テ大隅守重勝ニ至ル徳川家
 康ニ仕ヘテ軍功アリ、後屢々移城シテ正保二年豊後國杵築三萬二千石ノ城主トナル、ソレヨリ十一代ヲ
 經テ從五位親貴ニ至ル、君ハ其長男ニシテ明治八年十二月廿一日ヲ以テ東京ニ生ル、明治十五年十月二
 日家督ヲ相續シ、同十七年七月特旨ヲ以テ子爵ヲ授ケラル、幼ニシテ學習院ニ入り尋デ中等部ヲ卒ヘ更
 ニ同院高等科ヲ卒ヘテ帝國大學法科ニ入ル益辛雪苦參ケ年ノ課程ヲ卒ヘテ、美見法學士ノ稱號ヲ受ク、後
 更ニ大學院ニ入り斯學ノ蘊奧ヲ極メテ遂ニ去三十九年同族中互選ノ期スル處推サレテ貴族院議員タリ爾
 來籍ヲ研究会ニ置キ、院内ニ於テハ常置委員トシテ熱心其任務ヲ敢行シ、院外ニアツテハ會ノ少壯家ト
 シテ未來ノ大成ヲ嚮望セラレツ、アリ。

電話下谷 千〇十五番



(五七)

山本達雄氏

日本勸業銀行總裁
貴族院議員

麹町區上二番町三十八番地

(五八)

記者一日勸業銀行ニ阿部氏ヲ訪フテ總裁山本達雄氏ノ經歷ヲ叩ク、其要ニ曰ク、君ハ大分縣臼杵藩士山本確氏ノ第二子ニシテ安政三年臼杵城下ニ生ル、夙ニ漢學ヲ學ビ郷里ノ子弟中俊秀ノ聞アリ、一郷ヲシテ其前途ヲ想望セシム、後チ慶應義塾ニ入り英學ヲ修メ、又三菱商業學校ノ設立ニ當リ轉學シテ専ラ商業經濟ヲ研究ス、明治十三年其業卒ルヤ岡山縣立商業講習所ニ聘セラレテ其教頭トナル、氏ノ著「商業算術書」ノ成リシハ此時ニ在リトス、次テ大阪府立商業學校ノ教頭ニ聘セラレ、氏常ニ實業ニ從事スルノ志アリ、十六年三菱、共同運輸兩會社ノ競争起ルニ際シ、教鞭ヲ擲テ三菱會社ニ入り次テ横濱同支店ノ副支配人トナリ、専ラ競争ノ衝ニ當リ大ニ其敏腕慧手ヲ振ヘリ、當時川田小一郎男、膽大ニシテ才略アリ三菱會社重鎮トシテ岩崎彌太郎氏ニ信任セラレ、三菱共同ノ合併シテ今日ノ日本郵船會社ヲ創設セントスルニ當リ、川田男ハ氏ヲ隨ヘテ京阪ニ出張シ大ニ畫策スル所アリシガ同男ノ慧眼ナル其時既ニ氏ノ爲人ノ大ニ用ユベキヲ認識セリ、後日本郵船會社ノ起ルヤ韓國釜山元山支店長ニ擧ケラレ、後チ東京支店ニ轉セリ、廿二年川田男ノ入ツテ日本銀行總裁トナルヤ氏ヲ擧テ同行營業局長ノ要地ニ置キ、大小ノ行務ヲ執行セシメ兼ネテ又横濱正金銀行取締役ニ推薦シタリ、是レヨリ氏ノ技倆才幹ハ遺憾ナク發揮セラレ眼光犀利企畫縱橫事毎ニ着々其功ヲ奏セサルモノナシ、特ニ廿七八年日清戰役ニ際シ外、軍資ノ供給内、金融ノ操縱等日本銀行ノ施設上大ニ視ルベキモノアリシガ其間川田總裁ハ多ク病ニ在リシヲ以テ氏ノ同總裁ヲ助ケ畫策スル所甚ダ妙ナシト爲サズ、是ニ至リテ人皆川田總裁ノ眼識ト氏ノ才幹ヲ稱セリ、廿九年川田總裁歿シ岩崎彌之助男其後ヲ承クルヤ氏ハ理事ニ任命セラレテ内外ノ重望ヲ擔ヘリ後、男ノ印綬ヲ解クニ當リ氏ヲ其後任ニ推シ終ニ日本銀行總裁ノ榮職ニ任命セラレタリ、日本銀行總裁ハ吉原重俊、富田鐵之助ノ先輩ニ始マリ、川田男ノ膽力ト敏腕ニ依リテ大ニ振ヒ、岩崎男亦英邁ノ資ヲ以テ内外

ノ威望ヲ有シ、日本銀行總裁ノ地位ハ實ニ萬鈞ノ重キヲ加ヘタリキ、氏ハ之レカ後ヲ襲ヒシカ時恰モ日清戰役ヲ經テ政府ノ財政計畫ハ俄然擴張シ、經濟社會モ亦急劇ノ膨脹ヲ來タセル結果トシテ財政ハ困難ニ陥リ經濟社會モ悲觀ニ沈ミタル際ナレバ日本銀行ガ之ニ對スル處置ノ適否如何ハ國家進運上ニ大關係ヲ有シ其任ノ特ニ重且ツ大ナルヲ以テ或ハ氏ノ手腕ヲ疑フモノアリタリ、然レドモ氏ノ學識ト經驗トハ此ノ怒濤狂瀾ノ中ニ屹立シ緩急取捨其宜シキヲ得テ能ク金融ヲ鹽梅シ經濟社會ヲ援助シ、其職責ヲシテ遺憾ナカラシメタリ、卅六年十月任滿チ其職ヲ退キ貴族院議員ニ勅選セラレ、氏其職ヲ去ルノ當時日本銀行兌換券ニ對スル正貨準備ハ創立以來未曾有ノ巨額ニ達シ、兌換制度ノ基礎愈々鞏固ヲ加ヘタリ、氏ノ退職後數月ヲ出デサル翌卅七年二月日露開戰ノ事アリシガ政府ハ其ノ以前ニ於テ日進春日ノ兩巡洋艦及ビ必須ノ軍需品ヲ購入シ、又交戰中外債ノ成立ニ至ル迄軍資ヲ供給シテ遺憾ナキヲ得タルハ亦以テ氏ガ在職中ノ措置大ニ與リテ力アリト謂フベシ、氏ノ國家ニ貢獻スル處決シテ少ナシトセザルナリ、人生意氣ニ感ズ功名誰カ復タ論セン、好漢果シテ良ク好漢ヲ知ル氏微ニシテ未ダ顯ハレザルニ際シ、川田男ノ爲ニ其有爲ノ才タルヲ知ラレ、次デ又岩崎男ノ知ル處トナリ、精勵刻苦其知遇ニ酬ヒ大ニ其驥足ヲ展ハセリ、世ニ伯樂ノ有ラサルヲ以テ駿馬空シク耳ヲ槽櫪ノ間ニ垂レ志千里ニ在リト雖トモ終ニ顯ハル、ニ至ラサルモノ多シ、知己眞ニ得難シトナス、或ハ百歲ニシテ是ヲ得、或ハ千歲終ニ知ラレサルモノアリ、知己常ニ在ラサルニ氏ハ川田、岩崎ノ兩男ヲ得タリ而シテ兩男既ニ歿シ、氏亦閑職ニ在リテ讀書遊漁ニ耽リ敢テ聞達ヲ求メサリシガ時勢ハ長ク氏ノ閑地ニ悠遊スルヲ容レズ、今ヤ再ビ起ツテ勸業銀行總裁ノ要職ニ就ケリ、氏果シテ何等ノ蓋蓋ヲ披瀝セントスルカ。

電話番町 七十九番

(五九)

齊藤喜十郎氏

實業家

新潟市東堀通七番町

(六〇)

大丈夫志ヲ立テ事ヲ行ハントス何ノ恐ル、所アリテ、狐疑躊躇スルヲ要セン、我レ内ニ願ミテ一点ノ疾シキナク天地ニ俯仰シテ些ノ愧ス可キナシ、況シテヤ濟世愛民ノ至誠容易ニ汚ス可カラザルアルニ於テハ、世間群盲ノ反抗論我レニ於テ何カアラン、眼前山積ノ妨害障壁亦何ヲカ恐レン、聞ズヤ斷ジテ行ハバ鬼神ヲ避クノ古句ヲ、行ケ進メ斷々トシテ行ヘトハ、之レ實ニ齊藤君ガ胸中ノ覺悟亦以テ君ガ偉大ナル人格ヲ想見スルニ足ル吾輩ハ何ラ齋藤君ニ恩惠ハナキモ數年今日ノ成功ヲ以テ本書ノ花トナス。聞ク君ハ元治元年新潟縣下ニ生ル、幼少群童ト異リ常ニ暇アル時讀書ヲ好ミ長スルニ及ンデ早クモ世ノ辛酸ヲ嘗メ孝道意リナク又家業ニ勉ム後年先代ノ家督ヲ繼グニ及ンデ精勵愈々加ハル、爾來時運ノ大勢ヲ鑑ミ銳意専心公共事業ニ盡瘁シ功勞又大ナリ、明治二十二年推レテ市會議員トナリ尋デ市參事會員ニ舉ラレ、同三十年滿期解職トナルヤ君ガ信用ト資産トハ月ト共ニ加ハリ、同地ニ於ケル聲望第一流ニ位ス、彼ノ越佐汽船株式會社社長、水力電氣株式會社取締役、硫酸株式會社取締役、新潟電燈株式會社監査役、新潟商業銀行專務取締役、ハ其現在努力ヲ傾注シツ、アル處ニシテ、其他ノ大出資者トシテ關係ヲ有スルモノ、一々枚舉スルニ遑アラザルナリ、現ニ同縣多額納稅者トシテ上位ヲ占メ、多年奔走計籌シタル同市商業會議所會頭トシテ例ニヨツテ、同地産業ノ爲ニ滿腔ノ精血ヲ灑キツ、アリ。君資性濃厚篤實、頗同情同愛ノ念ニ富ミ、常ニ私財ノ巨額ヲ投ジテ徳ヲ積ミツ、アリ、亦以テ我利一片ノ富豪輩ニ示シテ頃門ノ一針タラシムルニ足ル。

電話 百四十六番

有坂成章氏

陸軍中將 男爵

牛込區築土八幡町二十七番地

甲冑界、發明家亦渺ナカラズト雖モ、彼ノ小銃及ビ速射野山砲ヲ創成シ、我陸軍ニ貢獻セシ功績ハ偉大ナリ、世人呼ンデ之レヲ有坂砲ト稱ス、君亦當代稀ニ見ル頭腦明晰ノ士ナルカナ、今茲ニ其小歴ヲ摘載シテ、時代ノ龜鑑タラシメントス。

君ハ舊岩國藩士、嘉永五年二月ヲ以テ生ル、實ハ木部左門氏ノ二男ナリ、慶應三年同藩有坂長良氏ノ養子トナリ其姓ヲ胃ス、夙ニ武人タラント志シ、明治六年醫學專業生トナリ、翌年兵學寮十一等出仕ニ任ジ爾來兵學小助教造兵司出仕、幼年學校教官、砲兵本廠出仕、海軍防禦取調委員等ヲ歴任シ、十四年參謀本部兼工兵第一方面附トナリ、翌年海防局へ兼務シ砲兵大尉ニ任ゼラル、同年砲兵工廠各生徒科教授、編纂取調委員トナリ次デ伊國砲術書取調委員トナリ、爾后砲兵會議附トナリ、新製火藥製造試驗委員、建築法審査委員、臨時砲台建築部事務官等ヲ歴任シ、砲兵少佐ニ累進砲兵會議々員ヲ兼任ス、次デ要塞ニ關スル事項取調ノ爲メ各地ニ出張シ、又歐洲へ差遣セラレ得ル處アリ、歸朝後砲兵會議審査官ニ任ジ、廿八年累進砲兵大佐ニ任ジ第一面本署長タリ、翌廿九年速射野砲ノ發明ニ腐心シ刻苦勉勵、前後數年ノ長日月ニ亘リ、終ニ三十年十二月美事速射野山砲ヲ創成シ、我陸軍ニ貢獻セシ所大ナリ、宜ナル哉功ヲ以テ勳二等ニ叙シ金五千圓ヲ賜ハル、卅二年再ビ軍機調査ノ爲メ歐洲へ差遣セラレ、同年陸軍少將ニ進ミ砲兵會議々長ニ任ズ、同卅六年更ニ陸軍技術審査部長タリ、次デ明治卅七年日露戰役前後ノ功ニヨリ功二級ニ陞セラレ、特旨ヲ以テ華族ニ列シ男爵ヲ授ケラル、此年七月終ニ陸軍中將ニ榮進ス。君資性謹嚴、宛然豪傑タルノ風格ヲ失ハズ、乞フ益々加重自愛シテ軍事ニ貢獻セラレン事ヲ。

電話番町 四百二十六番

(六一)

奥山三郎氏

實業家

四谷區鹽町一丁目三十三番地

(六二)

敏活ナル手腕ト活達ナル奇才ト有シ兼テ堅忍不拔ノ精神ヲ備ヘタルモノニアラザレバ焉ゾ、我國首都ノ實業界ニ起ツテ激烈ナル競争ニ打ち勝チ以テ目覺マシキ成效ヲ遂ケ得ンヤ、實ニ奥山三郎氏ノ如キ儘カニ異數ノ手腕ト才能ト有シカネテ勤勉力行艱難ニ打ち勝チ得タル人ナリ、斯界ノ秘訣ハ信用ヲ得ルニ在リ信用ヲ得ンニハ確實ヨリ他ナキナリ、確實ハ其人ノ天性ナリ奸商巧ミニ確實ヲ粧フトモ良商更ニ確實ヲ粧ハズト雖モ天ニ明アリ人ニ識別アリ奸商何ゾ善ク榮ヘン良商何ゾ榮ヘザランヤ、温乎タル其容貌能ク人ヲ容ル、ノ徳ヲ表ハシ而モ其内一片稜々ノ氣アリテ苟モ名ノ爲ニ惑ハス利ノ爲ニ枉グズ宛然君子ノ襟度アル君ノ如キハ實業界稀ニ見ルノ士人タルヲ知ル、凡ソ實業界ハ輕佻浮薄ノ小才子多ク偶々傑出スル者ナキニアラズト雖モ、利ノ趨ク所終ニ人ヲ賣リ友ヲ欺カズンバ止マズ、獨リ實業界ノミナラザルモ利ヲ同フスル時ハ百年ノ舊知ノ如ク一朝名利相突セザルニ到ラバ翻然トシテ悠々行路ノ人アルモノ滔々トシテ皆是レ也舉世斯クノ如ク滔々トシテ混濁ナルノ時、廉潔君ノ如キヲ有スル亦珍トスルニ足ラスヤ、即チ君ノ長キ經歷モ如上ノ評語ヲ以テ全豹ヲ蔽フテ餘アリ、其出身ハ千葉縣ニシテ同縣士族伏原如水氏ノ三男ナリ、嘉永六年四月八日ヲ以テ生ル、後年先代修氏ノ養子トナリ家名ヲ襲グ、維新當時藩ノ兵トナリ武術ヲ研究ス、壯年實業界ニ志ヲ寄セ、幾多銀行ノ破綻ヲ整理シテ屢々其ノ手腕ヲ認容セラル、往年安田氏ノ盡力ニヨリ、推舉セラレテ株式會社第九十八銀行頭取トナリ、以テ今日ニ至ル、尙特筆大書スベキハ、君ハ隠レタル教育界ノ大恩人ニシテ、彼ノ陸軍軍人ノ叢源ト稱セラレタル成城學校ノ如キモコレ君ノ心血ヲ灑イテ經營シタル處ナリ。

如斯シテ居常謹嚴、宛然タル古武士ノ節アリ、其趣味トシテ遊獵ヲ好ムニ至テハ亦面目ノ一半トスルニ足ル、希クハ自重シテ終ヲ全フセラレン事ヲ。

電話番町三千四百五十九番

澁谷嘉助氏

實業家

日本橋區本石町一丁目二十四番地

人生ハ長シト觀スレハ長ク、短カシト觀ズレハ短カシ、朝ニ生レタニ死ス浮游ノ命モ亦人生ナリ、茲ニ處ス最良ノ手段ハ何カ、只有リ最善ノ努力、成敗ハ問フ處ニアラズ、自レノ信スル處ヲ行ツテ天道ニ悖ラサル限り、斷々乎トシテ直截直進セハコレ足ルノミ、寔ニ君ノ如キハ、燥ラズ迫ラズ、自矜心ニ依テ實力ヲ行ヒ、何等求メントスル形式ナク、滔々タル當代實業界ニ超然トシテ一城廓ヲナス、然リ、眞ニ如斯シテ老舗ノ面目ヲ保ツ得ベキカ、傳ヘテ曰ク、君ハ千葉縣香取郡中村ノ人ニシテ嘉永二年七月ヲ以テ生ルト、乃父ヲ澁谷理左衛門氏ト稱シ、君其三男ナリ、天資伶俐ニシテ學ヲ好ミ、嬉戯亦群童ト異ナル者アリ、長スルニ及ンデ身ヲ實業界ニ投ジ、苦心慘憺幾多ノ事業ヲ經營ス、明治十四年先代忠兵衛氏ノ養嗣トナル、同所ハ日本ニ於ケル火藥店ノ老舗ニシテ、舊幕時代、諸大名ニ該品ヲ納メタルノ歴史ヲ有ス、尙明治初代大政官武庫司ヨリノ指定商舖タリキ、彼ノ大倉喜八郎氏モ始メ志ヲ得サリシ當時此店ニ使備セラレテ實務ヲ習得セルナリキト、廿二年四月君家督ヲ相續スルニ及ンデヤ、渾身ノ精力ヲ傾倒シテ家業ノ發展ヲ計リ、克ク時代ノ推移ニ着目シ、一步一步堅實ナル基礎ヲ樹立シテ益々向上ノ域ニ到ラシム、其營業振ニ至ツテハ専ラ實業ヲ旨トシ、虛飾ヲ避ケテ一新生面ヲ啓ク、宜ナル哉名望自然ノ恩惠ニヨツテ彌高ク、中央斯界黑人筋ヲシテ特ニ敬意ヲ拂ハシメツ、アリ、尙一面、餘力ヲ提ゲテ臺灣製氷會社、共愛生命保險會社、宮城紡績會社等ノ創業ニ盡瘁シ、其重役トシテ名聲隆々タリキ、今尙臺灣製氷ノ重役トシテ努力ヲ拂ヒツ、アリ、吾人ハ君ヲ評スベク趣味アル多クヲ有スト雖モ、今ハ當ニ概歴ヲ以テコレニ換ヘ、以テ意ノ存スル處ヲ致サンカナ。

電話本局 千四百二十四番

(六三)

鎌田勝太郎氏

貴族院議員

麹町區上三番町三十五番地

(六四)

貴族院議員トシテ香川縣ノ多額納稅者ナル君ハ讃岐國阪出町ノ人、元治元年正月ヲ以テ生ル、家世々豪農ニシテ傍ラ醬油醸造ヲ業トス、君天性敏活穎悟群童ト交リテ紅一點ノ觀アリ、幼ニシテ父君ヲ喪ヒ女丈夫ノ稱アル母君ノ手ニ養ハル君克己心ニ富ミ勤勉能ク家道ヲ起シ世態ニ通曉ス年齒僅ニ十七ニシテ早クモ北海道ノ富源ニ着眼シ自ラ巡遊シテ其狀況ヲ觀察シ以テ期スル所アリ、後鎌田物産會社ヲ起シ多數ノ船舶ヲ驅リテ廣ク四國、北海道ノ間ニ直接貿易ニ從事シ、又鹽田ヲ開キ紡績會社ヲ起シ或ハ銀行ヲ設立シテ産業ノ興盛ニ力ヲ盡シ以テ同縣ノ産業ヲシテ今日ノ如ク發達隆盛ノ域ニ達セシメタリ、君又教育ノ普及ニ力ヲ竭シ夙ニ中學教育機關ノ皆無ナルヲ慨シ同志ト共ニ濟々學館ヲ起シ又貧家ノ秀才ニ學資ヲ給シ其大器ヲ成サシメタル者尠カラス、次テ香川縣教育會々長ニ推サレ又同縣育英會理事長ニ舉ケラルニシテ縣會ニ議長タルノ蓋シ稀ナリトイフヘシ、同二十七年衆議院議員ニ選ハレ、君ノ如キノ若年トナリテ以來重任シテ今日ニ至ル、尙有名ナル會社銀行等ノ君ノ手腕ニ依テ重キヲ成スモノ舉ケテ數フヘカラス、殊ニ日露戰後力ヲ韓國ノ拓殖其他實業ノ方面ニ注キ卒先シテ各種ノ調査ヲ爲シ南韓ニ於ケル自家ノ經營スル農業ノ傍ラ韓國拓殖會社及韓國實業會社ヲ興シ現ニ其社長タリ。君性温厚篤實ニシテ寡言深慮アリ目下政友會ニ屬シ優ニ一方ノ重キヲ爲ス。

電話番号 百七十番

高木兼寛氏

男爵、貴族院議員、醫學博士

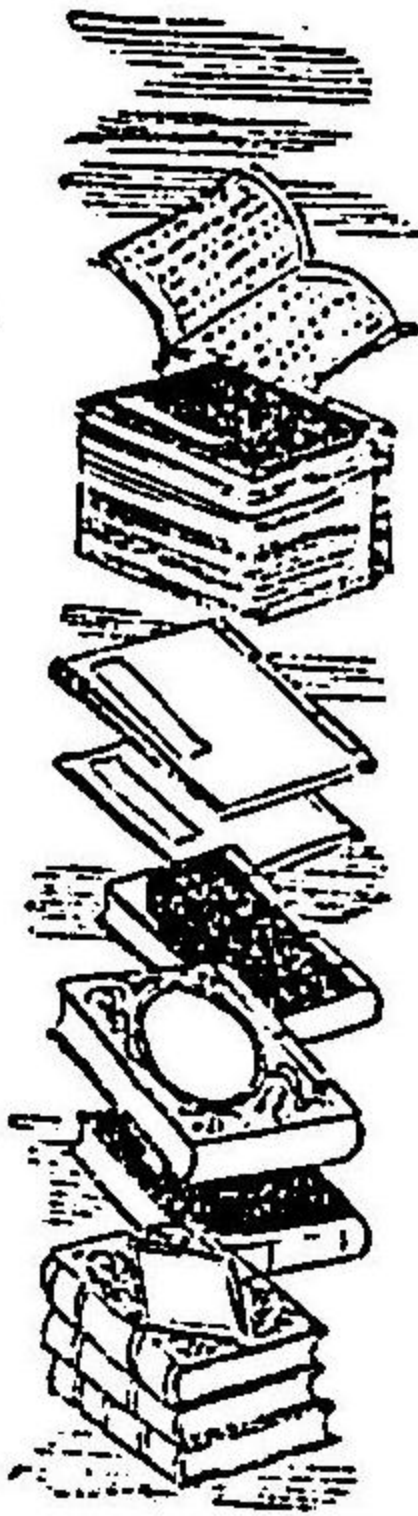
京橋區西紺屋町十番地

獨リ學殖ノミ深クシテ其他ノ點ヲ缺ケバ成功ハ得テ望ムベカラズ、只才智ノミ活躍シテ學殖ヲ有セサレバ久シク信用ヲ保ツ能ハサルナリ、故ニ一事一業盡ク其才ト學トヲ併有シテ初メテ成功ヲ求ムベキナリ君ガ今日ノ結果ノ如キ亦這般ノ理由ニ依ラズトセンヤ。君ハ舊鹿兒島藩士嘉永二年九月ヲ以テ生ル、幼名ヲ藤四郎トイフ、家世々武ヲ以テ藩侯ニ仕フ、君夙ニ文武二道ヲ修メ慶應元年初メテ醫學ヲ研究ス、曾ツテ君ガ師タル岩崎俊齊氏依命上都スルヤ、君亦後ヲ追フテ京都ニ至ル、吁天ナルカナ、命ナルカナ、至レバ即チ師歿ス、茲ニ於テ其途方ニ暮レタルモ勇ヲ鼓シテ職ヲ陸軍治療院助手ニ奉シ奥羽ノ戰地ニ出張シ平定ノ後チ歸國シテ藩設開成學校ニ入學シ數理學ヲ修ム、次デ英語ヲ修メ、明治二年鹿兒島藩醫學校六等授讀トナリ尋デ三等教官ヲ經テ更ニ校長トナルセラル、又海軍生徒トシテ英國ニ留學ヲ命セラレ「セントトーマス」病院醫學校ニ入ル、君天資醫學ニ達セシカ將タ勤勉拔群ノモノアリシカ學期試驗毎ニ優等賞ヲ得終ニ解剖教授助手ニ舉ゲラル尋デ外科學校ヨリ「メンバル」シツプ、オブ、デプロマ」ヲ受ケ、實地產科上達ノ賞狀ヲ得後又倫敦內科學校ヨリ「ライセンシエード、オブ、デロマ」ヲ受ケタリ、爾來君ハ其ノ修得セシ學術ヲ應用シテ內外科及產科當直醫ヲ勤メ再ビ賞狀ヲ受クルトコロアリ、十二年ニ至リ外科解剖學并ニ實地外科ノ懸賞試驗ニ應ジ最高點ヲ得テ銀製賞牌ヲ受ケ更ニ學術優等品行方正ナルヲ賞シテ金製賞牌ヲ領ス、這般ノ名譽ニ至リテハ當時内外人ノ異口同音等シク賞揚羨望セシトコロ實ニ日本國ノ光榮ヲ舉ケタルモノトイフヘシ、豈又偉大ノ成績ト謂ハザルベケンヤ、十三年業成リ外科學校ニ於テ「フェロー」シツプ、オブ、デプロマ」ヲ受領シテ歸朝ス此ノ年直チニ海軍々醫中監トナリ東京海軍病院長トナリ翌年海軍大醫監トナリ是レヨリ年ヲ遂フテ醫務局長

(六五)

遂ニ海軍々醫總監ニ榮進シ爾來海軍々醫本部長、内務省御用掛、海軍衛生部長、海軍々醫學校長ニ補セラレ二十年醫學博士ノ學位ヲ得海軍中央衛生會議議長ニ又中央衛生會委員、恩給局御用掛等歴任シテ二十五年貴族院議院ニ勅任セラレ現ニ海軍々醫總監從三位勳二等男爵貴族院議員醫學博士ノ肩書ヲ有ス、爾來ノ功績列舉ニ遑アララスト雖モ彼ノ海軍兵員中脚氣病ノ爲メ斃ル、モノ多キヲ慨シ親シク、天皇陛下ニ直奏シテ兵食改良實施ヲナシ効績大ナルモノアリ、尙王政復古國運新興ト共ニ醫學專ヲ泰西ノ學法ヲ講スルノ今日全國子弟ノ都門ニ廣集スル甚ダ多シ然ルニ學資缺乏順路就學スル能ハズ、之レヲ憐ミ簡易其業ヲ授ケントシ一講習所ヲ設ケ稱シテ成醫會講習所トイフ、今東京慈惠會醫學校トナリテ芝愛宕下ニ巍然タル大校舎ヲ見ル、君ガ院長トシテ常ニ醫學ノ發達國民全體ノ健康ニ留意シヨク院務ヲ處理シツ、アルナリ、斯クノ如クニシテ單リ刀圭界ノ爲ノミナラズ、苟クモ社會共同公益ノ事業ニシテ、以テ採ルベキアラバ、常ニ身ヲ挺シテ茲ニ盡瘁ス、コレ亦君ノ人格ニシテ世ノ定評アル處ナリ、更ニ特筆大書セザルベカラサルハ、健全ナル修養ヲ有スル青年國手ヲ養成シタルノ偉勳ハ元ヨリ、英國式醫學ヲ普及シ殊ニ海軍部内ニ少壯醫官ヲ出シタルモ亦懺カニ本邦軍事衛生史上ノ光彩トセザルベカラザルナリ、今ヤ醫界弊風滔々乎トシテ底止スル處ヲ知ラサルノ時、鷄群ノ一鶴、高木博士ノアルアリ、吾人襟ヲ正フシテ敬意ヲ拂ハサルベカラサルナリ。

電話新橋 二百十六番



川島 龜夫 氏

岡山縣郡部選出衆議院議員

芝區平町三番地

君ハ硬骨清廉、司直ノ官ニ在ツテ明快敏裁流水ノ如シ、而カモ細密ナル頭腦ヲ以テ事ニ當リテ其治績ノ稱スベキモノ多々アリキ、君ト同時ニ尙其以後出仕シタルノ英才多シト雖モ君ガ右ニ出ヅルモノナク獨リ君拔群シテ首位ヲ占ムルニ至リタル偶然ニアラサルナリ、其傳ニ曰ク慶應三年六月美作國津山町ニ生ル幼ニシテ穎悟夙ニ普通學ヲ修メ村夫子トシテ教育ノ任ニアルコト數年職起職ヲ退ヒテ笈ヲ東都ニ負フテ法律學ヲ研究スルコト二年餘其間荃辛雪苦專念學業ニ勉メ以テ得ル所大ニシテ第三回高等文官試驗ニ優等ノ好成绩ヲ以テ及第ス實ニ君ノオタル凡ナラザルヲ知ルニ足ル而シテ横濱地方裁判所及東京地方裁判所ニ職ヲ奉スルコト八年明治三十一年撰擢ヲ以テ司法省參事官トナリ司法大臣秘書官ヲ兼ネ旦夕精勤抱負ヲ盡サムトシタリシガ老朽者ノ爲ニ阻止セラレテ成功期スベクモアラザルヲ知ル、是レ先見ノ明ニ富ムカ故ナリ在職僅々十旬日ニシテ自カラ職ヲ辭シ、何等束縛スルナキ自由ナル社會ニ敏腕ヲ揮ハントシテ職ヲ辯護士ニ執リテ大ニ活動セントス、其誠實勤懇ニシテ用意固ク到ラザルナク緻密精細同業者ヲシテ敬服推重スルニ至ラシム、日本辯護士協會ノ主事トシテ其言論ハ同錄事及ビ文壇ニ異彩ヲ放チテ窺ヒ知ル事容易ナリキ、尙又會社銀行業等ニ於テ監查役及法律顧問トシテ君獨特ノ技量ヲ盡シツ、アリ、學歴トシテハ明治二十三年法學院英語法科ノ業ヲ卒へ、閑暇ヲ利シテ三島中州翁ノ門ニ至リテ漢籍ヲ講究シテ殊ニ詩文ニ嗜好厚シテ三六庵琴堂鶴城ハ其雅號ナリ現ニ選ハレテ衆議院議員タリ、尙君ノ經歷ニ關シ官界ニ身ヲ投シタル當時ノ逸事佳實多シト雖モ、ニ略シテ世人ニ問ハムトス

鹿島岩藏氏

實業家

京橋區木挽町九丁目三十一番地

精神一到何事不成ト辞ハ陳套ニ屬スト雖モ、意義ハ千古ノ眞理ナリ、君ガ拾有餘年ノ間興廢浮沈交々幾來セシモ毫モ避易セス挫屈セズ以テ遂ニ今日ノ大成功ヲ得タリシハ全ク如上ノ金言ヲ始終確守セシニ因ルト斷言スルヲ憚ラサルナリ、抑モ君ハ江戸中橋正木町鹿島岩吉氏ノ長男ニシテ弘化元年拾月三日ヲ以テ生ル、夙ニ乃父ノ業ヲ助ケテ勉強意リナク維新革命ニ遭フテ時勢ノ變遷ニ鑑ミ吾本業ヲ文明的ニ改正セサレバ將來ノ社會ニ立ツコト能ハサルヲ看破シ測量土木ノ學ニ志シ西洋煉瓦工事土木事業ヲ講習シテ其道ヲ解シ苦心經營以テ一家ヲナシ徹頭徹尾勤勉ト正實トヲ旨トシ從來同家ノ爲メ長女イト女氏ニ娶スニ精一氏ヲ以テシ家務一切ヲ委托シテ永遠ノ計ヲ策定セラル、トカヤ、精一氏ハ岩手縣ノ人明治八年七月一日ヲ以テ生ル、幼少學ヲ好ミ群童ト嬉戯ヲ異ニス長ズルニ及ンデ工科大學ニ入學シ、明治三十三年卒業シテ工學士ノ稱號ヲ受ケ鹿島組ニ復シ土木事業ニ從事シ遂ニ組主ノ養嗣子ニ迎ヘラルルニ至リシナリ由來土木事業ノ消長ハ文明開拓ノ先鞭ト稱セラル、本邦古來斯界ノ組織ノ不完全ニシテ統率者ノ人格亦頗ル疑ハシキ者比々然リキ、男性的事業ニ伴フ弊害ハ、亦如何トモスル能ハザリキ、君等新進ノ秀才ヲ得テ斯界ノ弊風ヲ一掃シ、理想的請負業者ノ顯出スルハ、單リ斯界ノ爲ニ祝スルノミナラズ、日本特有ノ請負業者氣質ヲ確的ニ有意ナラシムル所以ナリ、近來鹿島組ノ發展ハ愈々顯著ナル、衆多既ニ認容スル處ニシテ、仔細ニ裡面ヲ探究スレバ、如上ノ活氣鬱勃タルヲ見ル、亦慶セサルベケンヤ、堂々ノ陣ヲ張ツテ本邦斯界ヲ縱斷スルハ、コレ君ガ本懷ナラズヤ、父子協力亦人生ノ一大美事ナリ、勉メテ怠ルナクンバ、桂冠亦誰カ手ニ歸センヤ。

電話新橋 三百〇一番 全 七百四十三番

高橋門兵衛氏

實業家

京橋區錦屏島銀町二丁目十番地

文明ノ新思想未ダ東漸セズ、從ツテ入智未開ニシテ百般ノ事物悉ク舊套ヲ脱セザル鎖國姑息ノ時代ニ於テハ、概ネ農ヲ以テ國家經濟ノ大策トナセリ、然カモ一度泰西文化ノ風潮ニ浴シ、其光明燦トシテ吾國民ニ反影スルヤ、立志ノ大本茲ニ一轉シテ商工界ノ發達ヲ以テ國是トナスニ至レリ、蓋シ各國共ニ富國強兵ノ競争時代、一國ノ盛衰ハ實業ノ消長ニ至大ノ影響ヲ有スルヲ以テナリ、サレバ斯業ノ盛否ハ當局人士ノ才腕ニ俟ツコト多大ナル敢テ吾人ノ贅言ヲ要セザル所ナリ、然シテ此向上發展ヲ企劃スル上ニ於テ緊要必需ナル棟梁的有爲ノ人材タリ、此感ヲ抱イテ特ニ吾人ハ之ヲ望ムニ青年實業家ヲ以テス、高橋君ノ如キハ蓋シ其選ニ入ルベキノ士ナリ、君ハ東京府平民先代高橋門兵衛氏ノ長男ニシテ明治元年九月二十日ヲ以テ生ル、幼ニシテ群童ト戯ヲ異ニス同三十五年七月中家督ヲ相續シ先代ノ名ヲ襲フ、酒問屋ヲ業トシ誠實ヲ旨トシテ能ク客ノ信用ヲ得爲ニ日々隆盛ノ佳域ニ達ス、蓋シ同家ノ酒問屋トシテノ歴史ハ、先々代マデ伊勢國龜山ノ藩士ニシテ由緒アル家柄ナリシガ、江戸ニ來ツテ感ズル處アリ、斷然祿ヲ棄テ、斯業ヲ勵ミ、言行男性的ニシテ多クノ逸話アリ、爾來慈善公共ノ事業ニ私財ヲ投スルヲ以テ家憲トナス、先代亦克ク守成ノ才器トシテ名アリ、當主亦温厚ノ好紳士、木業ノ餘暇、説田、石橋氏等ト日本商船株式會社ヲ起シテ其計營發展ニ力メタリシガ、後辭シテ今ハ専ラ本業ノ擴張ニ熱心シ、明治四十二年來東京酒問屋組合頭取ニ舉ケラレ、眞摯誠實其職ヲ全フシ、一方自家營業方針トシテ先代以來ノ家憲正直薄利的ニ活動シツ、アリ、君尙文明的ニ向上スルノ積極的計劃ニ富ム、蓋シ同家ノ繁昌更ニ一段ノ高キヲ來サン。

電話浪花 千五百五十三番

石川甚作氏

實業家

日本橋區川瀨戸町十七番地

(七〇)

自働自立、自活自贍、果シテ以テ人生ノ最高目的ト云フベキカ、否是レ應報ノミ、當然ノミ、誰カ克ク
茲ニ達セザランヤ、サレバ人ヲシテ働カシメ人ヲシテ立タシメ人ヲシテ活カシメ然シテ人ヲ贍ラシムル
ニ至ルモノ即チ人生ノ最高目的ヲ達シタルニアラズヤ、學アリ只自己ヲ益ス、是レ其真ノ目的ニアラズ
才アリ只自己ヲ扶ク、是レ其ノ真ノ目的ニアラズ抑モ又財アリ以テ只自己ヲ利ス、是レ誠ニ財ノ目的ニ
アラザルナリ、活動シテ他人ノ身ノ上ニ及ブ、是ニ於テカ、目的成ル世道頽レズ人心倒レザル所以豈夫
レ茲ニアラズトセンヤ、學理ノ効用ハ實際ニ施シテ現ハレ、學識ノ淺深有無ハ實際ニ用ヒテ現ハル石川
甚作君ノ如キハ確ニ實理ニ富ミ之ヲ實地ニ應用シテ以テ大ニ殖産興業ニ盡セシノ人乎。
聞ク君ハ栃木縣平民石川亮平氏ノ長男ニシテ文久三年五月二十日ヲ以テ生ル、明治十一年十一月家督ヲ
相替ス、人トナリ謹厚篤實、終始一貫、曾テ變ルコトナキハ儕輩等シク驚歎スル處ニシテ、一切ノ行爲
悉ク社會ノ爲ニ盡瘁スルノ美質ヨリ出ズ如斯ハ何人モ云フベク行フニ難キ處タリ、殊ニ謙遜ニシテ懇切
常ニ對手ヲシテ快感ヲ抱カシムルト共ニ不知不織ノ間ニ畏服セシム現時富士石油株式會社監査役ニ推選
セラレ誠意誠心依然トシテ其職ニ力メツ、アリ、君說アリ見ズヤ、僅々三千方里、五千萬ノ同胞ヲ對手
トシテ商業ヲ競争ス必ズヤ個人ノ利益ヲ交換スルニ過ギズシテ國家ノ富強得テ望ムベカラズ、要ハ廣ク
且ツ多キ諸外國ヲ對手トシテ盛ニ物品ノ輸出ヲナシテ一方ニ輸入ヲ防遏スルノ策ヲ講セザルベカラズ是
レ蓋シ一日一刻モ忘ルベカラザル實業家ノ心得ナラズヤト、現ニ目下東京灣、造船株式會社監査役トナ
リ幾多ノ辛酸ヲ嘗メ多年一貫主張ヲ貫クニ怠ラザルハ吾人ノ敬服ニ耐エザル處ナリ。

電話本局 八百七十九番

桐島像一氏

實業家

小石川區原町百二番地

富豪三菱王國、銀行、鑛山、造船ヲ中心トシテ直接間接ノ經營事業、危然トシテ本邦實業界ヲ歴ス、之レガ
任ニ當ル者、莊田首相以下悉クコレ當代ノ錚々タリ、君亦三菱系ノ少壯家ニシテ『二世豊川』ノ異名ヲ享ケ
ツ、アリ、聞ク君ハ高知縣士族桐島正親氏ノ長男ニシテ、元治元年十月五日高知城下ニ生ル、夙ニ出デ、
東都ノ人トナル、當時岩崎家ニ於テハ、大石正巳氏ヲ塾頭トシテ明治塾ヲ起シ久瀨氏及同郷ノ秀才ヲ教育
ス君亦林民雄氏等ト共ニ茲ニ苦學シ、次テ帝國大學法科ニ入り政治學ヲ專攻ス、股錐ノ苦學其功空シカラ
スシテ卒業シ、直ニ合資會社三菱銀行部ニ入ル、爾來其才幹重ク用ヒラレテ副部長トナリ、兼ヌルニ地所
用度課長ヲ以テス、由來同行ノ前身ハ、彼第百十九ニシテ同行衰退ノ後ヲ受ケ三菱家ニヨツテ經營セラレ
タルハ明治十八年ナリ、次テ其組織ヲ變更シタルハ去ル二十八年ナリ、其營業振ニ至ツテハ、堅實無比、假
令諸預金額、同貸付及割引手形額、ニ於テ常ニ三井、第一、第百等ニ比シテ一儔ヲ輪スルノ觀アリト雖モ、
大富豪ノ經營テフ信用ト、堅實ナル行風トハ、却テ内地人ヨリモ寧シク對外人關係ニ頻繁ナリ、加フルニ
高級幹部ニハ譜代ノ臣豊川氏及君アリ、外様トシテ、三村及串田兩氏アリ、相反セル性格ガ調和シ結合シ
テ行務愈々揚ル、今專ラ地所用度課長トシテ全力ヲ注ギツ、アリ彼ノ八重洲町ノ三菱原及馬場先門外ノ
大建築經營等ヲ主ナル者トス、吾人ハ君ノ手腕ヲ認容ス、而シテ當代少壯實業家中ノ第一流ナルト稱スル
ニ於テ且其人格高潔ナルニ於テ、曰フベク多クヲ知悉スルモ、徒ラニ贊辭ヲ呈スルハ却テ君ノ主義ヲ破ル
ニ等シキヲ思惟シ敢テ一語ノ月旦ニ及ハスト雖モ、只一事君ノ日常ニ於テ、彼ノ土佐人式家格ト、談論風
發國士ノ節アルヲ以テ東洋豪傑ノ亞流ト誤解セラレツツアルハコレ君ノ眞骨頭ニアササルヲ附記センノ
ミ。

電話番町 九百五十七番

(七一)

村井貞之助氏

實業家

龜町區中六番町五十四番地

(七二)

曾テ煙草官營ノ前、日本斯界ノ商戰ハ、西ニ村井、東ニ岩天、火花ヲ散ラシテ接戰スル處、寔ニ天下ノ偉觀ナリキ、當時村井兄弟商界ノ參謀トシテ、帷幕ニ算計ヲ廻シテ巧妙一絲亂レズ、吉兵衛氏ヲシテ莫大王ノ桂冠ヲ得セシメシ者、實ニ君及眞雄氏ナリキ。

君ハ和歌山縣平民坂田幸三郎氏ノ弟ニシテ明治三年七月二十四日ヲ以テ生ル、少壯笈ヲ負フテ京都同志社ニ入り、故新島先生ノ薫化ヲ享ケテ出藍ノ譽アリ、二十八年亞米利加合衆國ニ航シテエール大學ニ入り刻苦數年業ヲ卒ル、歸朝後村井吉兵衛氏ノ知遇ヲ得、煙草會社ノ重役トナリ、尙印刷製函ヲ目的トスル東洋印刷株式會社ニ入り、村井家事業ノ別働隊トシテ大活動アリキ、即チ其事業上ノ功績ニ至ツテハ決シテ埋沒スヘキニ非ルナリ、後年官營トナルヤ直ニ同族相謀ツテ合名會社村井銀行ヲ起シ、「資本金一百萬圓」次テ鐵山部ヲ設ケラル、ニ至ルヤ、君推サレテ業務執行社員トナリ、東都銀行界ノ第一流ニ推サル、越ヘテ三十九年村井、三井、住友ヲ中心トスル株式會社共同火災保險ノ創設セラル、ヤ、一家ヲ代表シテ監査役トナル、翌四十年柳澤伯及澁澤男等ト共ニ株式會社高等演藝場(有樂座)ヲ起シテ取締役トナル彼ノカタン糸製造ノ如キモ一昨年來業務ヲ擴張シ英人ト共同出資シテ帝國製糸會社トナシ其重役タリ、尙村井一家ノ事業タル韓國農場ノ如キ、常ニ協力シテ發達ヲ計圖シツ、アリ、此ノ以前屢々歐米ヲ視察シテ得ル處アリ、殊ニ英國紳士ノ美風ハ常ニ君ガ則トスル處ニシテ、人格修養上享クル處大ナリトイフ、君尙母校同志社ノ理事トシテ、直接間接其發展ニ盡力シ、毎年一日忠實ヲ以テ致シツ、アルハ、亦人ノ知ル處ニシテ、君ノ風格ノ一半ヲ窺フニ足ラズヤ、敢テ未來ノ大成ヲ至囑シテ止マサルナリ

電話番町百五十二番

小川一眞氏

寫眞師

京橋區日吉町十四番地

日本寫眞界ノ元老、小川一眞君ノ閱歷ヲ按ズルニ、君ハ武州忍藩原田庄左衛門氏ノ次男、萬延元年八月十五日ヲ以テ生ル、夙ニ英漢ノ學ヲ修メ更ニ上京シテ英語ヲ研究ス、會々書中外國ニ於ケル寫眞術ノ事ヲ見ルヤ、深ク斯術ノ研鑽ニ從ハント動機ス、爾來幾多ノ苦心ヲ經、遂ニ某外人ニ學ブニ到ル、既ニシテ其大要ニ通ズルヤ、屢々是ヲ試ミテ工夫意ヲズ明治十四年榛名山々嶺ノ絶景ヲ撮影シテ第二回博覽會ニ出品シ、好評噴々トシテ當時ノ人心ヲ動カセリ、遂ニ渡米ヲ企テ、一外人ノ紹介ニヨツテ米國軍艦「スワタラ」號ニ乘組テ渡航スルニ至レリ、後「ポストン」府ニ於テ斯道大家ニ就キ、肖像画法、不變色寫眞術乾板製造法、寫眞銅版等ニ關スル技術ヲ修得ス、十八年歸朝シテ麹町區飯田町ニ開業シ幾干モナクシテ參謀本部寫眞部ノ囑托ヲ受ク、翌十九年米人「トッド」博士ノ來朝シテ日蝕皆既ノ觀察ヲナシ學界ニ貢獻セントス、即チ君ニ其撮影ヲ托ス、君苦心遂ニ一新法ヲ案ジ完全ニ其目的ヲ達シ大ニ社會ノ耳目ヲ聳動セリ、同廿年東京府工藝博覽會寫眞部審査委員ニ選バレ其出品ハ最高賞牌ヲ受ク、爾來宮内省ノ命ヲ奉ジ寶物名幅攝影ノ爲メ全國巨寺大社ヲ周遊シ「マグネシヤ」火光應用ヲ發明ス、爾來幾多ノ發明ニ或ハ雜誌ノ發行ニ或ハ技術審査ニ日本寫眞界ニ貢獻シタル事及、技術優良ニシテ賞牌ヲ受ケタル如キ一々列舉スルニ遑アラザルナリ、同卅三年第三回內國勸業博覽會審査委員ニ選バレ金銀賞牌等ヲ賜リ其出品ハ一等妙技賞及有功一等賞ヲ受ク、亦曾テ米國萬國博覽會ニ出品シテ一等賞牌ヲ受ケ亦萬國寫眞公會商議員トシテ渡米シ本邦斯界ノ名ヲ高フセシメタリ、同卅四年北清事變ノ際帝國大學ノ囑托ヲ受ケ北京ニ出張シ皇城內ノ建築物ヲ撮影シ其種板白金印画ヲ帝國大學へ寄附シ後特許ヲ得テ調製セシ寫眞帖ヲ各宮殿下及其他諸公へ獻納シテ賞辭ヲ受ケ將來學術研究上ノ好材料トシテ貢獻セシ處尠ナカラズ、同卅八年日露戰役ノ功ニヨリ勳五等双光旭日章ヲ授ケラル、同四十年一月日本乾板會社專務取役ニ推舉セラル、此

(七三)

事業タルヤ國民數年來ノ企望ナリシニ茲ニ時機ノ來ルヲ鑑察シ未ダ内地ニ完全ナル製造所ヲ有セザル故ニ其輸入高ハ實ニ年額百五十萬圓ヲ超過シ尙逐年増加スベキヲ思ヒ奮然此製造業ヲ起シ以テ斯業ノ發達ヲ促進シツ、アリ、同四十二年伊國皇帝陛下ヨリ王冠四等勳章ヲ贈與セラレ、今ヤ現所(京橋區日吉町)ニ店舗ヲ設ケ傍ラ小川寫眞製造所ヲ起シ、日本開祖ノ月桂冠ヲ得ルニ至レリ、爾後幾多ノ功績ニ至ツテハ敢テ細叙セズ當ニ日本ニ於ケル世界的技術家トシテ、明治寫眞史ト離ルベカラザルヲ特筆シアラユル贊辭ヲ呈シテ尙且君ノ偉績ヲ語リ盡ス能ハザルノ「大」ヲ斷言ス、如斯シテ終始一貫本那寫眞界ノ爲ニ滿身ノ努力ヲ傾倒シ、シカモ尙其功ヲ人ニ讓ツテ自ラ淡如トシテ與ラザルガ如ク、不言實行ヲ本旨トシテ管ニノ其實績ノ揚ラン事維レ努ムルガ如キハ、當代利ト名ニ憧憬シテ實力ヲ顧ミズ、徒ラニ門戸ヲ張ツテ顧客ノ吸收ニノミ慮心シ、何等ノ研究ナク、何等ノ造詣ナキ青年寫眞師輩、抄シク就テ學ハズヤ當時中央ニ於ケル斯界ニ流レタル一種ノ暗流ノ如キ、檢スレバ醜陋見ルニ耐ヘザルナリ、如斯ハ先ヅ反目ヲ休メテ抄シク先輩諸氏往時ノ苦心ヲ察シテ自ラ反省スル處アレ、何ゾ蝸牛角上ノ一鬪爭ヲ要センヤ、感アリ附記シテ本稿ヲ結ブ。

電話新橋 千六百六十番



植田小太郎氏

實業家

神田區鍛冶町三十三番地

至誠ノ念、燃ユル處、支障何カアラン、行ツテ茲ニ成ラサルノ理アラシヤ、「誠」ヲ伴フテ事成ラズンハ只是レ天ノ命ノミ、管ニ天理ノ指示スルニ從ヘバ足ル、君居常盡ク之レニ據テ律ス、百鬼夜行ノ當實業界中稀レニ見ルノ士トシテ知人ノ尊敬ヲ受ク故ナキニアラザルナリ。

君ハ東京ノ人、藤田良右衛門氏ノ長男ニシテ嘉永四年六月十五日ヲ以テ生ル、家計困難ノ爲メ幼少ヨリ辛慘ヲ嘗メ、十七年先代植田ナヲ子ノ養子トナリ家督ヲ繼承シテ其性ヲ胃ス、家號ヲ扇屋ト稱ヒ繪具商ヲ營ム、匪勉ニシテ力行能ク十數年ノ間ニ於テ今ヤ市内屈指ノ資産家トナル、區會議員學事獎勵會幹事長トシテ永年力ヲ盡ス、嘗テ秩父織物組合ニ些少ノ弊害アリテ君ノ友人ガ其組合ニアルノヨシミヲ以テ其弊害ヲ一掃シテ大功アリ後同組合ヨリ賞トシテ木杯一組ヲ贈與サレシコトアリ、往年東京硫酸株式會社創立ニ際シ幹旋頗ル努メ推サレテ其取締役トナリ、同社經營ニ參劃シテ多大ノ功績アリ、君由來義俠ニ富ム、シカモ所謂婦人ノ仁ニアラズシテ堂々タル男兒ノ俠骨ヲ現出スルニアリ、曾テ同區今川小學校在校生徒中細民ノ子弟ト見做スベキ兒童五十名ヲ選ビテ旅行ヲ企テ、鎌倉ノ風光明媚ヲ面ノ方リ彼等細民子弟ニ觀覽セシメシナド、斯ノ如キハ何人モ言フ可クシテ行ヒ難キナレドモ君尙ホ今春第二回ノ行ヲ企テ準備中ナリト聞ク以テ其一端ヲ窺フ可ク而シテ本春三月ヨリ毎月一回是等貧兒ヲ集メ慰安會ヲ開キ蓄音器、講談等ヲ聞カセ父兄等ヲモ隨伴セシメテ樂シク一日ヲ送ラシメ居レリトイフ。

其他公共事業ニ盡瘁スル枚舉ニ迫アラザルナリ、君亦後進扶掖ニ志厚ク從ツテ平素節儉ヲ守リ贅費ヲ省キテ獎學資金ニ投ズルナド常ナレバ同區細民ハ君ヲ見ル神ノ如ク敬慕シツ、アリトイフ、亦以テ當世得難キ好實業家好紳士トシテ後昆ニ示スニ足ル。

電話本局 七百七十番

中井三之助氏

實業家

東京下谷區仲根岸町六十六番地

今ヤ空前ノ戰捷ヲ收メテ實業ノ發展ヲ要求スルノ時、星ニ向ツテ飛ブガ如キ翺々タル架空家ノ簇生ハ其底止スル所ヲ知ラザルノ弊ヲ見ル、茲ニ於テカ先ヅ求ムベキハ眞摯ノ實業家ナランカ、今説ク君ノ如キハ青年實業家トシテ此需用ニ應ズベキノ士ナリト信ズ。

君ハ京都府ノ人、中井三郎兵衛氏ノ長男ニシテ明治八年七月十六日ヲ以テ生ル、夙ニ普通學ヲ修メ、後京都商業學校ヲ卒業シテ造詣愈加ハル、曾ツテ一年志願兵トシテ兵役ニ服シ其ノ終ルヤ豫備ニ編入セラレテ將校ノ班ニ在リ、嚴父ハ和洋紙商ヲ營ミテ一方ノ重鎮ヲ以テ目セラレシカ、君亦繼襲シテ一意專念營業ノ發展ニ努メ、往年巴里博覽會ノ開設セラレ、ヤ、該會視察ヲ兼ネテ英米獨佛埃瑞清等諸國ノ製紙販賣ノ方法ヲ巡察シテ大ニ得ル所アリ、歸朝後父君ト相謀リ其擴張ヲ企圖シテ中井商店ヲ改メ、合資會社中井商店トナシ、本社ヲ東京ニ置キ、京都、大阪、名古屋、清國上海、ノ各地ニ支店ヲ設ケ業務ノ發展ニ努メ今ヤ健全ナル發達ヲ遂ゲテ隆聲愈々高シ、君ハ其擔當社員トシテ世ニ知ラル、尋テ北海道紙料株式會社取締役、四日市製紙株式會社監査役、中央製紙株式會社監査役トシテ令名頗ル高シ、巽キニ、日露ノ戰役起ルヤ隊附經理官トシテ出征シ旅順ノ攻圍軍ニ參加シ尙奉天ノ會戰ニ參與シテ重砲隊ノ名ヲ揚ゲシコト高シ、君人トナリ、磊々落落々霸氣自ラ眉宇ノ間ニ顯ハル、シカモ壯年三十有六前途活動ノ餘地ニシテ亦寫眞術ニモ精通ストイフ、亦以テ性格ノ一端ヲ窺フニ足ル。

宅 電話下谷 二千四百五十六番

店

長電話本局 二百五十七番

長 本局 二千三百九十六番

本局 三百五十四番

尾城滿友氏

實業家

日本橋區鮫河岸四十一號

廻漕業者ノ先覺者トシテ、東都斯業界中漸然頭角ヲ顯ハス尾城滿友君ハ、舊田名倉藩士ニシテ尾城滿彦氏ノ長男、嘉永六年八月廿七日ヲ以テ瀨島縣田名倉ニ生ル、幼少學ヲ好ミ夙ニ和漢ノ學ヲ修メ造詣頗ル深シ、年十歲始メテ藩ノ勘定方見習トシテ出仕シ累進シテ雇員トナル、維新ノ當時諸藩ニ蘭式ノ徵練行ハレ君モ亦同藩ノ鼓手トナル、明治十年三菱汽船部ニ入り後三菱ヲ辭シ、獨立廻漕業ヲ營ムニ至ル、爾來銳意精勵業務ノ發展ニ努メ、籌計其宜シキヲ得日ニ増シ繁榮ニ趣キ遂ニ明治三十六年資本金五拾萬圓ヲ以テ、二見、中村ノ諸子ト相謀リ、尾城氣船株式會社ヲ創立シ、推サレテ代表社員トナリ、其手腕ヲ振ツテ社運ノ興隆ヲ企劃ス宜ナル哉、同社ガ聲望隆々以テ今日ニ至レルモノ、畢竟君ガ有爲ノ資ヲ以テ極力斯業ノ發展ヲ計リタル功果ニ他ナラザルナリ、尙ホ神谷瀛船合資會社業務擔當社員トシテ明治三十三年以來其職ニ在ル、亦以テ君ガ手腕ノ凡ナラザルヲ知ルニ足ラン。

君爲人剛健嚴格ニシテ而カモ宏量アリ恨ムラクハ其眞情人ニ誤ラル、ヲ、直チニ斯業社會ニ於ケル模範人物ト稱スルモ決シテ溢美ニ非ラザルナリ、君亦社會公共ノ念ニ厚ク博愛同情ノ心深ク、テ是等事業ニ對シ斡旋盡力スル所尠カラズ、人皆其德ヲ稱シテ止マズ、現代稀レニ見ル實業家トシ將亦人格ノ高尚ナル寔ニ得難キ好人物ト謂フベシ。

電話浪花 三千七十八番八十番

稻田善兵衛氏

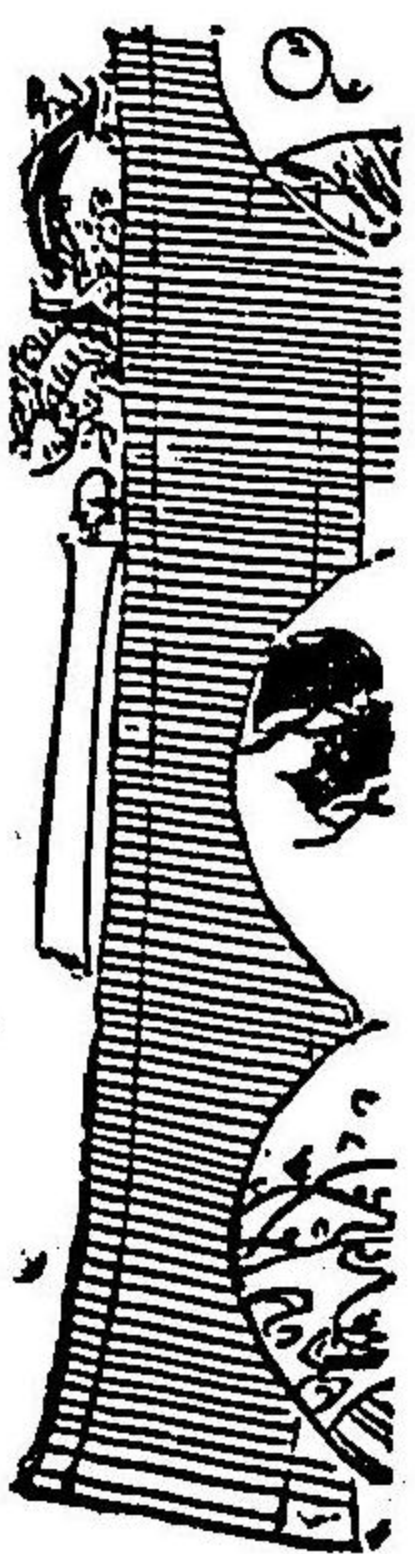
實業家

山形縣山形市六日町

君ハ山形縣ノ人、元治元年九月二日ヲ以テ山形縣山形市ニ生ル、先代善兵衛氏ノ長男、代々吳服太物商ヲ以テ業トス、先代善兵衛氏ハ有名ナル吳服太物商ニシテ頗ル仁心ニ富ミ、市民殆ント其德ニ浴セザルハナキ程ナリシカバ、君亦夙ニ其性ヲ受ケ大ニ實業ヲ振興シテ多數民衆ノ福利ヲ圖ラントノ念頗ル切ナリ。

先ヅ普通學ヲ修メ長ヅルニ及ンデ更ラニ和漢ノ學ヲ修メ造詣スル處頗ル大ナリ、某年株式會社兩羽銀行起ツヤ推サレテ監査役トナリ専心精意之レカ隆盛ナランコトニカメ又兩羽電氣紡績株式會社ノ創立ニ關與シテ之レカ取締役トナリ其他公共事業ニ盡瘁スル事枚擧ニ遑アラザルナリ、自是先キ廿八年市會議員ノ選舉アルヤ推サレテ同市議員トナル以來市參事會員所謂調査委員、山形商業會議所副會頭トシテ奔走シ市民ノタメニ致シツ、アリ。

君人トナリ磊落豪放、一點拘スベキ任俠ト美風ヲ有ス人ト語ツテ城府ヲ設ケツ、一念忽チ其度量ニ服セシム、乞フ自重加餐益々斯界ノタメ奮勵セラレンコトヲ。



奈良林淺次郎氏

加命堂腦病院々長

東京府下總戸町字小松川
四千七百五十九番地

今ノ世其多クハ羊頭ヲ揚ゲテ狗肉ヲ賣リ、快シキ『ドクトル』危險ナル博士、滔々トシテ患者ノ吸收策ニ腐心シ敢テ實力ヲ願ルナク虛榮ヲ楯トシテ憐レナル素人ヲ眩ハス、此ノ時ニ方ツテ眞摯確實君ノ如キヲ見ル吾人亦意ヲ強フスルニ足ル。

君ハ神奈川縣ノ人、菱山四郎左衛門氏ノ二男ニシテ慶應元年十一月ヲ以テ津久井郡烏屋村ニ生ル、幼ニシテ學ヲ好ミ夙ニ活學合ニ漢學ヲ學ビ見山學舎ニ數學ヲ修メ、明治十五年獨逸協會ニ入り、獨逸學ヲ研修シ大ニ得ル處アリ、先代元春氏ハ當時鏘々タル青木春岱氏ノ門ニ遊ビ醫學ヲ研鑽セシ人ニシテ明治九年小松川ニ癲狂院ヲ設立シテ其院長トナリ世ニ知ラレシ人、君望マレテ其養子トナリ其姓ヲ冒ス、明治廿年醫科大學別科醫學科ヲ卒業シ、尋テ醫科大學國家醫學科ニ入り、螢雪ノ功空シカラズ、明治廿四年同科ヲ修了シ夫レヨリ先考ノ遺業ヲ繼シテ患者ノ診療ニ從事シ、癲狂院ヲ改メテ小松川精心病院ト改稱シ、専ラ院ノ改善ヲ計リ明治四十二年更ラニ改稱シテ加命堂腦病院トナシ、令弟元熙氏、令姪基氏ト共ニ多年胸裡蘊奥ノ學殖ヲ應用シ、兼スルニ功妙ナル施術ト神秘ノ靈腕ヲ以テス、殊ニ其人格ノ露出スル處患者ニ接スル懇切慈愛ヲ極メテ其名噴々タリ、特筆スベキハ兄弟相倚リ相扶ケテ院ノ隆昌ヲ計リツ、アルコトニシテ、世ヲ舉ゲテ名利ニ奔走シ兄弟相反目シテ輸贏ヲ爭フノ醜狀ヲ見ルノ時、同胞親睦良ク盡スニ至ツテハ斯界ノ慶事タラズンバアルベカラズ。

電話浪花 二千五百五十二番

新關善八氏

山形市長

山形縣山形市町

(八〇)

今ノ獨世、形而下ノ名利ハ天下ニ氾濫シ、節操ヲ見ル事土芥ノ如ク、道德ヲ輕ンズル事落葉ノ如シ、茲ニ實業家ニシテ將亦市長トシテ新關善八氏ノアルアリ、其名未ダ世ニ顯ハレズト雖モ、人格ノ人トシテ世ニ推薦スルニ足ルヲ信ズ、君ハ山形縣山形市ノ人、安政五年二月ヲ以テ其郷ニ生ル、家代々農ヲ以テ業トシ、當代善八君迄七代連綿トシテ差ノ衰退ナク、富豪ヲ以テ知ラレ、乃父ハ頗ル慈善心ニ富ミ弱者ヲ振恤シテ以テ余生ノ樂トセリト聞ク、君亦先考ノ教訓ヲ得テ博愛慈善ノ念ニ富ム、幼ニシテ聰慧夙ニ普通學ヲ修メ、造詣頗ル深ク侮ルベカラザルモノアリトイフ、三十年山形縣會議員ノ選舉アルヤ、君推サレテ縣會議員トナリ、間モナク市長トナリテ現時ニ及ブ、君公職ノ餘暇、山形市商業會議所、特別議員トシテ市商業ノ發展ニ努メ尙市公共ノ事業ニ對シテ年々二千金ヲ投ジテ以テ市經營ニ盡瘁シツ、アリ君今ヤ山形縣多額納稅者トシテ鉅々タルハ勿論只ニ山形市長トシテノ新關ニ非ズシテ山形縣ノ活佛トシテ知ラレツ、アリ以テ君カ如何ニ市ノ爲將亦縣ノ爲メニ盡瘁シツ、アルヤ知ルベキナリ。君資性頗ル同情ニ富ミ、世ノ孤獨ニ對スル慈母ノ如キ憐情ハ決シテ彼ノ似而非慈善家一派ト等シキモノニアラズシテ男子ノ涙ノ權化シタルニ外ナラザルナリ。

鈴木辰次郎氏

靜岡縣郡部選出衆議院議員

靜岡縣志太郡大長村

記者一日憲政本黨ノ少壯政客トシテ牛耳ヲ執レル靜岡出身ノ某氏ヲ訪フ、談縣下ノ政黨觀ヨリ延ヒテ現代衆議員ノ月旦ニ及ブヤ、特ニ君ヲ物色シテ曰ク、中央政界ニ乘リ出シタ日ハ淺ヒガ、地方ニ於ケル勢力ハ隆々タル者デアル、君ガ多年地方ノ爲メニ努力シタル功績ハ決シテ尠クナイ、加之政友會ノ爲メニ奔走シタルモ頗ル大ナルモノデアル、併シ其割合ニ頭ヲ出サナカツタノハ、コレ即チ君ノ人格テアル、極眞面目ナ忠實一點張デ功譽ノ如キ秋毫モ願ミナイト、云ツテ消極主義カト云フニ仲々遣口ヲ見ルトソウデナイ、蓋シ君ハナスベキ業ハ『ベスト』ヲ盡シテ一念ノ外何物モ持ツテ居ラヌノデアル、正直ニ云ヘハ僕トハ政敵デアル、多年陣頭ニ白眼ミヤツテ居ル中デアル、シカシ公平ニ人物ヲ評スレバ、敵ナガラ賞賛ノ辭ヲ客マヌ、云々ト、一場ノ談話君ノ人格ヲ窺ツテ餘リアルニアラズヤ、傳ニ曰ク、君ハ元治元年二月ノ出生ナリト、山紫水明東海ノ『バラタイヌ』富士ヲ後ニ三保ヲ前ニス、コ、駿州志太郡大長ノ里、自然ノ産シタル隱君子ハ、正ニ此仙境ニ呱呱ノ聲ヲ上ゲタルナリキ、長シテ靜岡縣師範學校ニ入り、好成績ヲ以テ業ヲ卒ル、暫ク鐵鞭ヲ執ツテ後進ノ教撫ニ力ヲ致ス、後年選バレテ村長トナリ、徐ロニ政治上ノ諸運動ニ從ヒ、次テ郡會議員及同議長トナリ、靜岡縣會議員トナル、當時恰モ政進兩黨ハ、勢力囹ノ擴張ニ就テ大運動ヲ演ジ、秘術ヲ盡シテ覇ヲ爭フニ際ス、君等有志ノ奔走ハ到底筆紙ニ盡ス能ハズ、遂ニ動かスベカラザル地盤ヲ築キ今ヤ大勢已ニ決シテ立憲政友會靜岡支部ノ發展ハ頗ル顯著ナル者アル亦以テ君等努力ノ功ニ歸セザル可カラズ、外ニ縣參事會員及縣農會副會長トシテ縣治ノ樞務ニ參與スル事多年ナリ、前年第十回總選舉ニ際シ、同縣郡部ヨリ選バレテ衆議院議員トナリ、院內ニ於テハ決算委員トシテ實力ヲ發揮セリ。

(八一)

北垣國道氏

男爵 貴族院議員

京都市上京區土手町

君ハ其先開化天皇ノ後裔ニ出ヅ、夙ニ勤王ノ志厚ク彼ノ平野次郎等ヲ率イテ但馬ニ義兵ヲ擧ゲ王事ニ盡瘁スル處渺ナカラズ、後維新ノ鴻業成ルニ及ビ彈正臺ニ出テ阿波ノ稻田事件ヲ處理シテ令聞愈々揚ガル、其後北海道ヲ巡察シテ北門ノ警備ト同道開拓ノ事ニ就テ深ク考慮シ備サニ具狀スル所アリテ同時ニ明治四年鳥取縣少參事トナリ尋テ開拓使七等ヨリ累進シテ五等出仕ニ至ル、當時君拓殖意見ナルモノヲ建議シタルモ、長官委員年限ノ事ニ依ツテ政府其意ヲ許容セズ、遂ヒニ官ヲ辭ス、然ルト雖モ誠意北關ノ政策ヲ研究シ大ヒニナサントセシニ會マ西南ノ變起リ熊本地方其巷トナリ最モ手腕アルノ士ヲ渴望セリ、此時君拔擢サレテ熊本縣大書記官トナル、而シテ其技量ヲ發揮スルニ吝ナラズ治績觀ルベシ、因ツテ中央政府此ノ人材ヲ擧ゲテ内務書記官ノ榮職ヲ與フ、時ニ海軍危急ノ風聞頗ル治安ヲ害スルニヨリ政府ハ又モ君ヲシテ高知縣令タラシム、居ル事數年恩威共ニ行ハレ妖雲全ク一掃ス、明治十四年一月京都府知事ニ轉任シ有名ナル琵琶湖疏水ノ大事業ヲ起シタルモ亦君ニシテ衆民其深殖ヲ解スル能ハズ批難ノ紛々タルアルモ毅然群議ヲ撤排シテ其衝ニ當ル、既ニシテ竣工利用ノ廣大ナルヲ知リ衆庶始メテ其先見ノ明ニ感服シ今尙功績ヲ頌シテ已マズ遂ニ君ノ銅像建設シテ永遠ニ功德ヲ世ニ傳ヘテ不朽タラシム、於是君ハ北海道長官ニ進職水陸運輸ノ策ヲ計リ全道千三十哩ノ鐵道ヲ敷設スルノ事ヲ盡ス、其他港灣治水皆ナ宜シキヲ得、後拓殖次官トナリ、尙貴族院議員ニ勅任セラレテ男爵ヲ授與サル、三十七八年戰役ノ功ニヨリ勳一等瑞寶章ヲ賜ハル、後年北海道鐵道株式會社々長トシテ專心經營スル處アリシガ去ル明治四十年七月鐵道國有法ニヨツテ政府ノ買收スルトコロトナル。

君資性謹嚴、宛然古武士風格ヲ有ス亦當代ノ人傑タルニ愧ジザルナリ。

奥平昌恭氏

伯爵

芝區高輪南町五十三番地

上流華族ノ多數、其祖先戰場刀槍ノ功ニヨツテ、今ノ榮爵ヲ授ケラル、ニ至ル、サレド其多クハ宗祖ノ苦衷ヲ思ハズシテ、現代ノ安キニ甘ンズ、希クバ今ノ若殿輩、清廉嚴格、奥平伯ニ就テ渺シク學ブ處アレ、今茲ニ其家系ヲ按ズルニ。

抑モ當家ハ祖先村上天皇ヨリ出ヅ、其皇子一品式部卿具平親王ノ末裔、奥平美濃守貞能ノ長男信昌ノ後ナリ、信昌父ト共ニ徳川家康ニ屬シ、元龜元年朝倉義章ト姉川ニ戰ヒ、天正三年二月三州長篠ノ城ヲ賜ヒ同年五月武田勝頼ノ大軍ト戰ツテ勳功アリ、同十二年先鋒トナリ、森長一ト羽黒ニ戰ヒ追撃シテ敵首二百ヲ得、同十八年小田原ニ從軍シ戰功ニヨリ、上州宮崎ノ地三萬石ヲ賜ハル、慶長六年五月關ヶ原ノ役ニ從ヒ軍散ジテ、後チ京師ノ守護トナル、翌年二月美濃國加納城ニ移リ六萬石ニ加増セラル、其子大膳太夫家昌別ニ、野州宇都宮ノ城主トナリ十萬石ヲ領ス、後チ下總、古賀、出羽、山形等ニ轉ジ、享保十二年遂ニ豊前中津藩主トナル、ソレヨリ十二代ヲ經テ從五位昌邁ニ至ル昌邁幼ニシテ伶俐夙ニ學ヲ好ミ、舊臣福澤諭吉ニ就テ英學ヲ修ム、明治五年更ニ米國ニ遊學シ造詣大ニ加ハル、後チ歸朝シテ民間ノ懇望ヲ受ケテ芝區長トナリ、治績大ニ揚ガリ名聲噴々タルモノアリシガ、明治十八年一月遂ニ病ヲ以テ薨ズ、君ハ其嫡男ニシテ、明治十年六月十六日ヲ以テ江戸ノ藩邸ニ生ル、幼名ヲ九八郎ト稱ス、同十八年一月十六日家督ヲ相續シ、同年先代ノ薨去セララル、ヤ特旨ヲ以テ襲爵仰付ラル、同卅年六月現名ニ改ム、卅八年京都法科大學卒業、次テ田嶋、河津兩博士ニ就テ財政ヲ研究スル事前後三年、後チ農商務省ノ囑托ヲ受ケ露、獨、佛、伊、埃瑞、米、諸國ノ港灣取調ノ爲メ彼土ニ赴キ親シク踏查シテ同四十三年二月ヲ以テ歸朝ス、曩キニ國光生命保險會社創立委員トシテ盡瘁セシ功績亦渺ナカラザルナリ。

電話芝 千七百四十四番

早川松之助氏

實業家

牛込區市ヶ谷船河原町十一番地

(八四)

堅忍持久ハ成功ノ母ナリ、世ニ處シ一事ヲ爲サント欲セバ其經過ノ上ニ於テ、其研鑽ノ間ニ於テ幾多ノ辛酸ニ逢着シ、時ニ人間萬事塞翁ノ馬トノ嘆聲ヲ發シ、時ニ行路ノ難キヲ叫喚セシム、然レドモ若シ此塞翁ノ馬行路ノ難キヲ以テ人間ノ常數トナシ、其目的ヲ他方面ニ轉ジ、其精神ヲ別行動ニ注グアランカ假令好機運ノ目眩ニ迫レルアルモ、遂ニ頓挫ニ頓挫ヲ加ヘ、蹉跌ニ蹉跌ヲ重ネ徒ラニ悲觀スルニ至ルヤ必セリ、早川松之助君ノ如キハ能ク此頓挫ニ堪ヘ、又能ク此蹉跌ニ忍ビ終始一貫其目的其精神ヲ持續シテ以テ今日ニ至リシナリ、君ハ元治元年十一月二十一日早川佐七氏ヲ父トシテ日本橋區室町ニ生ル、性敏捷滑脱頗ル機才アリ、其人ト交ルヤ圓滿深厚ナリ令兄佐七氏ノ吉田菊地氏等ト俱ニニ東海銀行ヲ設立スルヤ氏亦入りテ盡瘁スル所アリシガ當時世能未ダ君ノ理想ヲ容レズ加フルニ周圍ノ事情ハ君ノ驥走ヲシテ展ベシメズ竊カニ機會ノ到來ヲ待ツ、已ニシテ重位ヲ占ムルヤ、躍然トシテ起チ身ヲ挺ンデ、難局ニ當リ苦心焦慮恩緣舊故ニ依ラズシテ獨力奔走世間ノ褒貶ヲ意トセズ、毀譽ヲ顧ミズ一身ノ名利ヲ犠牲ニ供シテ造次顛沛ノ間ト雖モ行務ノ整理ト進捗トヲ忘レズ幾多ノ困難ト戰ヒ終ニ財界共通ノ難關ヲ脱スルヲ得タリ、爾來業務駿々トシテ現下ノ繁昌ヲ來シ銀行社會ニ於ケル東海銀行ノ名ガ一種ノ活動ヲ意味スルノ域ニ達スルヲ得タリ、君ノ如キハ夫レ汝ノ城ヲ死守シタル者歟嗚呼舉世滔滔トシテ遊惰ノ風ヲナシ堅忍ノ氣地ヲ掃フノ今日君ノ如キ風勵卓發ハ正ニ一般ノ輿劑タラズンバアラザルナリ。

電話番号 千六百二十二番

相馬永胤氏

實業家

四谷區仲町三丁目三十五番地

沈勇ノ態度謹嚴ノ言行以テ心ヲ養フ寧靜ノ徳アルヲ見ルベシ、謙遜辭讓性テ風勵卓發ノ鋒鋷ヲ露サズ以テ身ヲ保ツニ恭儉ノ素アルヲ知ルベシ、而シテ其ノ溫醇含蓄ノ氣風ハ自ラ後進ノ敬愛ヲ増サシム天賦ノ大器素養ノ深奥ナルニアラズンバ爰ゾ能ク斯ノ如クナラシヤ。

君ハ江湖彥根藩士ニシテ夙ニ秀才卓識ノ名アリ、明治四年米國ニ渡航シ『コロンビヤ』大學并ニ『エール』大學ニ於テ泰西經濟法律ノ學理ヲ專攻シ大ニ造詣スル所アリ、明治十二年歸朝ス、既ニシテ本邦國民ガ法律經濟ノ思想ニ缺如セルヲ見ルヤ一片ノ至誠憂慮指ク能ハズ、目賀田男及田尻博士等ト相計リ東京ニ專修學校ヲ設立シテ許多ノ子弟ヲ薰陶シ泰西ノ知識ヲ普及セラレタリ、即チ專修大學ノ前身ニシテ之レ實ニ我國ニ於テ邦語ヲ以テ泰西ノ學科ヲ教授シタル專門學校ノ嚆矢ナリシ事ハ既ニ世人ノ知ル處ナリ而シテ君ハ大藏卿ノ命ニ從ヒ橫濱正金銀行ノ整理擴張ノ目的ヲ以テ同銀行ニ入り、頭取其他ノ人ヲ輔ケテ將ニ倒産セントセシヨリ盛大一世ニ寇タルニ至ル迄ハ事務ヲ執掌シ遂ニ取締役ヨリ頭取ニ陞進シ、十年一日ノ如ク益々熱誠ヲ以テ盡瘁シ諄々國家財政ノ休戚ニ任ジテ怠ル事ナシ、後老ヲ告ケテ其職ヲ退キ專ラ取締役トシテ樞機ニ參加シツ、アリ氏ノ如キハ當代ノ君子人ト云ハザルベカラズ。

電話番号 三百八十番

(八五)

青木房次郎氏

實業家

日本橋區元四日市町二番地

信義ヲ以テ經ト爲シ勤勉ヲ以テ緯ト爲シ、勇往邁進セバ天下ノ事恐ラクハ成ラザルナケン、時ニ或ハ百難前ニ横ハリ、或ハ萬難後ヘニ襲フモ豈敢テ喫驚スルニ足ランヤ。

聞ク君ハ慶應元年七月東都日本橋ニ生ル幼少伊豆國熱海町ニ於テ母ノ郷里ニ育チ歳十三才ニシテ故アリ青木家ノ養嗣トナル資性伶俐、郷童ト嬉戯ヲ異ニス早クモ實業ヲ以テ身ヲ立テ名ヲ揚ゲント欲シ、十四ノ春横濱ニ來リ左右田金作氏ニ仕ヘ忠實勉勵克ク其任務ヲ全フシ早ク君ノ忠勤敏腕ナルヲ氏ノ認識スル所トナリ、遂ニ拔擢セラレテ明治十六年横濱株式取引所仲買店ヲ開カセラル、ニ至ル、其レヨリ越ヘテ松野屋ノ支店ヲ兜町ニ設置シ氏ヲ支店長ノ要職タラシム、然ルニ廿三年大ニ感ズル處アリテ左右田家ヲ辞スルニ至リ是ヨリ獨立獨行シテ東京株式仲買人トナリ、數年ノ經驗獨得ノ手腕ヲ以テ大活動ヲ試ミ暫時斯業界ニ頭角ヲ顯スニ至レリ、遂ニ昨年明治四十一年東京株式仲買取引所ニ於テ幹事ノ選定セララル、ヤ、君舉ラレテ副幹事長トナル實ニ氏ノ名聲益々信用ヲ博スニ至レリ誠ニ君ハ平素人ニ接スル溫柔終日膝ヲ交ツテ尙且對手ヲ倦マシメズ、寔ニ其人物ノ圓滿ニシテ世路ノ辛酸ヲ嘗メタルニ因セスンバアラサルナリ。

電話本局 七百八十七番
全 七百九十九番

下山順一郎氏

藥學博士

下谷區下根岸町九十八番地

本邦藥學界ノ泰斗、將亦先覺者トシテ國家萬人ノ仰望シテ止マザル君ノ閱歷ヲ查覈スルニ。

君ハ舊尾州犬山藩士下山健治氏ノ長男、嘉永六年二月十八日ヲ以テ生ル、秀才ノ名早ク現ハレ、明治三年遂ニ貢進生トナリテ大學南校ニ學ビ初メ獨逸學ノ研究ニ從ヒ尋テ大學醫學部ニ入リテ製藥學ヲ修メ致々トシテ研究スル處アリ、十一年卒業シテ藥學士ノ學位ヲ受ケ、明治十四年陸軍藥劑官ニ任ジ東京大學助教授ヲ兼ネ、同十六年製藥學研究ノ爲メ獨逸ニ留學ヲ命セラレ居ルコト三年ニシテ歸朝シ、同廿二年醫科大學教授ニ任セラレテ藥學講座ヲ擔任シ兼ヌルニ高等中學校教授タリ、是レヨリ先キ、十六年日本藥局方編纂御用掛トナリ藥劑師試驗委員ヲ命セラルコト數回ナリシトイフ、明治三十二年藥學博士ノ學位ヲ受ケ現ニ陸軍一等藥劑官、東京帝國大學醫科大學教授タリ、頃日君清酒釀造ノ簡易法ヲ公ニス、其間ノ苦心元ヨリ測リ知ルベクモアラザレド君ガ多年斯界ノ爲メ幾多發明貢獻セラレシカ枚舉ニ遑アラザルナリ、今ノ世、學者ト稱シテ尙且實力ヲ疑ハザルベカラサルノ輩、頻々乎トシテ然リ、人格ノ探ルベクナクンバ何ヲ以テ衡トセンヤ、下山博士ノ如キ敦厚ノ士ヲ有スル我藥學界ハ亦以テ一面氣ヲ強フスルニ足ラズヤ、敢テ附記シテ肚裏三寸ノ氣焰ヲ洩ス。

電話下谷 四十一番

平山成信氏

貴族院議員

小石川區原町廿一番地

嘗テハ佛蘭西學界ノ名將ヲ以テ唱ヘラレ、今ハ上院ニアツテ牛耳ヲ執リツ、アリ、誠ニ明治ノ聖代政治學術兩界ニ渡ツテ光彩ヲ放チツ、アルノ君、ソモ如何ナル閱歴ヲ有スルカ。

君ハ舊幕臣ニシテ有名ナル平山省齋氏ノ男ナリ、安政元年十一月ヲ以テ江戸ニ生ル、幼ニシテ漢籍ヲ修メ、後チ昌平黌ニ入りテ益々斯學ノ蘊奧ヲ究ム、明治元年父ニ從ヒ静岡ニ移リ藩校ニ入り佛蘭西語ノ研究ニ從フ之レ抑モ本邦ノ世界ニ於ケル文明ヲ樹立セシ基ニシテ、明治政府ニ貢獻シタル功績亦尠ナカラザリキ、同三年藩命ヲ奉ジテ横濱ニ遊學シ、翌年左院ノ屬官ヲ命ゼラレ功績尠ナカラズ、同六年埃國大博覽會事務官トシテ維也納ニ赴キ同七年歸朝ス、十一年外務書記生兼巴里萬國大博覽會事務官トシテ佛國ニ航シ公務ノ餘暇法律學ノ研究ニ從フ同十四年ヲ以テ歸朝ス、尋テ大藏省少書記官、元老院權大書記官、大藏大臣秘書官、内閣書記官長樞密院書記官長、大藏省參典官、大藏省官房長、行政裁判所評定官等ヲ歴任シ學識才腕上下ノ信望愈々加ハル、同廿七年貴族院議員ニ勅任セラレ名譽益々擧ガル、卅三年官命ヲ奉ジテ佛國ニ航シ巴里博覽會出品聯合協會理事長トシテ派出諸員ヲ引卒シテ同年十月ヲ以テ歸朝ス、爾來東京帝室博物館評議員、第五回内閣勸業博覽會評議員兼審査部長ヲ歴任シテ事績大ニ擧ガル、尙現今宮中顧問官兼有栖川宮別當、帝室博物館評議員、日本赤十字社幹事トシテ貢獻スル處大ナリ、寔ニ君ノ如キハ當代政治學術兩界ニ渡ツテ一異材タルヲ信ジテ疑ハザルナリ。

追記日本美術協會專務幹事、東京勸業協會理事、日英博覽會出品協會々長、篤志看護婦會專務理事、尙素山學校ナルモノヲ設立シテ校主トナリ、貧兒教育ノ爲盡瘁セルコト特筆大書其功勞ヲ謝スベキナリ。

電話番町 六百七十六番

橋本太吉氏

鹿島縣尾道市選出衆議院議員

營業所京橋區本淺町二十六番地
自宅 赤阪區新坂町四十七番地

記者曾テ尾道市第一流ノ實業家ヲ訪フ、談會々新代議士橋本太吉氏ニ及ブ、某氏口ヲ極メテ君ヲ賞揚シテ曰ク、尾道市ノ發達ハ最近ノ事ナリ、或ル意味ニ於テ過渡ノ時代ナリ、到ル處要求シツ、アルハ新進有爲ノ人材ナリ、殊ニ政治上ニ於テ最モ痛切ナルヲ感セスンハアラス、此思潮ハ土着人種ノ發奮ヲ促シタルヤ事實ナリ、君ノ如キハ、此機會ノ産出セル有材ナリ、識見ニ於テ蘊蓄ニ於テ、門地ニ於テ經歷ニ於テ、體カニ第一流ノ錚々ダルモノナリ、云々ト、吾人ハ直ニ之レヲ經信スル能ハズト雖モ、中央政界ニ於ケル意味アル君ノ活動ハ、妙ナクトモ某氏ノ評語ノ溢美ナラサルヲ認容セサルベカラザルナリ、邇ツテ其經歷ヲ討究スレバ、君ハ備後尾道市ノ富豪橋本家ノ人ニシテ明治五年六年ヲ以テ生ル、家代々醸造業ヲ以テ兩備ニ冠タリ、少壯笈ヲ負フテ東都ノ人トナリ、三田慶應義塾ニ學ブ、勉勞數年業卒ツテ故山ノ人トナル、既ニシテ家督ヲ繼承シ、銳意其發展ヲ圖ルト共ニ、力ヲ同市ノ公共事業ニ致シ、幾多ノ公職ニ從事シテ聲望漸ク揚カル、幾モナクシテ市會議員トナリ、宿年ノ抱負ヲ開披シテ實力ヲ發揮ス、市民ハ此新勢ヲ認ムルト共ニ深ク未來ノ飛躍ヲ庶幾セリ、蓋シ同地土着人士中稀有ノ人材ナルヲ看取シ、一種ノ愛郷心ノ發スルアツテ偶然君ヲ物色スルニ至リシナリ、尙一方、尾道米鹽肥料取引所ヲ設立シテ理事トナリ、更ニ尾道電燈株式會社ヲ起シテ其社長トナル、前年第十回總選舉ニ際シ、市民ノ重望ヲ荷フテ逐鹿原頭ニ出テ、遂ニ當選シテ衆議院議員トナル、君ノ人格、當時ノ政黨ニ投スベク、餘リニ適セズ、硬派又新會ニ加盟シテ少壯有爲ノ名ヲ咨ニシツ、アリ、是ヨリ先キ明治卅三年横濱原合名會社ニ輸出部ノ設立セラル、ヤ、君入りテ支配人トナル、次デ同卅五年店用ヲ帶ビテ、露、獨、佛、英、米、諸國ノ商況ヲ視察シ同卅七年ヲ以テ歸朝ス、幾干モナク同店ヲ辭シ、由來「アルミニウム」器物ノ近時需用夥多ナルヲ洞察シ製造ニ着手シ販路ヲ擴張シツ、アリ。

電話新橋 二千四百四十七番

大木喬命氏

實業家 商業會議所會頭

甲府市横近町十一番地

昔ハ螢ヲ集メ雪ヲ積ミテ燈ニ代ヘタル學者アリ。キ近クハ軒下ノ點燈ニヨリテ學者トナリ苦學ノ際亦貧洗フガ如ク、粗食粗衣ハイハズトモカナ、破産徒ラニ風ヲ通シテ寒サヲ凌グスベモナシ、冬衣夢サヘ結ブ能ハズ偶々目ヲ開ケバ豈圖ランヤ、枕頭吹雪ニ埋モレテ白雪皚々タリ然トモ毫モ意トセズ屈セズ益々其業ヲ進メ以テ成功シタル後進ノ龜鑑トスルニ足ルベシ其略傳ニヨレバ。

君ハ山梨縣人、先代喜右衛門氏ノ長男ナリ、幼名喜右衛門氏ト號シ、後家督ヲ繼承スルニ及ンデ現名ニ改ム、家世々吳服販賣ヲ業トシ、縣下屈指ノ老舗タリ、明治六年副戸長ニ舉ケラレ尋テ戸長トナル、コレ君ガ公共事業ニ盡瘁スル道途タリシナリ、後年縣會議員ニ推サレテ産業振興論ノ立脚地ヨリ、屢々献策ス、事業トシテハ養蠶製絲ノ發展ヲ劃シ、亦交通發達ヲ劃シテ甲信鐵道ノ布設ニ努力シ、彼ノ峻嶮管子墜道ノ難工專ヲ開クヤ、卒先シテ巨額ノ私財ヲ投ジテ完成セシメタル如キ蓋シコレ特筆大書ノ價値ナクンバアラザルナリ、尙其關係セル諸會社、銀行亦勘ナカラズト雖モ、其主ナルモノハ前ニ株式會社貯金銀行ヲ起シ、遂ニ隆昌ニ向ハシメ現ニ頭取トシテ其堂面ニ立チツ、アル有信銀行(資本金三十萬圓)コレナリ、外ニ商業會議所會頭トシテ熱心ナル經營ヲ以テシツ、アリ。

君資性醇朴、事ニ忠勇ナル、已ニ人ノ知ル處ニシテ事ヲ貫カントシテ勇ナル、吾人ハ決シテ冒頭ノ一章ヲ以テ適切ナル前提ト信ズ。

竹内正志氏

岡山縣郡部選出衆議院議員

四谷區南伊賀町廿三番地

往年自由黨ノ志士トシテ盛名ヲ謳ハレ、今ハ院内ニ於ケル古參者ノ一人タル我竹内代議士、果シテ如何ナル經歷ヲ有スルカ。

君ハ岡山縣士族ニシテ安政元年四月十六日ヲ以テ岡山城下ニ生ル、夙ニ碩儒片山重範氏ニ就テ漢學ヲ修メ、更ニ開城校ニ入ツテ英學ヲ研究ス、後出テ、東都ノ游子トナリ、三田慶應義塾ヲ卒業ス、既ニシテ志ヲ政界ニ寄セ、明治八年草莽雜誌ヲ興シ自由民權ヲ唱導シ、極力新聞紙條令ニ反對ス、明治十年大坂ニ出遊シテ板垣伯ヲ補ケ、西南戰役後更ニ伯ヲ土佐ニ訪ヒ、天下ノ形勢ヲ達觀シテ愛國社ヲ再興セント計ル、更ニ各縣ノ志士ト共ニ自由黨ノ創立發展ヲ參劃ス、爾來ノ志士の行動ニ至ツテハ世ノ知悉スル處ニシテ憲政創始ノ偉功者タルヤ敢テ論スルヲ俟タサルナリ、明治十八年歐洲ニ遊ビ、具サニ視察スル處アリ歸朝後閣費ニ入り專ラ育英ニ盡シ廿一年大阪毎日新聞ニ聘セラル、廿一年九月農商務省水産局長ニ勅任セラレ正五位ニ叙セラル、コレヨリ先籍ヲ推歩黨ニ置キシガ君黨中ニアリテ増稅反對說ヲ固執シ先ヅ行政ノ刷新財政整理ヲ斷行スルニアラザレバ増稅ヲ爲スベカラズトノ意見ヲ持シ議遂ニ協ハズ同志ト涙ヲ吞ムデ手ヲ別ツニ至ル爾後數度衆議院トナリ、現ニ院内ニ有ツテハ内政上ニ消極的節約主義ヲ執リ而シテ對外策ハ積極的進取主義ヲ執リ同志ト共ニ活動昔モ今モ渝ラサルナリ。

君資性清廉潔白襟懷ノ灑落タル光風齊月ノ如シ、其官ニアルト野ニ在ルトヲ問ズ常ニ虛飾ヲ退ケ華美ヲ去リ而モ家ニ餘資アルナシトイフ、財散スレバ民集ルノ古言ニシテ實ナレバ君ノ人望多キ固ヨリ偶然ニアラサルナリ、著書トシテハ西洋民權家列傳外二三ヲ公ニセリ。

電話番町 二千五百六十番

鈴木仙太郎氏

愛知縣郡部選出衆議院議員

愛知縣尾張國海東郡佐屋村

(九二)

天資温良篤實事ヲ處スル偏依ナク、人ニ由ツテ愛憎ナシ、聖賢傳ニ學ビテ躬行實踐ヲ旨トシ、世ニ阿ラズ俗ニ媚ビス超然トシテ穎脱ス誠ニ群鷄將晨ニ鳴クトキ一鶴九阜ノ深キニ昂吟シ、百魚南海ニ唼喝スルトコロ大鵬北溟ニ逍遙スルノ慨アルモノ是ヲ鈴木仙太郎氏トス、君ハ愛知縣ノ人ニシテ幼時議論ヲ好ミ一度人ト論戦スルヤ必ズ敵手ヲ降サ、レバ止マザリキト、以テ郷人將來ノ政治家タルヲ認メタリ、亦筆墨ヲ友トシテ文ヲ作ルヲ嗜好トシ必ズ寸陰ト雖モ之レヲ浪費セズトイフ。

安政二年十一月十日尾張國海東郡佐屋村ニ生ル、會テ辯護士トナリ同業者間ニ角頭ヲ顯ハシタル正廉直潔他人ノ尊敬ヲ受ケ、又愛知縣々會議員同議長ニ舉ケラル、君ハ憲政本黨ニ屬シ爾來同黨ノ爲メ盡力シタル多々ナリキ今ハ立憲國民黨員トシテ只管同志ヲ糾合奔走シテ益々盛カンナラムコトヲ期ス、一重器タルヲ失ハズト云フベシ、今ヤ衆議院議員トシテ圓滿老熟ノ名士タルヲ失ハズ、君逸歴ニ富ムト雖モ吾曹尤大ナル書冊ヲナス不能、何トナレバ紙數ニ制限アルニ依ツテナリ、又尤大眞價ヲ損スルヲ恐レテナリ略歴ヲ列記シテ篇トナシ隱然トシテ世ニ顯ハレザルノ英才ヲ告ゲ以テ後進ノ範トシ又其名聲ヲシテ千歲不滅ナラシメムトスルノミ諸者諒セラレヨ、是ニ擲筆シテ稿ヲ脱ス。



吉田千足氏

實業家

下谷區三輪町八十八番地

聞ク君ハ出身埼玉ノ人、弘化三年ヲ以テ生ル、家世々郷土ノ豪農ヲ以テ、夙ニ近郷ニ聞ユ、幼少讀書ヲ好ミ、彼ノ有名ナル寺門靜軒氏ニ就キ、漢籍ヲ修メ造詣スル處渺ナカラズ、殊ニ詩文、書道ヲ良クス、弱冠勤王ノ大義ヲ唱ヘ東奔西走寧日ナシ、維新ノ鴻業成ルヤ、入りテ大宮縣權大尉ニ舉ゲラル次デ若松府典事、元老院大書記生、大阪裁判所判事等ヲ歴任シ、終ニ明治十四年累進シテ和歌山始審裁判所長ニ任ゼラル、幾干モナク感ズル處アソテ斷然野ニ下リ、直ニ大坂株式取引所頭取トナル、同十七年筑豊地方ニ於テ石炭業ヲ開始シ、後チ私財ヲ抛テ門司港ヲ開キ稅關ヲ設ケ、盛ンニ清韓各地ニ石炭ノ直輸出業ヲ營ム、後チ亦東京灣ニ汽船ヲ以テ石炭ヲ送り盛ンニ販路ノ擴張ニ奔走セシガ會々一大失敗ヲ招キ、更ニ組織ヲ變ジテ日本石炭株式會社ヲ創立セシモ、不幸又利アラズシテ、明治二十年終ニ解散ノ己ムナキニ至レリ、爾來軍艦用燃料ニ無煙炭ノ深ク必要ナルヲ觀察シ、自費ヲ投ジテ九州天草島ニ之レガ採掘事業ヲ創始セシニ時恰モ日清戰役ノ當時トテ需用頓ニ加ハリ利スル處渺ナカラザリシト云フ、同廿九年彼ノ無煙炭ヲ原料トシテ煉炭製造ノ業ヲ企テ、同志ヲ糾合シテ日本煉炭株式會社ヲ創立シ、其製品ハ海軍出師準備炭ニ採用セラレシヲ以テ、其製品ノ性質如何ヲ推知スルニ足ル、後年更ニ岩代國耶麻郡ニ加納鐵山株式會社ヲ創立シ經營ヲサシ、忘リナシトイフ、君往年、官ヲ離レテ實業界ニ投ジ、一大失敗ヲ來シ正ニ破滅ニ歸セントセシ當時ヲ回顧セバソレ現時ニ於テ隔世ノ感ナキカ。

今ヤ十數年間ノ宿望タリシ亞鉛製造業ヲ創始シ、鑛キニ其製品ヲ採鑛冶金學ノ泰斗末廣博士ニ試驗ヲ乞ヒ、尋デ工科大學長渡邊博士其他諸大家ニ試驗ヲ求メシニ其製品ノ純良ナル蓋シ前記諸博士ノ賞賛シツ、アル處ナリ。

電話下谷 八六十三番

(九三)

富田鐵之助氏

貴族院議員

小石川區大門町十七番地

寄骨稜々宛然タル古武士ノ風格ヲ有シ、清廉潔白當代稀ニ見ル處、本邦產業界ノ先輩富田鐵之助氏ニ於テコレヲ見ル、一度ビ事ヲ貫カントシテ猛進スルヤ、前方何等ノ支障ヲ認メズ、其主義主張ニ忠實ナル蓋シ君ノ如キハ稀ナリ、其逸筆ヲ蒐集シテ以テ單行本ヲ編マバ妙ナクトモ當代後進ノ好指針タルヲ信シテ疑ハザルナリ、茲ニ其略傳ヲ按スルニ、君ハ奥州仙臺ノ藩士富田壹岐氏ノ四男ニシテ天保六年十月ヲ以テ青葉城下ニ生ル、家ハ藩ノ重臣トシテ世々忠勤ノ譽アリ、君夙ニ文武兩道ヲ修メ、英材同輩ヲ抜ク事一頭地、慶應三年藩命ヲ以テ米國ニ留學ス、コレ本邦留學生中最初ノ部ニ屬ス、明治二年同地留學中特ニ官費ヲ給セラル、刻苦精勵新進ノ學術ヲ修得ス、同五年岩倉特命全權大使ニ擢ンデラレテ領事心得トナリ、紐育ニ在勤ス、翌年副領事トナリ九月歸朝シテ大藏省大書記官トナル、尋デ日本銀行副總裁トナリ二十年總裁ニ進ミ名聲經濟界ニ噴々タリ、後大藏大臣ト意見ヲ異ニシ、職ヲ辞シテ純乎タル市民ニ入り、同時ニ市會議員ニ選バレ、又名譽參事員ニ舉ケラル、二十三年貴族院議員ニ勅任セラレ翌年東京府知事ノ要職ニ就ク、時ニ良二千石ノ稱府下ニ喧シ、二十六年之ヲ辞シ以來東京商業學校商議員、市區改正委員長、鐵道會議員、日本勸業銀行設立委員、農商工高等會議員等ニ舉ケラレ參劃計算スル處妙ナカラサルナリ、今ハ一面橫濱火災海上信用運送保險株式會社社長トシテ實業界ニ其老熟ノ手腕ヲ揮ヒ、一面ハ上院ノ硬剛土曜會ノ重鎮トシテ日比谷原頭其剛骨ヲ鳴シツ、アリ、彼ノ日銀總裁辭職當時ノ真相ノ如キハ、今ヤ漸ク世人ノ知悉スル處トナリシモ、吾人若干裡面ノ消息ニ通ズル者ヲシテ云ハシメバ、一段ノ敬意ヲ拂ツテ老雄ノ男性的ヲ謳歌セサルベカラズ、即チ筆ヲ擱クニ當ツテ衷心加重ヲ祈ルヤ切ナリ

電話番町 六百六十三番

安部林右衛門氏

實業家

日本橋區箱崎町四丁目一番地

禍福ハ料ヘル繩ノ如シ成敗ハ固是レ天ノ數天運ノ消長人事ノ循環、豈夫レ限リアル人力ノ能ク制シ得ル處ナラン唯理ニ從ヒ義ニ斷シ信ズル處ヲ守ラバ人道即チ足ル亦以テ他ニ求ル處世ノ一路ナシ吾人此ノ意味ノ敬意ヲ拂ツテ君ヲ物色セント欲ス。

君ハ慶應三年十二月岩手縣上閉伊郡遠野ニ生ル、理右衛門氏ノ嫡男ナリ、曾テ官海ノ人タリシモ其ノ勃々タル滿身ノ霸氣ハ一介ノ腰辨ヲ以テ屑シトセズ、明治二十二年上京シテ王子製絨所工場取締トナリシモ志ヲ得ズ徒食年餘偶々知人ガ日本橋魚河岸ノ鹽店ヲ鎖店スルヲ聞キ君ハ頗ル面白シトナシ鹽小賣店ヲ同區本材木町ニ開キ小僧ヲ伴フテ各魚商ヲ歴訪シテ小賣ヲ爲ス、是レ君ガ鹽界ニ今日アル端緒ナリ、君資性觀察奇警行動機敏計畫壯大ニシテ市場ノ機微ヲ察シ乘ズベキ機會ヲ見ルヤ細心之レヲ研究シテ倦マズ三十九年九月滿韓鹽業株式會社ヲ設立セリ惟フニ戰後ノ急務ハ國民經濟ノ發展ニアリ斯クノ天職ヲ果スノ道ハ多方面ナリト而モ君ハ寬宏大度能ク人ノ言ヲ容レ克ク人ノ難ニ赴クノ雅量仁心ニ富ミ優柔ニ失セズ奇激ニ走ラズ所謂大人長者ノ風アリ本年未タ五十二達セザル壯齡ナレバ今數年ノ經歷ヲ積ミ進ンデ實業界ニ向ツテヨリ以上ノ驥足ヲ延サレタランニハ發展向上蓋シ大ナル至嚆ヲ以テ豫期スルニ足ル、即チ先輩偉人ヲ超越スルニ至ランカ吾人ハ常ニ本邦實業界ニ望ンデ斯ノ如キ高風有德ノ君子ノ出ヅルヲ待ツト共ニ天下絶美ノ我國風國體ヲ萬國ニ赫々タラシメン事ヲ期スルモノナリ。

電話浪花 三千九百三十五番

松尾寅三氏

山口縣下關市選出衆議院議員

山口縣下之關市三町

(九六)

本州ノ咽喉タル下ノ關ノ代表者トシテ政界ノ人トナルコト茲ニ二回其間ノ消息ヲ窺フニ一トシテ下ノ關ノ爲メ又市民トシテ同市ノ榮遠ヲ旨トシタル、君ハ嘉永三年七月十四日山口縣周防國吉敷郡秋穗二島村ニ生ル、明治十三年入江町西細江町々長、十五年二月以後四回山口縣會議員當選就職、十六年八月赤間關區學務委員拜命、廿年九月以後四回赤間關所得稅調查委員當選、廿二年四月赤間關市徵兵參事會當選廿二年六月以後三回赤間關市參事會當選、廿五年一月以後四回赤間關市會議長當選、廿六年六月破産管財人ヲ命セラル、廿八年清國媾和使來關ニ付外務省ヨリ事務補助ヲ命セラル、廿九年一月以後三回赤間關商業會議所會頭當選、三十三年四月山口縣勸業諮問會員ヲ命セラル、其他陰ニ陽ニ身財ヲ憚シテ只管地方自治ノ改發ニ努力シ私事ニ公事ニ忠誠以テ本分ヲ全フスルニ餘念ナク性質廉潔私利ヲ誡メテ公益ヲ謀ルヲ本懐トシテ安如タリ、尙同縣々會議員タリシ當時ノ逸話佳談多シト雖モ敢テ拙文ヲ以テ贅句ヲ列スル却ツテ愚ナルヲ止メテ君ヲ知ルノ人ニ向ツテ其記憶ニ訴ヘンノミ、昨四十一年第十回ノ總選舉ニ當ツテ君ヲ知ルニ厚キ市民ハ推シテ衆議院議員トナシ其荷負スル所ヲ大ナラシム、尙且實業ノ人トシテハ既ニ馬關商業銀行及馬關電燈會社々長、下關米穀取引所監查役トシテ重任ヲ帶ビ、能ク責ヲ盡シツ、アリ之ヨリ先キ君明治廿八年以降下關商業會議所會頭トナリ、次デ特別委員ヲ兼ネ現時其職ニアリ、尙今ヤ下關製氷株式會社取締役、下關瓦斯株式會社取締役トシテ良ク其重望ヲ全フシツ、アリ。

井上角五郎氏

廣島縣郡選出衆議院議員

麴町區一番町五十四番地

君ハ安政六年十月備後國深津郡上村ニ生ル、兄弟三人中其末子ニテ四歳ニシテ父ヲ失ヒ母堂ノ手ニ依リテ養育サレタリ、幼ニシテ學ヲ好ミシカド家貧ニシテ書籍ヲ購フ事ヲ得ズサリトテ一生ヲ酸生夢死センコトハ決シテ其堪ヘ得ザル所必ズ他日社會ニ出デ、有爲ノ士タランコトヲ期セリ、十五歳ノ時奮然慈愛厚キ母堂ノ膝下ヲ辞シ笈ヲ負フテ東京ニ上リ直チニ福澤諭吾先生ノ門ヲ控キテ慶應義塾ニ入ルコトヲ得タリ、爾後只管堅忍不拔ノ精神ト不撓不屈ノ努力トヲ以テ學ニ勉メタリシカバ氏ノ明敏ナル頭腦ト非凡ナル手腕トハ早クモ福澤諭吾先生ニ認メラレ深ク信頼セラル、所トナリ、卒業後明治十七年氏ガ二十四歳ノ時衆ヨリ選バレテ韓國統理交涉通商事務衙門顧問トシテ兼ネテ漢城博文局主宰ニ任ゼラル、又金玉均ノ依頼ニヨリテ韓城旬報主筆トナリ、得意ノ雄筆ヲ振ツテ以テ韓國ノ上下ヲ驚動セシメタリ時人氏ヲ以テ韓國ノ策士ナリト稱シタリト云フ、歸期後二十二年後藤象次郎伯ノ組織セル大同團結ニ入り秘書役ヲ兼ネテ政界ニ馳驅シ其敏腕ハ普ク世人ノ耳目ヲ聳動セシメタリ、翌二十三年國會開設セラル、ヤ衆民ニ推サレテ國會議員トナリ以來衆議員ニ當選スルコト前後十回ニ及ブ而テ氏ガ一度議場ニ入りテ壇上ニ立ツヤ滔々數萬言說キ來リ説キ去リテ余ス所ナク聽衆ヲシテタメニ恍然タラシメ當時尾崎行雄氏、島田三郎氏等ト相並ビテ議會ノ花役者ト呼バレタリキ、現ニ立憲政友會員タリ其間或ハ移民事業ニ或ハ牢獄生活ノタメニ途ニ財産ノ全部ヲ擧ゲテ費消シ盡シタリ、明治二十五年頃ヨリ斷然實業界ニ入り其手腕ニ定評アリ今ヤ北海道炭礦汽船株式會社及日本製綱株式會社專務取締役ニ選バレ爾來此地位ヲ持續シ居レリ尙此他多ク諸會社、銀行等ニ關係シツ、アル其數尠カラズ。

電話番号 千六百七番

(九七)

田野井多吉氏

實業家

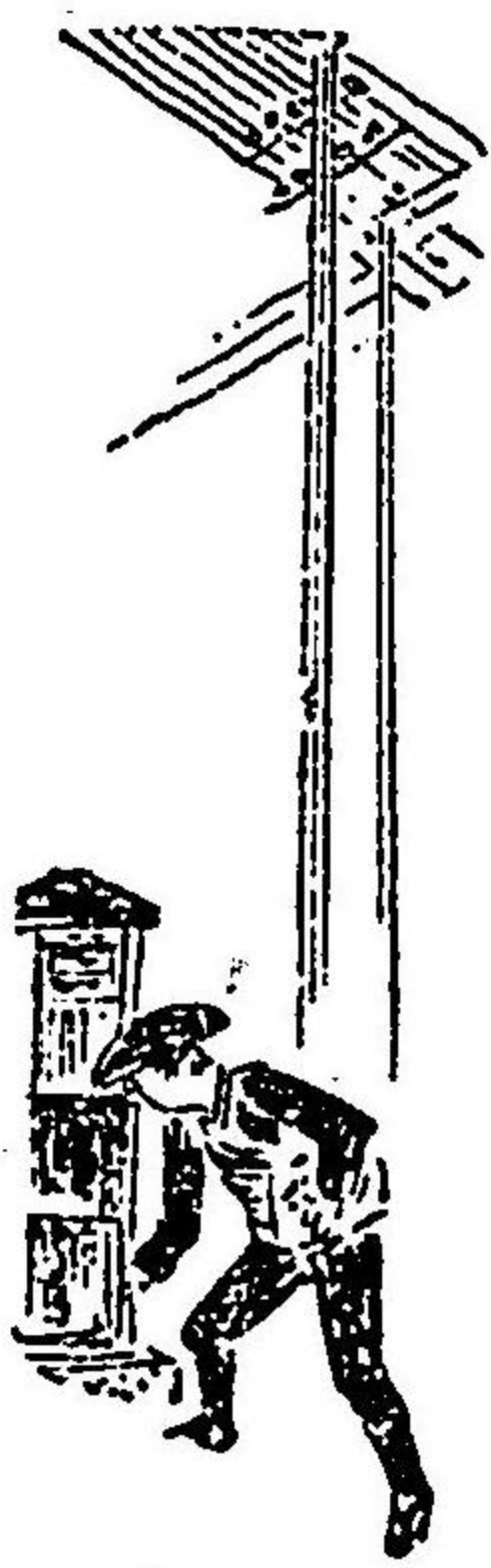
日本橋區濱町一丁目十七番地

諺ニ曰ク、最モ黒キ妖土ハ最モ美シキ花卉ヲ生セシムルト、如上ノ一節之レヲ人世ニ就イテ見ルニ大凡
 國家有用ノ材社會渴望ノ人物タルハ夙ニ浮世ノ辛酸ヲ味ヒ逆運苦難ト闘ヒテ屈スルナク、敢往邁進以テ
 身心ヲ鍛鍊シテ初メテ作り出サル、ナリ、之レヲ黒土美花ヲ作ルニ適スルノ比ト理ヤ同ジトス今茲ニ天
 ハ自ら助クル者ヲ助クトノ教訓ニ則リテ世間幾多ノ困難ト云ハズ、辛苦ト云ハズ、總ベテ人世ニ於ヒテ
 憂苦トスル憂苦ヲ盡ク嘗メ盡シテ自助的奮闘的成功者ト稱スベキ田野井多吉氏ノ閱歷ノ梗概ヲ草シテ傳
 トナシ、逆境ニ沈淪シテ然モ之レヲ脱スルアタハズ、失望落膽意氣爲ニ沮衷シテ起ツ能ハサル薄志弱行
 ノ徒ニ模範タラシメ又一方ニ後進子弟ノ龜鑑タラシメント欲ス。

君ハ朽木縣都賀郡壬生町ニ生ル、父ヲ重兵衛氏ト呼ビテ素行甚ダ感スベキモノナク機ヲ誤マリテ家財ヲ
 傾倒シテ悲惨早クモ君ヲ雙ヒタリ、十一歳ニシテ父ヲ失ヒ三歳ニシテ母ニ離ル、斯クテ伯父ノ許ニ養育
 サル、ノ身トナリ邪慳ナル伯父ノ酷使ト父母ニ別ル、ノ早キ且ツ君ノ刻苦勉勵ニ二宮翁ノ其レカト疑フ
 バカリナリ、時恰モ明治九年蛟龍池中ノ者ニアラズ此ノ年ノ秋蹴然伯父ニ暇ヲ告ゲ其養育ノ恩ヲ謝シテ
 東京ニ來リ現ニ支配人トシテ營業上ノ全權ヲ掌握シ、同店ヲシテ泰山ノ安キニ置キ益々發展セシメツ、
 アル日本橋區稻村商店ニ雇ハレノ身トナリ、頗ル勤勉ニシテ忠實如何ナル事モ主命ハ水火モ厭ハズ夙起
 夜寢悟スルニ二人以上ノ仕事ヲ以ツテセント欲シ些ノ怠リナカリシカバ主人ノ信愛任用スル所ト也十七
 歳ノ時ニ際シ初メテ京物及八王子物ノ仕入方ヲ命ゼラレ、當時人氣甚ダ揚ラズ隨ツテ仕入困難人物ヲ要
 スル八王子、足利、桐生、佐野方面ニ手腕ヲ振フベク主命ヲ帶ビタリ、而シテ之ノ方面ニ機敏ノ活動ハ
 實ニ筆紙ニ盡ス能ハズ、其後氏本店支配人トナリテ同地方ヲ去ルニ至リ桐生、足利、佐野ノ機業家ハ特
 ニ紀念品ヲ贈リテ勞ヲ謝シ、尙百四十餘名ノ有力者ハ盛大ナル送別ノ宴ヲ張リシト依ツテ氏ガ同地方ニ

貢獻シタル如何ニ大ナルカヲ窺フニ難カラズ、君向上ノ精神ヲ發揮シ公私共ニ身財ヲ惜マズ百事先ヲ競
 フテ盡力シテ以テ今日ニ至ル、氏ハ活動ヲ生命ト意思シ其活動ヲ善用セルノ人ナリ、特筆大書シテ示サ
 ントスルハ勉學ノ有様ナリ、主家ノ激務ヲ遺憾ナク處理シテ後チ八王寺ヨリ歸店スルヤ深更ニ及ブマデ
 新聞雜誌ノ振假名ナキ者ヲ撰ビ字書ニ就テ獨學シ十年一日ノ如ク怠ラズ勉學ノ結果殆ンド無學ニ等シキ
 君ハ途ニ相當ノ學識ヲ備フルニ至レリ、如斯ハ、云フベクシテ到底ナシ能ハサル處ニシテ、今日、月
 々ノ豊富ナル學資金ヲ得テ、シカモ下宿屋樓上、無爲ニ消光スルノ輩、尠シク就テ君ノ當時ニ學ハサル
 カ、喝、廿二年稻村商店相場ノ機關雜誌トシテ商報雜誌ヲ發刊スルヤ、君編輯ヲ擔任シ、漸次發展セシ
 メ廿七八年戰役後完全ナル實業雜誌トシテ發行スルノ好況ニ向ハシメタリ、嘗テ報知新聞社主催ノ雇人
 獎勵會第二回賞與選定人ニ加ヘラル、蓋シ未來ノ成功者トシテ選拔セラレタルナリ、曩キニ商家店員獎
 勵會ノ結果良好ナルヤ、報知新聞社々長箕浦勝人氏ノ命ニヨリ修進會ト改メ、君其常任幹事タリ。
 如斯シテ多年健闘主家ノ爲ニ致シタルノミナラズ、進ンデハ世ノ後進ノ爲ニ其力ヲ盡シテ忠實ナル、過
 去ノ經歷ト對照シ來ツテ益々人物ノ尊敬スベキヲ見ル、即チ蕪文ヲ草シテ逸歴ヲ汚スル罪、記者甘シ
 テ之レヲ受ケン哉。

電話浪花 四千三百三十二番



伏原宜足氏

子爵 貴族院議員

京都府愛宕郡下鴨村東十一番地

當家ハ天武天皇ノ皇子、一品舍人親王ノ孫右大臣夏野ノ後裔少納言舟橋秀賢ノ次男正三位大藏卿賢忠ノ後ナリ、賢忠別レテ一家ヲ爲シ家號ヲ伏原ト稱ス、ソレヨリ宜幸、宜通、宜條、宜光、宜武、宜明、ヲ經テ世々書博士ヲ職トシ正三位宜論ニ至ル、君ハ其長子ナリ、弘化元二年五月廿七日ヲ以テ京都ニ生ル、安政三年十二月元服シテ昇殿ヲ聽サレ、安政六年六月左兵衛權佐ニ任ジ、元治元年十二月少納言ニ任ジ、慶應元年五月近習ニ加ヘラレ、同年兼侍從ニ任ジ、明治三年二月内番參勤ヲ仰付ケラレ、同年十一月次侍從ニ任ジ、同四年十月侍從ニ任ジ、同九年四月式部寮十三等出仕ヲ命ゼラレ、同十年九月同九等屬ニ任ジ、同月兼中補部ニ任ジ、同年十二月兼八級掌典補ニ任ジ、同十一年十二月兼七級掌典補ニ任ジ、同十二年九月式部寮八等屬ニ任ジ、同廿二年七月賀茂別當神社官司兼賀茂御祖神官司ニ補シ、同廿六年三月貴族院議員ニ當選シ第七回帝國議會召集ノ際勳精ニ付同二十九年三月其賞トシテ銀盃一組ヲ下賜セラル、同卅年七月任期滿テテ貴族院議員ヲ辭シ同月再ビ當選ス、次テ三十七年三度ヒ選ハレテ今尙其職ニアリ。



相浦紀道氏

男爵 貴族院議員

芝原白金三光町四百三十五番地

當家ハ嵯峨天皇ノ皇子左大臣河原院融ノ後ナリ、ソレヨリ八世ヲ經テ篤ニ至ル、通稱渡邊源二ト稱シ久安元年伯父久ニ從テ肥前松浦ニ至リ相神浦城主トナリ、姓ヲ相神浦ト稱ス、ソレヨリ五世ヲ經テ藏人太夫宗興ニ至ル、弘安ノ役蒙古ノ兵ヲ退ケテ戰功アリ小城郡能取村ヲ賜ハル、ソレヨリ三世ヲ經テ宗美ニ至リ姓ノ一字ヲ略シ相浦ト改ム、ソレヨリ六代ヲ經テ宗廣ニ至リ初メテ鍋嶋家ニ仕フ、ソレヨリ十一代ヲ經テ源太夫蕃慎ニ至ル累世文武ヲ以テ現ハル、君其嫡男ニシテ天保十二年六月廿三日ヲ以テ佐賀ノ藩邸ニ生トナル、明治元年羽州戰爭起ルヤ、藩命ヲ以テ延年艦ニ乘組ミ戰地ニ向ヒ尋テ函館ニ進ミ賊徒ヲ降伏セシメテ戰功アリ同二年五月長鯨丸船長トナリ、同三年飛隼丸船長トナリ、翌年日進艦長露國「ボシエツト」灣ヘ差遣セラル、ヤ君航海本官トシテ出張仰付ラレ、此年海軍大尉ニ任ジ正七位ニ叙セラル、次デ攝津、筑波、雲揚、龍驤等ノ艦長ヲ歴任シ、同五年海軍中佐ニ任ジ從六位ニ叙セラル、同六年三月水路寮勤務仰付ラレ、翌年七月同寮測量課長トナリ、同十一年海軍兵學校次長兼學監トナル、同十二年再ビ築波艦長トナリ次デ金剛、秋葉等ノ艦長ヲ經テ同十八年海軍少將ニ任ジ常備小艦隊司令官トナル、爾後兼將官會議々員兼造船會議長、海軍技術會議々長、海軍省第二局長、製鐵所設立案取調委員長、常備艦隊司令長官、佐世保鎮守府司令長官、警備艦隊司令長官等ニ歴任シ同廿七八年日清戰役ニ參加シテ勳功ヲ顯シ、平定後累進シテ海軍中將ニ任ジ特旨ヲ以テ男爵ヲ授ケラル、爾後常備艦隊司令長官、橫須賀鎮守府司令長官兼海軍學校會議々員等ヲ經テ同卅五年五月豫備役仰付ラル、卅七年同族間ヨリ選バレテ貴族院議員トナリ現時ニ及ベリ、今ヤ正三位勳一等功三級ノ高位ニアリ、嫡孫助一氏明治廿年八月ヲ以テ生ル、夙ニ學習院小學部ヲ卒ヘ後テ慶應義塾ニ學ビ、今ヤ從五位ノ榮位ニアリ。

電話芝 千八百四十番

久保田與四郎氏

長野縣郡部選出衆議院議員、辯護士

君ハ文久三年一月十一日長野縣小縣郡長瀬村高柳家ニ生ル、後久保田氏ヲ嗣グ、上田松平學校及上田變則中學校ヲ卒業シ、長野縣立師範學校ノ試験ヲ受ケテ小學校教員トナリ長野縣北佐久郡宇山小學校ノ訓導トナル干時年十七、明治十四年志ヲ立テ笈ヲ負フテ東京ニ來リ三田慶應義塾ニ入ル在學二年ニ轉ジテ法律ヲ學ビ十九年辯護士トナル、此際青年辯護士トシテ大ニ盛名ヲ博シ、又嚶鳴社ニ入り、沼間、田口島田、肥塚、波多野、氏等ト共ニ井生村樓上大ニ辯論ヲ闘ハシ、次テ縣民ノ推ス處トナツテ縣會議員トナル廿六年六月歐米漫遊ノ途ニ上リ米國ヲ一週シテ英國ニ渡リ倫敦ニ滯留スルコト三年餘法律ヲ修メ傍ラ大ニ歐州ノ外交問題ヲ討究シ廿九年歸朝三十一年五月神田錦輝館ニ於テ六時間ニ渉ル外交問題獨演說ヲ爲シ東洋之危機附對外國見ト題スル一書ヲ公ニシ、以テ日露到底兩立スベカラザルヲ以テ彼ノ旅順、大連ヲ取リタルニ對シ、斷然反抗スベキヲ極論セリ、明治三十五年第七回總選舉以來衆議院議員トシテ籍ヲ憲政本黨ニ置キ、同黨常議員トシテ計策意リナカリキ、今ヤ同志ト兵ニ立憲國民黨ノ中堅タリ、尙尠シク消息ニ通スル者ヲシテ長野縣ノ政治治理ノ今昔ヲ觀察セシメバ、如何ニ君ガ渾身ノ努力ヲ傾注シタルヲ窺フニ足ル、殊ニ職掌柄トハ云ヘ、其流暢明快ナル辯舌ニ至ツテ慥カニ聽者ヲシテ「チャーム」セシムルニ足ル、コレ亦君ガ武器トシテ見ルヲ得ベク、居常一貫「正」ノ一字ヲ以テ蔽フハ、同志等シク賞揚スル處ニシテ、所謂武士道ハ、君ノ生命ナリ、吾人ハ君ト何等恩怨ヲ有スルニ非スト雖モ多年ノ情節、シカモ逆境ニ抗シテ奮然蹶起シ、萬難ヲ排シテ遂ニ其目的ヲ貫徹スルノ勇氣ハ、尠ナクトモ敬意拂フニ吝ナラサルナリ、希クハ建國愈々熾ナラン事ヲ。

寺田祐之氏

宮城縣知事

宮城縣仙臺市

君ハ元ト信州飯山藩士、嘉永三年十二月八日ヲ以テ長野縣水内郡飯山町ニ生ル、舊名半次郎ト稱シ後チ現名ニ改ム、夙ニ好學ヲ以テ聞ユ、年十九、小隊長トシテ越後ノ賊軍征討ニ從ツテ功アリ、明治四年八月始メテ職ヲ文學助教ニ奉ジ兼任學監仰付ラル、同六年十二月司法省十二等出仕ニ任ゼラル、翌七年六月警視廳十二等出仕ニ任ジ、同十四年一月警視廳ニ任ズ、此年四月準判任官御用掛仰付ラル、同十六年十二月四等警視ニ任ジ、翌年二月從七位ニ叙セラル、同十九年二月累進シテ兵庫縣警部長ニ任ジ、同廿一年一月山梨縣警部長ニ任ジ、同年十二月轉ジテ香川縣警部長ニ任ジ、同廿五年十一月廣島縣警部長ニ轉ジ、同廿九年東京府書記官ニ任ジ、同三十年十月熊本縣書記官ニ任セラレ、同卅二年五月長崎縣書記官ニ任ジ、翌卅三年八月新潟縣書記官ニ任ジ治績大ニ舉ガル、同卅四年四月累進シテ鳥取縣知事ニ任ジ同年株式會社鳥取縣農工銀行監理官仰付ラル、同卅九年四月日露戰役前後ノ功ニヨリ勳三等旭日中綬章並ビニ二千圓ヲ賜ハル、同年七月岡山縣知事ニ任ジ、同四十一年七月宮城縣知事ニ任ジ引イテ現今ニ及ベリ、今ヤ高等官一等正四位ノ高位ニアリ。

君人トナリ謹厚率直、猥リニ人ト爭ハス、サレド其主義ヲ主張スルニ於テノ猛力ハ、宛然人ヲ異ニスルノ概アリ、今ヤ縣民君ヲ推シテ能吏ノ型典トシテ崇拜シツ、アリ、一見溫厚ナレ共一朝事アル場合ニハ生資ハ泰然自若決シテ物ニ驚カサル風アリ。

村瀬春雄氏

法學博士

東京市本郷區春木町
三丁目二十四番地

君ハ舊福井藩士、故關戸由義氏ノ二男ニシテ明治四年三月二十九日ヲ以テ生ル、幼ニシテ穎敏聰慧學ヲ好ミ、温厚篤實群童ト異ナリ、夙ニ普通學ヲ修メ明治十六年兵庫縣立商業學校ニ入り登雪四年ヲ經テ十年最優ノ成績ヲ以テ同校ヲ卒業ス、是レヨリ先キ、明治十六年東京府ノ人、村瀬サダ子ノ死跡ヲ相續シテ其姓ヲ冒シ後兵庫縣ニ轉籍セリ、明治廿年東京高等商業學校ニ入り、同二十二年保險學研究ノタメ白耳義國ニ遊學シ、同二十五年同國「アントワープ」高等商業學校ヲ卒業シ、尋デ獨國「ライプジツヒ」大學入り、同二十六年歸朝シ直チニ職ヲ東京高等商業學校教授ニ奉ジ同二十八年辭職、直ニ帝國海上運送火災保險株式會社ノ招聘スル處トナリ、入りテ同會社ノ副支配人トナル次デ支配人トナル同卅三年終ニ常務取締役トナリ、謹嚴方正ヲ以テ事務ヲ採リ實業ノ通弊ニ陷ラズトイフ、尙ホ一面高等商業學校講師ニシテ事務ノ才ニ富メル者ハ學殖ノ見ルベキ者ナキハ世間一般ノ通弊トスル處、所謂牙アルモノハ事務ノ才ニ乏類ニシテ天ニ二物ヲ賦與セザルモノカ、然レトモ村瀬氏ノ如キハ學殖ノ豐富ナルハ勿論尙ホ事務ノ材幹ヲ備ヘ二者相待ツテ其適所ニ立テ其技能ヲ發揮シテ人ノ歎美スル所トナルモ亦宜ナル哉、四十年博士會ノ推薦スル處トナリ法學博士ノ學位ヲ授ケラル。

電話下谷 七百十三番

倉富勇三郎氏

韓國司法廳長官 法學博士

赤阪區丹後町四番地

君法曹界ノ先輩トシテ、多年其職ヲ全フシ、今ハ、隣邦韓國ニ駐マツテ司法廳ノ長官タリ、學者トシテ將亦官吏トシテ、深キ造詣ヲ開披シテ處斷苟クモ滯滞ナシ、茲ニ其閱歷ノ概要ヲ聞クニ。

君ハ舊福岡藩士、嘉永六年七月十六日ヲ以テ生ル、嚴父厚胤氏ノ二男ナリ、明治十年司法省出仕生徒トナリ同十四年ヲ以テ卒業ス、同年判事トナリ正八位ニ叙セラル、同廿年累進シテ司法省參事官トナリ、同廿六年勳六等ヲ賜ハル、翌廿七年分家シテ一家ヲ創立ス、同卅一年累進シテ司法省民刑局長トナリ兼ネテ司法省參事官タリ、同卅五年大審院檢事トナリ昇叙シテ正五位勳四等ヲ賜ハリ兼テ法典調查委員及政府委員タリキ、此間ニ於ケル君ノ手腕ハ遺憾ナク發揮セラレ、倉富檢事ノ名ハ、蓋シ無意義ニ聽取セラレザリキ、日露戰役後韓國統監府ヲ設置セラレテ政策漸ク樹立ス、熾ンニ官海ノ新人物ヲ拉シテ難衝ニ當ラシム、君亦拔擢セラレテ現官トナリ、幾多ノ苦心ヲ拂ツテ職務ヲ統一ス、先是、法學博士ノ學位ヲ授ケラル。

君資性快活、頭腦ノ明晰ナル、夙ニ定評アル處ニシテ、法律知識ノ造詣亦世ノ認容スル處ナリ、尙九州男兒ノ意氣亦蔽ハントシテ能ハズ、一見霸氣ニ富ム處、野心家ノ如クナルモ、事實眞骨頭ニ至ツテ亦他ニ存ス、君亦當代循吏ノ好型ナリ。

電話新橋 千二百六十一番

青木要吉氏 實業家

本郷區向ヶ岡彌生町三番地にノ十三號

偉人新島襄先生ノ訓陶ヲ受ケ、或ハ政治ニ或ハ實業ニ、或ハ文學ニ、或ハ宗教ニ、幾多ノ英材ヲ輩出シタルハ既ニ顯著ナル事實ナリ、若カモ一貫シテ共通ノ所謂同志社型ナル者ヲ具有ス、恩師浮田博士嘗テ記者ニ語ラレタル談片ニ『余ガ母校同志社ハ、多クノ才人ヲ輩出シタトイフノモ事實ニハ相違ナイガ、眞摯ノ人ヲ出シタトイフ事ガ其適評デアル……云々』ト本章ノ『ヒーロイン』亦同志社出身、少壯ニシテ郷里岡山ヲ辭シテ同社神學部ニ入り苦學數年業ヲ卒ル、直ニ米國ニ遊ビ『エール』大學ニ入ツテ哲學ヲ專攻シ『コロンビヤ』大學ニ經濟學ヲ專修シ幾多ノ白人ト伍シテ俊邁一頭地ヲ拔ク、卒業後哲學博士ノ學位ヲ得テ歸朝ス幾モナクシテ招致セラレテ郷里商業會議所ノ顧問トナリ次テ高等學校東北學院等ニ教鞭ヲ執ル、サレド英材長ヘニ邊陲ノ地ニ閉塞スベキニアラズ米國仕込ノ修養ハ、天資ノ材能ト相待ツテ牧師タリ教員タルベク、餘リニ物足ラサリキ、偶々安田銀行ニ信託部ノ設ケラル、ヤ聘セラレテ其部長トナリ、兼ネテ同行銀行員養成所ノ首腦タリ、由來安田直營ノ事業ハ、高級幹部ハ一門ニ非スンバ、直系ニ係ル、即チ安田ノ事業ハ其一族郎黨ニ非スンバ、一步モ其門内ニ入ル能ハサルナリ、然ルニ全然分子ヲ異ニスル君ガ、茲ニ要位ヲ占メ、參謀トシテ樞機ニ參スル所以即チコレ君ノ實力ニシテ眞摯テフ唯一ノ武器ハ、此圈内ニ實力ヲ保チ得ルニ値セルヲ以テナリ、世間或ハ、君ノ英文英語ニ耐能ナルヲ以テシ、或ハ圓滿老熟ノ處世術ニ巧ミナルヲ以テ今日ノ地位ヲ保ツヲ稱スルアルモ、コハ淺薄ノ見到底傾聽ノ價值ナシ、洋行歸リノ新材中英文英語ニ巧ミナル君以上ノ者亦決シテ鮮トセズ、處世術ノ巧妙ナルニ至ツテ現代ノ人士比々皆然リ、豈管ニ君ノ獨占ナランヤ、吾人敢テ君ト何等ノ恩怨アルニ非スト雖モ、月旦ノ筆ヲ操スル當然ノ義務トシテ一言ノ辯ナクンバアラサルナリ、終リニ曰ク、登場俳優ノ技量ハ調和セザル背景ノ爲ニ眞技ヲ誤マル、事及『箇』ノ人ヲ見ムト欲セバ須ラク就テ樂屋ヲ一覗セヨト。

電話下谷 二千六百四十一番

池邊棟三郎氏 醫學士 侍醫

本所區相生町五丁目二十四番地

刀圭ヲ擁シテ世ニ處ス、シカモ選ハレテ侍醫タリ何ノ名譽カコレニ比スモノアラシヤ 茲ニ君ヲ物色スベク特ニ此感アリ。

抑モ君ハ九睡大分ノ人、安政五年三月十八日ヲ以テ生ル、明治四年元森藩ノ儒者加藤賢成ニ就テ漢籍ヲ學ビ次テ同六年大分町英學校ニ入學シ更ニ豊前中津ノ學校ニ入ツテ英學ヲ究ムル事三年、遂ニ笈ヲ負フテ東都ニ入り獨逸人『ヒュルゲル』マイステル氏ニ就テ獨逸語ヲ修メ、同年九月東京外國語學校ニ入ル翌年三月更ニ東京大學醫學部ニ入り、益雪ノ辛苦其効空シカラズ明治十九年十月帝國大學醫科ヲ卒業シテ醫學士ノ稱號ヲ得茲ニ學校生活ノ一段落ヲ告ケタリ幾干モナクシテ郷里大分縣立甲種醫學校教諭兼同縣立病院副院長ヲ拜命ス、同二十一年三月富山縣々立病院長ニ轉任、同二十二年二月富山縣第二回藥舖開業試驗委員ヲ囑托セラレ同年二月引續キ藥舖開業試驗委員ヲ命ゼラル同年四月在職中格別勉勵ノ賞トシテ金若干圓ヲ下賜セラル、同二十四年十一月依願本職ヲ解カレ次イテ全家ヲ舉ゲテ東都ニ移ル尋テ現任所ニ開業シテ専ラ一般ノ診療ニ從事セリ、同二十六年四月内閣ヨリ東京醫術開業試驗委員ヲ命セラレ爾來勤績今日ニ及ブ、同二十七年八月宮内省侍醫ヲ拜命シ獨特ノ伎倆ヲ發揚シテ精勵一日ノ荒怠ナシ、其ノ後特ニ拔デラレテ皇太子殿下附侍醫仰付ラレ爾後孜孜々々赤誠ヲ披瀝シ、掬躬如トシテ尊體ノ拜護ニ深念シツ、アリ斯克ノ如クシテ始終一貫忠實熱誠ヲ以テ事ニ當ル、豈儼々タル醫商輩ノ企テ及ブ處ナラシヤ、吾人其健全ナル發展ヲ祈ル者強テ世辭一遍ニアラザル也。

電話浪花 三千〇五十番

谷 脇 靜 一 氏

實 業 家

高知市杉形町八番地

(一〇八)

堅忍持久ハ成功ノ母ナリ、凡ソ一事ヲ成サント欲セバ其經過ノ上ニ於テ其研鑽ノ間ニ百ノ艱苦千ノ辛酸ニ遂着シ、時々人間萬事塞翁ガ馬トノ嘆聲ヲ發シ時ニ行路ノ難キヲ叫喚セシム、然レトモ若シ此ノ塞翁カ馬行路ノ難キヲ以テ人間ノ常數トナシ其目的ヲ他方面ニ轉ジ、其精神ヲ別行動ニ注グアラムカ、假令好機運ノ目眩ニ迫レルアルモ、遂ニ頓挫ニ頓挫ヲ加ヘ蹉跌ヲ重ネ再ビ人間界ニ生息スルヲ悲觀スルニ到ルヤ必セリ、谷脇靜一君ノ如キハ能ク此頓挫ニ堪ヘ又能ク此蹉跌ニ忍ビ終始一貫其精神ヲ持續シテ以テ今日ノ成功者ト稱セラル、ニ至ル、蓋シ君ハ居常二兎ヲ逐フノ愚ヲ學ハズ、正道ヲ經テ一直線ニ邁往ス眞ニ事業家ノ典型トシテ江湖ニ鼓吹スルニ足ル可キノ人ナリ。

君ハ高知縣ノ人ニシテ吳服販賣ヲ業トナス、父君ヲ竹藏ト稱シ、酒造業ヲ營ム、君其長男ニシテ萬延元年十一月ヲ以テ生ル、十二歳ニシテ愛父ヲ衷ヒ、具サニ孤兒ノ辛酸ヲ嘗ム、加之家道亦意ノ如クナラズ君ガ苦心、到底筆紙ノ盡ス處ニアラサルナリ、爾來幾多ノ逆境ト抗シテ奮闘シ、尊キ玉ノ汗ハ、遂ニ君ヲシテ順境ニ向ハシメタリ、業務日ニ隆昌ニ赴キ、由緒アル家名ヲ再興スルニ至リシナリ、本業ノ外汎ク縣下ノ產業界ニ盡瘁シ、土佐水屋株式會社ヲ起シテ其重役タリキ、爾來振ハサル高知商業界ノ先覺者トシテ種々經營奔走スル處アリ、彼ノ副會頭トシテ精力ヲ注ギツ、アル高知縣商工聯合會、高知商業會議所ノ如キ、如何ニ大ナル貢獻アリシカハ、尠クトモ關西實業界消息通ノ知ル處ナリ。

嗚呼昔日ノ孤兒今ノ實業家、仔細ニ經路ヲ探究シ來レバ、悉クコレ好箇ノ立志篇、恨ムラクハ小冊本書ノ詳ヲ盡ス能ハサルヲ、敢テ絶叫シテ天下薄志弱行輩ヲ警告ス。

電 話 四 千 五 番

安 島 廣 三 郎 氏

鍼 術 家

日本橋區元柳町八番地

泰西物質文明ノ輸入ハ、特ニ科學ニ於テ顯著ナリ、コハ一面、日本固有ノ科學ヲ葬リ去ラントスル者ニシテ、吾人國粹保存ヲ念トスル者聊カ憤慨ナキ能ハサルナリ、頃者鍼術ノ大家安島氏ノ名譽ヲ聞知シ、此意味ノ發作ニヨリ崇敬遂ニ止マサル者アリ。

今其因縁ヲ尋ヌルニ、昔西村元春翁アリ、水戸黃門公ノ典醫ヲ奉シテ碌百石ヲ賜ハリ、盛名一代ヲ發動ス、數世ヲ經テ岡本元資氏ニ到リ、鍼術ヲ以テ水府ニ鳴リ、天才ノ譽中興ノ稱今尙人口ニ膾炙スル處ナリ、君夙ニ此門ニ入り、苦修力行多年一日ノ如ク、克ク師ノ衣鉢ヲ傳ヘテ出藍ノ譽アリ、去ル三十五年九月二十六日、東宮御所ニ召サレテ殿下ニ鍼術ヲ奉リ。奏効頗ル顯著ニシテ毫モ痛苦ヲ感セサセ給ハズ爾來同所女官方ノ全部ニ試ミ、遂ニ、青山御所ヲ通シテ其術ヲ賞セサル者ナキニ至レリ、偶々、聖上ノ御聞ニ達シ、召サレテ九重雲深キ處、玉體ニ咫尺マツリテ其鍼術ヲ奉施シタルニ、御感斜ナラズ、爾來御兩所ニ召サレテ施術奉ル事茲ニ八年、聖恩ノ無窮ニ感シテ精忠一貫、尊キ御錠ヲ賜ル一再ニシテ止マズ無官ノ一鍼術者トシテ此光榮ヲ荷ヒタル者前古未例ノ事ナリ、カクテ大内山ノホトリ、寵愛ヲ以テ厚ク遇セラレツ、アリシトイフ、傳フ處ニヨレバ、其最モ得意トスル處ハ、神經痛一般、胃腸病、腦病、リヨウマチス、及婦人病等ニシテ、ニ鍼直ニ平復ノ靈腕アリトイフ。

斯ノ如キハ、凡介學ヲ達スベキ者ニアラズ、尠クトモ術神ニ入ルニアラスンバ能ハズ、今ヤ辭シテ一般ノ施術ヲ諾シツ、アレバ、寔ニ如上疾病者ノ爲一大福音ナリト謂フベシ、茲ニ君ガ光榮ト天才トヲ欣慕シ、録シテ以テ永劫ニ傳ヘントス。

(一〇九)

前田 青莎氏

實業家

荏原郡上大崎五百九十一番地

嘗テハ東宮侍從トシテ九重雲深キ處ニ仕へ奉リ、今ハ牙籌ヲ執ツテ中央實業界ニ處ス、終始一貫ノ品性人格ハ濁流滔々タル斯界ニ介シ、屹トシテ其本節ヲ全フス、君亦有爲ノ士ナリト謂ツベシ、其略傳ニ曰ク君ハ舊鹿兒島藩士朝鮮總領事タリシ前田献吉氏ノ長男ニシテ前田正名氏ハ叔父タリ、慶應二年七月十七日ヲ以テ鹿兒島ニ生ル、幼少父君ニ從テ韓國ニアリ夙ニ學ニ志シ、普通學終ルヤ尙カニ外游ノ志禁スル能ハズ明治十六年、一年少ノ身ヲ以テ、茲ニ萬里ノ波濤ヲ越へ、科學ノ叢源獨逸伯林ニ航ス、苦學精勵伯林大學ニ法律學ヲ專攻ス、此間幾多白人ト伍シテ儕群ヲ拔キ、日東男兒ノ爲ニ萬丈ノ氣ヲ吐ク滯留前後七年明治廿二年ヲ以テ歸朝ス、爾來郷里ニ獨力ヲ以テ鑛山ヲ經營スル事數年、同廿七年仕官シテ宮内省主獵官ニ任セラレ、翌廿八年榮轉シテ東宮侍從トナリ、勤格精勵一日ノ弛怠ナシ、卅年十一月農商務大臣秘書官ニ任セラレ、樞機ニ參シテ功アリ、翌卅一年冠ヲ掛ケテ野ニ下リ、暫ク靜ヲ養ヒツ、アリシガ、英材永ク閑地ニ居ル者ニ非ズ、彼ノ岩越鐵道株式會社ヲ整理シ事務取締役會長トシテ事實上同社ノ經營ニ任ジ、業務隆々將ニ大ヲナサントスルニ際シ、鐵道國有ニ依テ政府ニ買收セララル、ニ至レリ、卅九年水戸鐵道株式會社重役トナリ、成瀬正恭氏等ト共ニ其發展ヲ劃シテ功アリ、外ニ柴田、今井氏等ト計ツテ府下尾久村ニ共益人造肥料株式會社ヲ起シ、現ニ其取締役タリ、四十年、十五銀行ノ機關タル帝國倉庫株式會社ノ創立ニ參加シ、爾來同社事務取締役トシテ熱心ナル經營ニ任ジツ、アリ、君亦大ナル抱負ヲ如何ニ現實セントハスル物ゾ、吾人ハ實業家トシテ君ノ人格ヲ認メテ敬服シ、之レヲ推薦スルニ吝ナラズト雖モ、其手腕ニ至ツテハ、徒ラニ贊辭ヲ呈スルヲ休メ、妙クトモ堅實實實、一步一步ノ確的進境ガ、懸テ評論記者ノ筆ニヨツテ世ニ傳ヘラル、愉快ナル未來ヲ待タント欲スルモノナリ。

電話芝 一千二百十九番

清水 彦次郎氏

實業家

麴町區中六番町三十五番地

進取ノ希望ナキモノハ生ナカラ死セルモノナリ、今日ノ活社會ニ處スルモノ何ンゾ這般ノ譏リヲ甘受シテ可ナランヤ、必ズヤ赤手ヲ揮フテ以テ激甚ナル競争場裡ノ覇者タルノ慨ナカルベカラズ、清水彦次郎君ノ如キハ滋賀縣ノ僻地ヨリ來リテ奮闘多年以テ實業界ノ覇者タルヲ得タルモノ其進取ノ氣奮闘ノ慨以テ後進ノ鑑トナスニ足ルモノアリ。

君ハ滋賀縣野洲郡舊西河原村ノ人、先代彦作氏ノ長男ニシテ、嘉永四年七月三十日ヲ以テ生ル、幼少學ヲ好ミ夙ニ和漢ノ學ヲ修メ造詣頗ル深ク、長ジテ同所戸長及同村外八ヶ村聯合村戸長ニ擧ゲラレ、職ニ居ルコト數年其施政ノ方針寔ニ宜キヲ得村民ノ君ヲ慕フ慈母ノ如ク亦乳兒ノ感アリシガ、明治十八年遂ニ其職ヲ辞シ大坂ニ出テ菓子製造業ヲ創ム、後全國同業者組合ノ菓子稅廢止ヲ唱フルニ至ルヤ君選バレテ委員トナリ、貴衆兩院ニ請願スル事數次同二十八年漸ク其目的ヲ達スルニ至リ其紀念トシテ、愛國生命保險株式會社ヲ組織シ同三十年大坂支店副支配人トナリ、同四十年本店取締役兼支配人トシテ多年同會社ノ發展ニ努メ、孜々トシテ盡瘁スル十年一日ノ如シ、同社ガ業務漸次繁昌シ、前途頗ル有望ノ姿ヲ示セル寔ニ君ガ材腕ノ致セル所ニシテ又以テ如何ニ君カ世ノ信用ヲ荷ヒ居ルカヲ知ルヲ得ベシ、吾人ハ君ガ奮勉力行ノ人ニシテ又進取ノ氣象ニ充テル人ナルヲ知ルト共ニ之レヲ後進ノ鑑トシテ推選スルヲ辭セサルナリ尙ホ風趣トシテ傳フベキ事多クアレドモ限リアル紙數故遺憾乍ラ其全般ヲ叙ス能ハズ、茲ニ君カ大坂當時ノ風趣ヲ載セテ君カ今日在ル其半生ノ境涯如何ニ悲慘ヲ極メシカヲ窺フノ資トセンカ。

かけこりの聲もきこぬ無一文

電話番号 九百三十六番

相馬順胤氏

子

爵

麴町區内幸町二丁目六番地

相馬順胤子ハ磐城ノ城主相馬胤胤ノ第三子ニシテ其先ハ桓武天皇ヨリ出ツ、皇子式部卿葛原親王ノ孫上總介平高望ノ次男良將ノ後ナリ、其子相馬小次郎將門後十一世師常源頼朝藤原泰衡ヲ討ツニ當リ軍功アリテ下總及磐城ノ郡邑ヲ領ス、重胤ノ世ニ至リ下總ヲ去リ磐城ニ移ル後十世ヲ經テ長門守義胤ニ至ル義胤豊臣秀吉ニ從ヒ本領磐城ノ三郡ヲ領ス、其子大膳亮利胤以來世々封ヲ襲フ長門守益胤四品大膳太夫充胤大ニ民政ニ力ヲ盡シ衰弊ヲ興ス充胤ノ子因幡守誠胤成辰ノ役ニ會シ一旦王師ニ抗スト雖モ尊王ノ大義ヲ唱ヘ遂ニ降伏歸順シテ舊封ヲ賜ハル、後京ニ入りテ華族トナリ從四位ニ叙セラレ子爵ヲ賜ハル、君ハ則其弟ニシテ文久三年九月二十九日ヲ以テ盤城中村城中ニ呱呱ノ聲ヲ揚ク、幼名龜五郎ト云フ、明治十九年四月二十八日誠胤ノ相續人トナリ、被叙從五位同二十五年三月家督相續仰付ラレ後累進シテ同三十五年六月正四位ニ叙セラル、由來相馬ノ地ハ、歷代ノ明君克ク統治ノ實ヲ舉ゲ、文武兩道ヲ獎勵シテ士庶共ニ此風ニ薰化セラル、今尙、足ヲ彼地ニ入ルレバ、一種ノ氣風流露シテ直ニ、其往昔ヲ憶バル、殊ニ先代相馬侯天資英明ニシテ士民ノ教育ニ腐心シ、銳意民政ノ改善ニ努ムルト共ニ、一面、臣下子弟ノ教育機關トシテ完全ナル藩養ヲ設立シタルガ如キハ、時人其先見ノ明ヲ稱シテ止マサリキ、蓋シ其貢獻當ニ一藩子弟ノ修養ノミニアラサルナリ、即チ附記シテ稿末ヲ彩ル。

電話新橋 百五十八番

阿部正功氏

子

爵

麻布區霞町一番地

『都をば霞と共に出てしかど、秋風吹く白河の關』既ニ人口ニ膾炙セラレタルノ古歌、思ヒ出多キ白河ノ關、コハ阿部子ノ舊領ナリ、如斯シテ古典的ノ聯想ハ、今尙子ノ舊領地ニ向テ心アル人士ノ琴線ニ觸レツ、アリ、茲ニ當家ノ系譜ヲ按スルニ、昔、孝明天皇ノ皇子大彥命ノ後胤ニ出ツ、其裔伊豫守阿部正勝ノ次男、左馬頭正吉ハ興家ノ祖ナリ、正吉徳川氏ニ仕ヘテ各所ノ戰陣ニ從ヒ屢々功ヲ顯ハシテ重ク用ヒラル、後豊後守忠秋ニ至リ、徳川三代將軍家光公ノ扈從頭トナリ、忠勤一頭群ヲ拔ク、寛永十四年下野壬生ノ城主トナリ、封邑五萬二千石ヲ食ム、後屢々勳功アリ、徐々ニ加封セラレテ遂ニ十萬石ヲ領スルニ至ル、其勳功ニ至ツテハ、之レヲ文ニ之レヲ劇ニ、傳ヘラレテ壯快ノ逸話ヲナス、カクシテ武州忍ノ城主トナリ、正篤ニ至リ奥州白川ニ移封セラレテ維新當時ニ至ル、治績頗ル顯著ナルアリ、即チ系譜ハ正能、正武、正喬、正允、正敏、正誠、正由、正權、正篤、正瞭、正備、正定、正者、正外、ヲ經テ從五位正靜ニ至ル、正靜維新ノ際、徳川累世ノ恩顧ニ酬イントシ、彼ノ官軍ニ抗シ、不幸ニシテ封邑四萬石ヲ削ラルコレヨリ先キ、(正功幼少ニ付キ正外、正靜共ニ分家ヨリ相續ス)、實ハ當主正功君其後ヲ繼グ、從四位下侍從播磨守正者ノ嫡子ナリ、萬延元年正月二十三日ヲ以テ奥州白河ニ生ル、幼名光之助又ハ基之助ト稱ス、明治元年十二月、先代正靜ノ家名ヲ相續シ、盤城國棚倉六萬石ヲ賜ハル、同二年三月藩籍ヲ奉還シ、同年六月棚倉藩知事ニ任セラル、同十七年七月子爵ヲ賜ハル、君爲人温厚篤實ニシテ學ヲ好ミ、多年人類學ノ研究ニ腐心、汎ク内外ノ専門書籍ヲ涉獵シテ造詣極メテ深ク、綿密ナル攻竅ニヨリ、新發見亦鮮ナカラスト雖モ、自ラ謙遜シテ單ニ趣味ト稱スルガ如キハ、亦以テ人格ノ一端ヲ窺フニ足ラズヤ、上流社會ノ沒趣味ハ殆ンド通有ナルガ如キ中、單リ學究ノ態度ヲ以テ君ノ孜々汲々ヲ見ル、亦以テ萬綠叢中紅一點ノ感ナクンバアラサルナリ。

才賀藤吉氏

愛媛縣郡部選出衆議院議員

大阪市東區今橋四丁目

電機界ノ元勳トシテ曰ク、東部ニ藤岡氏アリ、而シテ西部ニ君アリ、兩者相待テ本邦斯界ニ貢獻スル處多大ナルハ敢テ吾徒ノ嚟々ヲ要セス、世、己ニ定評アリ、今其閱歷ノ大要ヲ録センニ。

聞ク君ハ大阪府ノ人、明治三年七月ヲ以テ生ル、乃父ヲ重助氏ト云ヒ其長男ナリ、明治廿二年協立學校ヲ卒ヘ直ニ大阪電燈株式會社ニ入ル、幾許モナク技手長ニ進ミ諸多會社ノ電燈布設事務ヲ掌ル廿六年辭シテ東京三吉電機工場ニ聘セラレ設計工事監督ノ任ニアル事多年ナリキ、偶々京都市ニ電氣鐵道布設ノ企劃アリ、是レ抑モ本邦電氣事業ノ嚆矢ニシテ、當時三吉工場ノ製品ヲセントスルニ先チ端ナクモ技術者間ノ難問トナル、君此難局ニ當リ苦心慘憺大ニ努メ遂ニ同所ヲシテ一大成功ヲ荷ハシム、後チ專任技師トナリ野戰首砲廠發電所設置ニ出張シ戰利品中電氣ニ關スル機械ノ檢定ヲ囑托セララル、尙一面九州地方ノ各炭坑ニ向ヒ電氣應用ヲ遊記スル事屢々ナリキ、後チ辭シテ居ラ京都市ニ構ヘ獨力ヲ以テ才賀電機商會ヲ起シ專ラ斯業ノ發達ヲ計ル、爾來豊州電氣鐵道株式會社、伏見紡績株式會社、日本燃糸株式會社、磯野製紙所、三嶋紡績株式會社、絹絲紡績株式會社、東洋印刷株式會社、韓國電氣鐵道株式會社、大阪演劇會社、西讚電燈株式會社、東京、大阪各株式取引所等ノ電力諸機械工事電燈、大「シャンドンデリヤ」大扇風器等ハ全ク君ノ手腕ノ功ヲ奏セシ物ナリ、宜ナル哉設計請負日ニ頻多ヲ加ヘ遂ニ松山市ニ一大工場ヲ起シ盛ニ電機諸機械ヲ製造シツ、アリ、前年更ニ清國安東縣、營口等ニ於テ斯業ヲ經營シツ、アリト云フ、君亦繁劇ノ餘力ヲ割イテ伊豫水力電氣株式會社、美濃電氣鐵道株式會社、沖繩電氣鐵道株式會社、松坂水力電氣株式會社、日向水力電氣株式會社、安東縣電氣會社各社長、和歌山水力電氣株式會社、新瀉水力電氣株式會社、明石電燈會社、岩村電氣軌道會社、有馬電氣株式會社、成宗電氣鐵道會社、伊豫鐵道會社各取締役等トシテ尙外ニ豊後電氣鐵道株式會社、岩内水力電氣株式會社、營口電氣株式會社、讚岐

電氣株式會社等ノ成立モ亦君ノ力預ツテ大ナリト謂ッベシ、今ヤ一昨四十一年衆議院議員總選舉ニ際シ愛媛縣有志ノ強要スル處トナツテ候補者トナリ、優勢ヲ以テ當選シ、爾來上院硬派ノ國士ト訂盟シテ奔走怠ラズ、寔ニ院內唯一ノ電氣通ニシテ、肥大ノ體軀ト、電氣ニ關スル造詣ハ、確カニ日比谷ノ一名物タルヲ失ハサルナルナリ、尙目下計劃出願ニ係ル電氣事業ハ、約三十アリトイフ、其内、京都市地下線電氣供給ノ如キ、實ニ本邦ニ於ケル、嚆矢ノ設計ニシテ、君一ト度ヒ之レヲ發表スルヤ、東京、大阪ニ於テ同様ノ計劃ヲナス者ヲ生シタリトイフ、如斯シテ君常ニ電氣事業中成立ノ困難ナル者ニ對シテ特ニ其局ニ當リ、苦心研究其成立ヲ計ツテ理想ノ實現ヲ期シ、彼ノ尙カニ先人ノ精粕ヲ嘗メテ得々タル一派ヤ、人ノ苦心ヲ盜ンデ自己ノ創造ノ如ク裝フテ願サル一派ト、根本ニ於テ其趣ヲ異ニス。

如斯シテ事實上目下日本ニ於ケル電氣王ハ、自ラ此光榮アル(ニツクネーム)ニ對スル責任ヲ自覺シ、從來主ナル活動舞臺ガ多ク關西ナリシニ對シ、自今其猛力ヲ提ゲテ關東ニ突入シ、以テ名實相伴ハントシツ、アルハ斷言シテ憚ラサルナリ、彼ノ澁澤男、皆川四郎氏ト提携シテ創業シタル王子鐵道株式會社ノ如キ、蓋シ君ノ活動ヲ待ツモノ大ナルト共ニ、關東舞臺ニ於ケル君ノ開幕ト見ルベク、吾人モ亦世ト共ニ大ナル囑望ヲ以テ注視セント欲スルモノナリ。

茲ニ其概歴ヲ掲ケ、光明アル君ガ前途ヲ祝福シ精力ノ偉大ナル所以ノ例トシテ天下ノ後進ニ薦ムル處アラントス。

電話東特 千五十九番
全 東 四千七百七十四番

中松盛雄氏

特許局長

荏原郡入新井村新井宿千三十九番地

官職ヲ身ニ帶ビテ、治ヲ民ニ布クモノ豈心ヲ民情ニ通ゼズシテ可ナランヤ、現任特許局長中松君風ニ下情ニ明ナルヲ以テ名アリ君業ニ普通學ヲ修メ、明治廿一年更ニ進ンテ帝國大學法科ニ入り、同廿四年業卒ツテ法學士ノ稱號ヲ受ク、次テ農商務省試補ヲ拜命シ同廿八年累進シテ農商務省特許局審査官ニ任ジ正七位ニ叙セラル、翌廿九年特許局審査官ニ任ズ、翌卅年特許、意匠、商標三條例調査委員ヲ命ゼラル、三十一年從六位ニ叙ス、同年農商務省事務官兼任ヲ命ゼラル、三十四年正六位高等官四等ニ叙ス、三十六年特許局事務官ニ任ジ、(三十六年十二月五日特許局官制改正ニ依リ)三十七年端西國「ベルス」府ニ於テ開設セラレタル萬國工業所有權事務局長及代表者會議ニ列シ列國特許事務ノ改良統一ニ關スル討議ニ参加ス三十七年歸朝シテ高等官三等ニ陞叙ス、三十八年從五位ニ叙セラレ、同年勳六等瑞寶章ヲ授ケラル、三十九年特許法改正調査委員ヲ命ゼラレ、四十年特許局長ニ昇進シ、同年高等官二等ニ叙セラル、同年特許代理業者試験委員長ヲ命ゼラル、同年日本大博覽會理事官仰付ラル、四十一年正五位ニ叙セラル、同年勳五等ニ叙シテ瑞寶章ヲ授ケラル、同年農商務省所管事務政府委員仰付ラル、四十二年特許辯理士試験委員長ヲ命ゼラル、同年農商務省所管事務政府委員仰付ラル、即チ現官ハ特許局長兼日本大博覽會理事官、關稅調査委員、特許辯理士試験委員長ニシテ、多年ノ特勳中、工業所有權ニ關スル法規並ヒニ條約ノ實施上ノ事業、三十二年特許、意匠、商標法ノ制定實施及新條約ノ實施、三十八年ニ於ケル實用新案ノ制及實施、四十二年ニ於ケル改正特許外三法律ノ制定及實施等ハ其心血ヲ灑キタル者ナリ、君亦當代官海ニ於ケル少壯家トシテ、未來ノ大成ヲ至嚆セラレツ、アルノ一人ナリ。

電話芝 一千七百四十番

奥田柳藏氏

鳥取縣郡部選出衆議院議員

鳥取縣氣高郡大和村

君ハ因幡國氣高郡大和村ノ人ニシテ明治元年十一月ヲ以テ生ル、祖先ハ玉津城主武田高信ノ裔ヨリ出テ父ヲ長十郎氏ト云ヒ君ハ其長男ナリ、代々土地屈指ノ名望家タリ、君風ニ學ヲ修メ、早クモ家事ニ鞅掌ス、少壯力ヲ地方公共事業ニ致シ、初メ選ハレテ郡會議員トナリ、次テ鳥取縣議員トナル、主トシテ地方産業ノ發達ニ腐心シ、計策盡瘁一々擧ゲテ數フルニ進アラズ、三十二年同志、石谷、大塚、小田、澤田氏等ト計リ合資會社鳥取銀行ヲ起シテ縣支金庫ヲ具ヘ付ケ今尙社員トシテ奔走シツ、アリ、中執ク顯著ナル者ハ、同地ハ人モ知ル米穀ノ産地ニシテ年々ノ輸出額亦尠ナカラザリキ、然ルニ動モスレバ、國際貿易ノ眞意義ヲ解セズ、品質粗惡ノ傾向ヲ呈示セリ、即チ之レガ改良發達ハ一地方産業界ノ爲ノミナラズ、延ヒテ及ホス處頗ル大ナル者アリ、君風ニ茲ニ着目シ、卅六年因伯米輸出同業組合ヲ組織シ、其改善發達ヲ努メタルヤ大ナリ、コレヨリ先、同友福留氏ト提携シテ大同俱樂部ノ城砦ニ據リ年々浸蝕スル改友會ト對抗シ奮戰一日モ休ム事ナク、今ヤ中央俱樂部員トシテ例ノ活動ヲ持續シツ、アリ、往年第十回總選舉ニ際シ、四郡有志ノ強ヒテ推ス處トナリ、遂ニ衆議院議員トシテ中央政界ニ一指ヲ染メ將ニナスアラントシツ、アリ。

君資性慈善公共ノ念ニ富ミ、幾多ノ佳話亦尠ナカラズト雖モ、彼ノ居村ノ山野數百町歩ニ植林ノ法ヲ講シ以テ村ノ基本財産クラシメ、又多額ノ寄附金ヲ以テ高等小學校ヲ設立シ、續イテハ賀露、河原間道路、改修ノ擧アルヤ奔走盡力、數千金ヲ工費中ニ寄附シ、關係村民ヲシテ其德ヲ景仰セシメ、稱シテ奥田道路ト云フ、尙夙ニ忠君愛國ノ念ニ富ミ、國民協會時代ヨリ志士トシテ政治ニ運動シ、因幡同志會ナル改社モ其計籌ニナル者ナリトイフ、今ヤ滿韓ニ向ツテ農業並ニ移民ヲ計劃中ナリト傳ヘラル、吾人ハ邦家ノ爲ニ其實現ノ速カナラン事ヲ希フテ止マサルナリ。

有尾敬重氏

實業家

本郷區上宮土前町二番地

君ハ岐阜縣ノ人舊大垣藩士ニシテ嘉永二年六月美濃國大垣城下ニ生ル、維新前後舊藩ニ仕ヘテ治績アリ明治四年廢藩後朝廷ニ召サレ大藏省ニ出仕シ同六年地租改正條例ノ發布セラレシ時ヨリ専ラ地租及ビ處分ノ事務ニ任ジ地租改正ノ功ヲ全フシテ大藏省書記官ニ任ジ勳五等ニ叙セラレタリ、爾來大藏省主稅局ニ出仕シテ土地地稅ニ關スル事務ヲ擔當シ、偏ク各府縣ヲ巡回シテ足跡全國ニ達セザルナク土地ノ品位ヲ鑑按シ地稅ノ輕重ヲ計考シテ國家ノ良政ヲ策定スル處アリシ、尋デ主稅官ニ任ジ主稅局直稅課長正五位勳四等ニ陞レリ、明治三十年六月勸業銀行ノ創立アリ其理事ニ官撰セラレテ大藏省ヲ辭シ、又今日ハ株主ノ推薦ニヨリ其職ニ重任セリ、蓋シ君ハ大藏省セラル、モノ廿九年ノ永年ナリシヲ以テ辭職ノ後多額恩給金ヲ賜ヒ位階從四位勳三等ニ進メラレ功勞ヲ褒賞セラル、其財界ニ於ケル殊勳ハ、敢テ吾徒ノ暇々ヲ要セズト雖モ、特ニ其二ノ逸話ヲ録センニ、去ル三十一年關西經濟界ノ恐慌起ルヤ、同地方ノ工業社會ハ一時非常ノ苦境ニ陥リ、コレガ救濟方法ヲ勸業銀行ニ求ムルヤ、當時内外ノ經濟事情ハ到底此要求ニ應スル能ハサリシニ拘ハラズ、君期スル處アリ、實地ヲ視察シテ勇斷直ニ其急ニ應ジ、同地ノ產業界ノ爲ニ貢獻シタルモノ今尙人口脣灸セラレツ、アリ、其他日露戰役前後ノ活動ノ如キ、蓋シ君ノ面目躍如タルモノアリ、爾來引續イテ同行『活字典』ト稱セラル、嘗テ實業界ノ某先輩ヲ訪ヒ君ノ月旦ヲ求メタルニ、口ヲ極メテ君ノ人物手腕ヲ賞揚セルモノ頗ル趣味アルモノアリキ、如斯シテ君愈々熾ナリ、希クハ本邦財界ノ爲メ自愛セラレン事ヲ。

電話下谷 二千八十一番

福澤桃介氏

實業家

府下豊多摩郡澁谷村
下澁谷四百三十六番地

龍ハ雲ヲ獲テ益々靈ニ虎ハ風ヲ得テ益々猛ナリ實業家タルモノ先其ノ學ヲ修メテ愈々其ノ術ニ達セリト謂フベキカ。

聞ク君ハ元ト武州ノ人初姓岩崎氏夙ニ實業ニ志シテ慶應義塾ニ學ブ偶々偉人福澤翁ノ知遇ヲ得數千ノ學徒ヨリ選レテ其ノ養子トナル、蓋翁ノ明アツテ此ノ事ニ出ズ以テ其非凡ヲ窺フニ足ラン業終テ直ニ活社會ノ人トナリ、幾多ノ商業會ニ關與シテ其ノ重役トナルサレド未ダ以テ君ノ眞價ヲ發揮スルニ至ラズ嘗ニ福澤家ノ人トシテ故翁ヨリ來ル一種ノ隨力的尊敬ヲ拂ハレツ、アリシニ過ギズ、寧ロ君ノ實相ヲ誤傳セラレツ、アリシナリ、偶々日露戰役終テ幾多新設事業ノ勃興スルヤ、蛟龍遂ニ池中ノ者ニアラズ滿身ノ霸氣ヲ提ゲテ此ノ大渦中ニ投ゼリ嘗テ處女ノ如カワシ君ハ、今ハ脱兎ノ如キ敏捷ヲ以テシ時人ヲシテ遂ニ其ノ活動ニ驚カシメタリ、其出處進退電光石火ノ如ク一轉一起凡ヘテ痛快或者ハ目シテ其堂々正ニ男兒ノ事ヲ稱ス如斯シテ褒貶交々日本實業界ノ名物男トシテ而モ其ノ性格ハ疑問ヲ以テ蔽ハレタリ、吾徒ハ君ト嘗テ何等ノ親交ヲ有セザルト雖モ、君ヲ見ルニ於テ所謂世ノ神經家ノ夫レノ如ク輕薄ナルニ非ズ、寧ロ銳利正宗ノ如キ手腕ニ敬服スルト共ニ其正々堂々小刀細工ヲ弄セザルニ感服スル處アリ。

電話芝 七百五十三番



山口 弘達氏

子爵 貴族院議員

東京府下豊多摩郡澁谷村
下澁谷八十番地

篤學ニシテ、其趣味亦多方面ニ亘リ、克ク下情ニ通ジ、當代華族社會ノ一名士トシテ聲望赫々タルモノ
 茲ニ我山口子ノアルアリ、聊カ秃筆ヲ行ツテ世ノ貴公子ニ示シ以テ項門ノ一針タラシメント欲ス、抑モ
 君ノ家系ヲ按ズルニ、百濟明禰第三ノ王子、琳聖太子七世ノ孫長門守正恒ノ後ナリ、正恒祖先ヨリ周
 防國多々良ノ濱ニ住スルヲ以テ、朝廷ヨリ多々良朝臣ノ姓ヲ賜フ、ソレヨリ藤根、宗範、茂村、保盛、弘
 真、貞盛、盛房、弘盛、滿盛、弘威、弘安、重弘、長弘、弘事、弘世、義弘、持盛、教幸ヲ經テ任世ニ至ル、任世沙門
 トナリ、亂ヲ避ケテ尾州星崎ノ庄ニ隱遁ス、其子盛幸累代居住スル地名ヲ取ル、姓ヲ山口ト稱ス、其子
 平兵衛尉盛政、佐久間信盛ニ、其子但馬守重政、信盛ノ子正勝ニ依リ、屢々戰功アリ、重政徳川氏ニ仕
 へ大坂ノ役ニ勳功アリ、常陸國牛久城主トシテ一萬五千石ヲ領ス、ソレヨリ弘隆、重貞、弘豊、弘長、弘道
 弘務、弘致、弘封、弘毅ヲ經テ從五位下筑前守弘敏ニ至ル、君ハ其長男ニシテ、萬延元年三月廿三日ヲ以
 テ生ル、幼名ヲ長次郎ト呼ビ文久二年八月常陸國牛久一萬七石ノ封ヲ襲グニ及ビ原名ヲ改メテ弘達ト
 稱ス、明治元年十一月周防守ニ任ジ從四位下ニ叙セラレ、同二年三月表ヲ上ツテ藩籍ヲ奉還シ同六月牛
 久藩知事ニ任セラレ同十七年七月子爵ヲ授ケラレ華族ニ列シ、同廿年十二月正五位ニ陞リ同廿三年貴族
 院議員トナリ、同廿五年七月從四位ニ陞進シ同廿九年三月第七回帝國議會召集ノ際勳精ノ功ニ依リ銀盃
 一組ヲ賜ハリ、同三十年再ビ貴族院議員トナリ、正四位ニ叙セラル、三十六年從三位ニ叙セラレ、三十
 七年七月、十日貴族院議員ニ推サレ、同四十年日露事件ノ功ニヨリ旭日小綬章勳四等ヲ賜ハル、定ニ君
 ノ如キハ當代上流界ニ於ケル人格高潔ノ士ニシテ良ク祖先以家ノ家名ヲシテ益々發揚セシメ尙一面範ヲ
 後世子孫ニ示スモノト謂ツベシ。

電話新橋 二千二百二十三番

太田 清藏氏

福岡市選出衆議院議員

京橋區築地二丁目四十三番地

一面ニハ政治家トシテ其立脚地ヲ有シ、一面ニハ實業家トシテ其舞臺ヲ有ス、シカモ天資ノ敏慧ト豊富
 ナル財力ノ後援トハ、愈々益々君ヲシテ向上セシメツ、アリ、今其略傳ヲ草スレバ。
 君文久三年八月ヲ以テ筑前國福岡ニ生ル、夙ニ和漢ノ學ヲ修メテ深ク造詣スル處アリ、長スルニ及ンデ
 具サニ修養ヲ積ミ、頭腦頗ル明快ト稱セラル、シカモ温厚篤實ニシテ高雅ノ風趣アリ、既ニシテ志ヲ實
 業ニ寄セ、進ンテハ公事業ニ盡瘁シテ偉功アリ、年少ニシテ福岡市會議員トナリ、英材早クモ衆多ノ認容
 スル處トナル、尙同地産業ノ促進ヲ企圖シ、博多商業會議所會頭トシテ奔走計籌茲ニ年アリ、如斯シテ
 人望ノ根底牢トシテ拔クベカラズ、明治四十一年第十回總選舉ニ際シ、大多數ヲ以テ同市選出衆議院議
 員トナリ、立憲政友會ニ所屬シテ指ヲ中央政治界ニ染ム、更ニ其實業界ニ於ケル活動ニ至ツテハ、頗ル
 顯著ナルモノニシテ彼ノ筑紫銀行頭取、田川探炭株式會社監查役、岡山紡績株式會社取締役、博多電燈
 株式會社長、九州製油株式會社監查役、鍾淵紡績株式會社監查役、南北石油株式會社監查役等ノ重役ニ
 アツテナサレタル努力ハ亦世ノ定評アル處ナリ、現ニ福岡貯蓄銀行頭取、東洋鹽業株式會社、福博電氣
 軌道株式會社、北筑水力電氣株式會社各監查役、第十七銀行、筑紫水力電氣株式會社各取締役、徵兵保
 險株式會社專務取締役トシテ渾身ノ精力ヲ瀧マツ、アリ、願フニ君ガ中央實業界ニ於ケル實際經營ハ、即
 チ徵兵保險近時ノ發展ヲ引證セバ、敢テ細説スルヲ須ヒサルナリ、同社ハ總裁小澤男以下重役盡ク眞摯
 ノ人、從來樂天的ナリシ同社ガ、滔天ノ新勢力ヲ以テ活氣アル營業振ヲ見ルニ至リシハ、君就任以來表面
 ニ顯レツ、アル事實ナリ、希クハ天資ノ手腕ヲ揮シテ東都實業界ヲ捲席シ、九州男兒ノ爲ニ萬丈ノ氣ヲ
 吐カレン事ヲ。

電話新橋 二千百八十番

金杉英五郎氏

醫學博士
東京耳鼻咽喉科醫院長

神田區駿河臺南甲賀町二十三番地

思フニ今日ノ如ク本邦醫事衛生ノ進步發達セルハ開闢以來未タ見サル所ナリ、試ニ斯界ニ一目ヲ下セバ彬々乎トシテ大才ヲ續出ス寔ニ國家ノ爲メ慶スベキノ事ナリ、然レトモ君ノ如ク學殖深遠ニシテ遠ク歐洲杏林界ニマデ其令聞高キニ至リテハ吾輩局外者ト雖モ肩ヲ廣フスルノ快ヲ覺ユ、ソレ東京耳鼻咽喉科醫院長ト言ヘバ其名聲都門ハ勿論山間僻陬ノ片田舎ニマデ轟キタルモノ特ニ之レヲ紹介スルノ要ナカルベシ、サレド痛快ナル其性格ハ、以テ一服ノ清涼劑タラシムルニ足ル、曰ク、其人トナリ豪宕、稜々ノ氣骨到底所謂彼ノ數醫連ト同日ノ論ニアラズ、世ノ褒貶眼中ニナク、而シテ信スル所ニ向カツテ直進スルノ勇、玆ニ君ヲ評セントスルハ唯一ノ材料ナリ。

君ハ慶應元年七月十三日千葉縣ニ生ル、與右衛門氏ノ二男ニシテ幼時群童ノ首領トナリテ腕白實ニ到ラサルナク常ニ餓鬼大將ヲ以テ自他共ニ許セリ、叔父金杉恒氏其氣骨ヲ愛デ、遂ニ養嗣子トナス、少壯東都ノ人トナリ醫學ヲ研鑽シ、奮然起ツテ獨逸ニ航シ耳鼻咽喉科ヲ究メタルハ明治二十一年ノ事ナリキ、留學スルコト三年ニシテ「ドクトル」ノ學位ヲ受領シ、後チ專ラ彼地ノ碩學ニ就テ其助手トナリ、傍ラ實地ニ望ミテ瀝與ヲ極メ、新發見ニ意ヲ用ヒタル再三再四ニシテ止マズト云フ、廿五年錦ヲ飾リテ故國ノ人トナルヤ、直チニ地ヲ駿河臺南甲賀町ニトシテ一大病院ヲ起シ民間醫療ノ事ニ從フ、之レナン聲價院長其人ト共ニ遠近ニ喧傳サレツ、アル東京耳鼻咽喉科醫院トナス、君亦後進誘掖ニ力ヲ致シ同一學術ニ志ナス青年ノ爲メ同科刀圭家ヲ叫合シテ研究團體ヲ形作ル等又以テ其意ヲ謝スルニ足ル、其他陰ニ陽ニナサレツ、アル、君ノ盡瘁ハ到底筆舌ノ盡ス能ハサル所ニシテ世人亦已ニ認識スル所ナリ、今主ナルモノ二三ヲ列記セハ次ノ如シ。

大日本耳鼻咽喉科學會、大日本私立衛生會評議員兼理事長、醫學講習會々長、大日本耳鼻咽喉科學會名

譽會頭、耳鼻咽喉科學研究所長、海軍軍醫學校教授、慈惠院醫學專門學校講師等其外一々枚舉スルニ遑アラサルナリ又紙數ニ限リアリテ遺憾ト雖モ悉ク逸歴ヲ錄スルアタハズ、特ニ明治四十一年ノ春維也納市ニ開催セラレタル第一回萬國喉頭科學會ニ臨ミテ名譽會頭ニ推サレタル、尋デ埃佛伯ノ諸學會ヨリ聘セラレテ大ニ日本醫學術界ノ面目ヲ發揮セル事鮮少ナラズ、爲メニ俗醫凡庸ノ間ニ嫉視セラレタル故ナキニ非ラサルナリ、由來島國根性ノ俗物ガ、自己ノ足ラサルヲ補ハントセデ、渺ナクトモ修養セント企テモセデ、新進ノ有材ヲ拔擢シ、進路ヲ開拓スルニ勉メサルハ抑モ何等ノ醜事ゾ、偶々英材ノ出ツルアツテ爲ニ自己ノ地位ノ安全ヲ憂フルヤ、種々ナル手段ヲ弄シテ之レヲ排スルニ勉メ、管ニ管ニ自己ノ箔ノ剝脱セザラン事ニ汲タリ、而カモ白晝自己ノ大ヲ稱シテ世間ヲ僞罔ス、特ニ醫界ノ如キハ其弊風最モ極端ニシテ、醫弊ナル新熟字ヲ見ルニ至レリ、君ノ如キ大才ハ、常ニ是等奴輩ノ注視スル處トナリ、苟クモ乘スベキアラバ針小棒大ノ流説ヲナシ、此間接射擊ニヨツテ致命傷ヲ與ヘントス、如斯ハ、渺シク斯界ノ事情ニ通スル者等シク認ムル處ニシテ、快男兒金杉君ノ眞價ハ決シテ傷ケラル、モノニアラサルナリ論議聊カ葉末ニ亘ルト雖モ、君ヲ傳シテ特ニ此感ヲ深フシテ止マザルナリ、因ニ云フ、君亦豪磊一片ノ士ニアラズ、極到ノ號ヲ以テ詩文ヲ草ス、頃日左ノ一篇ヲ得、附記シテ稿ヲ結ハント欲ス。

庚戌元旦書懷

漫謂新年多瑞祥、看來時事總茫茫、國家須盡千秋計、邊境誰期萬里強、堪笑侏儒能媚世、却憐傀儡競登塲、何當能建經綸策、一片微衷報我皇。

電話本局 千二百八十五番
全 二千百〇一番

山際敬雄氏

新潟縣郡部選出衆議院議員

新潟縣西蒲原郡
黒崎村大字木場

(一一四)

當今代議士中少壯政客トシテ主義アリ見識アリテナスベキノ士トシテ嚮望ヲ逞シウシツ、アル者ハ抑々山際敬雄氏ナリ、君ハ明治五年四月新潟縣西蒲原郡黒崎村大字木場ニ生ル、質素儉約一見朴訥ノ人ノ如シト雖モ一度之ト談スルヤ洒々落落トシテ戯言口ヲ銜イテ出デ流石當代ノ潮流ヲ掬セル新進氣鋭ノ士タルヲ首肯スルヲ得ベシ、兎角北越人士トシテ稀ニ見ルノ社交ニ長シタルヨク人ニ對シ謙敬ノ念ヲ失ハズ、如何ナル者モ門ヲ叩ケバ公私ノ任務頗ル多シト雖モ必ス面談ノ事ニ應セサルナク、又其訪問ノ主旨如何ナルモノモ決シテ無氣ニ謝絶スルナク宜敷對者ノ意中ヲ圖リ應變ノ答辭些ノ惡感ヲ生セシムル等ノ事ナク到底狹量俗物ノ倣アベカラサル所ナリ、斯クテ君ヲ迎フルノ人多ク亦依頼スルモノモ少ナカラザル所以ナリ、呼當代ノ好紳士ト贊セサルベカラズ、常識圓満ナル君子ト賞ヘサルベカラズ、明治四十一年第十回總選舉ノ事アルヤ逐鹿場裡ニ打テ出デ最多數ヲ以テ衆議院議員ニ當選スルニ至リタルモノ亦以テ故ナキニアラズヤ、蓋シ民望君ニ歸スル根底淺サカラサルナリ當時金力ニ依ツテ總テノ要求ヲ充シ得ルナリトシテ君ニ敵對スルニ黃金ノ力ヲ借り一擧ノ下ニ破ラムトスルモノアルモ何ンデフ君ノ衆望深キヲ拔クヲ得ムヤ、君看ズヤ堂々タル國家ノ代議士トシテ其擧手投足國利民福ノ消長ニ係ル政治家トシテ金力ニ依ツテ兎角龜毛ノ虛榮ヲ希ヒ名ノミノ政治家輩亦何ヲカセム、君ノ如キ眞ノ政治家トシテ吾輩敬服スルニ餘リアリ、亦立憲政友會ニ屬シテ必スシモ異彩ヲ放ツベキノ偉材タルヲ疑ハズ、殊ニ先代以來、黨ノ爲ニ盡力シタルノ功績ハ、コレ決シテ埋没スベキニアラサルナリ、試ニ對改進黨以來、新潟縣ノ政黨分野ノ消息ヲ願レバ、君等ノ苦心及努力ヲ察スル餘アリ、君尙春秋ニ富ム、希クハ洋々タル前途ノ多幸ヲ臨ンデ一段ノ奮闘アラン事ヲ、即チ特ニ具體的傳記ヲ省略シテ寸評ヲ加ヘ、當ニ吾徒青年者ノ爲ニ謳歌スルノミ。

高杉晋氏

大日本麥酒株式會社營業部長

麻布區本村町
百四十二番地

本邦醸造工業界ノ「オウソリチー」トシテ、大日本麥酒會社ノ奮闘ハ、着々奇功ヲ奏シテ地盤既ニ堅實ナリ、馬越社長以下高級幹部、盡ク精力主義ノ少壯家ヲ網羅シ、一進一退中央實業界ノ精華ト稱セラル、營業部長高杉君、當面ノ局ニ當ツテ複雑繁多ノ難務ヲ敢行ス、君ノ手腕ノ伸ヒルト仲ヒサルトハ直接同社經營ニ影響ス、其任亦輕カラアルナリ、大ナル抱負ヲ擔シテ多幸ナルベキ前途ノ光明ヲ認メ、向上又向上、刻時モ底止セサル新進ノ君ニ對シ、其手腕ヲ評シ其事業ヲ論スルハ、蓋シコレ君ノ知己ニアラズ、吾人ハ當ニ其概歴ニ止メ、近キ將來玉成ノ日ヲ待ツテ月旦セント欲ス。

君亦當代人物ノ叢源ト目セラレツ、アル山陽岡山ノ人、即チ兒島灣頭ノ名勝、都窪郡三須村ノ出身ナリ少壯學ニ志シ、笈ヲ負フテ東都ノ客トナリ、贊ヲ明治法律學校(明治大學ノ前身)ニ執リ、次テ專修學校(專修大學ノ前身)ニ入ツテ理財ノ學ヲ修ム、當時後藤象次郎伯ノ知遇ヲ得テ同家ニ寄食ス、初メ仕官シテ遞信省通信屬トナリシガ、辭シテ後藤猛太郎氏ノ鑛山會社ニ入ル、コレ君ガ實業界ニ入ルノ首途ニシテ、亦手腕ヲ認メラレテ多數先輩ノ嚮望ヲ買ヒシ端緒ナリ、一轉シテ品川馬車鐵道會社ノ支配人トナリ早クモ其銳芒ヲ露ハス彼ノ矢野二郎先生ノ如キモ深ク君ノ人物ヲ賞揚シテ止マサリキ、既ニシテ同郷ノ先輩馬越泰平氏、君ガ爲人ヲ認メテ自ラ經營スル日本麥酒會社ニ招致ス、恰モ惠比壽麥酒ノ奮闘時代ニシテ、忠實精勵、克ク上長ヲ扶ケテ樞機ニ參劃ス、前年大合同ノ後、引續イテ現職ニ就キ、東奔西走席温ルナク、同社ノ山積アル歴史モ、君等少壯幹部ノ活動ニヨツテ益々面目ヲ發揮シツ、アリ、隱然同社ニ重キヲナスモノ亦以テ故アル哉。

電話芝 千二百六十五番

(一一五)

土屋 正直 氏

子 爵

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷松田百六十四番地

甲冑界ニ於ケル新進ノ英才トシテ、未來ノ大成ヲ囑望セラレツ、アルノ一人トシテ茲ニ君ヲ物色シテ章トナス。

當家ハ清和天皇ノ皇孫、鎮守府將軍源經基八代、陸奥守足利義康ノ曾孫、宮内少輔泰氏ノ孫、兵部少輔範貞ノ後ナリ、其レヨリ範次、藤直ヲ經テ金九伊賀守藤次ニ至ル藤次武田氏ニ仕フ、其ノ子虎次家ヲ嗣グ、其ノ子筑前守虎義武田晴信ニ仕ヘテ曉名アリ其ノ長男平八郎昌次父ト同ジク晴信ニ仕ヘ、大ニ寵愛ヲ受ケ、其ノ譜第ノ絶スルヲ嗣ギテ、土屋右衛門尉ト稱ス、天正六年長篠ノ役ニ奮戦シテ死ス、其ノ弟惣藏昌恒亦武田氏ニ仕ヘ、天目山ノ戦ヒニ主人勝頼ト共ニ死ス、其子平八郎忠直、徳川家康ニ識ラレ、二代將軍秀忠ノ侍從トナリ、慶長七年以上總國久留里二萬石ノ城主トナル、ソレヨリ數直、政直、昭直、陳直壽直、篤直、泰直、英直、寛直、彦直、寅直、ヲ經テ正四位舉直ニ至ル、君ハ其ノ長男ナリ、同二十五年家督ヲ相續ス、夙ニ學ヲ好シテ群書ヲ涉獵ス、二十八年東宮職出仕ヲ仰付ラレ、爾來忠實勤格ヲ以テ九重奥深キ處ニ仕ヘ奉ル、後年榮進シテ式部官トナリ、新進ノ有材ヲ以テ目セラル、尙三十四年茨城縣土浦町ニ土浦三輪銀行ヲ起シテ其行主タリ、由來上流社界ノ風紀漸ク亂レテ識者ノ憂懼ヲ買ヒツ、アルノ君、氣銳ノ秀才君ノ如キアリ、眞摯敦厚克ク勉メテ修養意ヲザルアリ、亦以テ祿々タル貴公子輩ニ示シテ三省セシムルニ足ル、君尙春秋ニ富ム、希クハ自重シテ未來ノ大成ヲ遂ケラレン事ヲ。

電話新橋 二百四十四番

草刈 隆一 氏

實業家

芝區公園九號地ノ一

君ハ周防國佐波郡西ノ浦村田中平造氏ノ次男、嘉永六年九月ヲ以テ生ル、年九才ニシテ姉宅ニ養ハレ明治九年草刈家ノ嗣子トナル夙ニ軍人タラント志シ、苦學精勵年アリ、サレド體質ノ伴ハサルアリ多年ノ志望ヲ棄テ、實業界ニ入ツテ修養ス、明治十一年下ノ關百十銀行ヲ設立シ入ツテ其ノ清算係トナリ尋テ五年支配人トナリ行務ヲ處理スル事多年、天性綿密精緻頗ブル記憶力ニ富ミ行中稱シテ活字引トナス、然レ共進退其ノ機ヲ知ルニ敏ナル君ハ二十六年感ズル處アツテ其ノ職ヲ辭セリ蓋シ胸中劃策ノ存スルアリテ更ニ大飛躍ヲ試ミシガ爲メナリキ、果セル哉廿八年出デ、東京ノ人トナリ、翌年三月東京銀行支配人トナル乃チ其深藏ノ手腕ヲ施シテ大ニ東都實業界ニ奮闘セント欲シ、徐ロニ其銳鋒ヲ露ハシタルニアリキ爾來天資ノ熱誠ト眞摯キ以テ事ニ當リ自然ノ判決ハ此偉才ヲシテ永ク池中ノ物タラシメズ、機會遂ニ到來シテ其眞價ヲ發揮セラル、ニ至レリ、尙故川田口銀總裁ノ知遇ヲ得、屢々有力ナル後援トシテ君ノ手腕ヲ發揮セシメタリ、先是明治二十年ノ交、對清對韓貿易ノ急務ヲ主張シ、自ラ渡航シテ實地ノ視察ヲ遂ゲ、多年ノ研究ヲ綜合シテ、日本商人ノ此方面ニ向ツテ發展セサルベカラサルヲ説キ、東奔西走一日ノ怠リナカリキ、氏當時人ニ語ツテ曰ク、商業ノ範圍ヲ廣クセヨ、眼前ノ小利ニ眩惑シテ同胞小舞臺ニ相闘グハ愚ノ極ナリ、試ニ一輩對水ノ彼土ニ渡ツテ實狀ヲ目撃セヨト、然リ對清貿易ノ先覺者トシテ到底君ノ名ヲ逸スベカラサルナリ、今ヤ眇タル東京銀行ノ一支配人ナリト雖モ、一度ビ胸中ノ經綸ヲ叩ケバ、眞個憂國ノ志士、極東ノ時事問題ヲ捕ヘテ從橫論議スル處、薄書埋裡ニ銖銖ヲ爭フ人ト思惟スル能ハサルナリ、君ノ眞骨頭果シテ如何、吾人ハ決シテ祿々タル實業界ノ一使衛人トシテ觀ル能ハサルヲ自白ス、好丈夫幸ニ健在ナレ。

電話芝 二千八百四番

市田兵七氏

青森縣郡部選出衆議院議員

青森縣西津輕郡本造町

(一一八)

其質實ナル性格ハ、彼ノ輕薄ナル現代ノ形式ヲ超脱ス、醇々朴々、一貫ノ至誠ヲ以テ事ニ任ズルモノ、コレ市田兵七氏ノ半面ナリ、シカモ熱烈ナル信仰ハ主義アリ、亦主張アリ、牢乎トシテ拔クベカラズ、然リ多年縣政ノ爲ニ盡瘁シ、今亦中央政界ニ處シテ硬骨今モ昔モ渝ラサルナリ。

君ハ陸奥國西津輕郡本造町ノ出身ニシテ、安政三年三月ヲ以テ生ル、家ハ土着人種中最モ由緒アル歴史ニシテ累世土地ノ豪族ヲ以テ名望近隣ニ鳴ル、シカモ一家ノ憲法トシテ儕世救民ノ美風ヲ遺セリ、君亦此家庭ニ人トナリ、夙ニ學ヲ修メテ造詣アリ、早クモ實業ニ従事シ、農業及銀行等ニ従事シテ産業上ニ貢獻シタルモノ亦尠ナカラサルナリ、既ニシテ身ヲ投シテ各種ノ名譽職ニ就キ、遂ニ推サレテ青森縣會議員同參事會員トナリ、土木ニ水利ニ、産業ニ教育ニ、銳意計算シタル功勞頗ル大ナリ、由來同縣ノ進歩ハ、世之レヲ誤ツテ遲緩ナリト稱スルモ、事實上近時ノ勃起ハ顯著ナルモノニシテ、其漸進的ナルト求メテ彩華ヲ採ラサル等ハ、其進運ヲ發表スルニ於テ餘リニ不適當ナリシナリ、サリ乍ラ同縣先覺者ガ勉メテ新進ノ氣運ヲ輸入セントシテ苦心シツ、アルハ爭フヘカラサル事實ニシテ、君等ノ平素唱導シテ止マサルナリ、前年推サレテ衆議院議員トナリ(二回)以テ今日ニ及ブ、先年、君同志加藤宇兵衛氏ト提携シテ憲政本黨ノ爲ニ盡瘁スル事多年ナリ、今ヤ立憲國民黨ノ成立スルニ際シ、政友ト共ニ其中堅トシテ東奔西走シツ、アリ、亦以東北代議士中ノ一人物ト稱スルニ足ル。

目賀田種太郎氏

男爵 貴族院議員

小石川區原町二十七番地

陰匿アルモノハ實割アリ陰行アルモノハ天ノ爵祿ヲ得易ク學ヲ積ムノ久シキモノハ人世ノ位勳ヲ收メ易シ社會果シテ悲觀カ世間果シテ樂觀カ宜シク已ノ修養ヲ積ミ宜シク已ノ學徳ヲ貯ヘ而シテ之ヲ斷ズベキノミ吾人目賀田君ノ今日アルヲ見テ必ズヤ其裏面ニ學徳ヲ蘊蓄スルノ深キモノアリヲ終ニ茲ニ至レルヲ欽仰セズンバアラサルナリ、君ハ靜岡縣目賀田幸助ノ長男ニシテ嘉永六年七月廿一日ヲ以テ生、幼少學ヲ愛シ書ヲ好ミ長ズルニ及ンデ名聲大ニ揚リ、明治初年米國ニ航シ經濟學ヲ研究シ造詣スル處大ナリ歸朝シテ同七年文部省ニ出仕シ、爾來判事及大藏省少書記官 兼參事院員外議官トナリ、尙大藏省參事官橫濱稅關長トリリ、尋テ醸造試驗所長等ヲ歷任シ其間各種ノ委員タル事甚ク多ク其ヨリ帝國議會ノ政府委員タル前後十四回會テ留學生監督トシテ歐米各國ニ航ス次テ韓國政府財政顧問ニ聘セラレ、卅九年四月、日露事件ノ大功ニヨリ特ニ華族ニ命セラレ男爵ヲ授ケラレ貴族院議員トナル、誠ニ君ノ如キハ明晰精確ナル頭腦ト源遠博大ナル學識トヲ以テ立チシ人ト云ベク、昔テ、松尾氏ト共ニ大藏省ノ活字典ト稱セラレシハ皆世人ノ知悉スル處ニシテ今ヤ城北ノ閑地靜カニ世ノ趨勢ヲ觀シツ、アルモ一念ノ至誠ハ邦家ノ爲ニ隠レタル貢獻ヲナシツ、アリ、實ニ君ノ如キハ明治財政史上逸スベカラサルノ人材ナルノミナラズ僅シタル功績ハ彼ノ武勳ノ赫々ニ比シテ人目ヲ映感セシムル者ナシト雖モ、此ノ質實ナル所以ハ形式ヲ以テ量ル能ハサル偉大ヲ意味ス、加フルニ高潔ナル人格ニ至ツテ之レヲ頌表スルニ於テ天下何人モ否定シ能ハサル處ナリ、願フニ故勝海舟先生ヨリ享ケタル薫化ハ之レ君ノ今日アラシムル所以ナラン歟。

電話番町 九百七十五番

(一一九)

吉松駒造氏

ドクトル
メヂチネ 醫學士

日本橋區濱町一丁目一番地

本邦小兒科醫界ノ大家タル吉松駒造氏ノ閱歴ヲ尋ヌルニ安政五年七月ヲ以テ豊前國企救郡小倉ニ生ル、世々小笠原伯爵家ノ舊臣タリ、父ヲ源五郎氏ト稱ス、明治五年藩ノ育徳館ニ入りテ文武兩道ヲ修メ、尋テ同七年中澤郡大橋ナル西洋學校ニ入り蘭人「フハン、カ、カステル」氏ニ就キ獨逸語ヲ修メ大ニ得ルトロアリ、後チ更ニ育徳館ニ歸リ英學ヲ學ブ、君ノ素志ヤ海軍ニアリシガ偶々父ノ病患ニ罹ルヲ見テ初メテ醫學ノ重要ナルヲ感ジ之レヲ研究セント欲シタルモ學資ヲ得ルノ道トテ更ニナシ、苦心慘憺ノ結果恰モ好シ、明治九年縣廳ニ於テ醫學本科生一名、別科生十一名ヲ選ビ、縣費ヲ以テ東京ニ遊學セシムルノ舉アリ、君亦之ノ選ニ當リ欣喜雀躍宿志ヲ果スノ時ヤ至レリト同年一月上京シテ大學豫備科ニ入り四年豫科ニ移リ定規三年ノ業ヲ卒ヘテ更ニ本科生トナリ内科學ヲ「ベルツ」外科術ヲ「スクリバ」兩博士ニ受ケ研鑽五ケ年ヲ經テ同二十一年十二月醫學士ノ稱號ヲ受領ス、是レヨリ明治十九年先代吉松氏ノ養フ所トナリテ其姓ヲ胃ス、因ニ云フ、君ハ元近藤氏ナリキ、大學卒業後小兒科研究生トシテ大學院ニ入ル、當時大學中ニ小兒科ナク弘田長氏獨逸ヨリ歸朝シ、初メテ講師トナリ教場ヲ開クヤ君直チニ之レガ助手ニ舉ケラレ大ニ斯學ノ奧堂ヲ極メシモ、小成ニ安スルノ士ニアラザレバ甚ダ以テ足ラサルヲ覺リ同二十一年六月職ヲ辭シ、佛國巴里ニ赴キ諸大家ノ門ヲ叩キ次ギテ獨逸「ストラーブルグ」大學ヲ參觀シ、伯林ニ至リ「ブレスラウ」大學ニ入り教授「ゾルトマン」氏ニ從ヒ實地ヲ研精シ後チ小兒科論文ヲ提出シテ「ドクトル、メヂチネ」ノ學位ヲ受ケ、同二十四年十一月歸途埃國維納ニ至リ小兒科有名ノ大家「ウイデルホーヘル」氏ニ就キ其學說ヲ聽キ又伯林ニ出テ「ヘーノツホ」氏ノ臨床講義ヲ聞キ、又獨逸滯在中第十回萬國醫學會ニ臨ミ小兒科會員トナリ廿五年業全ク卒ヘテ歸朝ス、如上ハ君ノ修養ノ時代ニシテ刻苦精勵一トノ怠リナク千辛萬苦志ス所ニ向ツテ直進シ今日ノ顯地位ヲナスニ資シタルナリ、歸朝スルヤ直チニ小兒

科病院ヲ開設シ之レニ院長トシテ専ラ救治ノ道ヲ盡ス、蓋シ我國ニ於ケル小兒科病院ノ嚆矢ニシテ、前ハ汪洋タル隅田ノ長江ニ對シ、欄ニヨツテ河面ヲ眺ムレバ、上シ、下スル船舶、彼方伏腕形ノ巨屋國技館指呼ノ中ニアリ、此自然ノ勝地、黃塵萬丈ヲ避ケテ既ニ地ノ利ヲ占ム、加フルニ君ガ多年ノ經驗ト深遠ノ學術ヲ以テ診療ニ從フ、院務ノ隆昌蓋シ故ナキニアラサルナリ、君此多忙ヲ割イテ尙且學術界ニ貢獻シ、進ンテ後進ノ爲メニ誘導ス扶掖ヲ怠ラズ、彼ノ慈惠會醫學專門學校ニ於ケル小兒科講師トシテ造詣ヲ開披シタルガ如キハ、亦以テ價値アル例證ナラズンバアルベカラズ、明治三十九年四月、皇孫殿下拜診御用掛ヲ仰付ラレ、特ニ侍醫ヲ命ゼラレ、一念精忠、只管尊キ御邊ニ御健康ノ事ヲ以テ奉仕シ、餘暇例ニヨツテ一般ノ診療ニ從事シツ、アリ、如斯ハ、其責任極メテ重大ナルト共ニ、單ニ一身ノ光榮ニアラスシテ、一門永ク紀念スベキノ名譽ナラズンバアルベカラサルナリ、如斯シテ君精勵日モコレ足ラズ、シカモ飄ツテ人格ニ及ベバ、温厚篤實ノ好紳士ニシテ、仁慈ノ情ニ富ム處、往年君ガ學ヲ選ンデ小兒科ニ執リシ動機、サコソト察セラル、モノ妙ナカラサルナリ、加フルニ當代識者ノ憂懼ヲ買ヒツ、アル醫弊氣質ノ如キハ到底君ニ向ツテ塵埃タモ求ムベカラサルナリ、或ル意味ニ於テ君ハ純然タル學者肌ナリ、超然トシテ俗ヲ脱スル處、自ラ對者ヲシテ尊敬セシムル力アリ、嘗テ閑却サレタル小兒衛生、育兒ノ大問題ハ、茲ニ有力ナル君等ノ熱誠ニヨリ、更ニ復活シテ更ニ向上セントス、吾人ハ青年時代ニ於ケル君ノ苦學ト、一貫スル君ノ品性ト、小兒科學界ノ勳功トヲ綜合シ、而シテ之レヲ尊敬シ、蕪文ヲ草シテ世ノ青年ニ示シ、以テ何等ノ據テ養スベキノ道ヲ明カニセント欲シテ止マサルナリ。

電話浪花 二千三百六十番

角倉賀道氏

畜産家 愛光舎主

神田區三崎町一丁目六番地

(三三三)

本邦ニ於ケル牛痘研究「オウソリチ」トシテ、將亦畜産界ノ成功者トシテ、君多年ノ奮闘、頗ル趣味アル而カモ活ケル立志傳ニシテ、後進子弟ノ服膺スベキ者ニ屬セリ、唯恨ムラクハ短篇本志ノ克ク其精細ヲ盡ス能ハサルヲ。

君ハ有名ナル角倉了意先生ノ後裔ナリ、先生ハ慶長年間安南貿易ヲ開始シタル外、河川ヲ開キテ舟筏ノ便ヲ通ズル等濟世救民ノ志厚キ一世ノ英傑ナリキ、彼ノ京都清水寺ノ本堂ニカケタル舟ノ額ハ、即チ安南貿易ノ紀念ニシテ、同本堂ノ樺ノ柱十八本ハ同家ノ寄進ニ係ルモノナリトイフ、爾後累世醫ヲ以テ業トナシ先代以知二氏ニ至ル、氏ハ牛痘研究ニ腐心シテ家産ヲ蕩盡シ、シカモ其目的ヲ達スル能ハスシテ他界ノ人トナル、君ハ其長男ニシテ安政四年三月廿日ヲ以テ生ル、年僅カニ十四、愛父ヲ喪ツテ慘憺タル孤兒ノ境涯ニ入ル、先考ノ遺言夢寐ノ間タモ忘レ難ク、京都醫學校ノ前身京都府療病院内學事局ニ入リ苦學數年業ヲ卒ル、十九歳ニシテ東都ニ上ツテ戸塚文海翁ノ下ニ寄食ス、後埼玉縣醫學校、神奈川縣十全病院等ニ職ヲ奉ズ、明治十七年天然痘避病院々長トナリ、亡父ノ遺志ヲ繼クノ機會ニ接セリ、翌年辭シテ神田三崎町ニ牛痘館ヲ起シ、牛痘苗ノ製造ニ從事ス、此間ノ苦心ニ至ツテハ到底秃筆ノ描キ能フ處ニアラサルナリ、此大革新ハ種々ナル波瀾ヲ生セシモ、今ヤ氏及北里博士ノ二ヶ所ヲ以テ日本全國清韓、ノ需用ニ應スルノ外更ニ氏ノ活動ニヨツテ太平洋沿岸、布哇等ニ向ツテ供給シツ、アリ、此事業ノ副産トシテ明治二十三年頃ヨリ牛乳搾取業ヲ經營シツ、アリシガ、結核牛ノ危険ナルヲ感シ、卒先シテ此缺點ヲ補フベク理想的牛乳店愛光舎ハ成立セリ、爾來頑冥ナル同業者ノ迫害ト戰ヒ、遂ニ政府ヲシテ結核乳牛取締規則ヲ發布セシムルニ至レリ、爾後痘苗製造ト共ニ主義アル搾乳業者トシテ半バ國家的經營觀念ニヨリ、意味アル努力ヲ提供シツ、アリ、即チ該事研究ノ爲ニ歐米ニ渡航スル事前後三回、彼地

ノ大家ニ親灸シテ大ニ得ル處アリ、歸朝後、全力ヲ盡シテ改良ニ從事ス、殊ニ優等乳牛ノ普及ハ其一部ノ理想ニシテ、或ハ自ラ渡航シ、或ハ人ヲ派シ、純米國優等種ヲ輸入スル事前後七回、今ヤ御料牧場及小岩井農場等ヲ除キ、本邦ニ於ケル同業者ニシテ乳牛ノ純良ナルヲ求メバ、何人モ指ヲ君ニ屈セサルハナキナリ、今ヤ神田三崎町水道橋畔ニ策源地ヲ置キ、事業ノ樞機ヲ掌リ、搾乳場トシテ城北巢鴨村ニ、宏莊ナル大建築ヲ有シ、現代科學ノ精粹ヲ應用シテ設備ノ完全ナル、他ニ比隣ヲ見サルナリ、更ニ武州大宮ノ名勝ヲ選ビ、廣袤十餘萬坪ノ模範的種牛牧場ヲ有シ、四百餘頭ノ純良種ヲ放チツ、アリ、加フルニ本多林學博士ノ設計ニ成ル四千餘坪ノ庭園ヲ附屬シ、隨意公衆ノ遊息ニ任セツ、アリ、尙其發明ニカ、ル殺菌器ノ如キ亦頗ル完全ナルモノナリト云フ、而シテ營利以外君ガ畜産界ノ爲ニ盡シツ、アルモノ一々枚舉ニ遑アラスト雖モ、彼ノ商業會議所議員トシテ専門上ノ調査ヲ擔當シ、關稅改正問題等ノ爲ニ貢獻シタル偉功ハ決シテ不問ニ附スベカラサルナリ、尙ホ防疫上ノ研究結果ヲ公表シテ同業者ヲ覺醒シタル如キ亦以テ德トスルニ足ル、サレド大體俗耳ニ入ラズ吾人滿腔ノ同情ト敬意ヲ拂ツテ君ガ衷情ヲ忖度シテ止マサルナリ、如斯シテ東奔西走絶大ノ精力ヲ傾注シテ斯界ノ爲ニ盡瘁サル、ノ外、四六時中、三崎町、巢鴨、大宮ノ循環線ヲ往來シテ刻時モ休止スルナキハ、到底帳場格子裏ニ煩悩スルノ氣樂連ト同日ニシテ語ルベカラサルナリ、蓋シ其人格ノ高潔ナルニ至ツテハ熱烈ナル宗教上ノ信仰上ヨリ來ル者ナラシカ、令息正道君曩キニ獸醫學校ヲ卒業シ直ニ傳染病研究所ニ於テ細菌學ヲ研究シ、今ヤ父君ヲ補佐シテ牧場一切ノ監督ニ任シツ、アリ、コレ君ガ波瀾アル歴史ノ概要ニシテ、不文體ヲナスト雖モ、後年明治畜産史ヲ編ム者ノ爲メ材料供給ノ一助トモナラバ、吾徒ノ本懷之レニ過キサルナリ。

電話本局 一千三百〇三番

(三三三)

田中榮八郎氏

實業家

本郷區根津宮永町三十六番地

自ラ信ジテ自ラ重シ自ラ斷シテ自ラ行フ堅忍不撓以テ、活社界ニ立チ進ンテ努力スルノ勇氣ト退キテ情慾ヲ節約スルノ慎重心ヲ以テ、自主獨行シ加フルニ天賦ノ才幹ヲ擁シテ目的地ニ進ム其成功ヤ得テ期待スベキナリ、聞ク君ハ東京府士族大川修三氏ノ三男ニシテ文久三年八月十六日ヲ以テ生ル、實ニ大川平三郎氏ノ令弟ナリ天性伶俐幼少文武二道ヲ好ミ分ケテ讀書ヲ愛シ、嬉戯自ラ群童ト異ナル、後年田中家ノ養子トナリ、明治二十五月二月家督ヲ相續ス、常ニ商業ニ從事シ以テ身ヲ立テ家ヲ起サント欲シ金湊ニ到リ外國商館員トナリ銳意専心業務勉勵シ此間君ノ辛苦ハ一方ナラザリキ、茲ニ於テカ、君ノ信用漸ク高ク世上豪紳ト往來シ殊ニ濫澤男ニ知遇ヲ受クル事多ク益々家運ヲシテ隆盛ニ赴カシム、明治廿九年十月福原有信、故和田、及ヒ半田小西等ノ諸氏ト共ニ關東酸曹株式會社ヲ起シ君撰バレテ専務取締役トナリ、外ニ令兄大川氏ト協力シテ幾多ノ商業會社ヲ經營ス、即チ東京硝子株式會社、盤城採炭株式會社、中央製紙株式會社、龍東木材株式會社等ハ其主ナル者ニシテ、殊ニ硝子ニ關スル研究苦心ハ頗ル大ナルモノニシテ、田中工場時代ヨリ今日ニ至ルマデ終始一貫努力ヲ提供シテ、アリ、即チ彼ノ『ビール』瓶ヲ本邦ニ於テ製造シタルハ、君ヲ以テ其嚆矢トナス、コレ事業界ニ於ケル君ノ概傳ニシテ、尠シク其活動振リヲ觀察スルモ亦趣味アルヲ覺ユ、想フニ君ノ品性ハ故乃父大川修三先生ノ人格ト、心服スル濫澤男等ノ衣鉢ニ享クル者大ナルナクンハアラサルナリ、即チ一切ノ虛飾ヲ避ケテ實質ヲ尙ビ、漸ヨリ漸ヲ逐フテ地盤ヲ堅實ナラシムル處、頗ル味フベキモノアリ、如斯一面謹嚴ナルト共ニ一面意ヲ公共事業ニ瀧ギ、貧民窮兒ノ救惠ノ如キ、寧ロ其癖ニ近シトイフ、亦以テ人格ノ片影ヲ捕捉スルニ足ラズヤ。

電話下谷 三百四十一番
全 千六百六十九番

深川喜次郎氏

實業家

佐賀市道祖元町

深川家ノ名、既ニ九隴ニ喧傳ス、中興ノ祖嘉一郎氏ハ、實ニ精力主義ノ權化ト稱セラレ、先見ノ明英斷ノ資猛烈ナル創業的天才ニヨリ、前人未發ノ事業ヲ遂行シタル一世ノ快男兒ナリ、由來鎮西實業家ノ錚々タルモノハ、悉ク這般ノ共通性格ヲ帶ブ、麻生然リ貝島然リ、我深川嘉一郎氏ハ、或ル點ニ於テ此二者ヲ抜クモノアリキ、即チ其造詣ノ多方面ニシテ活躍ノ範圍決シテ狭少ナラザリシナリ、之レヲ詳記セバ優ニ數百『ページ』ノ立志篇ヲナス、而シテ其人ヤ質素敦厚、富ヲ贏タンガ爲メノ活動ニアラスシテ事業其者ニ趣味ト而シテ大ナル執着力ヲ有シタルニ於テハ、亦敬意ヲ拂ハサルヲ得サルナリ、彼ノ筑後川下流ノ要地、三潞郡大川町若津港ヲ文明的ニ開發シタル事實上ノ偉人ナリ、思ヒ起メ今ヨリ二十有餘年前、同地ニ造船所ヲ設ケ、更ニ火輪船金華丸、寶國丸、ノ二隻ヲ新造シ、汪洋タル筑後川ニ浮ヘテ交通ノ便ニ充テ、同地ニ於ケテ該事業ノ嚆矢トシテ世ノ視線ヲ引キタルモノ、即チコレ嘉一郎翁ノ經營ナリキ、當主喜次郎君ハ其愛孫ニシテ、夙ニ慶應義塾ニ遊ンテ理財ノ學ヲ修ム、資性快活ニシテ同情ニ富ミ、好尚ノ英國式紳士ナリ、業卒ルヤ直ニ郷里ニ入り、箕裘ヲ繼クニ及ンテ刻苦精勵其家名ヲ墜サ、ラン事ニ努メ、守成の手腕ヲ擁シテ堂々歩武ヲ進ム、今ヤ佐賀縣ニ於ケル土着派ノ人士トシテ第一流ノ少壯家タリ、其事業遂行ニ勇斷ナル、髣髴トシテ祖父翁ノ偉アリ、願フニ同縣ニ於ケル福澤門下ノ代表者トシテ稱スルニ足ラムカ、爾來先代ノ遺業ヲシテ發展セシムルハ元ヨリ、地所株式會社ノ重役トシテ徐ロニ其才華ヲ發揮シツ、アリ、尙佐賀市商業會議所議員トシテ幾多ノ禿頭ニ拔ンテ、新進ノ意氣ヲ示シツ、アリ。

吾人ハ事業機線上ノ見解ニヨリ、九州西北部ノ産業分野ハ、群雄割據ノ状態ニアルヲ見ル、中原ノ鹿ノモ何人ノ手裡ニ歸スルヤ、コレ頗ル趣味アル問題ナルヲ思惟ス、尠クトモ君ノ如キハ一方ノ雄トシテ世ノ嚆望ヲ負フノ士ナラスンハアル可ラズ、君夫レ幸ニ自愛セラレヨ。

本多忠保氏

實業家

本郷區向ヶ岡彌生町三番地

人ノ活動セント欲スルヤ必ズ自己ノ精神ト體質ノ如何ヲ顧慮セザルベカラズ、若シ夫レ計畫ヲ忘リテ漫然其目的ヲ定ムルトキハ中途ニシテ挫折セサルコト鮮シ鶴ノ真似スル鳥ノ水ニ溺ル、ハ良キ例證ニアラズヤ、聞ク君ハ安政元年五月帝都ニ生ル、實父ハ舊幕臣ニシテ岡部駿河守トイフ、君ハ其次男幼ニシテ志アリ喜戯群童ト異リ、資性伶俐、本多雪山氏ノ養子トナリ其姓ヲ胃ス、長スルニ及ンデ時世ノ大勢ヲ鑑ミ卒先以テ文明主義ヲ鼓吹シ社界ノ進運ニ伴ハンコトヲ期シ、明治五年研學ノ目的ヲ抱イテ金港ニ至リ修文館ニ入學シ勉學意ヲズ英學ヲ研究スルコト數年、大ニ其濫與ヲ極ム後ニ感スル處アリテ將來ノ方針ヲ實業ニ樹テシモ明治十一年一先印刷局ニ職ヲ奉シ當時ノ御雇教師、外人「キヨソネ」氏ト共ニ印刷事業ヲ研究シ同氏ノ歸國スルヤ、君專ラ其業ヲ擔當スルニ至レリ、三十二年官ヲ辭シテ期スル處アリ、思ラク民間ニ於テ此事業ヲ經營セバ成功以テ期スベキノミト途ニ三十三年一月ニ至リ河合辰太郎氏等ト共ニ資本金四萬一千圓ヲ以テ凸版印刷合資會社ヲ起シ、重役トシテ技術長トシテ、多年ノ老技ヲ實地ニ施シ、漸進的ニ堅實ナル地盤ヲ築造セリ、業務愈々隆盛ニ赴キ、更ニ増資シテ二十萬圓トナシ、銳意發展ヲ計リテ成績常ニ良好ナリ、前年經濟界不況ノ際ニモ拘ハラズ、組織ヲ擴張シテ資本金五十萬圓ノ株式會社トナシ、君亦取締役兼技師長トシテ敏腕ヲ發揮シツ、アリ、願レハ同社創業以來茲ニ十有餘年歳月永シト稱スルニ足ラサルモ、此長足ノ進歩ヲ示シツ、アル所以、一ニ君等ノ精勵ガ、具體的ニ出現シタルニ外ナラサルナリ、即チ斯業ニ對スル君ノ熱心ハ、到底局外者ノ窺ヒ知ル能ハサル處ニシテ、三十一年凸版事業ノ幼稚ヲ憂ヒ當時僅カニ十九歳ノ令息ヲシテ、英、佛、獨ノ諸國ニ見學セシメタル如キ其一例ナリ、如斯シテ君多年斯業ニ盡瘁シ、シカモ天資ノ趣味性、一管ノ筆ヲ俠ンデ好メル繪畫ニ風懷ヲ洩シツ、アリトイフ。

電話下谷 千八百十四番

高田 畊安氏

東洋内科醫院長

神田區駿河臺鈴木町二番地

我邦内科學殊ニ呼吸器科ノ泰斗タル、君ハ安政元年八月ヲ以テ京都府加佐郡中筋村字京田ニ生ル、少壯醫學ニ志シ、明治九年五月遂ニ京都府醫學校豫備校ニ入學シ同十二年卒業シ次デ京都醫學校本科ニ轉學シ同十七年四月全科ヲ修了シ、同年十一月大學豫備門ニ於テ學力試驗ニ合格シ十二月醫科大學ニ入學シ二十二年十二月醫學全科ヲ卒業シ醫學士トナリ、二十三年三月醫科大學無給助手ヲ被命二十四年醫科大學助手ヲ命ジ、第一勤務申付ラレシガ同二十九年三月事情アリテ職ヲ辭ス、天性ノ信仰心ハ社會人道ノ爲ニ盡サントス、第一醫院勤務ニ從フノ傍ラ自家特長ノ内科ニ就テ深ク研究ス其専門的伎倆ニ於テハ出來星博士輩ノ企テ及フ處ニアラズ、博士以上ノ學士トシテ斯界ニ鳴ルハ單リ吾人ノ贊辭ノミナラザルナリ、二十九年現所ニ東洋内科醫院ヲ設立シ專ラ自己ノ理想ヲ以テ事ニ當リ、院名、君ノ名ト共ニ高シ、三十二年分院ヲ相州茅ヶ崎ノ海濱ニ設ケ、今ハ市ヶ谷見附内帯阪ノ附近、高燥閑集ノ地ヲ相シテ新ニ分院ノ建築ニ着手セリ、以上ハ君ガ國手トシテノ小歴ニシテ其他傳フベキモノアリト雖モ、特ニ吾人ガ筆ヲ淨メテ世ニ示サント欲スルモノハ、其伎倆ノ外ニシテ君ノ人格性行ナリ、君ハ熱心ナル基督教徒ニシテ其信仰ノ堅實ナル、祿々タル輕薄才子ノ亞流ニアラザルナリ、其初メ深ク人類ノ墮落ヲ奮慨シ、入テ救主ノ福音ニ接受シ、爾來安心立命ヲ得テ其業務ヲトルニ至リタルナリ、即チ君ガ博愛主義モ、又貧民施療モ、盡ク此信念ノ發露シタルニ過ギザルナリ、嗚呼澆季ノ末法篤實君ノ如キハ正ニ之レ鷄群ノ一鶴ト願スベキナリ。

電話本局 八百八十八番

全 八百九十八番

小野田元瀨氏

香川縣知事

香川縣廳知事官舎

君ハ舊館林藩主秋元家ノ臣下ニシテ嘉永元年二月十一日ヲ以テ館林城内ニ生ル、父君ヲ藤野逸平氏ト稱シ君ハ其次男ナリ、後同藩士小野田安兵衛氏ノ遺言ニヨリ其死後ノ養子トナリテ跡目ヲ相續ス、時恰モ幕末天下騷然タルノ時ニシテ、君年僅カニ十四歳ナリキ、爾後野州日光山警衛等ニ從事シ、世上ノ風雲愈々急ヲ告クルヤ、有志者ト共ニ東奔西走シ、早クモ少年志士ノ名ヲ博スルニ至レリ、由來同藩ハ徳川譜代ノ列ナルヲ以テ、當時時事ヲ論ズル者ハ閉門又ハ永ノ暇トナルノ狀況ナリキ、故ヲ以テ戊辰ノ秋ニ際シ佐幕ノ論ヲ生スルニ至レリ、サレト君ガ恩師古屋直彦氏ハ、偉人大橋訥庵ノ門人ニシテ大義名分ノ說ヲ把持セシヲ以テ、君亦此黨化ニヨツテ勤王論ヲ主張シ、幾多ノ危險ヲ冒シテ主義ノ貫徹ニ努メ、遂ニ東山道ノ官軍東下ノ節藩論勤王ニ歸スルニ至ラシメタリ、君直ニ羽前ノ陣屋ニ到リ奥羽二十一藩同盟ノ際ハ死生ノ間ヲ出入シ辛フシテ本國ニ歸還スルニ至レリ、爾來五十歳以下悉ク兵トナスノ建議ヲナス說行ハレテ、仙臺、會津兩所ニ一大隊宛出兵セシムルニ至レリ、既ニシテ王政復古シテ廢藩置縣ノ實施セラレ、府兵ヲ廢スルニ當リ、百二十人四屯所ノ人数ヲ鹿兒島藩ヨリ二十人、館林藩ヨリ十人ヲ出シテ組取締組ヲ組織スルヤ君茲ニ勤務シ、爾來引續キ警察官トシテ警視廳ニアル事十六ヶ年、其間故川路大警視ニ隨行シテ歐米各國ノ警察、監獄、消防等ノ實狀ヲ調査シ、小形ノ蒸氣「ポンプ」ヲ携帶シ歸ルニ至ル、彼ノ江戸ノ花ト稱セラレタル火災ノ慘劇ハ、此偉大ナル資ニ依テ文明的ニ救濟ノ端緒ヲ啓發セリ、コレ決シテ埋没ニ附スベキモノニアラサルナリ、明治廿六年内務省警保局長トナリ、爾來茨城、山梨、静岡、宮城、ノ各縣知事ニ歴任ス、五年二月香川縣知事トナリ、勅任官一等ニ榮進シ正四位ニ叙セラル、卅九年四月日露戰役前後ノ功ニヨリ勳一等旭日大綬章并ビニ金三千圓ヲ下賜セラレ、翌四十年五月從三位ニ昇叙セラル、君亦當代官海ニ於ケル、能吏ノ典型ナリト謂フベシ。

内海三貞氏

實業家

下谷區上根岸町四十九番地

之ヲ開ケバ天地ニ充チ之ヲ捲ケバ懷ニ藏ムベキハ孟子ノ所謂活然元氣ニ非ズヤ、元氣旺盛氣橫溢セルモノハ事業ヲ爲スニ於テ最モ必要ノ條件ナリ、英人ノ諺ニ意氣強健ナルモノハ大瀧ノ如ク人ト共ニ道ヲ拓クト善イカナ言ヤ、我内海君ハ活動的ノ人ナリ元氣ノ人ナリ至誠ノ人ナリ熱血ノ人ナリ主義ノ人ナリ抱懷アルノ人ナリ苟モ主義ニシテ容レラズンバ去ツテ其抱懷ヲ他ニ展ベントス、片時モ因循沈滯スルヲ屑シトセズ是レ君ガ賦性ナリ資性ナリ宜ナルカナ今日君ガ大成ヲ見タル事ヤ、君ハ東都ノ人舊旗下ノ士内海利貞氏ノ三男ニシテ明治元年四月ヲ以テ生ル、幼ニシテ機慧大志アリ學ヲ好ミ書ヲ愛シ温厚父母ニ事ヘテ其孝順ナル隣保皆稱與シテ神童ノ名アリ、夙ニ普通ノ學ヲ修メ長ズルニ及ンテ工部大學校ニ入り更ニ東京帝國大學ニ編入ス爾來寢食ヲ忘レテ日夜勉勵シ工科大學應用化學科ヲ卒業シ、工學士ノ稱號ヲ受クルニ至レリ、既ニシテ新造詣ヲ擁シテ實業界ノ人トナル、明治廿二年、北海道「セメント」株式會社ニ入ツテ技士長トナリ、熱心ナル計劃ニヨツテ同社ノ生産ヲシテ完全ナラシム、同廿七年仕官シテ農商務省特許局審査官トナリ次デ兼ヌルニ内國勸業博覽會審査官ヲ以テス、翌二十八年彼ノ三河「セメント」會社ガ單ニ工場トシテアルノ當時、入ツテ是レガ整理ニ任ジ拮据經營幾多ノ研究ヲ重ネ三十一年主トシテ「ポルトランドセメント」製造販賣ノ目的ヲ以テ、中京ノ紳商、祖父江、伊藤、岡谷、ノ諸氏ト共ニ三河「セメント」株式會社ヲ創立シ當面ノ經營ニ當ル、三十五年中央「セメント」株式會社ニ聘セラレテ技士長トナル如斯シテ「セメント」ニ關スル君ノ苦心ハ、決シテ一朝一夕ノ事ニアラズシテ、技術家トシテハ、斯業ノ「オウソリチー」ト稱スルモ、何人ト雖モ否定スル能ハサル處ナリ。

電話下谷 千八百九十三番

市川文藏氏

貴族院議員

山梨縣中巨摩郡五明村

(一四〇)

多年父祖ノ家憲ヲ奉ジテ熱心公共事業ニ盡瘁シ、政治實業ノ兩難臺ニ跨ツテ誠心邦家ノ爲ニ努力ス、彼ノ祿々タル富豪ト趣ニ異ニスル者君ナリ、由來市川家ハ祖先ハ佐々木氏ニ出ヅ、一族江州ノ亂ニ逃レテ流浪ノ身トナリ、落延ヒテ甲州ニ土着シ、武田家ニ仕ヘテ功勳アリ、後年甲冑ヲ脱シテ耕鋤ニ身ヲ托シ以テ子孫ノ繁榮ヲ計ルニ至ル、姓ヲ改メテ市川ト稱ス、後代ヲ重ネテ益々近郊ヲ開拓シ、卒先シテ各種ノ施設ニ任ズ、斯クノ如クシテ累世武士的基礎觀念ヲ以テ事ニ當リ、富徳共ニ繁榮ス、降ツテ徳川時代ニ至リ、將軍ノ直屬領地ノ故ヲ以テ同家ハ郡中總代ノ職ヲ帶ブ、先代多衛門氏ハ、有名ノ奇行家ニシテ王政維新ノ後一切ノ俗事ヲ避ケ、超然トシテ世外ニアリ、シカモ容易ニ斷髮セサリシ如キハ其面目ノ一端ナリ、サレド資性ノ慈善心ハ、屢々世ノ孤弱ヲ賑恤シ、鄉民今尙徳トシテ景仰ス、當主文藏氏ハ其長男ニシテ、元治元年十一月廿二日ヲ以テ生ル、夙ニ土地ノ碩儒ニ就テ和漢ノ學ヲ修ム、二十一歳ニシテ愛父ヲ失ヒ、爾來一家ヲ統轄シテ孳々乎タリ、夙ニ村長、村會、郡會、縣會等ノ議員ヲ歴任シ、治水ニ土木ニ、産業ニ、教育ニ、各種ノ委員トシテ奔走シタル處決シテ妙ナカラサルナリ、往年同縣多額納稅議員補選選舉ニ際シ、推サレテ貴族院議員トナル、爾來上院ノ硬團土曜會ニ籍ヲ置キ、同志ト共ニ奔走意ヲズ、コレヨリ先、同家一族ヲ中心トシテ創立シタル株式會社市川銀行頭取トシテ縣下屈指ノ健全ナル金融機關トシテ信用第一流ニアリ、更ニ同縣農工銀行ガ客亂ノ後ヲ享ケテ一大整理ヲ遂ゲ、茲ニ九年間孜々トシテ發展セシメ、遂ニ世ノ要求ニ應ジテ増資スルノ程度ニ至ラシメタリ、次テ同志ト共ニ彼ノ有望ナル富士水電ヲ起シ、其取締役トシテ參劃シツ、アリ、君爲人温厚篤實、人ト語ツテ城府ヲ設ケズ、會談對手ヲシテ倦マシメズ、政治實業上ノ手腕ニ至ツテハ既ニ如上ヲ以テ證明スルヲ得、終リニ公共慈善事業ニ對スル善美ナル其態度ヲ頌シ、附記シテ茲ニ筆ヲ擲ク。

大熊氏廣氏

彫像家

小石川區竹早町百一番地

君ハ武藏鳩ヶ谷町ノ人安政三年六月ヲ以テ生ル、幼ニシテ繪畫ヲ好ミ夙ニ光淋派雨華庵某ニ就テ學ビ、亦洋畫ヲ川上某ニ學ブ、後チ明治九年更ニ工部省美術學校ニ入り伊國人「ラクザ」氏ニ就キ彫刻學ヲ學ブ、成績常ニ他輩ヲ拔キ、同十三年推サレテ同校助教授ニ任ゼラレ、同十五年首席ヲ以テ卒業ス、尋テ翌十六年嘱托ニ依ツテ有栖川宮邸建築彫刻部擔任ヲ命ゼラレ、同十八年皇居御造營釘陰彫刻仰付ラレ、同年觀古美術會行啓ノ際御前彫刻仰付ラレ、同十九年故大村兵部大輔銅像製作主任ヲ命ゼラレ首尾克ク竣成シテ名聲益々揚ガル同廿一年伊國羅馬ニ航シ同國美術學校ニ入り同國第一ノ彫像家「モンテベルデ」氏ニ就キ深ク斯道ノ真髓ヲ究メ、又佛國巴里府美術學校教師「ファルギール」氏ニツキ彫像術研究ノ上歸朝ス、次デ故毛利敬親公銅像設計ヲ依托セララル、先是明治十八年以來獨國伯林ノ萬國博覽會其他各國開催ノ美術品評會、勲業博覽會等ニ於テ金銀賞杯賞狀等ヲ授ケラル、又外ニ東京工藝品共進會、美術協會、東京彫工會、競技會等ノ審査委員ヲ嘱托セラレ、亦日本美術協會第三部委員、臨事博覽會事務局監査官等ニ舉ゲラレシ事數回、其製作中著名ナル物ハ故大村氏、改有栖川宮殿下銅像故北白川宮殿下石齋御肖像等ノ各銅像ハ重ナルモノニシテ、右ノ中有有栖川威仁親王殿下ニハ殊ノ外御満足ニ思召サレシ旨ヲ以テ御紋付御袖釦壹組ヲ下賜セララル、尙明治廿七八年戰役ノ際靈應高千穂銅像ヲ製作シテ皇上ニ獻納シテ嘉稱セララル、同卅三年皇太子製下御慶事ニ際シ、各省大臣ヨリ祝賀獻納品ナル銀製鑄馬像ノ製作ヲ嘱望セラレタリ、今ヤ故小松宮銅像製作ヲ命ゼラレ辣腕以テ眞技ヲ奮ヒツ、アリ、大婚二十五年大典ヲ祝シ、内閣諸公ヨリ献上セララル、兩陛下御料御馬銀鑄製作、山縣元帥銅像故伊藤公銅像、歩兵第五聯隊雪中行軍遭難紀念銅像、(八甲田山ニ建設)臺灣總督府警官招魂碑等ハ亦快心ノ作タルヲ失ハサルナリ。

電話番町 八百四十八番

(一四一)

前田武四郎氏

合資會社工業雜誌社長
實業家

麻布區新堀町七番地

棟梁ノ人材ハ嫩葉ニシテ其ノ質ヲ表シ冲天ノ蛟龍雛爪ニシテ其ノ氣ヲ吐ク後來人ニ卓越スルモノ年少ノ時代既ニ自ラ其ノ光芒ヲ露セリ、前田君十二三ノ垂髫ヲ以テ學ニ志シ一タビ郷譽ノ考試ニ應ズルヤ精熟審判ノ績先進ノ舌ヲ捲テ驚嘆スルトコロナリシトイフ。

聞ク君ハ新潟縣ノ人前田武平ノ二男ニシテ幼少喜戯群童ト異ニス常ニ學ヲ愛シ書ヲ好ミ、夙ニ和漢ノ學ヲ修メ造詣スル處甚々多シ長ズルニ及ンテ時勢ノ大勢ヲ洞察シ早クモ實業ヲ以テ身ヲ立テ名ヲ顯ハサント欲シ、明治三十年分家シテ帝都ノ人トナリ、機械製造業ヲ營ミ斯業ニ熱心次第ニ信用ヲ博シ上流ノ豪紳ト交ヲ結ビ明治三十二年、岩垂邦彦氏外數名ト共ニ日本電氣株式會社ヲ創立シ、爾來熱心ヲ以テ業務ノ擴張ニ努メ、推サレテ監査役トナル、幾キニ増資シテ壹百萬圓トナシ、隆々乎トシテ向上シツ、アリ又一面合資會社工業雜誌社ヲ設立シ社長トシテコレガ經營ニ任ジ、専門的立脚地ヨリ編輯サレタル同誌ハ、蓋シ當代新聞雜誌界ニ於ケル眞面目ナルモノニシテ批評セラレツ、アリ、尙多年東京商業會議所議員トシテ中央產業界ノ爲ニ忠實ナル先覺者トナリ、外ニ電氣業組合副會長トシテ斯業ノ發達ヲ計算シツ、アルガ如キハ、尠クトモ感謝ノ意ヲ表セサルベカラサルナリ。

君資性快活、人ト對シテ能ク談シ、毫モ城府ヲ設ケズ、洒々落落々ノ襟度ハ亦以テ敬服スルニ足ル、シカモ事ニ臨ンテ忠實ナルハ儕輩等シク稱揚スル處ニシテ慥カニ君ノ美點タルヲ失ハサルナリ、即チ中央實業界ノ一異材トシテ未來ノ大成ヲ至嚮セラレツ、アル所以ナランカ。

電話芝 四百四十五番

男 全 三 郎 氏

實業家

品川徒步新宿百九番地

中央實業界、老練ノ大家アリ、將亦少壯ノ敏腕家アリ、彬々乎トシテ流行兒ヲ輩出ス、城南ノ老紳男全君亦流行兒カ、知ラズ吾人ハ此意味ノ立脚地ヨリ君ヲ傳セント欲スル者アラズ、即チ血性江戸氣質ノ活快ニ與シテ本篇ニ物色セント欲スルニアリ、先ツ其小歴ヲ揚ケテ加フルニ寸評ヲ以テセントス。

君ハ東京府平民飯田庄十郎氏ノ長男ニシテ、安政五年七月四日ヲ以テ生ル、夙ニ敏慧ヲ以テ隣保ニ名アリ、年僅カニ十四、推サレテ副戸長トナル、由來同家ハ土地屈指ノ名望家ニシテ、先代ハ名主取締トシテ當時公共事業ニ盡瘁シ、德望今尙口碑ニ傳ヘラル、君此衣鉢ヲ受ケテ早クモ名譽職ヲ帶ブ、亦異數ノ事ニ屬ス、明治十一年戸長トナツテ以來、引續キテ各種ノ公職ヲ帶ス、明治二十六年先代萬藏氏ノ養子トシテ家督ヲ和繼ス、既ニシテ身ヲ實業界ニ投ジ、去ル三十一年同志福原氏等ト共ニ品川金融株式會社ヲ起シ、推サレテ監査役トナリ業務ノ盛昌ヲ計ルト共ニ一面、品川銀行取締役トシテ計籌スル處アリキ三十八年家督ヲ長男萬藏氏ニ譲リ、品海ノホトリ、徐ロニ多年奮闘ノ勞ヲ慰シツ、アリ。

君爲人温厚篤實、深ク慈善公共事業ニ同情ヲ有シ、爾來之レニ向ツテ精神ニ物質ニ努力ヲ拂ヒタルモノ一々枚舉ニ遑アラストイフ、今ヤ俠骨江戸氣質ノ衰廢ハ、滔々トシテ浸入シ來ラントス、此時君ノ近狀ヲ耳ニシテ聊カ快感ナキ能ハズ、即チ採ツテ以テ材トスルニ至リシナリ、サレド多年奮闘ノ經路ニ止メテ細說ニ及ハサリシハ、コレ本書編輯例ノ範圍ニ於テセシノミ、希クハ君健在ナレ。

電話芝 百九番

高松豊吉氏

工學博士
東京瓦斯株式會社專務取締役

本郷區駒込西片町十三番地

(二四四)

東京瓦斯ノ重鎮、高松博士ハ東京ノ人ナリ、嘉永五年九月ヲ以テ淺草區阿部川町ニ生ル、少年ノ頃、舊東京天文臺主中西金吾氏ニ就テ數學及漢學ヲ修ム、明治四年大學南校ニ英學ヲ修ム、同八年開成學校普通科ヲ卒業シ、尋テ東京大學ニ化學ヲ專修シ、十一年十一月全科ヲ卒業シテ理學士ノ稱ヲ受ク、直ニ東京師範學校ニ教鞭ヲ採リツ、アリシガ、翌十二年命ヲ以テ英國「マンチエスター」府「オエンス」大學ニ入ツテ理化並ビニ製造化學ヲ修ム、苦學修業幾多ノ白人ヲ凌駕シテ成績頗ル良好ナリ、後同大學製造化學ノ定期大試験ニ應ジ、最高點ヲ得テ書籍二卷ヲ賞セラル、次テ獨逸伯林大學ニ入り再ヒ製造化學ヲ研究ス是ヨリ先キ「ロンドン」化學會員ニ舉ケラレマタ伯林化學會員ニ推サレ更ニ英國工業化學會員トナル、コレ君ガ修學時代ノ略歴ニシテ其造詣ノ深キ所以ヲ知ルニ足ラズヤ、歸朝後文部省御用掛兼大學理學部及豫備科講師ヲ命セラレ、十七年以後、理科大學教授、職工學校應用化學講師、工科大學教授、東京職工學校教諭、東京工業學校教授等ニ歷任シ、後進誘掖ノ爲ニ盡瘁スルト共ニ本邦製造化學界ノ發展ニ貢獻シタルノ勳功ハ亦以テ特筆大書スルニ足ル、三十二年農商務省特許局審判官ヲ命セラレ、翌年歐米各國ニ出張シ、三十四年歸朝シ前官ニ兼ヌルニ工科大學教授ヲ以テス、此以前高等官一等從四位勳四等ニ陞叙シ工學博士ノ學位ヲ賜ハル、其著化學書ハ、後進唯一ノ指南車ナリ、尙染色術ニ關スル獨特ノ識ハ、蓋シ他ニ匹儔ヲ見サルナリ、前年官ヲ辭シテ東京瓦斯株式會社ニ入り、專務取締役にシテ當面ノ局ニ當リツ、アリ、會社營業振リハ既ニ世ノ定評アリ、千代田瓦斯ノ創業ニ對スル樂觀的計劃、博士ノ人格ヲ窺フニ足ラズヤ、茲ニ工業界ノ偉人トシテ概歴ヲ抄録シ以テ世ノ後進ニ示ス。

電話下谷 一千七十一番

池田仲博氏

侯

爵

麻布區市兵衛町一丁目三番地

當家ハ清和天皇ノ皇孫鎮守府將軍源經基五世ノ孫右馬允池田泰政ノ後胤紀伊守恒利ノ男紀伊守信輝ノ後ナリ、信輝始メ勝三郎ト稱ス織田信秀信長ニ仕ヘテ軍功アリ、天正十二年長湫ノ役秀吉ノ軍ニ屬シ子之助ト共ニ戰死ス其次男左衛門輝政其後ヲ繼ギ秀吉ニ從フテ戰功アリ後德川家康ニ屬シ其二女ヲ娶リテ室トナス、慶長五年關ヶ原ノ役後、播州姫路ノ城主トナリテ五十二萬石ヲ領ス次男左衛門督忠繼、別ニ一家ヲナシ備前二十八萬石ヲ領ス、之レ即チ當家ノ祖ナリ、慶長十八年父輝政ノ遺領ノ内播州三郡九萬八千石ヲ加ヘラル大坂ノ役ニ從軍シテ勳功アリ歸國後卒ス年僅カニ十七歲嗣子ナキヲ以テ同母弟宮内少輔忠雄家ヲ繼ギ後參議ニ任ス忠雄ノ子充仲寛永九年因伯二州ヲ賜テ之ニ移リ鳥取卅二萬石ヲ領ス其レヨリ十三代ヲ經テ君ニ至ル、君ハ前ノ將軍今ノ公爵德川慶喜氏第五男ニシテ明治十年廿八日ノ誕生ナリ、幼名博ト稱シ夙ニ實父ノ資性ニ感化ヲ受ケ、温厚ノ裡而カモ活智ニ富ム、同廿三年二月廿七日養ハレテ先代池田輝知侯ノ嗣トナル同年四月輝博ト改メシガ輝仁親王ノ御名ヲ避ケテ現名ニ改ム幼ニシテ軍人ニ志シ普通學ヲ終ツテ陸軍士官學校ニ入ル、爾後嚴格ナル校風ニ化セラレテ其神心ヲ鍛練シ其人格自ラ高潔ナルモノアリ明治卅年六月勳四等ニ同八月從五位ニ叙セラレ、三十一年十一月士官學校卒業シ卅二年六月陸軍歩兵少尉ニ任セラレ、近衛歩兵第二聯隊附ニ補セララル、卅三年正五位ニ叙セラレ卅四年十一月陸軍歩兵中尉ニ任ズ、三十五年十月從四位ニ叙セララル、卅七年二月復職近衛歩兵第二聯隊補充大隊附ニ補セララル、同年三月本職ヲ免セラレ陸軍幼年學校生徒隊中隊附ニ補セララル、同年九月再ビ休職、卅九年四月、明治卅七八年戰ノ功ニ依リ旭日小綬章并ニ金百圓ヲ授ケ賜ハル、四十年六月從軍紀章拜受、四十二年九月休職滿期ニ付豫備役仰付ラル、蓋シ當代貴公子中稀ニ見ル人格ノ人ナリト稱セララル、モノ故アツト謂ツベシ。

電話新橋 千百三十二番

(一四五)

恒松隆慶氏

嶋根縣郡部選出衆議院議員

芝區西久保巴町十六番地

政治家モ亦多シ名利ヲ追フモノアリ、權勢ニ奔走スルモノアリ、專念國家ノ爲ニ盡スモノアリ、滔々タル百千ノ政治家中、其後者ニ屬スル者果シテ幾干カアル。

君ハ嘉永六年五月石見國邇摩郡靜間村ニ生ル、年漸ク十五、同國安濃郡長久村恒松家ヲ襲グ、幼ニシテ儒者泉全齋、恒松強二氏ノ塾ニ遊ビ十六歳ニシテ舊徳川幕府大森代官所ヨリ居村年寄役ヲ命ゼラレ、次デ明治五年安濃郡鳥井村外數村ノ戸長トナル、爾來絶エズ郡村及ビ縣ノ公職ヲ歴任シ、同廿七年遂ニ島根縣會議長ニ舉ゲラル、其間衛生、教育、産業等ニ關スル公職ヲ兼ネタル事枚擧ニ遑アラザルナリ、亦安濃銀行島根農工銀行等ノ設立委員トシテ多年盡瘁シ推サレテ其取締役トナリ今尙其職ニアリ、君由來縣下養蠶業ノ不振ヲ慨シ私財ヲ抛テ養蠶傳習所ヲ自宅ニ設ケ普ク斯道ニ關スル全般ノ講話ヲ開キ親シク門下生ヲ黨育セシ事前後二年、亦桑苗ヲ作りテ公衆ニ分與シ以テ同地方蠶業發達ヲ助長セシ功績ハ舉ゲテ大ナルモノト云フベシ、又同縣ハ隱岐列島ヲ包有スルガ故ニ水産物極メテ夥多ナリ從テ斯業ノ興隆ヲ計ルベカラザルハ軌近ノ急務ナルヲ思ヒ同志ト提携シテ水産聯合會議所ヲ設立シ推サレテ其所長トナリ大ニ斯道ノ發達ヲ獎勵セリ、君嘗テ大演習陪觀ノ後大阪城内ニ於テ、陛下ニ御陪食ヲ仰付ラレ亦受賞セラレシ事數フルニ暇アラズ、君頗ル公共ノ心厚ク、明治廿六年島根縣下大水害ノ際、陳情委員トナリテ上京シ國庫ヨリ七十萬圓ノ補助ヲ受クルニ至ラシメタリ、如斯ニシテ衆望ニ期スル處明治廿七年第三回總選舉ニ推サレテ衆議院議員トナリ爾來連續當選以テ今日ニ及ブ亦輿望ノ厚キ事政界稀ニ見ルノ士ナリ、尙明治廿七八年日清、同卅七八年日露兩戰役ノ際ニハ共ニ渡清シテ戰地ヲ視察シ親シク軍士ヲ慰問セリ、宜ナル哉前後ノ功ニヨリ特ニ三ツ組銀盃一組ヲ下賜セラル、今ヤ立憲政友會山陰支部ノ一異材トシテ其英職ヲ全フシツ、アリ。

小室三吉氏

實業家

赤阪區新坂町四十二番地

洛陽ノ一奇骨故小室信夫先生ハ、明治士林稀ニ見ルノ快男兒タリキ、彼ノ中江兆民、福地櫻痴ト併稱セラレ、幾多ノ逸話ハ以テ一卷ノ單行本ヲナス、豪遊連日千金ヲ散シテ快ヲ叫ブ、花々シテ半面ハ人皆之レヲ稱ス、シカモ裡面ニ於ケル哲學的工夫ニ至ツテハ質素ナル丈ケ人目ヲ眩惑スルモノナシト雖モ、コレ快シテ閑却スベキ問題ニアラザルナリ、偉大ナル先生ノ人格ハ、輕薄ナル後輩共ノ小ヲ以テ量リ得ル處ニアラサルナリ、本章ノ主人公、其息男ニシテ大ニ乃父ト趣ヲ異ニス、即チ先人ノ豪磊ニ比シテ後者ノ謹直ナル、先人ノ奇拔ニ比シテ後者ノ篤實ナル等コレナリ、試ニ語ヲ換ユレバ、前者ノ東洋式ニ比シテ後者ノ英國式ナルニアリ、サレド前者後者共ニ一貫スル俠骨ハ、亦蔽フベカラサル性格ナリ。

君ハ出生文久三年七月九日、處ハ正ニ西京ノ地、夙ニ乃父ノ薰陶ヲ享ケテ人トナリ、長ジテ東都ノ遊子トナリ、一橋商業學校ニ費ヲ執ル、卒業後三井物産會社ニ入ル、蓋シ同所ハ若干學閥登用ノ見アリシモ事實ニ於テハ寧ロ極端ナル實力登用ナリキ即チ幾多ノ秀才ガ、拔擢セラレテ重用セラレタルモノ亦極メテ多數ナリキ、君亦此選ニ入ツテ上長ノ期望ヲ受ケ、累進シテ上海支店長トナル、蓋シ、複雜ナル對清貿易ハ、君ノ手腕ニ依テ發展シタルモノ尠ナカラザリキ、同所ノ難務ハ、倫敦、紐育ト共ニ稱セラレ常ニ敏腕ナル新進ノ有材ヲ置キ、東洋貿易ノ霸權ヲ掌握セントスルニアリ、君克ク其任ヲ敢行シテ堅實ナル君ト、辣潑タル山本氏トハ、上油支店長ノ好對照トシテ人口ニ膾炙セラレキ、後辭シテ暫ク中央本部ニアリシガ、前年三井組織變更ト共ニ、三井合名會社理事トナリ、三井一家ノ教育ニ關シテ其局ニ當リツ、アリ。

電話新橋 千六百六十七番

富田明治郎氏

高輪氣養院長

芝區下高輪町六十四番地

東鐵品川行電車ニ搭乘シテ將ニ終點ニ到ラントスル處、車掌ノ呼フナル東禪寺、コ、ニ下車セバ右方觀然タル洋館ノ見ユルアリ、コレナン君カ經營ニナル高輪氣養院ナリ、樓ニ登ツテ南方品海ヲ瞰下セバ、臺場ヲ繞ツテ走行スル白帆風情アリ、遠ク水平線ノ彼方、雲烟迷フホトリ房總ノ山ヲ眺ムベシ、既ニシテ地ノ利ヲ占ム、施スニ君ノ手腕ヲ以テス、院務ノ盛否亦問ハスシテ知ルベキノミ。

君ハ愛知縣三河國、五十三次ノ驛路トシテ知ラレタル知立ノ人、明治四年五月ヲ以テ生ル、普通學終ルヤ直ニ愛知醫學校ニ入ル、勉學數年成績亦優良ナリ、二十七年業終ツテ將ニナスアラントスルノ際、偶々日清砲火ヲ交ユルノ事アリ、報國ノ念勃如トシテ禁ズル能ハズ、從軍一年餘、近衛師團總督府、第二師團兵站司令部等ノ各所ニ歴任シ、清國ヨリ更ニ臺灣ニ航ス、當時腸窒扶斯、脚氣等ノ流行其極ニ達シ一日一人ノ醫官ノ手ニヨツテ取扱ハル、傳染病患者ハ、殆ント百二三十名ニ昇リシトイフ、君茲ニ處シテ其手腕ヲ發揮ス、役終ツテ再ビ研究ノ目的ヲ以テ東都ニ入り、先ヅ青山内科ニ研究スル事年餘、次デ海外留學ヲ企圖シ、三十一年斯學ノ叢源獨逸ニ遊ブ、同地ノ諸大學ニ研究スル事一年有半。不幸中途ニシテ病ノ胃ス處トナリ、異域ニ殘恨ヲ止メテ歸朝ノ止ムナキニ至レリ、靜養ノ後、元氣ノ舊復ヲ待ツテ一倍ノ精力ヲ傾倒シ、多年ノ造詣ヲ反復研究シテ實力充實ス、茲ニ現地ヲトシテ獨力病院ヲ創立スルニ至リシナリ。

試ニ君ノ品性ヲ窺ヘバ、常識圓滿ノ好紳士ニシテ、シカモ『獨逸歸リ』ノ臭味ヲ帶ビサルモノ亦以テ人格ノ半面也トセズヤ、ソレカアラヌカ、常ニ醫界ノ弊風ヲ憤慨シ、城南ノ一角、同志ト共ニ此事ニ腐心シツ、アリ、好漢願クハ健在ナレ

電話芝 千五百九十七番

高山保綱氏

工業家

芝區三田小山町二丁目八番地

科學ノ進歩ハ世界近世史中ノ壓卷ナリ、本邦亦此波及ヲ受ケテ日進月歩ノ熾盛ヲ見ルモ、而カモ泰西先進ノ夫レト比シテ遜色アルハ免ルベカラサル實勢ナリ、君夙ニ茲ニ志シ、多年斯界ノ爲ニ盡瘁セラレツ、アルヲ耳ニス。

君ハ京都府士族高山保教氏ノ長男ニシテ安政六年正月二十九日ヲ以テ山紫水明ノ京都ニ生ル、嚴父保教氏ハ禁闕ニ仕ヘ奉リ、勤王ノ志厚ク、志士トシテ國事ニ奔走シタルノ功績アリ、君此家庭ニ人トナリ薫化ヲ享ケタルモノ決シテ渺ナカラサルナリ、明治初年笈ヲ負フテ東都ノ人トナリ、一橋開成學校ニ入ツテ理科ヲ修ム、當時ノ苦學談亦傾聽ノ價值アリ、既ニシテ業ヲ卒ルヤ、洋行ヲ企テ、機會ヲ俟ツ、遂ニ明治十一年ヲ以テ佛蘭西ニ航シ、機械工學ヲ專攻シテ造詣亦加ハル、即チ本邦斯學ノ先轍者ト謂ツベク後進輩出ノ萌芽茲ニ胚胎セリト斷言スルヲ憚ラサルナリ、在留三年ニシテ錦衣歸朝ス、早ク職ヲ海軍ニ奉ジ、幼稚ナル本邦海軍機關界ニ向ツテ貢獻シタル處決シテ渺ナカラサリキ、同十九年海軍少技監ニ任セラレ、同二十八年造船大監ニ昇進ス、同三十五年退命仰付ラル、此前後正四位ニ陞リ勳三等ニ叙セラレ、職トシテハ、造船監督、橫須賀海軍造船廠員、海軍艦政本部出仕、吳海軍造船廠長、佐世保造船廠長等ニシテ、廿六年ニハ、富士、八島造船管督トシテ英國ニ航シ、三十年歸朝セリ、冠ヲ掛ケテ以來株式會社石川島造船所ノ招聘ニ應ジ、造船技師長ノ名ヲ以テ顧問ノ地位ニアリキ、前年辭シテ、獨力機械輸入ノ業ヲ開始シ、爾來一切交渉等ノ任ニ當リ、渡來ノ機械ノ過半ハ、殆ンド一度ハ君ノ手ヲ通ジテ供給セラレツ、アリ、即チ多年ノ經驗ト老熟ノ手腕ハ好箇ノ適材トシテ推薦スルニ足ルベシ。

電話芝 千百三十四番
七百三十二番

中井新右門氏

實業家

日本橋金吹町一番地

(一五〇)

日本橋金吹町ノ一角、純日本式ノ一銀行ハ、コレナン君ノ經營スル合名會社中井銀行ナリ、主宰者タル君ハ東京府平民先代新右衛門氏ノ男ナリ、家世々本兩替ヲ營ミ、江戸時代ヨリ老舗トシテ人ノ知ル處ナリ殊ニ先代ハ同家中興ノ偉才ニシテ維新前徳川幕府ノ御用達トシテ頗ル徳望高キ人ナリキ、君ハ乃父ノ遺業ヲ繼承シテ守成ノ功アリ、明治初年三井及ビ小野組ト併ンテ國事ニ盡瘁スル處アリ、其功顯著ナルノ故ヲ以テ位階ヲ賜ハル、爾來世ノ趨勢ニ見ル處アリ、明治十六年ヲ以テ中井銀行ヲ創設シ、其ノ堅實ノ商風ハ克ク時人ノ認ムル處トナリ日ニ月ニ進歩シ、本邦斯界ノ老練ヲ以テ許サル、ニ至レリ、要スルニ天賦資性ノ然ラシムル處ナリト雖モ、克ク先代ノ薰陶ヲ服膺シテ事ニ當リ、加味スルニ祖先傳來ノ中井式特風ヲ以テシタルニ外ナラザルナリ、想フニ君ノ素資ハ創始ノ才ニアラズシテ守成ノ器ナルガ如シ前年經濟界ノ混亂ハ幾多商會社ヲ紛碎シ、堂々タル日本屈指ノ大銀行モ其餘波ヲ蒙リ、僅カニ糊塗シテ其危ヲ免レタリ、然ルニ堅實中井銀行ノ如ハ不動磐石ノ如ク、何ノ微震ヲモ感セザリシナリ、蓋シ中井家多年ノ信望ト堅實無比ナル主宰者ト兩々相待ツテ愈々隆盛ナラシムル所以ナリ、尙穢テ君ノ半面ヲ描カンカ君由來榮華權勢ニ冷カニシテ、時ニ巨萬ノ私財ヲ投ジテ公共事業ニ費スガ如キ、敢テ珍トスルニ足ラズ其感化ノ及ホス處亦大ニシテ、統下店員ノ如キモ常ニ克ク其美風ニ倣ハン事ヲ期シ、只管質素ヲ旨トシテ業務ニ忠實ナリ、君既ニ數百萬ノ財寶ヲ有シ、市内及地方ニ有スル土地ノ如キモ莫大ナル者ニシテ、現ニ多額納稅者トシテ上位ヲ占ントシツ、アリ、如斯シテ始終一貫、克ク其本分ヲ守リ祖先以來ノ美風ヲ發揮シテ富ヲ増シ徳ヲ積ム、寔ニ虛業家一派ニ示シテ三省セシムルニ足ラズヤ。

電話本局 二千八十八番
全 千五百三十一番

内藤久寬氏

實業家

牛込區下宮比町四番地

日本石油界ノ明星、内藤久寬氏ヲ物色ス、敢テ他意アルナシ、氏ガ多年、身ヲ犠牲ニ供シテ斯界ノ爲ニ奮闘シタル光榮アル歴史ヲ尊重シ、加フルニ滔々タル現代實業界ニ處シ、人格高潔超然トシテ一頭地ヲ拔クヲ見テ聊カ頂門ノ一針タラシメント欲スルニ外ナラサルナリ、複雑ナル君多年ノ活動モ一言以テ之レヲ蔽ヘハ、曰ク誠意誠心即チコレナリ、更ニ半面ヨリ見タル君ノ經歷ハ、本邦石油事業ノ發達史ナリ。君ハ新潟縣刈羽郡石地町ノ人安政六年七月ヲ以テ生ル、家ハ土地ノ名族ニシテ由緒アル舊家ナリ、君ニ十二歳ニシテ既ニ縣會議員トナリ、二十七年郷里第六區ヨリ選ハレテ衆議院議員トナリ、再ビ解散ノ後ヲ享ケテ日比谷ニ客タリ、是ヨリ先キ明治二十一年同志ト共ニ日本石油會社ヲ起ス、爾來二三ノ同業ニ從事セシモ、渾身ノ精力ヲ傾注シタルハ同社ナリ、爾後増資シテ資本金一千萬圓トナシ、販賣店ヲ、東京、大坂、新潟、下關、等ノ要地ニ置キ、鑛物出張所ヲ新津、長岡、高田、高谷、相良、宮川、吉川、尼瀨、五智等ニ設ケ、油槽所ヲ隅田川、沼垂ニ、製油所ヲ柏崎、直江津、新津ニ附屬工場トシテ柏崎硝子製造所、新潟鐵工場、新潟硫曹製造所ヲ設ケ、設備ノ完全東洋第一ト稱セラル四十二年ノ末、臺南廳及嘉義廳管下ニ於ケル經營ヲ視察シテ歸來ス、今ヤ同所ノ成績東洋一ト稱セラル、由來人ハ稱シテ日本石油界ハ兩者對立ト號セシモ、實田今ヤ秋風落漠、内藤君タルモノ敵將ノ死ヲ悼ミタル古英雄ノ感ナキカ、如斯シテ一方内ニ其經營ヲ完備ナラシムルト共ニ、外商ト對抗シテ劇烈ナル商戰ヲ持續ス、吾人ハ君ガ拂ヒタル高價ノ努力ガ、早ク有利ナル具體現ニヨツテ天下テ變動シ、誠意誠實ノ尊キ所以ヲ說示スル大天理ガ、能ク後進ヲ教ユル資料トナラン事、至嚮ト敬意ヲ以テ君ヲ月旦スル所以也。

電話番町 二百七十二番

(二五一)

菊本直次郎氏

實業家

芝罘金杉新濱町一番地

昔ハ三田ノ秀才トシテ學術僭群ヲ歴シ、今ハ三井王國ノ少壯家トシテ手腕亦一頭地ヲ拔ク、由來危大三井事業ノ如キハ、非常ニ複數ニヨリテ經營サル、モノニシテ、拔擢ケニ、單獨ノ功名ヲ獲取スルノ「チャン」ハ、極メテ乏シキモノニシテ、事業ノ成功ヲ見テ直ニ人物ヲ品臨スル事極メテ危險ナリ、吾人ハ此意義ノ眞面目ニヨリ、世間動モスレバナスナル一朝ノ毀一タノ譽ト聊カ見ヲ異ニスルモノナクンバアラサルナリ、此故ニ君ノ手腕ト功績ノ若干ヲ知ルモ、徒ニ褒辭ヲ陳列スルノ淺薄ヲ休メテ、當ニ「三井系中有力ナル少壯家」當代中央實業界ニ於ケル眞面目ノ人トシテ君ヲ觀察セントス、即チ是君ガ知己タルニ庶幾カラシ乎、君ハ伊賀國上野ノ出身、明治三年九月十二日ヲ以テ生ル、即チ舊上野藩ノ重臣同苗保有氏ノ長男ナリ、保有氏ハ藩ノ重臣トシテ德望アリ、維新後藩士總代ヲ勤メテ其名郷黨ニ知ラル、君十二歳ニシテ其父君ヲ喪ヒ、爾來慈母ノ手ニ成育ス、同縣津中學ヨリ三田慶應義塾ニ學ブ、級中常ニ優等ノ成績ヲ占メ同大學部第一回卒業生トシテ第二席ヲ以テ卒業ス、次テ故小幡篤次郎氏ノ周旋ニヨリ三井銀行ニ入り、營業部秘書役、大坂支店貸附係長、和歌山、神戸、函館、各支店次席ニ歴任シ、卅五年九月本店詰調査係トナリ次テ營業部預金係長トナル、勤格精勵屢重用セラレテ惟幕ニ參與ス、殊ニ早川千吉郎氏ノ如キハ、常ニ望ヲ君ニ囑シテ特ニ難件ヲ處理セシメタリ、三十七年深川支店長トナリ、爾來振ハサリシ同店ヲシテ其成績ヲ復活セシメタル如キハ、既ニ消息通ノ知ル處ナリ、誠ニ君ノ「箇」ノ人ヲ窺ヘバ、快活ナル平民の紳士ニシテ、趣味トシテ園芸及古書畫ニ遊ヒ、後者ノ如キ毎ルベカラサル鑑識眼ヲ藏スル珍品亦尠ナカラスト云フ、令弟中西萬藏君ハ、北濱銀行名古屋支店長トシテ中京實業界ノ花形役者ニシテ岩下君唯一ノ股肱タリ兄弟西ニ東ニ、相應シテ銜々ノ名ヲ博ス、又一門ノ慶事ト觀スルニ足ランカ、希クハ自重シテ最終ノ美ヲ濟サレン事ヲ。

電話芝 千五百七十二番

北里袞袞男氏

實業界

麻布區神ノ町二十四番地

帝都ノ中樞日本橋區、吳服橋外ニ策源地ヲ置キ、本邦ニ於ケル古キ會社トシテ知ラレタル帝國生命保險ハ、社長福原氏ノ信望ト、常務取締役北里氏ノ精勵トニヨリ、業務隆昌地盤堅牢、寔ニ斯界ノ第一流ト定評セラル、今北里君ヲ傳スベク徒ニ褒辭ヲ陳列スルヲ止メ、氏ノ事實上ノ經營ニ成ル同社ノ營業狀況ヲ摘記セバ、コレ即チ敏腕家ト稱セラレツ、アル、君ノ手腕人物ヲ間接ニ説クノ所以ナリ、同社ハ資本金百萬圓ニシテ明治二十一年ノ創立ニ係ル君ノ書記トシテ身ヲ投ジタルハ創業五年ノ後ナリキ、爾來幾多ノ遷轉ヲ經テ今ヤ諸積立金ハ資本額ノ九倍ヲ算シ、契約金高約六千萬圓、被保險人約拾三萬人ヲ算ス支店及出張所ヲ十五ヶ所ニ、代理店ヲ七百八十箇所ニ設ケ、歩武整々其奮闘的態度ハ實ニ斯界ノ華ナリ其營業ノ特色トスル處ハ、利益配當附保險ニシテ相互組織ノ長所ト、株式組織トヲ折衷シタル理想的組織ナルニアリ、如斯シテ今ヤ著大ナル發展ニヨツテ同業者間ニ一頭地ヲ拔クノ状態ニアリ、此策戰ノ參謀長北里君、亦以テ偉ナラズヤ、傳ニ曰ク、君ハ熊本縣人北里惟信氏ノ二男ニシテ慶應三年四月三十日ヲ以テ生ル、令兄北里柴三郎博士ハ日本刀圭界ノ偉人トシテ既ニ人ノ熟知スル處ナリ、夙ニ法科大學ニ入り専ラ法律學ヲ研究ス、卒業後直ニ身ヲ投ジテ帝國生命保險會社ノ書記トナリ、爾來精勵多年一日ノ如ク、樞械ニ參シテ同社ノ隆昌ヲ圖ル、緊進シテ營業課長兼秘書役トナリ、次テ現職ニ任ズ、此間幾多經濟界ノ波瀾ニ際シ、同業者ノ多クハ大打撃ヲ受ケテ支障相踵キシガ、同社ノ如キハ依然トシテ益々隆昌ヲ極ムルモノ一半ハ繫ツテ君ノ功績ニアリ。

事務家トシテ君ノ概要如斯、翻ツテ私生活ノ半面ヲ窺ヘバ、快活ナル紳士ノ好型ヲ有シ、其趣味トシテ專門外國書籍ノ研究ニ腐心スルガ如キ、亦以テ人格ヲ察知スルニ足ラン、希クハ加重シテ玉成セラレン事ヲ。

電話新橋 四千二百三十四番

上柳喜右衛門氏

長野縣郡選出衆議院議員

長野縣下伊那郡飯田町

其爲人温厚篤實、多年公共事業ニ盡シテ計籌忘ラズ、我上柳代議士亦南信有數ノ名士ナリ、君ハ長野縣下伊那郡飯田町ノ出身ニシテ嘉永二年九月十一日ヲ以テ生ル、先代喜右衛門氏ノ男ナリ、家ハ土地屈指ノ舊家ニシテ、連綿五代、喜右衛門ノ名ニヨツテ酒造ヲ業トス、夙ニ家業ニ從事シテ乃父ノ薰化ヲ受ケ早クモ公共事業ニ意ヲ須ユ、由來同家ノ憲法ヲシテ、本業ニ忠實ナルト共ニ、餘力アレハ公益ニ盡瘁スルノ制アリ、累世此不文法ヲ嚴守シテ違ハサルノ美風アリ、明治八年飯田町副戸長拜命以來、町會議員、下伊那郡所得稅調查委員、郡會議員、同議長、等ニ當選ス、此間歩一步ノ漸進的向上ニヨリ、信用地盤ハ頗ル鞏固トナリ、飯田町長、縣會議員等ノ重職ニアル事多年ニ及ビ、老熟圓滿ノ手腕ハ、敵モ味方モ贊辭ヲ呈セサルナク、常ニ衆多ノ尊敬ヲ受ケツ、アリキ、外ニ長野、新潟、兩縣所得稅審查委員會長、松本稅務管理局所轄内所得稅審查委員等トナリ、尙勅令發布以來下伊那郡酒造組合長トシテ同業者ノ發展ヲ期シツ、アリ、而シテ純然タル實業關係トシテハ、多年百十七銀行頭取トシテ同地ニ於ケル唯一金融機關トナスニ至リ、堅實無比ヲ以テ定評アリ、外ニ飯田貯蓄銀行頭取トシテ亦敏腕ヲ揮ヒツ、アリ、續イテハ伊那電車軌道株式會社ノ創立ニ關與シ、爾來其重役トシテ拮据經營シ、既ニ其一部運轉ヲ開始シテ南信唯一ノ交通機關タリ將來同社ノ發展ニヨツテ同地ノ開發セララル、事蓋シ疑ヲ要セサルナリ、彼ノ南信新聞ノ如キモ亦君等有志ノ創立ニナルモノナリトイフ、如斯シテ衆望君ニ歸シ、前年補選舉ニヨリ殆ンド無競争ノ姿ヲ以テ衆議院議員ニ當選スルニ至リシナリ、多年盡力シタル地方問題亦頗ル多シト雖モ、飯田町ニ設立セラレタル高等女學校ノ如キ、コレ最近部ニ於ケル努力ノ顯出ナリ、尙赤十字社ノ爲メニ盡力シ、二十二年來特別社員トシテ奔走シ有功章ヲ授ケラル、又日露戰役ノ功ニヨリ勳八等ニ叙セラレ白色桐葉章ヲ下賜セラレタルノ光榮アリ。

大木宗保氏

實業家

下谷區茅町二丁目二十四番地

東臺ノ邊リ、篤志家トシテ市民ノ瞻仰ヲ受ケ、勳章師トシテ令名噴々タルモノ、茲ニ大木宗保氏ノアルアリ、其任俠ノ美風ハ寔ニ東京男兒ノ血性ヲ代表スルニ足ル、試ニ其閱歷ノ一節ヲ録スレバ。君ハ帝都ノ人安政五年十一月ヲ以テ本所龜澤町ニ生ル、宗雲齋氏次男ニシテ幼名ヲ録之助トイフ、代々金銀盃彫刻ヲ以テ業トシ技能ノ精巧ヲ以テ稱ヘラル、資性毅剛頗ル忍耐力ニ富ム、明治二十一年懇望ニヨリ出デ、故大木宗保氏ノ後ヲ繼グ、是レ君ガ斯界ニ隆々タルノ名聲ヲ博セシ基ナリ、養父宗保氏明治十二年佛國ニ赴キ在留一年有餘ニシテ勳章製造ノ奧儀ヲ究メ、同十二年歸朝スルヤ直チニ勳章局ノ命ヲ蒙ル、幾干モナクシテ卒去セシヲ以テ君其後ヲ繼ギ益々業務ヲ擴張シ名聲噴々内外ニ轟ク、今日陸海ノ將士ガ萬丈ノ光彩ヲ胸間ニ放チ其死生ノ境ヲ出入シタル偉大ノ彰表タル、勳章其物ハ殆ント君ノ手ニ成リシモノナラン、而シテ先代宗保氏ハ勳章製作ノ模範國タル佛國巴里ニ於テ其技ヲ練磨セラレタルニヨリ同店ガ現下ノ榮達ヲ得タルモノ偶然ノ事ニ非ズト雖モ、守成ノ秀才君ノ努力ニ依テ確的ノ結果ヲ得タルヤ言フ俟タサルナリ、今ヤ本邦ニ於ケル唯一ノ勳章師トシテ斷言スルモ決シテ過當ノ言辭ニアラザルナリ、斯クノ如クシテ君精力ノ一半ヲ割キ、幾多ノ公事業ニ盡瘁シ、其篤志家トシテノ好評ハ世間既ニ定マレルモノアリ、試ニ其主ナル者ヲ列舉セバ、下谷區會議員、下谷區兵事會副會長、東京市會議員等ニシテ實業上ノ關係ハ、株式會社長口銀行取締役會長、東京商業會議所議員等ニシテ、多年絶大ノ熱誠ヲ捧ゲテ盡瘁シツ、アリ、殊ニ吾人ノ敬服ニ耐ヘサルハ、一舉一投足、渾ヘテ男性的ナルニアリ、亦以テ廢レ行ク江戸趣味ノ復活者歟。

電話下谷

八百十三番

全 二十三番

全 二千三百五番

奥田豊次郎氏

實業家

深川區露岸町百廿一番地

(一五六)

世ハ澆季、道徳地ヲ拂フテ一ノ敦厚ナク一ノ誠意ナシ、頃ハ江東ノ異彩奥田豊次郎君ノ爲人ヲ耳ニシ、其尊キ苦辛慘憺史ヲ瞻仰シテ快感禁スル能ハザル者アリ、過去ノ生涯、正直ト勤勉ヲ以テ一貫ス、爾カモ幾多ノ逆境ト奮闘シテ將ニ成功城頭ノ人々ラントス、吾人ハ天下後進ノ爲メ、略傳ヲ草シテ立志ノ資料ヲラシメサルベカラズ、君ハ神奈川縣神奈川青木町ノ出身ニシテ文久二年ヲ以テ生ル、幼少慈母ヲ喪ヒ巖父兵助氏ニ依テ補育セラレ、當時振ハサリシ家道ハ薄命ナル孤兒ヲシテ悲惨ナル運命ニ逢着セシメタリ、既ニシテ嚴父ト共ニ、僅カノ縁故ヲ便ツテ東都ニ出ヅ、爾來或ハ油類ノ行商ニ、或ハ商家ノ子僧奉公ニ、雪ノ夜雨ノ日、無情ノ虐使ニ接シテ爾カモ孝々乎タリ、或ハ遠ク阪地ニ出稼ギシ、夢圓カナラヌ旅館ノ一室、燈影淡キ處、不遇ヲ嘆シテ切齒シタル處ソモ幾干ナリシカ、時到ラズ失敗ニ踵クニ失敗ヲ以テス、窮餘嚴父ニ隨ツテ空箱賣買ノ行商ヲ營ミ僅カニ貧居シテ父子相擁ス、然ルニ多年ノ窮迫ハ君ヲシテ益々自奮セシメ、鐵ノ如キ意志ハ鍛鍊セラレテ、自助ノ大精神ハ深ク刻マレヌ、此修養ト共ニ商界ノ機敏亦奮闘ノ產物トシテ獲取セラル、ニ到リシナリ、如斯シテ君ハ時運ノ趨勢ヲ看取シ、荷造用木箱並ニ化粧國ノ製産ヲ企ツ、即チ同業ノ有望ナルニ拘ハラズ、爾來斯業ニ從フ者頗ル沒觀念ニシテ新知識ヲ有セズ、一人トシテ發展向上ノ計ヲ立ツルモノナカリキ、君多年ノ經驗ト觀察トニヨリ、其缺條ヲ憤慨シ、機械力應用ヲ以テ獨創ノ方策ヲ樹ツ、即チ社會ノ進運ト勞銀ノ關係及、生産力ノ増加其他價格ノ低廉、製造期間ノ確的等ノ要求ニ應セント欲シタルニアリ、茲ニ紀念スベキ明治二十二年三月血ト汗トニ依ツテ築造セラレタ小資本ヲ以テ、奥田製國所ハ創立セラル、ニ至リシナリ、換言スレバ、奮闘ノ價ガ茲ニ現實シテ君ガ理想ノ一部ヲ成テ得タルナリキ、之レ實ニ我國ニ於ケル該業機械製造ノ鼻祖ニシテ輕々看過ニ附スベキ者ニアラサルナリ、殊ニ多年其心血ヲ灑キタル瓦斯應用焼印版ノ發明ノ如キハ、着想

ノ嶄新ナル、高尚優美ニシテ堅牢ナルハ需用者ノミナラズ世ノ定評アル處ナリ、優ニ天才的發明家トシテ獨立ノ立脚地アリ、爾來二十有餘年、幾多經濟的波瀾ハ、屢々君ガ經營事業ニ打撃ヲ與ヘタリシモ、奥田式猛力茲ニ愈々發揮シ、此難關ノ踏破シ去ツテ些ノ萎微ナク、自若トシテ此衝ニ立ツ、果セル哉、苦心徒勞ニ歸セズシテ好評噴々、各方面ノ需用者ヲ劇増ス、彼ノ近藤利兵衛氏發賣ノ葡萄酒箱及大日本麥酒會社ノ化粧箱ノ如キハ十數年來君ガ製造權ヲ獨占シツ、アリ、當時一ケ年ノ製造額五十萬以上ヲ算スト云フ、岩手縣九戸郡ノ附屬製版所、埼玉縣秩父郡ノ製材所、府下大島町宇龜戸ノ新工場等愈々規模ヲ擴張シテ隆乎タリ、殊ニ新工場完備ノ曉ハ、一ケ年ノ産額百萬箇以上ニ出ヅベシトイフ、願レバ一介ノ行商人ヨリ身ヲ起シテ此隆盛ヲ來ス、當ニ絶好ナル立志篇ノミナラス、本邦工業界ノ恩人タリ、加フルニ其性格ニ至ツテハ先ヅ筆ヲ措イテ贊稱セサルベカラズ、即チ我利貧欲ノ奴輩ト異ナリ、稜々タル俠骨世ノ弱者ヲ扶ク、爾カモ其私財ヲ投シテ公共ノ爲ニ致ス如キニ際シ、匿名ヲ以テシテ決シテ名ヲ傳ラサルハ亦以テ敬服スベキニアラズヤ、又勤儉力行身ヲ持スルハ薄ク人ヲ待ツニ厚シ、使用人ノ待遇ノ如キ殆ンド理想的ニシテ家族主義ヲ實顯セリ、人格ノ薰化店員ニ及ボシ、目下總員五十有餘人中、十年以上勤績ノ者五人、五年以上ノ者ニ至ツテ其過半ヲ占ムトイフ、更ニ特筆大書スベキ逸話トシテ有名ナルハ、君ガ逆境時代、九尺二間ノ裏長屋ニ於テ、策劃計劃熟シ、正ニ實業界ニ打テ出テラントスル際、丸山某氏ヨリ金三圓ノ補助ヲ受ケシガ、後年業務隆昌ナルニ至リ舊恩ヲ報ヒント欲シ、其住所ヲ求ムル爲ニ東都五大新聞社ニ囑シテ五十有餘圓ノ廣告料ヲ拂ヒ遂ニ其目的ヲ達シタル如キ、亦故近藤利兵衛氏ノ舊恩ヲ追想シ、其生前ノ寫眞ヲ複寫シテ肖像画ヲ製シ晝夜仕フル事ニカカシトイフ、寔ニ君ノ如キハ、經歷ニ於テ人格ニ於テ、天下青年ノ鑑鏡タルノミナラズ、當代似而非紳士輩ニ示シテ項門ノ一針クラシムルニ足ル、希クハ健在ナレ。

電話浪花 二千八百十八番

(一五七)

久保田大次郎氏

實業家

京橋區新宮町七丁目三番地

剛健ナル意志、明晰ナル頭腦、放膽ノ如クニシテ爾カモ致密ノ性格ハ、會々明治人物ヲ輩出シ鬱然トシテ一城廓ヲ爲ス、コレ長野縣人士ノ面目ナラズヤ、吾人ハ地理ト人文關係トヲ論據トシテ、信州男兒ヲ評論スル事ノ頗ル趣味アルヲ自覺スルモ短篇ヨク盡ス能ハズ管ニ君ヲ物色スルノ前提トシテ胸中ノ告白ヲナスノミ、君亦所謂信州派ノ實業家ニシテ、一種ノ異彩ヲ放チツ、アリ、即チ其出身地ハ信州飯田本町ニシテ嘉永元年十二月十七日ヲ以テ生ル、實父ハ秦野久次郎氏ト稱シ君ハ其次男ナリ、萬延元年六月廿日ヲ以テ先代久保田喜兵衛氏ノ養子トナリ、明治三年二月九日先代隱退ノ後ヲ受ケテ戸主トナル、夙ニ實業ニ志シ、明治ノ初年横濱ニ出テ天下ノ糸平ノ店舗ニ仕ヘ忠實勤格意ラズ、益々重用セラレテ要務ニ參シ、一面大規模ナル、彼ノ糸平式ノ薰化ヲ受クルト共ニ一面、自奮ノ辛キ經驗トニヨリ、愈々商道ヲ研磨ス、後辭シテ獨立シテ横濱南仲通ニ弗仲買ヲ始メ、不幸火災ニ遭フテ計劃畫餅ニ歸ス、爾來或ハ、米屋町ニ仲買店ヲ開ク等種々ナル波瀾ヲ經テ意志彌々剛健ナリ、這般ノ消息試ニ小説家ノ『モデル』タラシメバ、優ニ一篇ノ傳奇小説ノ主人公トシテ物色スルニ足ル、後年北海道炭礦賣炭組支配人トナリ、大ナル困難ト戦ヒ、渾身ノ熱誠ヲ披瀝シテ南船北馬ス、轉ジテ北海道炭礦株式會社賣炭部主任トナリ多年ノ經驗ヲ擁シテ重任ヲ全フシ、奔走刻時ノ休止ナク、功績今尙同社ノ沿革史乘ノ逸事タリ、サレド淡如トシテ功ヲ人ニ歸スルニ至ツテハ座ロニ景仰ノ禁スル能ハサルナリ、後病ニヨツテ職ヲ辭シ、商人經營トシテ、深川大島ノ地ニ深川石灰製造所ヲ設ケ令息ヲシテ事ニ當ラシメツ、アリ。

因ニ云フ、君ガ糸平店員時代ノ奮闘ハ、以テ使用人ノ模範タルニ足ルト、流石ノ偉人糸平ノ薰化モ當時ノ店員トシテ其衣鉢ヲ傳ヘタルハ君一人ナリト云フ、亦以テ君ノ全般ヲ窺フニ足ラン歟。

電話新橋 二千八百五十二番

堀田生次郎氏

實業家

淺草區北東仲町八番地

君ハ先代、生次郎氏ノ長男ニシテ、文久三年九月二十三日ヲ以テ生ル、幼名ヲ菊次郎トイフ、明治十七年家督ヲ相續シテ生次郎ト改稱ス、君人トナリ、公共ノ念ニ厚ク、明治三十六年選ハレテ市會議員トナルヤ、君思ヘラク公事ニ膺ル須ラク私事ヲ抛ツテ以テ其任務ヲ果サルベカラズ、徒ラニ虛位ヲ擁スルガ如クンバ、選舉民ノ意思ニ背キ自治ノ本旨ヲ没却スルモノト、是ニ於テ父祖傳來ノ質商ヲ廢シ、専心以テ二百萬市民ノ爲メニ日夜思ヲ焦ス、世間往々名譽職ヲ濫用シテ私利ヲ貪ルモノアリ、如斯ハ立憲ノ大敵、自治ノ蟲賊ナリ。彼レ等ヲ出セル、選舉區民ハ千歲拭フ可ラザルノ汚辱ニシテ、君ノ如キヲ出セル、選舉區ノ名譽ハ長ヘニ朽チザルナリ、君亦各種ノ常設委員ニ推サレ、水道、土木等ノ爲ニ盡瘁ス、明治四十一年七月推サレテ、市參事會員トナルヤ、偶々市政刷新ノ聲頗ル熾ニシテ遂ニ市政整理委員會ヲ組織セララル、ニ至ル君亦委員トシテ銳意市政ノ改善ニ努ム、蓋シ君ノ主張タルヤ、從來市政ノ舉ラザルハ、參事會ノ權限廣キニ失シ市長ヲシテ專ラ其手腕ヲ揮ハシムベキ十分ノ余地ヲ與ヘザルニ起因スルヲ以テ、今後ハ大ニ市長ノナスベキ、委任事項ヲ増加シ、自由裁量ノ範圍ヲ擴張セシメントスルニアリキ、是レ今日ノ輿論ニシテ何人モ否定シ能ハサル處ナリ、其成功益シ遠キニ非ラザルベシ、亦一面淺草區會議員トシテ、明治廿八年以來、區ノ爲メニ盡力シ其間學務委員トシテ教育ノ進捗ヲ畫サレタル事皆人ノ知ル所ナリ、公人トシテノ君ハ如斯、而シテ亦實業界ノ爲メニ奔走シタル事僅少ナラズ、就中淺草銀行ノ創立ニ關シテハ、今井氏等ト共ニ發起者トナリ、以テ區内ノ金融機關ヲ完備セシメタルガ如キ、其著シキ者也、其他未廣株式會社取締役等ニシテ、君亦慈仁ノ念ニ富ミ、市養育院ノ常設委員トシテ盡シタルコトハ多ク人ノ知ル處ニシテ其零碎ニ至ツテハ一々數フルニ遑アラズ、君亦中央公人中ノ一異材ナリ。

電話下谷 二百六十八番

小池長次郎氏

實業家

本所區東井區三十四番地

家庭ハ主人ノ反映ナリトハ歐洲ノ俚諺ナリ然リ家庭ニシテ甘キ事密ノ如ク琴瑟相和シテ暖カナル春風ノ如クナラバ其主人ノ必ズヤ温厚ニシテ人格高ク理想ヲ有シテ信仰アル人タルハ疑フヘカラズ之ニ反シテ若シ一旦家庭ニ風波ノ絶ユルコトナク夫ハ妻ヲ疑ヒ妻ハ夫ヲ怪シミ終始秋ノ寂ビレ行クガ如キアラバ其主人ノ品性下劣ナル是又疑フヲ要セザルナリ而シテ家庭ノ寂シキモノト暖キモノトハ其主人ノ活動力ニ對シテ非常ニ大ナル影響ヲ及スハ自然ノ理ニシテ家庭若シ寂シキナクハ主人ノ活動力十倍シテ其奮闘タルヤ誠ニ目覺マシキモノアラシ、故ニ家庭ハ必ス暖カナラサル可カラザル社會ニ活躍セントスルモノ、大ニ心ヲ要サル可ラサル所ナリ、君ノ如キハ此間ニ注意サレシモノカ、君ノ家庭ノ暖キ事奉ノ如ク又花園ノ如クナラン、聞ク君ハ東京府ノ人小池彌右衛門氏ノ次男ニシテ安政六年九月十六日ヲ以テ生ル、幼少ニシテ大志アリ、嚴格ナル乃父ノ薰陶ニヨリ喜劇群童ト異リ資性伶俐ニシテ書ヲ好ミ、學ヲ愛シ深ク和漢ノ學ヲ修メ造詣スル處甚ダ大ナリ、長ズルニ及ンテ將來實業ヲ以テ天下ニ名ヲナシ國家ニ貢獻セント欲シ、明治七年分家シテ一家ヲ創立シ、實業界ニ身ヲ投ジ盛シニ豪商紳士ト往來シテ交ヲ結ビ、家運益々隆盛ニ向フテ茲ニ巨萬ヲ投シ、淺草銀行ヲ創立シ推サレテ其頭取トナリ、次デ明治四十年十二月資本金壹千萬圓ヲ投シ近藤、濱口ノ諸氏ト共ニ株式會社豐國銀行ヲ起シ、社務ノ擴張ニ盡瘁シ其取締役トナル、定ニ君ノ如キハ人ニ接スル懇切信義ヲ以テシ當時ノ僑紳士ト趣ヲ異シ殊ニ慈善公共ノ事業ニ進ンテ其勞ヲ惜マス、區會、徴兵慰勞會其他ノ名譽職ヲ帶シ、忠實ナル奔走ヲ以テシツ、アリ、今ヤ區民ノ推ス處トナリ、府會ニ向ツテ其職足ヲ伸長セントシツ、アリ、君亦江東土着人種ヲ代表スルノ士歟。

電話下谷 二百十三番

相良頼紹氏

子爵

麻布區飯倉片町六番地

上流ノ硬團談話會ノ首領トシテ、多年奔走一日ノ寧ナキモノ、コレ亦君ニ向ツテ感謝セサルベカラサルモノナリ、今其系譜ヲ按スルニ當家ハ大職冠鎌足ノ孫左大臣武智磨ノ裔駿河守時理ノ次男遠江守維兼ノ後也、維兼ノ孫右京大夫周頼遠州榛原郡相良ノ庄ヲ領シタルヨリ地名ヲ採ツテトナス周頼ヨリ四世ヲ經テ三郎長頼ニ至ル、長頼元文二年島山重忠ヲ撃チ軍功ヲ以テ播磨備前郡及ビ豊前國上毛下毛二郡頭職ト爲ル、建久九年ニ至リテ肥後國人吉ノ庄ヲ領ス、長頼ヨリ十一世ヲ經テ宮内少輔長每ニ至ル、長每豊臣氏ニ屬シ征韓ノ役ニ功アリ後徳川氏ニ從ヒ關ヶ原大坂ノ兩役ニ功ヲ樹テ肥後人吉二萬二千石餘ヲ領ス長每ヨリ二十一代ヲ經テ正五位頼基ニ至ル君其後ヲ襲グ、君實ハ先々代長福ノ長子、嘉永六年十二月ヲ以テ生ル、幼名ヲ武之進トイヒ頼基ノ養子ト爲ル、明治五年二月從五位ニ叙シ八年五月家督ヲ相續ス、九年十二月宮中祇候トナリ同年十二月華族部長局書記ニ補シ十二年同局主典ニ進ム、十五年三月歐州ヲ漫遊シ親シク泰西ノ文物制度ヲ視察シ十六年八月ヲ以テ歸朝ス、十七年七月子爵ヲ授ケラレ二十年十二月正五位ニ進ム二十三年七月貴族院議員ニ當選ス二十五年七月從四位ニ叙ス二十九年三月第七回帝國議會召集ノ際勳精ニ付キ銀盃一組ヲ下賜セラレ三十年七月正四位ニ陞リ同月貴族院議員滿期改選ニ再ビ當選三十六年六月從三位ニ進ム三十九年四月、明治三十七八年事件ノ功ニ依リ勳四等旭日小綬章ヲ授ケ賜フコレ其概歴ニシテ、政治家トシテノ評價ハ、世既ニ定評アリ、尙其趣味ノ高尚ニシテ多方面ナル亦人ノ知ル處ニシテ銃獵、謠、能書、彫刻等技亦所謂「殿様藝」ニアラサルナリ、此性格ニ於テ盟友秋元子ト一致スル處亦妙ナラズヤ。

電話芝 千二百九十八番

河村金五郎氏

宮内次官

青山南町六丁目百〇三番地

君往年、武人タラント欲シテ果サズ、不幸、病魔ニ侵サレ、中年、其目論見ヲ變へ、幾日適材ヲ以テ、現時ノ榮職ニ親任セラル、思フニ是レ異界ニ成功シタルノ人ナランカ、茲ニ其閱歷ノ概要ヲ録セシニ君ハ州津山藩士ニシテ、明治二年ヲ以テ呱呱ノ聲ヲ揚グ、先考ハ海軍士官ニシテ故攻玉社社長近藤眞齋作琴氏等ト親交アリ、君亦幼少ヨリ軍事界ノ人タラント志シ夙ニ攻玉社ニ入り次デ明治十五年海軍兵學校ニ入ル、同十七年同校本科生ニ進ム偶々眼病ニ胃サレ、其退學已ムヲ得ザルヲ思惟シ、一度ビ退イテ閑ニ入リ静養シツ、アリシガ、終ニ意ヲ決シ、明治廿年第一高等中學校ニ入ル業卒ハルヤ、更ニ帝國大學法科ニ入ル、同廿八年七月全科ヲ卒ヘ法學士ノ稱號ヲ受ク、幾干モナクシテ官ニ入り宮城縣參事官ニ任ゼラル、同廿九年會々、未會有ノ奥羽大海嘯ノ災害アリ、君其救難前後策ニ寧日忘リナカリシ、同卅年七月轉ジテ樞密院書記官ニ任ジ、兼テ樞密院議員長秘書官トナリ、黒田、西園寺、伊藤、山縣各議長ノ常任書記官タリ、尙大藏省參事官、農商務省參事官、法制局參事官等ヲ歴任シ治績大ニ揚ガル、同卅二年文官高等懲戒委員會幹事ニ推舉セラル、同卅七年高等捕獲審檢所委員ニ任ゼラル、同卅九年行政裁判所評定官ニ任ジ、同四十一年累進シテ、樞密院書記官長ニ任ジ鋭才能ク上長ノ信望ヲ厚フス、次デ一躍シテ今次宮内次官ニ親任セラレ幾干モナクシテ樞密院書記官長兼任ヲ命セラル。

君人爲、謹嚴卒直、猥リニ人ト争ハズ、宛然君子ノ風格ヲ失ハズ、亦以テ當代ノ異材トシテ後昆ニ傳フルニ足ル、願クハ其大任ヲ長ヘニ全フセラレン事ヲ。

電話新橋 千六百六十七番

仁禮景助氏

子

爵

芝區高輪南町五十九番地

我國今日在ルハ當ニ、維新ノ大業ニ因ル、而シテ維新大業ノ先鞭ハ舊鹿兒島藩諸名士ノ努力ニヨル事大ナリトイフモ過言ニハアラザルベシ、國亂レテ忠臣出ツト、宜ナル哉、當時人材ノ天下ニ輩出スルモノ眞ニ枚擧ニ遑アラザルナリ、而シテ鹿兒島藩士亦多數ノ人材ヲ出シタルニ至ツテハ、誰レカ其壯ナルヲ言ハザラン、君カ嚴君モ即チ其一人ナリシナリ、國家ノ存亡將ニ此時ニ在リトナシ、東奔西走、家ヲ思ハズ、繁累ニ偏ラズ、念頭只國家アルノミ、即チ其功ニ依リ特旨ヲ以テ華族ニ列セラル、君ハ其二男ニシテ、明治八年七月八日ヲ以テ東都三田綱町ニ生ル、令兄景二氏ハ早ク海軍ニ籍ヲ置キ夙ニ米國海軍大學ニ入り、卒業後海軍少佐トナリ、彼ノ日露戰役ノ當時軍艦初瀬ニ在リテ、令名ヲ轟カシ、遂ニ戰死ス君其後ヲ繼イテ正五位ニ叙セラレ、現今ニ及ブ、幼時城北尋常中學ニ學ビ卒業後宮城縣立農學校ニ入り明治三十三年目出度卒業シテ亦爲スアラントス、偶々埼玉縣秩父郡立農學校ニ於テ君ヲ聘ス、暫ク教鞭ヲ執リシモ後辭シテ、北海道ニ渡リ、十勝國乙更村ニ「オトホロ」農場ヲ開墾シテ、其主宰者トナリ、今ヤ成功シテ二百二十餘萬坪ノ大農場ヲ開墾シテ、大豆、小豆、燕麥、馬鈴著ヲ其重ナル產物トシテ年々多額ノ收利アリトイフ、今ヤ上流ノ殿原多クハ、祖先ノ功ニ依リ、安逸ニ滔々タルノ時、身ハ上流ノ家ニ生ラ享ケ、眞摯ナル業務家トシテ、將亦國本タル農事ニタツサハル、當代稀レニ見ル隱君子トシテ社會ニ示スニ足ル。

電話芝 千四百五十五番

安樂兼道氏

貴族院議員

豊多摩郡大久保村大字西大久保
字關裏四百六十一番地

(一六四)

安樂君ハ鹿兒島縣出身ニシテ、其位置ハ第二第三流ニアルモ、氣宇自ラ大ニシテ統御ノ才アリ、壯年已ニ頭角ヲ現ハセリ、明治四年御親兵ヲ組織セラル、選ハレテ編入セラレ、六年解隊ニ因テ歸國シ、七年更ニ上京シ、八年職ヲ警視廳ニ就ク、九年前原一誠等ノ亂ニ際シ、山口縣へ出張シテ歸京ス、其頃鹿兒島私立學校不穩ノ狀況アリ、逐次東京ニ聞エシヨリ、同僚中原尚雄、末弘直方、寺原長輝、高崎親章等及當時書生タリシ柏田盛文、大山綱介、平田宗質等ト共ニ之ニ赴キ方向ヲ誤ラシメザル様盡力スルコトヲ決シ、相携エテ歸郷スルニ至レリ、此時私學校徒已ニ暴發ノ際ニシテ、彼等ハ君等警察官等ノ一時ニ數名歸郷セルヲ見テ、政府ガ西郷大將ヲ倒サンカ爲メニ派遣セル刺客ナリト誣ヒ、之ヲ捕ヘテ拘禁シ、虐待訊問慘酷至ラザルナキモ、君等屈スル所ナク凛トシテ其精神ヲ發揮セリ、時恰モ黒田伯警視隊ヲ率ヒ入鹿兒ニ際シ、救ハレテ虎口ヲ脱レ、僅ニ歸京スル事ヲ得タリ、十二年琉球藩ヲ廢シ沖繩縣ヲ設ケルニ方リ、松田道之氏宣ヲ藩主ニ傳ブルヤ、懲戒ノ爲メ園田安彦氏等ト共ニ該地ニ出張シ、警察ノ制ヲ定メテ歸朝シ、十三年石川縣警部ニ轉シ、警視廳長トナリ、十四年警視廳ニ入り、警視ニ昇任ス、十五年高知縣警部長ニ任セラレ、伊集院縣令ヲ輔ケ政黨ノ跋扈ヲ抑ヘ、行政上一大改革ヲ成就セリ、此間政黨ノ操縦ニ於テ、君ノ意見見ルヘキモノアルハ上下共ニ之ヲ認メラレタリ、十九年熊本縣警部長ニ轉シ、陋習ヲ破リテ着々警察ノ制ヲ改メ、二十八年同縣書記官ニ昇任シ、二十九年山口縣知事ニ任セラレタリ、三十年難治ノ聞エアル福島縣知事ニ轉シ、水害復舊ニ就テ縣下ノ利ヲ圖ルモノ多ク、三十一年縣民ニ愛惜セラレツ、岐阜縣知事ニ轉シ、三十二年擢テラレテ内務省警保局長トナリ、行政警察上創設改革スル所甚タ多ク、所謂行政執行法、治安警察法ノ類ハ此時ニ制定セラレタルモノナリ、三十三年伊藤内閣成ルニ及ビ、警視總監ニ任セラレ、三十四年伊藤内閣ノ倒ル、ト共ニ其職ヲ辞サレ、三十七年八月勳功ニ依

リ貴族院議員ニ勅選セラレタリ、爾カク官ヲ去ラル、モ有爲ノ氣象ニ富ミタル君ハ、一日モ閑散ニ安スルコトヲ爲サス、常ニ元老諸公及ビ有力政治家ノ間ニ交遊シ、意旨ノ疏通ニ努ムルコト多シ、先年井上侯ノ囑ニ依テ東本願寺ノ財政ヲ整理シ、内紛ニ因テ斷然自ラ其關係ヲ絶タレシモ、老法主尙其才能ニ信賴セリト云フ、然共君ハ畢竟民間事業ノ人ニアラズ、將來ハ必ズ同士ノ志ト共ニ其勢力ヲ政治ノ上ニ發揚セラレベキハ、君ヲ知ル人ノ共ニ信スル所ナリ、三十九年西園寺内閣成ルヤ「ボーツマス」條約ノ後ヲ受ケ、市民激昂警視廳ハ攻撃ノ燒點トナリシ時、入りテ再ヒ警視總監トナリ、勅任一等ニ叙セラレ、制度ノ改革スルモノ頗ル多シ、而シテ改革ノ方針ハ、民意ヲ容レ主トシテ其ノ便ト其利ヲ圖ルニアリ、是ニ於テ市民ハ日ヲ逐フテ堵ニ安スルヲ得タリ、四十一年西園寺内閣ノ解クルノ日、其ノ職ヲ辞シ、西郊大久保ニ浩然ノ氣ヲ養ハル、コト、ナレリ、後先キノ警視廳廢止ノ論者モ、一變シテ數百ノ巡查増員ヲ主張シ、且ツ其實行ヲ見ルニ至レリ。

寔ニ君ノ如キハ、人格ニ於テ識見ニ於テ、當代稀ニ見ルノ人材ナルハ、世既ニ定評アル處ニシテ、吾人亦捲土重來ノ日ヲ至囑スルヤ切ナリ、尙繼ツテ家庭ニ於ケル其人ヲ窺ヘハ、濃厚篤實ノ好紳士ニシテ、克ク後進ノ爲メニ力ヲ致シテ倦マズ、即チ君ガ快刀亂麻ヲ斷ツ底ノ公生活ト、洋々トシテ春海ノ如キ私人生活トハ、對照頗ル妙味アリ、這般推サレテ千代田瓦斯株式會社々長トナル、希クハ其深藏ノ抱懷ヲ開披シテ出蘆ノ日一日モ速カナラン事ヲ。

電話番町 九百七十四番

(一六五)

外松孫太郎氏

男爵

府下豊多摩郡落合村大字
上落合字伊七宮下

(一六六)

一度ナラス、再度迄數十萬ノ大兵ヲ海外ニ派シテヨク何等ノ支障ナキヲ得今ヤ益々軍備ノ大擴張ノ實行ヲ見ル、之レカ經理ノ任又頗ル困難ナルモノ當底常人ノ能クシ得可キニ非ラザルナリ、茲ニ外松孫太郎氏アリ、此重且ツ大ナル任ヲ全フシテ些ノ支障ナク經過シ來リテ綽々餘裕アル君ハ如何ナル經歷ヲ有スルカ。

君ハ舊西條藩士ニシテ大堀太右衛門氏ノ二男ナリ、弘化元年八月朔日ヲ以テ其藩邸ニ生ル、後舊和歌山藩士外松孫左衛門氏ノ養嗣子トナリ其姓ヲ冒ス、明治六年和歌山縣學區取締役トシテ居ルコト一年有餘後辭シテ農ニ歸ス明治九年和歌山縣廳十一等出仕トナリ、勤務中十一年西南ノ役アリ爲ニ君モ亦召サレテ陸軍省十等出仕トナリ、糧食分割ノ任ヲ命ゼラレ、同十二年軍理副トナル、同十六年會計軍理ニ進ミ累進シテ同三十一年一等監督ニ進ミ、前局長野田氏ノ骸骨ヲ乞フヤ、君拔擢セラレテ經理局長ニ勅任セラレ、尋テ主計監ヲ經テ主計總監ニ陞任セラレ、從四位勳四等ニ昇レリ、斯ル重職ニ就キ此非常ノ事業美事ニ整理ノ任ヲ全フシテ遂ニ今日ニ至ル、其功偉大ナリトイフベシ、日露戰役ノ際君征露大軍經理ノ重任ヲ負ヒ措置其宜キヲ得、平定ノ後勳功ニ依リ、功二級金鷄勳章ヲ賜ハリ勳二等ニ叙セラレ四十年九月華族ニ列シ男爵ヲ授ケラレ、今ヤ令名朝野ニ普ク轟々職ヲ辭シテ後進ノ秀才辻村氏ニ讓リ武藏野ノ一角ニ閑居シテ自然ノ風物ニ多年ノ勞ヲ慰撫シツ、アリ、時人稱シテ當代循吏ノ好型ト稱ス、社會ノ尊重眞ニ偉大ナルモノアリ、希クハ邦家ノ爲メ自重加餐アラン事ヲ。

電話番号 六百九十五番

服部綾雄氏

岡山縣郡部選出衆議院議員

芝公園二十號地ノ四

沈勇寡言ニシテ豪膽磊落小事ニ拘ラズ、末節ニ泥マズ如何ナル難事ニ遭遇スルモ泰然自若トシテ色ニ顯ハサズ、然カモ能ク人ヲ容ル、雅量寛ク、名聲内外ニ轟キ遂ニ大多數ヲ以テ國家ノ大政ヲ議スル衆議院議員ニ選舉セラレタル君ハ始メ教育家トシテ立脚地ヲ定メ而シテ茲ニ至ルノ經路亦偶然ニ非ラザルナリ。

小傳ニ曰ク、君ハ文久二年十二月駿河國駿東郡沼津町ニ生ル、其學歷ヲ按スレバ東京築地大學校ヲ卒業シテ後チ米國ニ遊ビ「プリンストン」大學ニ於テ倫理及心理學ヲ修得シテ朝ニ歸ル、學殖深ク徳望亦一世ニ範タルノ士ナリ、人格ノ如何モ窺知スルニ難シトセザルナリ、嶷ニ富山尋常小學校長ヨリ岡山縣立中學校長ニ歷任シテ其間幾多ノ用材ハ君ガ薰陶ニ依ツテ人トナル次テ私立金川中學校々長トナル同校ノ名聲大ニ世上ニ顯ル職トシテ君ノ力ト云ハザルヲ得ズ、位正七位ニ居ル、又古屋商店顧問トシテ北米「シートル」ニ在留セル中日本人會長ニ舉ケラル、彼ノ排日問題及學童問題ニ就テ、死ヲ決シテ同胞ノ爲ニ奔走セシ如キ、己ニ人ノ知ル處ニシテ想ヒ起ス其當時錦輝館ノ演壇ニ君ガ泣イテ説カレタル一場ノ演說中、吾人亦傍聽席ノ一隅ニ居シテ慄カニ泣キヌ。

爾來母郷ノ山水ニ親ミシガ、去ル四十一年第十回總選舉ニ際シ、岡山市有志ノ推ス處トナリ、選出セラレテ衆議院議員トナル、既ニシテ硬派又新會ノ飛將トシテ、同志ト共ニ東奔西走怠ラサリシガ過般立憲國民黨ノ組織セラル、ヤ、馳テ此員ニアリ、政治家トシテ君ノ經歷ハ、アマリニ豊富ナルニ非スト雖モ其智識、其人格、其技量ニ於テ已ニ陣笠ヲ歴ス、即チ政界人物中、無意義ニ歡過セラレサルナリ、希クハ嘗テ各種ノ問題ニ努力シタル熱誠ヲ以テ、長ヘニ光輝アル活動ヲ持續サレン事ヲ。

(一六七)

田中四郎左衛門氏

實業家

日本橋區濱町一丁目十五番地

人生棺ヲ覆フテ評定マル、生前ノ評定ハ必竟根底ヲ求ムルニ難シ、一事、一業ノ成否ヲ捉ヘテ直ニ人ヲ評論ス、コレ必ズシモ正鵠ノ謂ニアラズ、況ンヤ階級長幼ノ如キニ於テオヤ、遠觀スレバ生存中ノ人物價値ハ未知數ナリ、嚴密ナル意義ニ於テ然リ、吾人ハツマデ極端ナル衡ニヨツテ月旦スル者ニアラズ、管ニ小サキ琴線ニ觸レタル心狀ヲ直覺ノマ、描寫スルノミ、老舖田中氏、洛陽ノ實業界ニ雄ヲ稱スル事茲ニ十二代、當主四郎左衛門君ニ至ル、世々吳服業者トシテ一種獨特ノ商風アリ、其昔、畏キアタリノ御用ヲ蒙ツテ御覺目出度カリキ、君ハ明治十七年十一月ヲ以テ生ル、幼ニシテ愛父ヲ失ヒ、早クモ世ノ辛酸ヲ嘗ム、早クモ學ニ志シ、普通學終ルヤ費ヲ城北早稻田大學ニ執ル、攻究スル處政治經濟學、シカモ君ノ要求スル處ハ高等國民ノ素養ナリキ、登幸雪苦ノ効空シカラスシテ業ヲ卒ル、直ニ入ツテ自家ノ店舖ヲ經營ス、多年築造セラレタル店憲法ハ、コレ亦容易ニ動カスベカラサル者ナリト雖モ、シカモヨク這般ノ消息ヲ會得シテ加味スルニ新進ノ智識ヲ以テシ、銳意改善ノ道ヲ講ズ、自白ス記者ハ君ト母校及ニ店ヲ經營シテ自分ノ思フ通りニスルノハ骨ガ折レルヨ、一面店ノ歴史ヲ尊重スルト共ニ一面三代ノ忠臣ノ爲ニ同情ヲ拂ツテヤラナケレバナラス、彼等ノ手腕ヲ拘束スル事ハ僕ノ潔トセサル處ダ、マー十年先キヲ見テ吳レ給ヘ、併シ紳士傳ニ登載スルナンドハ、君モ罪作りタネー」ト吾人亦何ヲカ云ハムヤ、嗚呼吾ガ校友ヨ、長ヘニ健在ナレ。

電話浪花 千五百六十四番

渡邊

渡氏

工學博士

本郷區駒込千駄木林町三十四番地

本邦工學界ノ先覺者トシテ將亦赤門ノ重鎮タル、君ハ抑モ如何ナル經歷ヲ有スルカ吾人ハ茲ニ秃筆ヲ弄シテ君カ梗概ヲ叙述シテ以テ後進子弟ノ指針トナサン乎。

君ハ肥前國長崎ノ人、安政四年七月ヲ以テ呱呱ノ聲ヲ揚グ、幼ニシテ穎悟學ヲ好ミ、稚歲亦他童ト異ナル、明治四年大學南校ニ入り、専ラ英學ヲ研究シ第一大學區一番中學實費生ニ列シ、東京大學理學部ニ進ンデ、同十二年一月探鑛冶金全科ヲ卒業シテ理學士ノ學位ヲ受ケ、直チニ理學部補助教授トナリ、専心後輩ノ爲メニ盡瘁スル事數年同十五年鑛山學修業ノタメ、獨逸國「フライベルグ」ニ三ヶ年間留學ヲ命ゼラレ、同所ノ大學ニ在ツテ探鑛學ヲ專攻シ、同十八年大學探鑛學教授「クライシヤル」氏ト共ニ英國ノ諸鑛山ヲ巡視シ、米國ヲ經テ歸朝ス、爾來東京大學御用掛トナリ尋デ工科大學教授ヲ兼ネ、御料局佐渡支廳長、御料局理事等ニ歷任シ廿五年工學博士ノ學位ヲ授ケラル、夫レヨリ、廿九年工科大學教授專任トナリ、翌年農商務省鑛山局長ニ兼任セラル、三十二年依御用歐米ニ差遣セラレ、同年歸朝シテ正五位勳四等ヲ賜ハル、同三十五年鑛毒調査委員トナリ、是レヨリ先推サレテ東京帝國大學工科大学長トシテ今日ニ及ブ、爾來君カ門下トシテ斯學ヲ修メタル有材ノ士ハ日本各地ノ工業ニ關係シテ重キヲナセリ、吾人ハ此意味ニ於テ日本工業界ノ先覺者トシテ且亦本邦工業界ノ恩人トシテ之レヲ景仰スルモノナリ。

電話下谷 千三百六十四番

中川謙二郎氏

女子高等師範學校長

本郷區駒込西片町十番地

(一七〇)

當年ノ苦學生、今ノ教育家、中川謙二郎君今次高嶺氏ノ後ヲ繼イテ女子高等師範學校長トナル、吾人ハ世ト共ニ絶好ノ適任者ヲ得タルヲ祝セントス、茲ニ其閱歴ノ一端ヲ揚ケンニ、君ハ丹波國南桑田郡馬路村ノ人ニシテ嘉永三年九月廿一日ヲ以生ル、維新當時一少年ノ身ヲ以テテ西園寺侯ニ從ヒ山陰道鎮撫及越後、奥州ノ役ニ参加ス、後出デ、東京開成所及私塾共學舎ニ學フノ傍、他ニ教鞭ヲ執ツテ衣食ノ道ヲ得苦學スル事數年間、更ニ東京開成學校ニ入ツテ製作學製煉學ヲ修ム、明治九年七月、新潟縣新潟學校百工化學科ノ教員トナリ、次テ同縣鑛山ノ調査ヲ命セラレ在勤三年聘セラレテ學習院教師ト也、更ニ東京女子師範學校教員トナル、其女子教育ニ關スル意見ヲ實行シ、同校ノ方針ヲ確立シタルノミナラズ、薰化ノ才媛當今世ニ名ヲ成ス者尠ナカラサルナリ、同十六年六月文部省普通學務局ニ入り爾後文部省御用掛、東京女子師範學校教員、高等師範學校教員、女子師範學校教員兼幹事同校教授等ニ歴任シ、本邦教育界ニ貢獻シタルノ殊勳ハ、特筆大書ノ價值ナクンバアラサルナリ、廿五年「コロンバス」世界萬國博覽會出品審査委員トシテ嚴正ナル態度ヲ以テ事ニ任シタルハ、今尙逸話トシテ人口ニ膾炙セラレツ、アリ、廿七年文部大臣官房書課兼勤トナリ、卅一年東京工業學校教授、兼高等師範學校教授トナリ後兼勤ヲ止ム、此間工業教員養成所主任、徒弟學校主事、師範學校幹事、教育博物館主事、文部省中等教員檢定委員、等ノ職ニ就ク、次テ文部省視學官、兼東京工業學校教授、高等教育會議員トナル、卅九年仙臺高等工業學校ノ創立セラル、ヤ、任セラレテ同校々々長トナリ、爾來同校ヲシテ發展セシムルニ努力シ、効果着々トシテ實ヲ揚ク、本年三月任セラレテ現職ニ就キ、多年ノ實歴ニヨツテ得タル技量ヲ振ハントシツ、アリ、因ニ云フ、君ガ女子教育ニ盡シタルモノハ頗ル大ナル者ニシテ、彼ノ女子職業學校ノ如キモ君ガ發起シテ創立シタル處ニシテ現ニ其理事タリ、茲ニ君ガ新任ヲ祀スルノ意味ニヨリ、概歴ヲ摘記スル事如斯。

下田歌子女子

教育家

赤阪區青山北町六丁目五十三番地

女流教育家トシテ下田歌子女史ノ名ハ、夙ニ江湖ノ知ル處ナリ、即チ明治時代ガ産出シタル、代表的な傑ト謂フニ足ル、女史ハ舊美濃國岩村藩士平尾重義氏ノ女ニシテ、安政三年八月九日ヲ以テ生ル、寔ニ先哲叢談ノ著者東條琴臺先生ノ愛孫ナリ、夙ニ此家庭ニ人トナリ、七歳ニシテ詩歌ヲ能クス、琴臺先生深ク之レヲ戒メ婦道必須ノ業ヲ修メシメントス、女史快々トシテ樂マズ、遂ニ病ヲ獲ルニ至ル、先生大ニ驚キ、延ヒテ自ラ教授ス、後田紀知翁ニ就キテ專ラ歌道ヲ修ム、後翁ニ隨ツテ上京シ、研鑽モ怠ラズ明治五年十月宮内省十五年出仕ニ補セラレ、上ハ、皇后陛下御咏ノ御相手、下ハ女官ノ教授ヲ命セラレ畏クモ皇后陛下ヨリ歌子ノ名ヲ賜ル、同八年權命婦ニ任ゼラレ、同十二年辭シテ麴町區一番町ニ桃天女學校ヲ創立シテ其校主トナル、同十七年宮内省御用掛ニ任ゼラル、但奏任侍遇、同十八年華族女學校教授兼幹事ニ任ゼラル、同十九年華族女學校監ニ任セラレ奏任二等ニ叙セラレ、同二十六年九月學監ヲ辭シテ教授在官ノマ、女子教育視察トシテ歐米諸國ヲ巡回ス、同二十八年九月歸朝即日學監ニ任ゼラル、同二十九年常宮周宮御用掛ニ任ゼラル、同三十二年二月帝國婦人協會附屬實踐女學校工藝學校ヲ設立シ會長及ビ兩校長トナル、同三十九年十月學習院女學部教授兼部長ニ任ゼラレ高等官二等ニ叙セララル(勅任)同三十九年十二月正四位ニ叙セラレ同四十年十一月非職ヲ命ゼラル、同四十一年四月前記兩校ヲ併セ實踐女學校長トナル、同四十一年十一月財團法人設立ノ許可ヲ得テ私立帝國婦人協會實踐女學校理事兼職トナル、コレ女子ガ、本邦教育界ニ貢獻シタル概略ノ歴史ニシテ、此他、新聞ニ雜誌ニ、或ハ公開演說ニ所説ヲ發表シテ世ヲ裨益シタル事一々枚舉ニ迫アラズ、女史モ亦明治教育史乘ノ一人物タルヲ失ハサルナリ。

電話新橋 三千三百四十四番

(一七一)

藤崎三郎助氏

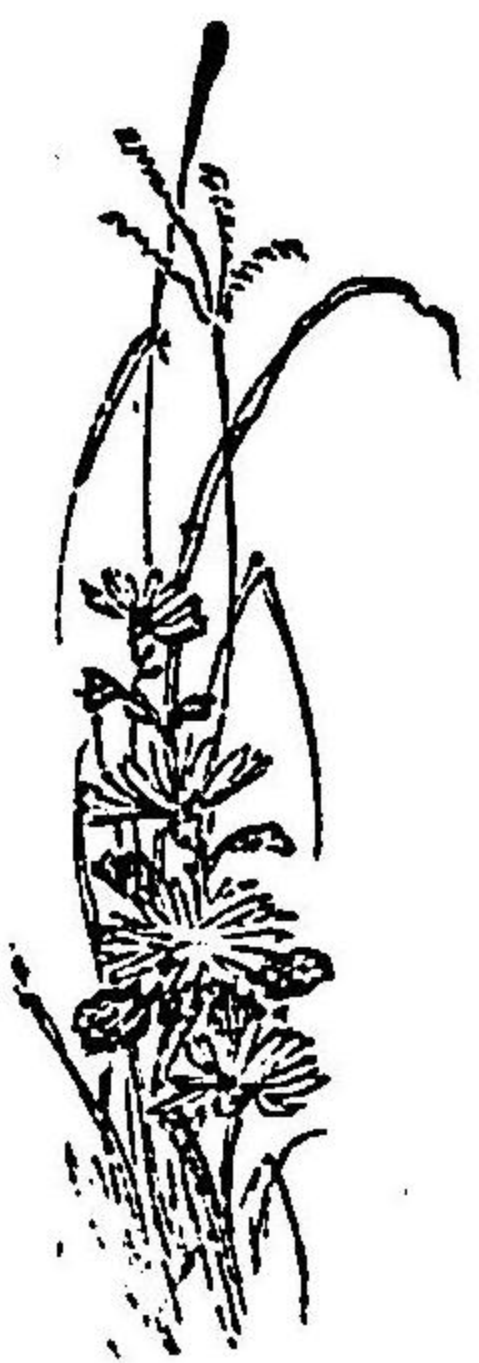
實業家

四谷區盤町一丁目二十九番地

昔者一世ノ偉人伊達獨眼龍ヲ出シ、下ツテ原田孫七郎、林子平ヲ出ス、コレ奥州仙臺ノ産出シタル代表
 的人物ナリ、由來仙臺人物ノ長トスル處大膽ナルニアリ、而シテ小心ナルニアリ、一ト度事ヲ企ツルヤ
 百難ヲ排シテ貫徹セシムル止マサルナリ、蓋シ執着心ノ濃厚ナルハ其事業ト運命ヲ等フス、君亦此地ノ
 人、家世々青葉城下ノ舊家トシテ富亦土地ノ第一流ニ位ス、家業吳服太物ヲ業トシ、大町五丁目ノ街頭
 廣大ナル店舗ハ、行人ノ注目ニ値シテ繁榮日ニ日ニ熾ナリ、即チ其取引ノ頻繁ナル、商品出入ノ盛ナル
 蓋シ白河關以東ニ於ケル同業者ノ冠タリ、今ハ同縣ニ於ケル多額納稅者中ノ上位ニ居ス、同家ノ歴史ヲ
 詳記セバ尠ナクトモ、宮城縣ノ産業發達史トシテ見ルニ足ル、累代ノ統率者皆卓拔ノ技ヲ有シ、誠實敦
 厚ヲ以テ商業運用ノ基礎トナシ、實質ヲ求メテ形式ヲ避ク、殊ニ公共ノ念ニ厚クシテ施シタル幾多ノ善
 根一々擧ケテ數フルニ遑アラサルナリ、君夙ニ先代ノ薰化ヲ受ケ、祖先以來ノ家憲ヲ經トシ自己ノ新知
 識ヲ偉トシ能ク時代ノ推移ト併進ス、前キニ歐羅巴ニ航シテ商業狀況ヲ視察ス、殊ニ佛國里昂滯在中ノ見
 學ノ如キハ、慥カニ君ノ造詣ヲ深カラシメタルヤ明カナリ、往年雜貨販賣ノ目的ヲ以テ、南米「ブラジル」
 及「アルゼンチン」ニ向ツテ輸出シ、彼地ニ店舗ヲ設ケテ新進ノ有材ヲ配置ス、即チ前者ノ如キハ、日本
 商店トシテ直接ニ商業ヲ經營シタル嚆矢ニシテ、現今識者ニ唱導サレツ、アル南米ノ天地ハ、既ニ數年
 前君ニヨツテ先鞭ヲ着ケラレツ、アリキ、彼ノ橫濱ニ於ケル君ノ策源地ハ、陸々乎トシテ熾盛ヲ極メツ
 、アリ、尙合名會社藤崎生絲荷造所ノ代表社員トシテ計圖スル處尠ナカラサルナリ、明治三十六年盟友
 荒井泰治氏等ト計リ、臺灣總督府保護ノ下ニ模範的製糖會社、鹽水港精糖株式會社ヲ起シ、同社ノ成績
 良好ナル、世既ニ定評アリ、即チ其目的ニ於テ他ノ營利一片ヲ以テ經營スル會社ト赴テ異ニシ、加フル
 ニ經營ノ任ニ當ル重役ハ、盡クコレ一特色ヲ有シ、加フルニ大半ハ多年ノ交訂アリ、曾テ重役會議ナル

モノガ、他ノ夫レノ如ク鹿爪ラシク行ハレシ事ナシトノ風評ヲ以テ推知セハ、如何ニ團樂シツ、アルカ
 フ察スルニ難カラサルナリ、今ヤ順風ニ乗ジ快速力ヲ以テ進行スルモ、其創業當時ニ於ケル君等ノ苦心
 ハ、蓋シコレ輕視スベキ者ニアラサルナリ、如斯シテ同島糖業ノ勃興ヲ促スノミナラズ、一面土民ニ向ツ
 テ有利ノ事業ヲ授ケ、一面母國ニ輸入シテ外國粗糖ヲ驅逐セリ、其功業亦以テ大ナリトセズヤ、外ニ濱
 口、荒井、外二三子等ト計ツテ成立シタル高砂製糖株式會社ノ如キ、本年十二月ヨリ運轉ヲ開始スル豫定
 ナリト稱セラル、多大ノ囑望ヲ以テ迎ヘラレツ、アル同社ノ運命亦以テ豫メトスルニ足ル、君專ラ前記
 兩社ノ東京出張所ヲ直管シツ、アリ。
 コレ君ヲ中心トスル事業ノ説明ニシテ、即チ間接ニ語ル處ハ君ノ人物ナリ君ノ手腕ナリ、更ニ某氏ノ君
 フ觀察シタル一句ヲ採ランカ曰ク「藤崎君ハ一寸交際ハ惡ルイガ、深ク交レハ交ル程立派ナ人物デ、嚆ミ
 シメテ見ルト云フニ云ハレヌ味ガアル……云々」ト、然リ、形式ニ拘泥セサル處、直截直進ノ處、表
 面若干ノ圭角ヲ覓レスト雖モ、シカモ豪磊ノ裡、人ヲ容ル、ノ雅量ト、稜々タル奇骨ハ以テ部下ヲ心服
 セシムルニ足ル、敢テ問フ君苦笑シテ受クルヤ否ヤ。

電話番号 千四十六番



藤田藤一郎氏

日本橋區本町二丁目十一番地

君ハ東京ノ人、先代藤一郎氏ノ長男ニシテ、元治元年五月ヲ以テ深川ナル藤田家ニ生ル、幼名ヲ恒太郎ト稱ス、先代藤一郎氏ハ多年東京市ノ名譽職ニ在リテ公私ニ盡瘁シ、政治趣味ヲ有セル、商業家トシテ知名ノ士ナリシガ、君先考ノ訓化ヲ亨ケ、稚戯亦群童ト異ナル、夙ニ慶應義塾ニ學ビ故福澤翁ノ薫陶ヲ受ケ、造詣頗ル深シ、明治十九年(年廿三)飄然家ヲ脱シテ渡米シ、紐育ニ滞留ス、書問勞役ニ服シ夜間、同市高等商業夜學校ニ通學シ、螢雪苦、三年ニシテ、卒業ノ月桂冠ヲ得尙成ス所アラントス、時恰カモ洋行中ノ故藤田茂吉氏、故吉田熹六氏等ノ歸朝スルニ會シ、強伴サレテ歸朝ス、時ニ明治廿二年歸來君有松絞ノ改良ニ腐心シ、染色原料ヲ佛國ニ採リ、日夜研究シテ遂ニ捺染絞ヲ案出シ、其方法ヲ同業者ニ傳ヘ自己ノ特權ヲ求メズ、何等關セザルカ如シ、後、渡邊利七、清水滿之助、氏等ト相謀リ、元百五十三國立銀行ヲ創立シ頭取トナリ、大ニ其手腕ヲ振ヒ三ヶ年ノ後辭シテ亦省ズ、明治三十二年農商務省ノ囑托ヲ受ケ、商工業視察ノ爲メ、渡歐シテ各國ニ遊ビ大ニ得ル處アリ、偶々獨露ノ鉛筆業ノ盛大ナルヲ視テ感アリ、三十六年歸朝後、直チニ下谷區入谷町ニ貓額大ノ工場ヲ設立シ、自ラ職長トナリテ、晝夜油墨ノ中ニ座シ、千辛萬苦經營中俄然工場ハ失火ノ爲メ鳥有ニ歸シ、亦起ツ可ラザルノ窮境ニ陥リシモ不撓ノ君、更ラニ勇氣十倍シ、一意専心、器械ノ改良、鉛筆ノ製法ニ盡瘁ス、サレド器械工學ノ造詣ナキノ君其苦心察スルニ余リアリ、主義ハ天地モ是レヲ感應シケン、遂ニ翌年途ニ完全ナル藤田式鉛筆器械ヲ發明シテ特許ヲ受クルニ至リシナリ時ニ明治三十八年ナリ、此三年間ノ辛キ經驗ト工夫トハ、懸テ光明アル世界ニ君ヲ導ク案内者トナツテ遂ニ今日本鉛筆製造株式會社ノ盛況ヲ見ルニ至リシナリ、今年々海外ヨリ七十八十萬圓ノ鉛筆輸入ヲ防ギ、尙ホ支那、朝鮮、印度ニ輸出シテ歐米ノ鉛筆ヲ東洋ヨリ驅逐セズンバ止マザルノ決心ヲ以テ奮勵シツ、アリ。

電話本局 一千三百九十五番

有賀長一文氏

三井家同族會理事

麻布區飯倉片町二番地

資性温厚篤實謙讓ニシテ能ク衆ヲ容レ最モ部下ヲ愛撫ス故ニ世ノ信用甚ダ深厚ニシテ配下亦喜ンデ之レガ爲ニ献身服務ス、君ガ今日ノ地盤ノ鞏固ナル蓋シ此美德ニ胚胎セルモノナラン歟。

聞ク君ハ大坂府ノ人、亡有賀長隣氏ノ二男ニシテ世ニ有名ナル法學博士有賀長雄氏ノ實弟ナリ、慶應元年七月七日ヲ以テ生ル、幼少ノ頃ヨリ嬉戯群童ト異リ、天性學ヲ愛シ書ヲ好ム、長スルニ及ンデ國家公共ノ爲メニ其力ヲ致サントノ大志アリ夙ニ法學ヲ研究シ東都ノ人トナルヤ贊ヲ帝國大學法科ニ執リ、寢食ヲ忘レテ股錐ノ勉學意ヲ其功空シカラズシテ成績上位ヲ以テ卒業シ、法學士ノ稱號ヲ得ルニ至レリ一度政治界ニ志ヲ寄セシガ感スル處アツテ其ヨリ三井家ニ入り一意専心業務ニ勉勵シ早クモ伎倆ノ敏腕井上侯ノ知ル處トナリ、其レヨリ大ニ其庇護ヲ得タリト云フ、然レ雖君ガ現在ノ位置ニ至レルハ悉ク眞摯勤勉熱心忍耐トヲ以テ建造サレタル積年ノ功績タラズンバアラズ、爾來三井同族會ノ重鎮トシテ富豪三井一家ニ關スル複雑ナル事務ニ執掌シ、隱然トシテ重キヲナシツ、アリ、蓋シ其事業タル、他ノ銀行物產業ノ如ク外面ニ起ツテ彩華アル活動ヲナスモノニアラス、極メテ質素ナル、而カモ責任重キ處、赫々ノ功名ニ憧憬スルモノ克ク耐ユベキニアラザルナリ、即チ其内容ニ至ツテハ到底門外漢ノ窺ヒ能フ處ニアラスト雖モ、一言「難務」ノ二字ヲ以テ蔽フニ於テ、何人モ非議スル能ハサル處ナリ、前年三井組織ノ變更ト共ニ三井合名會社參事トナリ、同族會事務局ノ理事タル事務ノ如シ、君モ亦當代實業界中隱レタル手腕家ト謂フベキ歟。

電話芝 三百〇五番

井上謙作氏

辯護士

横濱市住吉町一丁目九番地

金港法曹界ノ異彩トシテ、剛骨今モ昔モ變ラザルハ君ナリ。

聞ク君ハ出身新潟縣佐渡郡相川町ノ人、明治六年六月ノ生、父ヲ仙藏氏ト云ヒ君其長子ナリ、幼ニシテ穎悟夙ニ讀書ヲ好ミ頭腦明晰、拔群ノ成績ヲ以テ米澤中學校ノ業ヲ卒ハル、直ニ第二高等學校ニ入り更ニ帝國大學法科ニ進ミ、同三十四年業全ク終ツテ法學士ノ稱號ヲ受ク、次デ司法官試補トナリ横濱地方裁判所命ゼラレ、同卅六年二月水戸區裁判所兼地方裁判所判事ニ任ゼラレ從七位ニ叙ス、翌卅七年一月同區裁判所檢事兼地方裁判所檢事ニ任ゼラレ、同卅九年韓國統監府ノ設立セララル、ヤ京城理事廳副理事官ニ任ゼラレ、多年ノ蘊蓄ト天稟ノ英才トヲ逞フシ、統監伊藤公ノ下ニアツテ才名韓山ヲ歴ス、當時多數ノ理事廳吏員中、種々ノ醜行ヲ演ジテ邦人ノ惡聲ヲ破ル者頻々タシシガ、獨リ君ノ潔白ハ萬綠叢中紅一點ノ高趣アリキ、サレド稜々ノ奇骨竊カニ野ニ下ラント期ス、即チ時到ツテ掛冠現所ニ法律事務所ヲ設ケ永年老熟ノ手腕ヲ扼シテ辯護士業務ヲ開クニ至リシナリ、爾來天分ノ俠骨克ク弱者ノ友トナリ名聲隆々一段ノ高キヲ致ス。

由來君ガ辯護士トシテ關係シタル事件ニ至ツテハ一々枚舉ニ追アラスト雖モ要スルニ一貫ノ方針トモ主義トモ稱スベキハ、熱誠ノ直進コレナリ、其熱烈ナル法廷ノ雄辯ニ至ツテハ、同地法曹界ノ一名物ト稱セラレツ、アリ、君尙春秋ニ富ム、希ク邁進愈々猛烈ナラン事ヲ。

電話 二千二百十四番

小久保喜七氏

茨城縣郡部選出衆議院議員

四ッ谷區右京町十一番地

我小久保城南、當年自由黨ノ驍客トシテ屢々死生ノ境ヲ出入シ、今ハ選ハレテ日比谷原頭ノ客ナリ、多年其主義ヲ操守シテ未タ嘗テ變渝ナク、一片耿々ノ氣、寔ニ天下ノ志士タリ、吾人未見ノ師トシテ常ニ其壯烈ナル青年時代ヲ景慕スル事茲ニ久矣、一度機ヲ得テ親シク交語スルヤ、益々其人物ノ大ナルニ敬服シ、爾來屢々其門ヲ叩イテ卓見ヲ聞ク、然リ如斯シテ君ニ接近シテ居常ヲ目睹ス、今觚ヲ操シテ君ヲ傳スベク餘リニ多クヲ知悉ス、サレド之レヲ知ル者ノ爲ニ厚ク、之レヲ知ラサル者ノ爲ニ薄キハ、聊カ私情ニ偏シテ筆ニ遊フ者ノ潔トセサル處ナリ、即チ簡記シテ隔靴搔痒ヲ忍ヒ、而シテ以テ世ノ公評ニ待タン哉。

君ハ慶應元年三月ノ生、下總國猿島郡新鄉村ノ出身ナリ、夙ニ漢籍ヲ修メ、長スルニ及ンテ法政經濟ヲ學ブ、當時板垣伯等ノ自由民權ヲ唱導スルニアツテ國內ノ輿論茲ニ沸騰スルヤ、君乳臭ノ一少年ヲ以テ挺身國事ニ盡瘁シ、汎ク天下ノ志士ト交遊ス、爾來橫暴ナル、當局ノ壓迫ト對抗シ、或ハ囚ハレテ幽獄ノ身トナリ、或ハ追ハレテ遠所ニ移サル、即チ、集會條令ノ發布アリ即チ豫戒令ノ嚴達アリ、公憤發シテ福島事件トナリ、熱血迸ツテ加波山事件トナル、如斯シテ高價ノ犧牲ハ憲政創始ヲ催進ス、嗚呼此偉功……長ヘニ青史ニ特筆シテ錦上ノ花タラシメヨ、君爾來縣會ニ雄ヲ鳴ラシテ郷土ノ爲ニ努力シ、傍ラ二三ノ産業社團ニ關係シテ清節貧居ニ處ス、輕薄ナル、而シテ健忘性ナル我國民ハ此恩人ヲ忘レントシツ、アルノ時、突如下院ニ其名ヲ耳ニスルヤ、名聲復活シテ今ヤ立憲政友會ノ雄ト稱セラレ、爾來ノ行動コレ政機綿ニ觸レツ、アリ、君亦活キタル政黨史カ、近日城南詩集ノ刊行アリ、面目躍如トシテ餘韻ニ流露ス君幸ニ健在ナレ。

電話番号 千八百十三番

大森 鐘一氏

京都府知事
貴族院議員

京都府知事官舎

(一七八)

君ハ舊藩岡藩士ニシテ、安政三年五月十四日駿河府中屋形町ニ生ル、明治六年四月十五月初メテ兵司
 第外一等附屬トナリ次デ造兵司十五等出仕ヨリ累進シテ、十三年一月十日内務二等屬ニ任セラレ、爾來
 太政官權少書記官、官有財産管理法取調委員、參事院書記官等其諸官職ヲ兼歴シ、十八年一月廿二日
 戶籍局長兼務ヨリ十九年三月三日内務大臣秘書官トナリ、同四月十日奏任官二等ニ叙セラレ、之レヨリ
 先キ十八年七月三十一日御用有之歐洲へ差遣セラレ二十年五月九日歸朝ス、廿一年三月九日奏任官一等
 ニ陞叙セラレ、廿四年郡分合ニ關スル法案政府委員仰付ラレ、同四月十五日勅任官二等ニ叙セラレ、廿
 五年十二月勅四等瑞寶章ヲ賜ハル、廿六年三月十日長崎縣知事ニ任ズ、爾後明治廿七八年事件ノ功ニヨ
 リ勳三等旭日中綬章ヲ、條約改正實施ノ功勞ニ對シ勳二等瑞寶章ヲ下賜セラレ、三十年四月七日兵庫
 知事ニ任ジ同六月廿二日高等官一等トナル、内務總務長官ニ任セラレ、三十四年從三位ニ叙セラレ、六
 月五日地方局長心得トナリ、三十五年二月八日京都府知事ニ任セラレ、三月五日京都帝室博物館評議員仰
 付ラル、三十六年七月六日清國皇帝陛下ヨリ第二等第一等雙龍寶星ヲ授ケラレ及佩用スルエトヲ允許セ
 ラル、三十九年四月一日勳一等旭日大綬章金三千圓ヲ日露事件ノ功ニヨリ賜ハル、同廿八年大不列顛國
 皇帝陛下ヨリ、『コンマンダー、オブ、セゾイクトリアン、オーダー』勳章ヲ受領佩用ヲ許サル、四十一年
 三月九日韓國皇帝陛下ヨリ勳一等太極章ヲ受領佩用スルコトヲ許サル、明治四十二年四月十九日、日英
 博覽會評議員仰付ラレ、同十二月廿一日貴族院議員第一條第四項ニ依リ貴族院議員ニ任セラレ、斯クノ
 如歷任シテ益々其光輝ヲ放チツ、アリ、未ダ錄スル多シト雖モ殘數ニ限アリテ果サズ。

福井 菊三郎氏

實業家

麻布區市兵衛町二丁目十三番地

前年、富榮三井組織ノ變更傳ヘラル、ヤ、風聲鶴厲尠クトモ實業界關係者ノ注視スル處トナリ『御殿山』ノ
 遣リ口ハ種々ナル立脚地ヨリ各人各様ノ豫想ヲ以テ期待サレキ、一度新内閣ノ顔振發表サル、ヤ、世ノ多
 數ハ流石ニ此實現ヲ祝セリ、然リ、從來ノ情弊ヲ一掃シテ、新進ノ徑路ヲ啓キタルハ、單リ三井ノ爲ニアラ
 ズシテ天下青年ノ爲ニ太白ヲ舉ケタルナリキ、君亦新進ノ有材ヲ擁シテ閣員ノ一椅子ヲ占ム、吾人聊カ如
 上ノ意味ニ於テ其前途ヲ祝福シ、物色シテ以テ章トナサン哉。

君ハ東京ノ人中村萬吉氏ノ五男ニシテ慶應二年二月二日ヲ以テ生ル、夙ニ福井家ノ養嗣トナリ其姓ヲ冠
 ス、少壯高等商業學校ニ理財ノ學ヲ修メ、卒業後三井物産會社ニ入ル、由來同社ハ中央實業界ニ於ケル秀
 才ノ叢源ト目セラル、若干情實ノ弊ヲ傳ヘラレシモ、事實ニ於テハ、實力ノ競争場ニシテ、『スバルタ』武士
 道式ノ人材登用ハ、平素數次實現セラレツ、アリキ、君夙ニ此群秀ニ介在シテ優ニ一頭地ヲ拔キ、先輩ハ
 多大ノ囑望ヲ以テシ、儕輩ハ畏服シテ俊秀トナス、累進シテ同社大坂支店長トナル、蓋シ、同所ハ其業務ノ
 複雜ニシテ絶大ノ手腕ヲ擁スルニアラズンバ、克ク其任ヲ全フスル能ハズ、貿易業ノ中心點ニ於ケル君ノ
 努力ハ、歸セスシテ光榮アル名聲ヲ贏チ得ルニ至リ、榮轉シテ紐育支店長トナル、明快ノ頭腦、卓拔ノ見
 歴史アル其職ヲ全フシ、名ハ眇タル一支店長タルモ、或ル意味ニ於テ亞米利加貿易ノ第一人者トシテ米大
 陸ニ睥睨シ、幾多白人俊邁ノ士ト相背馳シテ些ノ遜色ナシ、前年末三井組織ノ變更ニ際シ、英材迎ヘラレ
 テ三井物産株式會社常務取締役トナリ、多年ノ經驗ヲ擁シテ天下ノ知遇ニ酬ヒントス、君居常質素敦厚
 ニシテ友誼ニ厚ク、常ニ後進ヲ誘導シテ倦マズ、快氣亂麻ヲ斷ツ底ノ俊腕ハ、戰士トシテノ君ノ武者振ニ
 シテ、シカモ『箇』ノ人トシテハ、温厚ナル紳士ニシテ、一面蔽フベカラサル江戸ッ兒の霸氣ト俠骨ノ隱現
 セラル、亦爭フベカラザル處ナリ。

電話新橋 二千六百八十三番

(一七九)

山本留吉氏

實業家

神田區駿河臺北甲賀町三番地

(一八〇)

言所之レヲ行ヒ行フテ後之レヲ口ニシ又善ク積ミ善ク散スルハ實ニシテ氣宇宏闊ナル山本留吉君、抑モ君ハ明治二十年四月伯父大橋佐平氏ニ隨テ上京シ同年六月博文社創立ニ關シ盡瘁スル處頗ル大ナリ然ノ隆盛ヲ致シタルモノ揚ゲテ君ノ功績顯著ナリ、同三十年七月伯父佐平氏並ニ從兄新太郎氏ト謀リ合資會社博進社ヲ創立シテ專ラ洋紙業ヲ營ミ其ノ規模ノ大ナル亦以テ察スベキナリ、君其專務理事トシテ今日ニ至ル、同三十二年十二月支店ヲ大坂ニ開クヤ業務益々繁榮ヲ極ムル處アリ、同三十六年十月合資會社博愛堂ヲ創立シテ其幹事タリ、同三十八年二月株式會社東亞公司ノ創設セラル、ヤ推サレテ其取締役トナル、同十二月清韓兩國ヲ漫遊シテ得處アリ翌年二月歸朝ス、同三十九年七月其專務取締役ニ選バル後大坂、上海、漢口、天津、其ノ他樞要ノ地ニ支店及出張所ヲ設ケ日清貿易ニ從事シ業務益々歩武ヲ進ムルニ至ル、想フニ東洋ニ於ケル貿易ノ中心點ハ善隣清國ナリ、其ノ商權ヲ把握セント欲シテ歐米諸強國百方苦策ヲ運ラシ巧妙ナル手段ヲ弄シテ互ニ其爪牙ヲ磨スルノ久シキ亦故アル哉、此間ニ介立スル我國ガ自國ノ現狀ニ鑑ミ對清貿易上更ニ多大ノ注意ヲ加ヘテ東洋ノ世界ニ於ケル地位ヲ鞏固ナラシムト共ニ清國ノ商機ヲシテ獨リ之レヲ歐米人ノ壟斷ニ委セザルノ用意ナカルベカラズ、吾人ノ君ニ嚆望スル又獨リ茲ニ存スルナリシ頃日博文館主大橋新太郎氏ト謀リ博文、博進、兩社經營ニヨリテ帳簿其ノ他ノ製本事業ヲ開始スルニ至リシナリ。

電話本局 二千二百四十二番

宗重望氏

伯爵 前貴族院議員

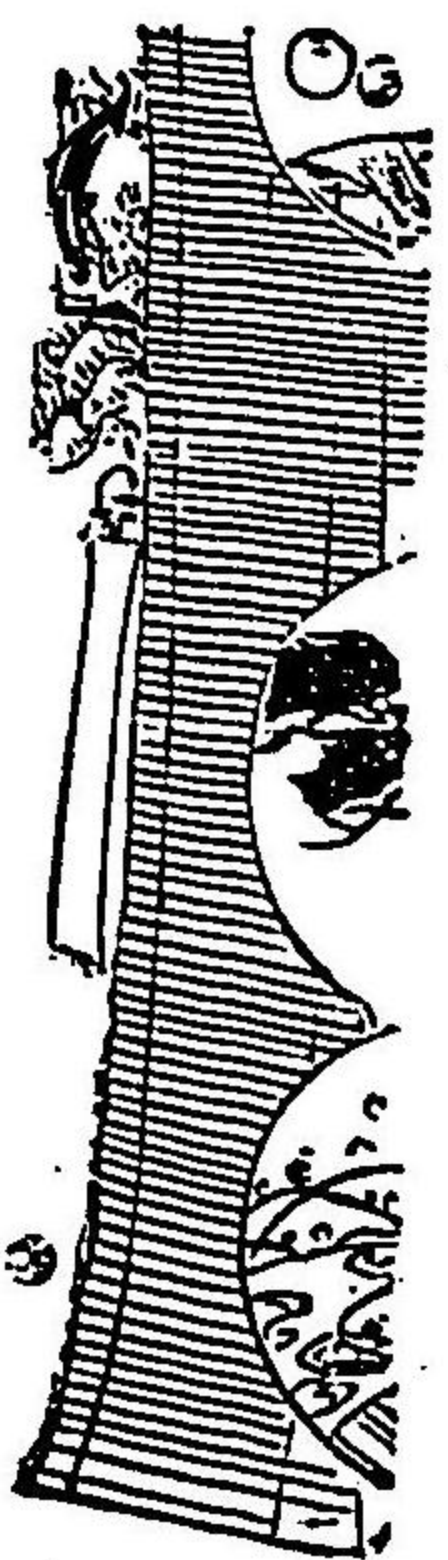
下谷區二長町五十一番地

叢麟タル日本海ノ一孤島、對島國ノ歴史ハ、最モ壯烈ナル『ページー』ヲ以テ彩色セラツ、アリ、萬籟寂トシ聲ナキ夕邊、靜カニ史ヲ披キテ文永、弘安ノ役ニ及ベ、殘忍ナル元兵ガ、對馬ノ同胞ヲ虐殺シタル章ニ至ラバ、誰レカ肉躍リ骨鳴ルノ感ナカラン、嗚呼櫻花園ノ吾祖先ハ、難ニ殉シテ從容死ニ就ケリ力戰奮闘刀折レ矢盡キ、外夷ノ毒及ニ倒レテ日本武士道ノ面目ヲ發揮シタリキ、爾來屢々外寇ヲ蒙ツテ尙大和魂ノ真隨ヲ發露シタル我對州ノ祖先ハ、蓋シ眞個男兒ノ精華ナリ、英魂長ヘニ國土ヲ護ル、嗚呼我對州ノ祖先ヨ、今説ク伯爵宗家、此名譽アル對州ノ統治者ナリキ、試ニ其系譜ヲ按ジテ本篇ノ一章トナサンカ、曰ク當家ノ祖先ハ安徳天皇ヨリ出ヅ、二世右馬助助國ノ時ニ當リ、文永十一年蒙古ノ大軍ニ來襲サレ、直ニ騎兵八十ヲ率イ大ニ之ト戰ヒ、衆寡敵セズ族屬ト共ニ國難ニ殉ス、誠ニ日本武士ノ龜鑑タリ、弘安四年三世盛明ノ時、元艦五百來寇ス、州兵之ヲ退ク、徳治二年四世盛國ノ時元寇又來ル、五世刑部少輔經茂ニ至ル、經茂武勇衆ニ優レ時人稱シテ兇刑部トイフ、其子頼茂ヨリ讃岐守貞茂ノ世ニ至リ、佐賀ニ居住ス、元中六年六世頼茂ノ時、韓將朴歲戰艦百餘隻ニ乘シ襲來リ遁レ歸ル者七八隻、七世貞茂ノ時、應永二十六年韓人入寇シ、糠嶽ニ迎ヘテ之ヲ打チ、累日苦戰シテ遂ニ斬首二千五百餘級ヲ獲テ打退ケシモ、負傷シテ遂ニ殉ス、對馬ヲ領セシ以來前後外寇ヲ被ルコト十數回ナリ、嘉吉三年韓ト修好シ、歲船五十ヲ約ス、乃面、鹽、釜山、ノ三浦ヲ以テ泊トナス、ソレヨリ十六世刑部少輔義調ニ至ル、天正中秀吉ノ西征ヲ聞キ、義調子義智ト共ニ往イテ箱崎ニ謁ス、幾モナクシテ義調卒シ、尋テ義智ニ讓ル元祿元年秀吉征韓ノ師ヲ起ス、義智前部ノ先鋒トナリ、東萊、釜山、十餘城ヲ拔キ、京城ヲ陥レ平壤ヲ取ル、秀吉其功ヲ賞シテ薩摩出水郡一萬石ヲ與フ、慶長二年再ビ征韓ノ舉アリ、義智再航ス、同年秀吉薨シ俄ニ軍ヲ還スニ至ル、徳川家康其功ヲ賞シ、肥前基肆養父ノ地ヲ出水郡ニ換ユ、後チ家康ノ命ヲ以

(一八一)

テ韓ト媾和ス、爾來拾萬石以上ノ格ニ列セラシ、夫ヨリ三十一世對馬守義質ニ至リ、肥筑、下野ノ諸郡ニ於テ二萬石ヲ給フ、其子義章弟對馬守義和ヲ經テ三十四世重正ニ至リ、豊前豊後ニ於テ増地ノ榮ヲ賜フ、夫ヨリ三十五世重望ニ至ル、君ハ其長男ニシテ慶應三年七月廿七日ヲ以テ對馬國嚴原藩邸ニ生ル、幼ニシテ讀書ヲ好ミ明治二十七八年戰役ノ際報國ノ至誠遂ニ對馬義勇團ヲ起シ、舊領肥前田代ヨリ米穀ヲ寄贈シ、其功ヲ以テ父重正ヲ從二位ニ君ヲ正四位ニ叙セラシ、之ヨリ前キ掌典ニ任セラシ、姑クシテ之ヲ辞ス、同三十七八年戰役ノ開始スルヤ、舊領對馬ニ金米ヲ贈リ、大ニ奉公ノ意ヲ全フセシメタリ、同三十七年七月貴族院議員第三回總選舉ニ際シ、同族中ヨリ選バレテ貴族院議員トナリ論旨ノ公開ヲ貫徹スルニ至ル、此時勳四等ヲ賜フ、同四十一年感スル所アツテ議員ヲ辞シテ、再ヒ政界ノ人タラズ、爾來野ニアツテ風流三昧ニ入り書畫鐵筆ニ靜養ヲ嗜ミツ、アリ、君夙ニ三島中洲氏ニ就キ王朱ノ學ヲ學ヒ、又仙佛ノ二道ヲ修ム、其書畫ニ於ケルヤ故大倉雨村ノ高足ニシテ、筆墨超逸セル自カラ瀬川ノ室ニ入レリ、東京、名古屋、京都各所ノ南畫會長トシテ合開斯界ニ噴々タルモノアリ。

電話下谷 六百二十二番



福永吉之助氏

海軍省經理局長

麻布區永坂町七十一番地

其正廉潔白ト、其經理通トハ、當代官海稀ニ見ルノ人材トシテ定評アルモノ即チ君ナリ、其人物月旦ニ至ツテハ屢々操觚者ノ筆端ニナサレツ、アリ、吾人ハ蛇足ヲ加フルノ徒勞ナルヲ信ジ今ハ管ニ官歴ノ摘記ニ止メントス、即チ明治八年海軍會計生徒被申付以來會計局總計課、主船局調度課、比叡艦員外乘組、第二丁卯艦員外乘組被申付、十二月海軍主計副被任金剛乘組トナル、同十五年六月海軍主計補ニ被任、同年七月朝鮮事變ニ付品海發同國へ回航、同十一月任海軍小主計、更ニ淺間艦乘組被仰付、次テ海軍主計學校教授兼監事被補、同年十二月海軍大主計被任、同廿年海門艦主計長被補、同廿三年五月免本職、橫須賀鎮守府衣糧科長トナリ以來海軍下士卒被服制及被服給與法改正調査委員、糧食給與規則取調委員等ノ職ニアリ廿四年七月免本職、橫須賀鎮守府主計部長主管被補、廿五年來大和、巖島、主計長、佐世保海軍司計主管、佐世保鎮守府監督部保証金出納官吏等ヲ歷任シ、尙明治廿七八年戰役ノ功ニ依リ勳五等双光旭日章及年金百二拾圓ヲ授ケ賜フ、其ノ後橫須賀鎮守府海兵團主計長心得被仰次テ海軍主計少監被任尙橫須賀海兵團主計長、橫須賀衣糧庫主管、海軍省經理局第二課々僚被補、海軍被服糧食經理調査委員被命、卅年十二月海軍主計中監被任、翌年四月海軍被服改良調査委員被任、以來海軍主計官採用委員、各鎮守府特別檢閱便付出帥準備品制定調査委員被命、卅三年海軍主計大監被任、爾後海軍省經理局第二課長被補、同月兼海軍主計官練習所長、海軍高等武官採用委員等ニ歷任ス、明治卅三年清國事變ニ於ケル戰功ニ依リ勳三等瑞寶章及ビ金七百八拾圓ヲ授ケ賜フ。同卅六年七月免本職並兼橫須賀鎮守府經理部長被補、同十一月橫須賀海軍經理部長兼橫須賀鎮守府主計長被補、同卅九年四月明治廿七八年戰役ノ功ニ依リ功四級金鷄勳章並年金五百圓及旭日中綬章授ケ賜フ、四十年三月海軍主計總監被任次テ現職ニ任セラシ、ニ至リシナリ。

電話芝 千五百八十八番